

【完】 ACE COMBAT SW —The locus of Ribbon —

skyfish

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

各メディアから「一人で大陸戦争を終わらせた男」と謳われ、味方からは「ユージアの猛禽」と称賛され、敵からは「リボン付きの死神」と恐れられたISAF空軍のエース。コールサイン「メビウス1」。大陸戦争が終わった2年後、ノースポイント領空に接近してきた謎の巨大航空機に遭遇。交戦し撃墜するも気を失ってしまう。

目が覚めるとそこは魔女と異形の敵が戦う異世界だった――

※2014年9月19日をもちまして、ミッションは終了いたしました。ご愛読誠にありがとうございました

目次

第0話「Unknown」	1
第1話「遭遇」	9
第2話「尋問」	16
第3話「再会と二つの歴史」	23
第4話「飛翔」	32
第5話「入隊と交流と」	41
第6話「新たな相棒？」	51
第6・5話「早朝の一コマ」	60
第7話「模擬戦」	65
第8話「初陣」	82
第9話「メビウス1の懸念」	98
第10話「夢・記憶」	106
第11話「ジェット戦闘機」	115
第12話「原初の誓」	121
第13話「こっくりさんと、とばっちり？」	128
第14話「憑依と激しき風」	135
第15話「老兵、出撃」	149
第16話「夢・心の傷」	163
第17話「短い休暇」	169
第18話「怒り、エースとは、英雄とは」	178
第19話「顔を知らない旧友」	190
第20話「その男の正体は」	201
第20・5話「訓練……？」	216
第21話「音速、そしてお疲れ様」	221

第22話「闇に潜む敵」	230
第22・5話「肝油とサウナ」	238
第23話「仲間」	244
第24話「誕生日パーティー」	255
第24・5話「ルツキーニを探せ！」	266
第25話「苦悶」	273
第26話「パ・ド・カレー上空戦―君を忘れない―」	280
第27話「慟哭」	291
第28話「邂逅」	301
第29話「Yellow」	309
第30話「死の足音」	318
第31話「戦間の静寂」	326
第32話「宮藤脱走」	335
第33話「ウォーロック」	345
第34話「バトル・オブ・ブリテン」	359
第35話「決闘前」	380
第36話『リボンと黄色 前編 “2人の戦争”』	392
第37話「リボンと黄色 後編 “13”」	404
第38話「王の目覚め」	412
第39話「Shattered Skies」	421
第40話「MEGALITH」	433
最終話「Blue Skies」	441
エピソード	454
あとがき	459

第0話「Unknown」

2007年5月19日 13:00

ノースポイント アレンフォート空軍基地

定時の周辺哨戒任務のため格納庫に置いてある愛機に乗り込む。

パイインという電子音が鳴り響き巨大な鉄の鳥が目覚めるのをコックピットから感じとりながら目の前の機器を操作してゆく。

そして自分の愛機F-22Aラプターを滑走路まで動かして基地管制塔の指示を待つ。

《基地管制塔よりメビウス1へ。離陸を許可します》

「メビウス1、了解。離陸する」

そうして彼、メビウス1は空へと舞いあがった。

《メビウス1、高度制限を解除。メビウス2が上がるまで高度5000フィートで待機してください》

「メビウス1、了解した」

短い通信を終えた後周囲を見渡した。

雲一つない快晴。北は島の山脈。南は水平線の先まで見えそうな青い海。

東は海岸線がつづき、西も同様で市街地を見下ろすことができる。

「……」

だが彼は市街地を見ないでその手前に広がる光景をただじっと見つめている。

正確には先の説明は少しだけ誤りがある。

基地と市街地の海岸線は途中で大きく寸断されている。そこには巨大な穴が開いており周辺は小高い丘のように盛り上がり、海水が流れ込んでさながら湾のように見えるが人の手が加えられておらずそこだけ他とは違い異様に空気が重く見える。

「あれから今年で8年経つのに何も変わっていない……」

メビウス1が見つめるその名はアンダーソンクレーター。

1999年7月8日

地球のロシユ限界に突入した小惑星ユリシーズはバラバラに砕け、

ユージア大陸に死と恐怖を降り注いだ。

ユージア大陸の各国家は大気圏突入前のユリシーズの欠片をさらに砕くために大陸中央の砂漠に「120cm対地対空両用磁気火薬複合加速方式半自動固定砲」隕石迎撃兵器ストーンヘンジを開発。効果はあつたがそのすべてを破壊することはできなかった。

ユージア大陸には計8のクレーターが存在する。
これもその1つ。

そのクレーターの端には水没した残骸と廃墟が広がっている。

ここは旧市街地。当時の市街地の真横に落ちた隕石の被害によりそこを放棄。

離れた場所に新市街地を作り直し今はそこに人々が住んでいる。

メビウス1はクレーターの内側にある建設物の残骸を見続ける。

《メビウス2よりメビウス1へ、離陸完了した。：おい、メビウス1?》

「ん、ああすまん。少し考え事していた。メビウス1、これより任務を開始する」

《珍しいなお前が考え事なんて。メビウス2、同じく任務を開始する》

そうして2機は南の空へと飛んでいった。

13:30 アレンフォート基地より南沖合80km 上空8000フィート

《メビウス1、この任務が終わったら何か食に行かねえか?》

任務中なのにメビウス2はそんなことを言ってくる。

まあ、自分も任務中なのに先ほどのことを考えれば人のことを言えないのだが。

「メビウス1よりメビウス2、それは帰ってから考えろ。あと、寿司を食べすぎるのはあまりよくない。舌が肥えて他が食えなくなるぞ」

《うるせえ、お前朝からあんな臭いもの食べやがって》

「納豆まだ駄目なんだな。メビウス8は毎日食うが」

《それはあいつの舌がおかしいんだ。俺はあんな食物認めないぞ

》

「お前が毎日食べてる発酵食品の仲間だぞ」

《《ヨーグルトはいいんだヨーグルトは》》

などと話していると通信が入る。

《《こちらスカイアイ。今は任務中だ。集中しろ》》

「すまんなスカイアイ、つい話込んでしまった。メビウス1、了解」

《《続きは帰ってからにするか。メビウス2、了k》》

だが、そのときコックピットの外が赤い光に包まれた。

「なんだ!？」

《《前が見えねえ!!》》

《《こちらスカイアイ。メビウス1、2、どうした？ 何が起こった

!》》

通信は生きてるらしく現状を報告しようとするが、光が消えた。

すぐに機器のチェックをするがすべて問題なし。

「こちらメビウス1、いきなり外が見えなくなったがすぐにもとに戻った。機器に異常なし」

《《なんだったんだありや。こちらメビウス2、こっちも同じだ、問

題ない》》

《《そうか：ん？ ちよつと待て》》

待つこと3秒。

《《方位150、距離120km、高度14000フィートに所属不明機がいきなり現れた。数は1、IFF応答なし。このままだとノースポイント領空に侵入する恐れがある。メビウス1、メビウス2は直ちに向かってくれ》》

「メビウス1、了解」

《《メビウス2、了解》》

2機は不明機のいる空域に急行する。メビウス1は回線を開き不明機に対し警告を行った。

「不明機に警告する。貴機の進路はノースポイント領空の侵入コースである。直ちに反転しろ。繰り返す——」

「この警告に従わない場合、当方には貴機らを撃墜する用意がある」

交信を試みるが応答なし。ためしに別の周波数で更新を試みるが変化はなかった。

《不明機の動きに変化なし。メビウス1、メビウス2、警告射撃を実施せよ》

「メビウス1、了解した」

《メビウス2、了解》

AWACSからの指示に従い、1番機パイロットは最新のデジタル機器で構成されるパネルのそばのスイッチを入れる。

HUDの脇にある小型のディスプレイを見てある疑問を口にした。

「……機種不明？ どういうことだ。故障か？ スカイアイ、そっちはどうだ」

《スカイアイよりメビウス1。こちらでも解析は続けているがわからない》

《なんだ、みんなそろって故障か？ こっちでもアンノウンとしかでない》

《わかり次第、データリンクを通じて情報を送る。とにかく不明機への対処をしてくれ》

わかり次第と言われたが、もう1分もしないうちにミサイルの射程内に入る。

再度、レーダーを確認する。映る光点は1つ。

「この速度…戦闘機にしては遅いな。旅客機か爆撃機か？」

《確かに遅いな。でも旅客機にアンノウンはありえねえし、爆撃機にしても1機だけでしかも護衛機なし。なんだこいつ》

不明機まで残り40km。ここでメビウス1が反応した。

「・・・タリホー。11時方向。やや低い」

《メビウス2、こちらでも確認した》

メビウス1が言った方向に小さいが黒い点が見える。

近づくにつれて徐々にその全容が明らかとなってゆく。

距離20kmで不明機の異様な形に言葉を失った。

「なんだこれは…」

《気味が悪いぜ》

それはおよそ飛行機とは似ても似つかない形をしていた。

大きさは大型旅客機の3機分、本体は三日月状の形をしており4つの垂直尾翼らしきものが確認できる。全体の装飾は黒なのだがところどころ真つ赤な点やラインがあり、それだけで禍々しさが伝わってきた。

再度警告をしようとするが不明機が赤くなるのを確認すると悪寒を感じ動き出すタイミングは一緒だった。

「ブレイク！ ブレイク！」

メビウス1とメビウス1の危機迫ったような声を聞いたメビウス2は即座に回避行動をとる。次の瞬間さっきまでいたところを赤い光が突き抜けた。

「…っ!!」

《うおおおお!!?》

緊急回避し、僚機の無事を確認する。

「メビウス2！ 無事か!？」

《当たり前だ！ あの野郎いきなり仕掛けた上にレーザーとか、ふざけんな!!》

「スカイアイ、不明機からの攻撃を受けた！レーザー兵器を搭載している。交戦許可を！」

《交戦規定に基づく正当防衛と判断。メビウス1、メビウス2、交戦を許可する!》

「了解！ メビウス1、交戦エンゲージ！」

《了解！ メビウス2、交戦。ぶっ壊してやる!!》

散開し、戦闘を開始した。

メビウス1は機体を旋回させて不明機と向きある形なる。

そして、メビウス2は上空から遅れて接近。

「メビウス1、FOX2」

《メビウス2、FOX2！ FOX2!》

メビウス1が先にサイドワインダーを発射しコックピット部分と思われる場所を破壊。

続いてメビウス2も同様に不明機のだ真ん中にサイドワインダー

を撃ちこんだ。

爆発、不明機の正面と上部が大きく破壊されているのが確認できた。

《よっしゃあ！ ざまあみろ！》

《こちらスカイアイ、不明機の高度は変わらず直進している。》

「なに？」

《あれでまだ墜ちないのか!?!》

不明機のほうへ目をやる。2機はそれぞれ別の異常を見つけた。

ミサイルによって砕けた部分が光りながら徐々に小さくなっている。

「こいつ…自分で自分を修復しているのか？」

《エンジンが見当たらないぞ！ どうやって飛んでんだ!?!》

メビウス1は不明機を睨み付ける。

レーザー兵器を積み、かつ被弾しても自ら修復する異形の化け物。

ふと中央、修復中の破損箇所で変なものを見つけた。

「(赤い…結晶?)」

メビウス1はそれを一瞬だったがはつきりと見た。

大きさは1mほど、球体のような形をしたルビーのように赤い結晶。

だがメビウス1にはルビー独特の情熱的な赤よりも血のような禍々しきに見えた。

「メビウス1よりスカイアイ、不明機の中央に妙な物体を確認した」

《スカイアイよりメビウス1、2へ。こちらでも収穫があった》

《なにか分かったのか?》

《不明機の中心部に高熱源反応を感知した》

「そこが動力源であり、弱点であるか？」

《断定はできないがその可能性が高い》

「よし。俺が突入して動力部を破壊する。メビウス2は援護を頼む」

《ウイルコ。まかせろメビウス1！ あのでかぶつに目にも見せてやる!!》

2機は編隊を組みターゲットの後方上部から接近する。

《食らいやがれ！ FOX3 FOX3！》

メビウス2が中距離空対空ミサイルを放つ。不明機に向かって突っ込んでいくが、赤い光線により防がれてしまう。さらに2機に向けてレーザーを放つ。2機は回避。しかし、メビウス2の左尾翼に被弾した。

《うお！『ジユウ』》

「メビウス2、大丈夫か!？」

《左の尾翼が溶けた！ すまないが離脱する》

「墜ちるなよ。あとは任せろ！」

そう言つてメビウス1は不明機へと加速してゆく。

不明機の攻撃は続いているがバレルロールと繊細な機体制御でレーザーを躲す。

「メビウス1、FOX2！」

ミサイルはそのまま直進し命中した。そして、赤く輝くものを確認する。

「見えた！インガンレンジ。ファイヤー！」

機銃を掃射。ターゲットは粉々に砕け散った。

不明機の上を交錯する。

不明機はこちらの機内からでも分かる鉄が軋む音をあげながら崩壊してゆく

「スカイアイへ、目標を破壊した」

《目標の沈黙を確認した。よくやったメビウス1》

《イヤッホー!! さすが俺たちのエースだぜ!》

味方からの称賛にわずかに頬がゆるむ——それは突然起こった。

「(ガタン!) ツ!？」

急に減速した時と同じような衝撃を受ける。もちろんそんなことはしていない。

すぐに機器をチェックするが正常、なのに未だ振動が続き大きくなっていく。

「くそー！ いったいどうしたんだ相棒！」

そういつて自分の愛機に叫ぶ。

《メビウス1、何が起こった?》

「分かんらん! 機器はどれも正常だが振動が続いて——」

《お・・・おい! あのでかぶつ縮んでるぞ!?》

報告を受けてメビウス1は後方にいる不明機に目をやる。

先ほど破壊した場所、そこに黒い点が存在し周囲の空間が歪んでいる。

周辺の空気が吸い込まれているのが見て取れた。

「吸い寄せられているのか!?!」

《なんなんだいったいあいつは!》

《解析したがよくわからない! メビウス1、メビウス2は今すぐ不明機から離れろ!》

「了解。逃げるぞ!」

《メビウス2、了解!》

フルスロットルで離脱を試みる。

《メビウス1! なにをしている。早くスピードをあげろ!》

「とつくにやっている!」

《メビウス2、安全空域に到達した。メビウス1! 早くしろ》

「くそ! アフターバーナー点火!!」

アフターバーナーに点火し、唸り声をあげるエンジン。

速度はマツハ2.4に到達する。しかし

「これでもだめなのか!?!」

「機体が制御できない!!! うあああああああ!!!」

F-22Aは制御不能となり吸い込まれてゆく。不明機にぶつか
る寸前、激しい揺れでメビウス1の意識は停止した。

《メビウス1! 畜生!》

《メビウス1、応答しろ!——!——!》

命令違反と分かってもメビウス1の名前を叫ぶスカイアイ。

次の瞬間、白い光に包まれたあとそこには何事もなかったかのよう
に平和な色をした空が広がっていた。

第1話「遭遇」

この世界でも人間同士の戦争は存在した
いや、正確にはそれを忘れさせる異変が突然起こった
人類は“互いに殺しあう”という遊戯を考える余裕すらなくなった
のだ

それらは毒をまき、鉄を貪り、大陸の空と大地を蹂躪し始めた
もちろん人類も黙って見てはいない
自分たちの故郷、友人、恋人、家族・・・
大切な人たちを護るためにその異変に立ち向かった
それが5年前から今に至る戦争——
彼らは猛々しく戦い、敗走した
ヨーロッパ大陸のそのほとんどを侵略された人類は
各国の精鋭を集めた部隊を編制し望みを託した。
大陸最後の砦であるこの島は今も護られている
”彼女たち”のおかげで
ここでは仮初の平和が保たれている
平和から最も遠いこの空で
平和と人類を護るために飛ぶ彼女たちの名は——

『ストライクウィッチーズ』

1944年5月19日16:30

警報！そのとき私は格納庫にいた。

すぐさま自分の機体に取り戦闘準備を始める。

うるさすぎるアラートが基地全体で鳴り響いてる。

《ネウロイ出現！ 方位105、グリット17地域、高度8000
に大型ネウロイ1機接近中！ 各員戦闘配置につけ。航空部隊はた
だちに出撃せよ！》

他の仲間が格納庫に駆けつけていく、一番最後の人を見て大声を上げた。

「宮藤！ すぐに出撃するぞ、はやく準備しろ！」

「す、すみません！ 坂本さん」

そうして全員準備が完了し滑走路から飛び立った。

「敵機発見！」

坂本がそういうと同時にネウロイからの攻撃が始まった。それを散開してやりすぎす。

「シャーリーとルツキーニは援護射撃！ バルクホルンを援護！ 私と宮藤は奴を攪乱する。リーネは後方支援を頼む！」

「二二了解！」

坂本と宮藤は九九式二号二型改13mm機関銃を撃ちながらネウロイの周囲を飛び回る。

シャーリーとルツキーニの援護射撃の中で、バルクホルンはMG42機関銃の銃身をネウロイの体に叩きつけた。

「はあああああ!!」

バルクホルンの固定魔法「怪力」で強化された一撃の威力は大きくいつもなら簡単に砕け散るのだが、ネウロイの装甲が堅いのかヒビしか入らない。

「リーネ、あそここのヒビを狙え」

「はい！」

リーネは手に持つボーイズMk. 1対装甲ライフルを構えて狙撃した。

爆散。煙がはれるとそこに赤いコアが見えた。

「コアを見つけたぞ！ 全員撃てえ!!」

コアに大量の魔力がこもった銃弾をあびせる。その威力に耐えられずコアは粉碎した。

「ネウロイの沈黙を確認。みんなよくやった」

「はく怖かったあ」

「頑張ったね。芳佳ちゃん」

皆がそれぞれのこと話合っている。

太陽は傾き、空は薄暗くなっていた。

「よし。日が暮れる前に基地に帰るとす…ん？」

基地からの通信が入ったので回線を開く。

《少佐！坂本少佐！聞こえますか!?!》

「どうしたミーナ、そんなに慌てて？」

《それが…皆さんがいる空域に新たに大型ネウロイの反応があったのだけど様子がおかしいの。警戒して!》

「ネウロイが?…ここからは何も見えないのだが…」

そのとき、夕暮れの橙色の空が真っ白になり輝いた。

「うお!…なんだ!?!」

「ネウロイの攻撃か!?!」

「うじゅ。眩しい。」

あまりの光に皆戸惑う。治まると黒い物体を見て声を上げる。

「ネウロイ!?!」

「そんな…いきなり現れたの?」

「うえ、もう帰りたいんだけど…」

「そういうなよルツキーニ。ちやつちやと終わらせて帰ろうぜ」

「珍しく意見が合うな、リベリアン。なんであれ私の前に見えるのを落とすだけだ」

「いや待て、様子が変だ」

坂本美緒は自身の固有魔法である魔眼を使い、ネウロイをくまなく観察する。

その直後、ネウロイは砕け散った。

「え?…え?…なんで?」

「魔眼で確認したのだがコアが見当たらなかった。おそらくすでに破壊されていたのだろう」

「なんだそれ。じゃあだれが破壊したんだ?」

「それは分からないが…」

そんな中、先ほどのネウロイを見ていた宮藤が何かを見つけた。

「あれ?坂本さん、あそこで何か落下してます」

「なに?」

坂本が魔眼で確認すると

「あれは…ウィッチだ！」

「え！ウィッチですか、でもどこの？」

リーネが質問するが美緒は分からないと答える。
とりあえず不明ウィッチに交信をはじめた。

「上空のウィッチ、聞こえるか。聞こえていたら自らの所属を明らかにしろ」

返事はない。ただその高度をどんどん落としてゆく。

「上空のウィッチ、所属を明らかにしろ！そのままでは海に落ちるぞ！」

無音。

「もしかして気を失ってるんじゃない？」

「まずいぞそれは！」

先に動いたのは宮藤だった。

「助けに行かないと!!」

「待って、芳佳ちゃん！」

「ヨシカー！」

後からリーネとルツキーニが続く。

「待て、お前たち！ むやみに近づくな！」

「いや、行かせてやれ」

「少佐！ もしネウロイだったら！」

「魔眼でもコアは発見できなかった。大丈夫だろう。ミーナ、聞こえるか？」

そういつて美緒は基地にいるミーナに通信を送る。

《なに、坂本少佐？》

「突如出現したネウロイは消滅した。それと所属不明のウィッチに遭遇したが気を失っている。大事はないと思うが救護班の準備をしてくれ」

「なっ!? 正気か少佐？」

《了解しました。急いで帰投してください》

「だそうだ。これ以上日が暮れては面倒だ。つづきは基地に帰ってからにする。いいな」

「…了解した」

バルクホルンは俯いて小さく答えた。

「大丈夫ですか!? しっかりしてください!」

宮藤は声をかけるが返事がない。このままでは海に突っ込んでしまふため、せめて落下を止めようと試みた。

「う〜〜! おも〜い〜!!」

宮藤はウィッチの体を抱き支えるが依然落下は止まらない。

その間にリーネとルツキーニが追いつき、リーネが右手の銃をルツキーニはストライカーユニットを持ちようやく止まった

「この銃見た目通り重いよ〜!」

「うじゅああああ!!! むり! シャーリー手伝ってえ!」

「あいよー。つと、確かに重いな」

などと4人がかりで運ぶことになった。

帰り道はこの正体不明のウィッチについての議論で持ちきりだった。

「いったいどこの誰なんでしょうか?」

「顔つきは扶桑人に似ているが知らない顔だな」

「それにこの銃ですが私たちが使うものと全然ちがいます」

「一番おかしいのはこのユニットだよなあ。もしかしてジェットストライカーだったりして」

「あれはまだ開発中のはずだ」

そんなこんなといろいろ話しているとルツキーニがあるものを見つけた。

「ん? ねえねえ、シャーリー。翼と尾翼に何か書いてあるよ」

「え? どれどれ」

「なんだ? 見せてみろ」

美緒が翼を、シャーリーが尾翼を見る。

「3つの矢じりのようなものが描かれているな」

「なあ。これ部隊章じゃないか?」

そう言われ、確認するとそこには水色の輪に白い飛行機のようなものが通り抜けているマークが描かれていた。

基地に着くまでずっと議論は続いた。

ただ1人だけ、バルクホルンは今も気を失っているウィッチを睨んでいた。

——少しだけ時間を遡る

空気を切るような音でわずかに意識が戻った

目の前に若干赤みがかった海がどんどん近づくのが意識しなくても理解できた

全身で風を受け止めているのが感じられる

どうやら自分が気づかないうちにイジェクトしていたようだ

でもパラシュートが開く様子がないので、このままでは海に叩きつけられて死ぬだろう。

すこしだけ残念に思う

もし死ぬなら空中で自身の愛機と共にしたかった

でもそんな贅沢が簡単には実現しないのが世界だと十分認識していた

ふと目を横にやる。目に入るのは沈みかけた真つ赤な夕日

それはこんな状況でもこころ奪われるほど美しいものであった

だからこれが最後まで、まあいいか、と思ってしまう

海面がすぐそこまで迫ってきた

覚悟を決めて目を閉じようとする、何かがちちに近づいてきた最初、俺の命を刈り取る死神かと思っただがそうではない

見るとどうやら女の子のようだ

つぎは天使にでも会ったかと思っただがこれまたハズレ

頭に天使の特徴である輪っかもなければ翼もない

その代わりに足に変なものを履いていた

どうやら本物の天使は万人が想像するものとはまったく違うものだ
だと理解し、内心ため息をつく

そんな珍妙な天使の顔がはつきりと分かるまで近づいたとき

「——ああ、そうか。やっと…」

心の中でそう呟き、目を閉じた。

？

同日 21:00

「それで、例のウィッチの容体はどうなの？」

この基地の最高指揮官であるミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐は坂本美緒少佐と今日起こった出来事を話していた。

「ああ。医師からの報告では、指先の内出血以外は目立った外傷はなく明日には目を覚ますとのことだ」

「そう、でも問題は…」

「ああ……こつちだな」

2人の前には例のウィッチが所持していたストライカーユニットと銃を見ていた。

他のユニットと比べ一回り大きく、並べて置いてあるせいか明らかに他とは違う技術が使われていると感じさせた。

「とりあえず機体には触れないように伝えておいたけど、とにかく彼女の目が覚めたときに聞いてみる必要があるわね」

ミーナの声が格納庫に静かに響いた。

第2話 「尋問」

「ここは・・・」

目が覚めると石造りの天井が見えた。

「あら？目が覚めたのね」

声が出たほうを向くとそこには看護婦と思われる女性がいた。

「ここは医務室よ。昨日の夕方にいきなり運ばれてきたから慌てたわ」

「それは申し訳ない。記憶はないのだが助かった。礼を言います」

メビウス1は深くお辞儀をした。

「別にいいですよ。じゃあミーナ中佐を呼びに行きますのでしばらくここにいてください」

「？ちよつと待ってくれ。その前に質問していいか」

部屋を出ようとした看護婦を呼び止めた。ある言葉が引つ掛かったからである。

「さつき中佐といったがここはどこかの軍事施設なのか？ノースポイントにこんな施設があるなんて聞いてないが」

しばらくの間、顔をきよとんとしていた彼女だがこう答えた。

「ここはブリタニア連邦、ウィッチーズ基地よ」

と言い残し部屋を後にした。残されたメビウス1は

「・・・はあ？」

少々まぬけな声を出していた。

（ブリタニア連邦？どこの国だ、ユージアにそんな国は存在しない）

メビウス1は今の現状を理解しようとしていた。だが、答えがまるで出てこない。

まあ、答えなんて出るわけがないのだが。

（それにウィッチーズ基地と言ってたな。ウィッチーズ・・・ウィッチ（魔女）？）

考えれば考えるほど分からなくなっていく。むしろ考えるだけ無駄なのか？と思えてきた。

（魔女の基地ねえ。箒に乗って呪文でも撃ちあうのか、もしくは魔術

師の戦闘機部隊が戦うのか)

などと、自分で勝手にどうでもいい想像を膨らませていた。ちなみに魔術師のエンブレムを持つ戦闘機部隊が彼の世界で8年後に表に出てくるのだが、それは別の話。

そんなことを考えているとドアが開いた。

入ってきたのはオレンジ色の長髪をした女の子であった。部屋の中に入る前になにやら周りを気にするようなしぐさをする。

「よし。誰もいないな・・・」

それに1人で何かぶつぶつ言っていて不審者以外の何物でもない。なんだこいつとか思っていると向こうから話しかけてきた。

「よう、気分はどうだい。少しはマシになったか?」

「ああ、まだ本調子ではないが悪くはない」

そうかそうかと言いながらどんどん顔を近づけてきて、

「なあ、おまえの機体どれだけスピードが出るんだ?」

そんなことを聞いてきた。

だがそんな言葉はあまり頭に入ってこなかった。なぜなら彼女の大きな胸が目の前にあつたから。

脳内でアラートが鳴り響いているのが平静を保とうと自分を落ち着かせる。

(落ち着け!落ち着け!今までの戦闘に比べればこの程度・・・)

など考えているがあることばで現実に引き戻された。

「なあ。いま『俺の機体』って言ったよな?この基地あるのか?」

「ああ、そうd「そうか!!」(ビクッ)！」

相手のあまりの変化にすこし驚くシャーリー。

「よかった。無事だったのか。あく安心した」

「ずいぶんとあの機体が入ってるんだな。」

「当たり前だ。長年一緒に飛び続けた相棒だからな」

「そ、そうか。よかったな。で、話を戻すけどどれくらいのスピードが出せるんだ?」

「ああ、それは・・・」

メビウス1は自分の愛機の性能を言おうとした口が止まった。

なぜなら、シャーリーの瞳が、なんとというか、えーと、その…
しいたけのようになり輝いていたからだ。さながら新しい玩具を見
つけたこどものように。

「で？どのくらいなんだ!？」

「あ…あ。速度は985ノット」

「985!？」

「マッハ1.7だ」

うそを言った。だがF-22はアフターバーナーを使わなくても
超音速航行が可能なため、それだけでも十分速い。

「すげえ。音速を簡単に超えられるのか。面白い話聞かせてもらっ
たよ。じゃあな」

「ちよつと待て。お互い自己紹介もせずに行くのか」

ああ。と立ち止まりこちらに振り返る。

「私はシャーロット・E・イエーガーって名だ。シャーリーって呼んで
くれ、お前は？」

「おれのこと…メビウスと呼んでくれ」

「メビウスか。変わった名だな」

「よく言われる」

また嘘をついた。正直嘘をつくことが嫌いなメビウス1だが上か
らの命令であるため従っていた。

「じゃあな。メビウス」

「ああ」

そういつてシャーリーが部屋から出ていくのを見届けた。

その顔が何かを企む顔になっているとも知らずに。

「あら、思ったより元気そうだなによりだわ」

「起きたばかりで悪いのだがこちらの質問に答えてもらえるか」

しばらくして、2人の女性が入ってきた。1人は一昔前のどこかの
士官の服を着た赤毛の女性。もう1人は黒髪で眼帯をした隻眼の女
性、細部は違うが60年ほど前のノースポイント海軍の軍服に似てい
た。

…なぜ下はズボンを着ていないのか

「質問を返すようで悪いがあんたがこの基地（？）の指揮官か？」

「ええ。カールスラント空軍JG3航空団司令、ストライクウィッチーズ隊長ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケ中佐です」

「私は扶桑皇国海軍遣欧艦隊第24航空戦隊288航空隊、ストライクウィッチーズ隊所属、坂本美緒だ。階級は少佐。」

2人が自身の所属を伝える。聞いたことのない国名だったのでよく分からなかったのだが向こうが言ってくれた以上こちらも応える必要がある。

「ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス隊長、コールサインはメビウス1。階級は少佐。名は・・・申し訳ないがお答えできない」
2人は表情を難くしてメビウス1を見つめた。

当然といえば当然の反応だった。名を明かせないことはさらなる疑いがかかることは当然である。

「どうしてもお答えできませんか？」

「上からの命令でな。自身の特定に関わるような情報は口外するなど言われている。名前や血液型、生年月日、出身国などすべて」

しばし、2人は黙っていたがミーナが口を開いた。

「さきほどアイサフ空軍の者と言いましたがそんな名前の軍隊は聞いたことがありません」

「なっ、そんなはずはない。今ではオーシアやユークトバニアに次ぐ軍事力にまでなったのだから知らないはずがないだろう」

「オーシア、ユークトバニアという国も知らないな」

ミーナと美緒の言葉で訳が分からなくなっていく。

ISAFどころか超大国であるオーシア連邦とユークトバニア連邦共和国すら知らないと目の前の2人は言ったのだ。

「じゃあ2人が知っている国をできるだけ多く言ってくれ。1つでも知っているものがあるかもしれない」

それに美緒が「じゃあ私が」と応える。

「まず帝政カールスラント、ブリタニア連邦、扶桑皇国、リベリオン合衆国の四大国。ほかにアラウエイランド、オラーシヤ帝国、ガリア、スオムス、ヴェネツィア公国、ヒスパニアなどがある」

「・・・すまん。すべて聞いたことない国だらけだ」

余計に混乱するだけであった。

はあ、とため息だけが出てくる。「一体ここはどこなのだ。」

「・・・ひとつ質問してもいいかしら」

「なんだ？」

ミーナの顔を見ないで応える。

「今、何年何月何日か教えてください」

「？何日か分からないが2007年の5月だろう」

おかしな質問を聞きながら即答する。

帰ってきた返事がとんでもないものだった。

「今は1944年の5月です」

「・・・」

沈黙。顔をあげてミーナと美緒を交互に見る。

信じたくなかったが嘘をついている顔ではなかった。

そもそもこの場で嘘を言う理由が思いつかない。

「・・・仮にそうだと君たちが1944年の人間だと証明できるものは？」

「それは貴様が証明している」

美緒がこちらを睨みながらそう答えた。

「貴様が寝ている間に貴様のストライカーユニットを調べさせてもらった。分解はしていないが特異なフォルムにレーダーを反射する装甲。さらに機銃の威力と速度が今の技術を集めても作れるものではない」

先ほどとは違う雰囲気を押されそうになるメビウス1。

だがこちらにも引くわけには行かなかった。

「俺と俺の相棒(F-22ラプター)の存在自体が俺が未来から来た人間だと証明するに足ると、じゃあ力づくで奪うのか？もしそうなら無駄だとしても抵抗するぞ」

こちらにも2人に睨みかえす。

「奪いなんかしないわ。まあ、未来の機体だと予想はしていたけど私たちが使うとどうなるか分からない。今はだれも触れさせないよう

「にしているから安心しなさい」

「すこしだけ安心した。このまま相棒が知らない連中にバラバラに分解されるなら拳銃片手に抵抗するつもりだった。」

「話を戻すけどなんで未来の人間であるあなたがこの世界にいるの？」

「そりゃこつちが聞きたいよ。黒くてでかいレーザー兵器もつ化け物と交戦して勝ったと思ったら吸い込まれて気が付いたらここにいた」

「メビウス1は独り言のように呟く。」

すると2人が

「黒い化け物・・・ネウロイだな。」

「その可能性が高いわね」

と、なにか知っているような感じだったので聞いてみた。

「もしかしてあの化け物のこと知っているのか？」

「さつきから思っていたのだが貴様は本当に未来の人間なのか？なぜネウロイのことをしらない」

「ネウロイという言葉も知らないし、ついでに言うとな俺がいた世界の1940年代に君がさつき言ってた国は俺の知る歴史には一つも存在しない」

これまでの会話を踏まえてミーナはこう結論づけた。

「もしかしたら別の世界、それもネウロイがいない世界の人間なのかしら」

「にわかには信じ難いがな」

「俺には目に映るものすべてが信じられん」

そんな感じでメビウス1に対する尋問は終了した。

「ちなみに貴女の機体の性能はどうなっているの？」

「先ほどシャーリーが聞いてきたことと同じことを聞くミーナ。」

「速度は985ノット、上昇限界高度は50000フィート」

驚く2人、だが

「このことはシャーリーに言っただけダメね・・・」

「ああ・・・あいつのことだ。やることは目に見えている」

と、先ほどの人物でなにか物騒な話をしている。

メビウス1は聞いてみることにした。聞かなければ大変なことになるかもしれないと第六感が働いていた。

「なあ、そのシャーリーって奴なにかあるのか」

2人は顔をしかめながら答えた。

「私の隊員の1人なのだけど彼女ものすごいスピード狂で」

「自分のストライカーユニットを改造して罰を受けたり、バイクやトラックも改造して近くの町まで爆走している」

「何度注意しても聞かないのよ」

はあ、と一際大きなため息を漏らすミーナ。

なるほど苦労しているのだなと考えていたが、つい先ほどのあいつのことを思い出す。

そんなこの彼女の前に音速を簡単に超える機体（彼女にとっては玩具）があればとるであろう行動がすぐに想像できた。

「おい！今すぐ俺の機体のところへ案内してくれ!!」

いきなり大声を出したメビウス1に驚く2人。

「どうしたの？」

「なんなんだ急に」

「お前らが来る前にシャーリーって奴が来て性能を言っちゃまったんだよ！早くあいつを止めな……い……い……と……」

急いでベッドから出たメビウス1は自身の目を疑った。

なんと自分はズボンを穿いてなくパンツだけだったこと。

いや、それ以上に驚いたのは

「な……な……!」

自分の足が自分の知る姿ではなく

足だけでなく自分自身の体全体が

「なんで女の体になってるんだあああああああ
!!!??」
病室にこれまでにない絶叫が鳴り響いた。

第3話 「再会と二つの歴史」

シャーリーはひとり通路を歩いていった。

「985ノット・・・マツハ1.7・・・ふ・・・フフ・・・フフフフ
フフフフフフ」

不気味な笑みを浮かべて小走りで格納庫へ向かうシャーリー。メビウスの予想は間違っただけではなかった。なにせ目の前に未知のストライカーユニットがあるのだ。今の技術で作れるものではないとシャーリーは判断していた。

「シャーリー？どしたの？そんなににやけて」

別の通路から出てきたルツキーニが話しかけてきた。

「お、ルツキーニ。今日で音速の壁を簡単に打ち破ることができてるぞ」「ほんと!？」

「ああ。昨日連れて帰ったやつが履いてたやつ。じつはな・・・」

先ほど入手した情報を話すシャーリー。2人は騒ぎながら格納庫へ急いだ。

だがここで問題が発生した。

「むむ・・・あの機体の前に3人いるな・・・」

格納庫に着いたシャーリーとルツキーニは陰から様子を伺っていた。

例の玩具の前に3人、バルクホルン、ハルトマン、ペリーヌがいたからである。

昨日から例の機体に触れないよう全員に連絡がされていたため興味を持つ者が見に来ていた。これでは乗ることすらできない。

「ルツキーニ、少しあいつらの気を引いてくれないか」

「いいけどどうやって?」

「ん、こんなのでいいんじゃないか?」

シャーリーは適当に思いついたことをルツキーニに伝えて実行に移した。

メビウスの機体を前にバルクホルン、ハルトマン、ペリーヌの3

人は見ながら話をしていた。

「にしても大きいねー。見たところジェットストライカーっぽいけど」

「実験の段階だから実用化はまだ先だ。それと、あのウィッチが所持していた銃を試撃ちするよう中佐に言われたのだが初速が我々のものと違いすぎる」

「どのくらいの違いですか?」

「私たちが使う銃は1分間に平均1200〜1500発だろうか?だがこれは違う・・・すぐに弾切れになったが少なくとも3000発はあった」

「毎分3000発!?!」

あまりもの違いに声を上げるペリーヌ。ハルトマンも声はあげないものの驚いていた。

「へー、ウルスラに見せたらすごく喜ぶだろうなー」

「・・・だが1番異常なのはこのストライカーユニットだ。」

バルクホルンは真剣な目で機体を見ながら言う。

「それはどういう意味ですか?」

「坂本少佐から聞いたがこの機体、レーダーに映らないそうだ」

「レーダーに映らない・・・」

「こつらが気づかないうちに懐に入られるね」

その事実を理解し再び例の機体を見る3人。これが本当ならかなりの脅威だ。今はレーダーのおかげでネウロイを早期に発見し迎撃しているが、もしこれが敵なら知らないうちに近づかれて攻撃を受けていたとないかねない。

「ねえねえ。なにしてるの?」

そこにルツキーニが入ってきた。

「例のウィッチのストライカーユニットを見てるんだよ」

「へ・・・」

じーつと機体を見つめるルツキーニ。すると横に顔を向けて

「あれ?あそこにいるの昨日のウィッチじゃない?」

と奥を指差した。

「なに！」

「ん〜？」

「どこですの？」

3人はルツキーニが指差すほうを見るが誰もいない。

機体から目を離れたその一瞬の間に

「イイイイイイイイアアアアアアッフウウウオオオオオオオオ!!!」

シャーリーがものすごい笑顔で大声をあげながらメビウス1の機体に乗った。

かなり適当な作戦だったがうまくいったようだ。

「なっ、おい！リベリアン！その機体には触るなどの命令を忘れたのか！」

「細かいことはいいんだよ！これで私は音速の世界を見に行くのさ！」

バルクホルンが言ってくるがお構いなし、シャーリーは機体を滑走路に移動させようと魔導エンジンに魔力を注ぎ込んだ。

一方、メビウス1とミーナ、美緒の3人は格納庫に向かっていった。

走りながらミーナが何かをしゃべっている。

「・・・じゃああなたは女性ではなく男性なの？」

「ああそうだよ。確認するけど昨日俺を助けた時にはすでにこの姿になっただのか？」

「ああ、そうだ」

頭が痛くなってきた。異世界に飛ばされたあげく女の体になるなんて。

神様の悪戯なのか知らないがこんなことした元凶にA―10の30mmGAU―8ガトリング砲をプレゼントしてやりたい。

「今の貴女は18歳くらいですけど前の世界の年齢はいくつなの？」

「俺は28歳だ。この話はあとでいいか。急いで案内してくれ」

「急ぎたいなら腰に巻いてあるそれを取ればいいだろう」

「あんな格好で外にでられるか！」

病室での会話を思い出す。メビウス1の女体化騒動がひとつだがもう一つの騒動は彼女たちが下をパンツのみで平然としていたこと

だった。

——なんでパンツ一枚だけなんだ！ズボンを穿け！ズぼんを！

——失礼ね。ちゃんと履いてるじゃない——

——どこが!?!——

——貴様も履いているだろう。それがズボンだ——

——違う!!——

などと会話が続けていたが埒が明かないため話を切り上げて格納庫で向かうことにした。

メビウス1は部屋を出る前に置いてあった大きめのタオルを腰に巻いて歩いている。

「文化も違えば価値観も違うってよく聞くがこれはないだろ・・・」

「ん？なにが言ったか？」

メビウス1の独り言に美緒が反応するが、「なんでもないです」と即答し3人は格納庫へ急いだ。

格納庫に着いた3人は人だかりができているのを発見した。近づくとその中心には先ほどの女の子シャーリーが仰向けに倒れており、肩を使い大きく呼吸している。

「ぜえーはーぜえーはーぜえーはー・・・」

さながらフルマラソンをした後のように見えた。

シャーリーがいることを確認するとメビウス1は自分の相棒を探したが見つからない。

美緒にどこにあるか聞いて指差すほうを見た。

絶句。

そこにはF-22ラプターらしきものが置いてあった。主翼と尾翼は似ており、機体表面のラインが間違いなくラプターだと確認できた。ただ異常があるとすればコックピット部分がないこと、機体が壊れている訳ではないが当たり前のように縦半分に分かれている有様

だった。

「あ………相棒……?」

信じられないという顔をしながら機体にさわる。機体の主翼に I S A F のマーク、尾翼にメビウス隊のエンブレムを確認しこの機体が間違いなく自分の機体だと理解した。

「相棒………こんな姿になっちまって」

なんとか絞り出せた言葉であった。

「ミーナ、彼……といえはいいのか。あのままでいいのか?」

美緒は機体に触りながら膝をおり顔を俯かせているメビウス1のほうを指差すが

「そつとしておいてあげましょう。なんだか話しかけられる雰囲気ではないし……それに可哀想に見えるわ」

「あ……ああ、そうだな」

ミーナの提案を受け入れて人だかりのほうへ歩いていった。

「で、これはどういうことですか?」

その声に全員が振り返り、ミーナ中佐が来たことを知る。

「ああ、実はな……」

バルクホルンが今の状況を説明し始めた。

シャーリーがああ機体に乗る魔導エンジンをかけようと魔力を注いだのだがまったく動かなかった。起動させようとしてたけの魔力を注いで何とかエンジンがついたのだが、その時にはシャーリーの魔力はほとんど使い切っていた。

そして、今に至るといふ。

「シャーリーさんが魔力を注いでも起動させるのがやつと……」

「飛ばすにはかなりの魔力量が必要になるわけか」

バルクホルンの話からああ機体の性質を推測した。

「はあ、先ほども言いましたと思いますがあの機体に触れることは一切禁止します。いいですね?」

「了解した」

「りょうかい」

「わかりました」

ミーナ中佐の命令にそれぞれ返事をする3人。

「それとシャーリーさん？」

「はー・・・はー・・・なんででしょうか？」

ものすごく疲れた顔をしてるシャーリーに対してミーナは笑顔で

「今すぐにはいませんが、あとで私の部屋に来てくださいね」

と言った。赤の他人から見ればとてもきれいな笑顔に見えただろう。

「・・・はい」

何かを悟ったかのようにシャーリーの小さい返事が聞こえた。

シャーリーに伝えることを伝えたミーナはメビウス1のほうへ向いた。

メビウス1は先ほどと同じ体制のままであった。

彼が女ではなく男と聞いたとき、彼はウィッチではなく普通の戦闘機乗りだとミーナは推測していた。もし仮にウィッチなら自分の機体を見てあんな反応はしないだろう。ならここに来る前はあのストライカーユニットは戦闘機でそれに乗ったまま彼はこの世界に来てしまったと考えるのが妥当だとミーナは思った。

そして、なぜかわからないが彼は女の姿に、あの戦闘機はストライカーユニットへと姿を変えた。

自分の憶測だがこれで間違いないだろうとは判断した。

それにしてもいくらなんでも気を落とすすぎではないだろうか？
ミーナは思った。

「お取込み中悪いのだけど詳しく話をしたいから執務室に来てもらえないかしら？」

「・・・その間にこの機体は大丈夫なのか？」

「皆に触らないよう命令したから安心して、それになにを落ち込んでいるの？」

さつきからブルーな雰囲気になっているメビウス1にミーナは質問した

メビウス1はゆっくりと立ち上がり

「俺が女になったことも含めて・・・絶望的な光景は見慣れたが・・・これは強烈すぎる」

自身の愛機を見ながらそう呟いた。

その後、2人は執務室へ移動した。この時でもメビウス1の気は凹んでいた。

「俺が女の体になるのはいいとして、なんで相棒までこんなことになるんだ・・・」

「落ち込んでいるけどさして問題は無いんじゃないかしら」

「どこが。あんな意味不明な形にされて、あれでどう飛べばいいんだ」

メビウス1はその一点のみを考えていた。機体が無事と言われて安心したが、あれではコックピットがないため乗ることができない。

メビウス1は自分が女の体になったこと以上に神様の悪戯を恨んでいた。30mm GAU-8ガトリング砲だけでは物足りない、FAEB（燃料気化爆弾）でも気が治まるかどうか。

「おそらくですけどあの機体で飛ぶことはできると思いますよ」

「どうやって？乗るところなんてないじゃないか」

「乗るのではありません。履くのです」

「・・・は？履く？あれを？」

「詳しい説明はこの世界のことを含めてお話します。いいですか」
「分かった。頼む」

メビウス1はミーナからこの世界のことを聞いた。まず、魔法が存在しそれを操る魔女がいること。ストライカーユニットという魔力を動力源とする機械が開発されたこと。1939年に黒い異形の敵「ネウロイ」が世界各地に出現し人類に対し侵略を始めたこと。通常兵器でも戦果はあるもののそのほとんどが効かないこと。その戦いによってヨーロッパ大陸のほとんどが侵略されたこと。これに対し、唯一ネウロイに対抗できるストライカーユニットを使える魔女で編成された部隊ができたこと、などを話してくれた。

「それが私たち、ストライクウィッチーズ隊です。主にヨーロッパ大陸最後の砦であるこのブリテン島をネウロイから守るのが任務です。

ほかにも部隊があり、それぞれの任務を帯びています」

それを聞いたメビウス1はただただ黙っていた。自分たちとは違う世界。そこでは人類共通の敵を倒すために国、宗教、民族の垣根を越えて人々が協力し合い戦っている。これだけ聞けば人類がひとつになっていると見えるだろう。だがメビウス1はあることを気にしていた。この状況はまるで――

「それでは今度は……えーっと、なんてお呼びすればいいのかしら？」
「メビウスと呼んでくれ。シャーリーの奴にもそう伝えたからな」

それじゃあ、といいメビウス1は話を始めた。

「あんたが知っているとおりの世界にネウロイなんて化け物はいない。まあここに飛ばされる前に偶然見つけたがな。で、当然ネウロイとの戦争はなかった。だが――」

メビウス1の話が進むにつれてミーナの表情がだんだん暗いものになっているのがわかった。当然だ。自分が話しているのは俺の世界で2年前に終結したばかりの国と国の戦争、人間同士の『殺し合い』なのだから。

メビウス1はその戦争のきっかけから話を進めた。エルジアという軍事大国とその他の小国家群の間で長く武装平和という緊張状態が続いたこと、1999年に起こった小惑星ユリシーズの落下、それに伴う大量の難民の発生とその押付け合い、軍事大国エルジアの武力侵攻、それに対抗して小国同士で軍事同盟『ISAF』を結成、敗走を繰り返しユーリア大陸からの撤退、その後が始まるきわどい中での反撃作戦、中立国首都サンサルバシオンの解放、エルジア首都フアーバンティへの侵攻、そして終戦……。

「ユリシーズ落下から戦争終結までの6年間……死人が山ほど出た。政府の公式発表と民間が独自に調べた内容は違うが……一説には2000万人が亡くなったとの情報もある」

その話を聞きながらミーナはメビウス1の目を見続けた。彼は話している間目をやや下のほうを向けていたが、その眼は何も見っていない。虚空を見つめているようだった。ミーナは真剣にメビウス1の話を受け止めていた。それはミーナが常日頃から思っていたこと、今

はネウロイという脅威に対して人類は団結しているがもしネウロイがいなければ人間同士、ウィッチ同士の殺し合いがあったことは目に見えていた。

「俺自身、任務とはいえたくさんの人を殺した。戦争は終わった」

話を終えたメビウス1は両手で顔を覆った。辛いことがあったことが分かった。

「あなた自身もつらい思いをしたのね」

「ああ、俺の隊の前の隊員たちは反撃作戦に入る前に・・・」

ミーナは自分の質問を後悔した。彼に悲しみを思い出させてしまったのだから。

「ごめんなさい、つらい思いをさせて」

「いいんだ。探りを入れるようで悪いがあんたもつらいなにかがあるのが分かった」

メビウス1の指摘は間違いでなかった。ミーナ自身もここブリタニアに撤退するとき彼女の恋人が亡くなっている。

謝罪としてミーナはそのことを言おうとしたがメビウス1は右手で待ったをかけた。『無理をして言わなくてもいい』と無言で告げていた。

「ごめんなさい。本当に申し訳ありません」

ミーナが深々と頭を下げ謝罪の意を示す。

「気にするな。それに階級でいえばあんたが上官だろ？そんなに頭下げられるとこっちが困る」

メビウス1の言葉で顔をあげる。

「年相応のことばを言っているのに、今のあなただとおかしな感じね」「それは怒ってのいいのか？」

そんな会話をし、2人は少しだけ笑いあった。

第4話 「飛翔」

2人は話の続きを始めた。

「つまり、俺の機体はそのストライカーユニットになっていると？」

「形状から見て間違いないはずです。我々のものと異なりますが異世界の戦闘機を元としているなら飛ぶには問題は無いでしょう」

「そう言われてもな。操縦の仕方が分からないなら乗れないのも同然だと思うが」

仮にあれを履いたとしてもどうすればいいのか。しかもあれを履いている自分の姿が想像できない。

「昨日あなたを救助したとき、あのストライカーユニットを履いていたと報告にはあります」

「あれを履いていた？俺が？」

「ええ、もしかしたら動かせるんじゃないかしら」

俄には信じられないことだった。あんな状態の相棒でも飛ぶことができるかもしれないのだ。試に動かしてみるのは可能だろうか。

「じゃあ、13:00に試運転を兼ての性能の確認を行います。それでいいわね」

「分かった。その時はよろしく頼む」

こうして動くかどうか分からないが、相棒を飛ばすことが決まった。

まだ隊員の皆に顔を合わせる段階ではないので病室で昼食を取ることにした。

「少しだけ待っていると昼食を持ってきたのが

「よく。待たせたなくメビウス」

シャーリーだった。先ほどと比べて大分回復しているようだがまだ疲れているのだろう。

「おいおい。大丈夫か？それと相棒に勝手に乗るなよ」

とりあえず、釘を刺しておこうとする。

「フフフ……。私は夢を簡単に諦める女じゃないのさ！」

……。こいつ。まだ諦めていなかったのか。

「だがどうやって動かすんだ。ミーナ中佐から聞いた話じゃ動かす前に魔力切れ起こしたそうじゃないか」

「それはもう解決済みさー!」

今度はどうしようというのだろうか。また、変なことを起こす前に聞いてみることにする。

「どうすんだよ」

「そんなの簡単だ。お前があれを操縦する、私はそれに乗れば魔力を使わなくとも音速を超えることができる!」

ガッツポーズを取りながらシャーリーは力説した。そんな彼女に非情な現実とやらを教えてやることにする。

「その案、無理だぞ」

「この作戦で私は・・・へ?」

シャーリーの間抜けな声が響く。しばらく無言が続いたがこちらから話を切り出すことにした。

「あの機体はもともと単座、一人乗りだ。それに無理やり乗り込まれると失速しかねない」

相棒に乗ること自体を諦めてもらうためにいろいろ言った。第一危険極まりない。

シャーリーはというとフリーズしているように見えた。

「え・・・だめ?」

「だめ」

それだけで会話は終了した。シャーリーはため息ひとつして部屋から出ていく、涙を流しながら。

(泣くな、強く生きろ)

心の中でそう励ましメビウス1は食事を始めた。

昼食を食べ終えたメビウス1は格納庫にある愛機の前にいた。本当に履けるのかこれ?と思いつながら機体を見つめていた。

「どうした。乗らないのか?」

後ろから坂本少佐が話しかけてきた。

「いや、乗る前に確認するが助けられたときこの格好してたのか、俺?」

「ああ、そうだ」

改めて自分の服装を確認する。上は渡された私服に何故か普段着ていたフライトジャケットだった。下は・・・パンツ一枚だけである。彼女たちから見れば制服の一部らしいから変な目で見られることはないが、それでもこっちが気にしてしまう。

「ジェット機乗るには耐Gスーツ、ヘルメットが必要不可欠なんだが・・・不安だ」

「はっはっはっ！まあ試運転するには見つけた時の格好にするのがいだらう」

「にしても下パンツ一枚・・・いや、君たちからいえばズボンか。これはどうにかしないとこっちの身が持たん」

メビウス1は大きくため息をはいた。これは試験飛行が終わった後にどうにかしなければ。

「坂本少佐、だれでもいいから余っているものがあればジーンズか男性用の作業服がほしい」

外見でいえばスカートなのかもしれないがあんなもの履きたいと思わない。絶対に。

「そうだな、高射砲部隊か整備部のところに聞いてみよう」
「助かる。で、これをどう履けばいいんだ？」

メビウス1は少し躊躇っていた。足を入れる場所は分かっているのだがとりあえず聞いてみた。

「そこに穴が開いてあるだろう？そこに入れるんだ」
予想通りの返事が返ってきた。ふと、気になったことを口にする。

「そういえばこいつは機械の塊だから足を入れるスペースなんてあるのか？」

「ストライカーユニットに入れた足は魔法で別次元に移動するから問題ない」

なんか不可能なことすべて魔法で補っているのかと思えてきた。
「そろそろ時間だ。準備してくれ」

「了解。相棒に乗るはずなのに変な気分だ」

疑心暗鬼のままメビウス1はF-22と思われるストライカーユ

ユニットに足を入れた。

その時、頭に直接「ピイイイン」と電子音が響いたのを感じた。それと同時に表には出さないものの動揺するメビウス1（なんだこれ？操作は全く違うのに手に取るようにわかる）

そんなことは余所に灰色の猛禽類はその眠りから徐々に目覚める。キイイイイイというエンジンの甲高い音が格納庫に反響する。美緒はメビウス1を真剣な表情で見つめていた。

（ものすごい量の魔力だ。宮藤の数倍かそれ以上の魔力量だな）
そう心の中で思い無意識に口から

「これが未来の戦闘機・・・」
と呟いていた。

その頃、滑走路にはストライクウィッチーズ隊の皆が集まっていた。

「いったい何が始まるんだろうね」

「ちよつとだけ楽しみなだね。芳佳ちゃん。」

「昨日助けた方のストライカーユニットの性能の確認と聞きました
が」

「ミーナの奴、あんな得体のしれないやつを得体の知れないストライカーユニットに乗せて試験飛行するなんて」

「いいじゃないいじゃん、トゥルーデ。面白そうだし」

「お前はもう少し危機管理というものをだな！・・・」

「ウジユ？シャーリーは？」

「シャーリーさんは、あいつのスピードをこの目で確かめてみたい
！」と喋って飛んでいきましたよ」

「えっ、でもミーナ中佐から罰則として格納庫と皆のストライカーユニットの清掃って言われてなかった？」

「リベリアン・・・ミーナに報告が必要だな」

「そういうえばエイラさんもないですね」

「エイラさんとサーニヤさんなら例のストライカーユニットの性能の確認のためもう空にいますわよ」

宮藤、リーネ、ペリーヌ、バルクホルン、エーリカ、ルツキーニの

5人が集まっていた。

理由はもちろん昨日助けたウィッチが履いていた不思議なストライカーユニットの試験飛行をするという聞いて。

「一体どんな機体なんだろうな」

「ジェットストライカーなのかな？」

宮藤とリーネはそれぞれの想像を膨らませていた。

「あまり期待しないほうがいいですよ」

「そうだぞ・・・お。ようやく出てきたな」

皆の視線が格納庫から出てきた陰に注目する。

私たちが使うものとは違う構造を持ちとても滑らかに見える。

操縦者を見るとあることに気が付いた。

何か鳥の羽のような耳や尻尾があったが、頭の右側の髪にあるものが結ばれていた。

「・・・リボン？」

「油圧、電子系統、制動系に異常なし。燃料は・・・ん？MAXになっている？」

少しおかしいと思った。この世界に飛ばされる前の戦闘で燃料はすでに半分は切っていたのを覚えていたからである。

「メビウス1よりミナーナ中佐へ、いつの間に燃料を補給したんだ？」

《燃料なんて入れてないわ。それにさっきも説明したけどストライカーユニットのエネルギー源は操縦者の魔力よ》

そう言われてメビウス1は思い出す。ということは

「これは俺自身の魔力・・・ってことか」

《そういうこと。他に質問はあるかしら？》

「いや、大丈夫だ」

機器の最終チェックを済まし、管制塔に連絡する。

「メビウス1、離陸準備完了。指示を待つ」

《こちら管制塔、発進を許可する》

「了解。メビウス1、離陸する」

管制塔からの指示を受けてメビウス1はエンジンに火をつけた。

ゴオオオオオ!!とジェット機特有の轟音をあげてスピードを上げる。

滑走路が短すぎると思ったが、それよりも短い距離で離陸ができた。

《エンジン始動から30秒もかからずに離陸!?!》

ミーナ中佐の驚きの声が通信を通して聞こえた。

「こちらメビウス1、離陸完了した。どうすればいい?」

《あ・・・ええ、基地上空にエイラさんとサーニヤさんがいますので合流してください》

索敵レーダーを起動する。出てきた情報が直接頭の中で映し出される。

「これか。ん、反応が3つ?もう一人はだれだ」

疑問に思いながら近づくとそのもう一人がシャーリーだと気付いた。本当に相棒のことが気に入っているらしい。

「・・・すごいスピード」

「ダナー。でも音がうるさすぎるナ」

「やっぱり私の予想は間違いではなかった!」

3人で短い会話をし通信を入れた。

《メビウス、聞こえるか?》

「ああ、通信はクリア。シャーリーと君たちは?」

《私はサーニヤ・V・リトヴァクです。性能の確認をするため呼ばれました。サーニヤと呼んでください》

《私はエイラ・イルマタル・ユートイライネン。エイラでいいゾ》
2人が名前を紹介してくれた。名前からしてサーニヤはユークトバニア系かなとメビウス1は思った。

「こちらメビウス1、どうすればいい?」

《はい。これから最大速度と上昇限界高度の確認をやります》

《中佐から聞いた話だと速度985ノット、高度50000フィート。本当ナノカ?》

《マジだつて!今もうちらよりスピード上じゃん!》

そんな返事が返ってきた。当たり前だな、こいつ(F-22)はこ

の時代、この世界にないものなのだから。

「こいつの性能は君たちが確認してくれ。こっちの準備はOKだ」

《あの・・・一つだけ問題が》

「なんだ？」

《なぜか分からないけどストライカーユニットの反応が弱いのですが・・・》

反応が弱い・・・ああ、そういうことか。メビウス1は胴体下ウエポンベイを開く。そこからAIM-120C AMRAM（中距離空対空ミサイル）が姿を現す。

《うおっ、開いた!?!》

《あ、映った》

《なんだあの長いモノ?》

機体のウエポンベイを開けたことで目を丸くする3人。

「これで問題ないか？」

メビウス1の言葉に無言でうなづくサーニヤを確認する。

「メビウス1、これよりスピード性能の確認を行う」

と言ってもアフターバーナーの存在は伏せてあるので最高速度を偽る形になるのだが。

スロットルをあげてどんどん増速する。魔法がかかっているのかスピードの対しての風圧は少なかった。だが、速度が上がるにつれて大きくなっていく。

「現在時速1400km以上・・・!」

「スゲ〜・・・」

「ああ!一度でいいから乗ってみたい!!」

シャーリー、エイラ、サーニヤの3人はそれぞれの感想を口にしていた。一方地上の面々も

「想像以上のスピードね」

「距離15kmをあっという間に飛行か」(魔眼使用)

「えっ!?もう見えなくなっちゃった」

「速いねー」

「一体何者ですのあのウィッチ」

「うじゅー！シャーリー絶対よろこんでそう」

「簡単に音速以上のスピードを出し、そのうえレーダーに引つ掛からない装甲をもつストライカーユニット・・・」

「これ見たらウルスラどんな反応するかな？」（ワクワク）

と十人十色な反応をしていた。

「現在870ノット」

全身で風を受けながら報告する。しばらくそのままの速度だったので加速をやめた。

《時速、約1600kmでストップしました。》

《985ノットまで出てナイナ》

《おいおいメビウス。もしかして出し惜しみしたのか？》

通信から3人の話が聞こえてくる。シャーリーが言ってきたので理由を説明した。

「ウェポンベイを開いたままだからな、その分空気抵抗が増えたんだ。普段は閉めているから985ノットは出せる」

言い終えると同時に《へー》と驚くような感心するような返事が聞こえてきた。

「それじゃあ、今度は上昇限界高度の確認を行う」

機種を上にあげて上層を開始する。高度10000フィート・・・15000・・・20000・・・

「メビウスさん、高度12000mを突破しました」

「どんどん上がってイクナー」

「すっげー！すっげー!!!」

あまりの性能に驚く2人と目を輝かせるやつ1人。

「現在50000フィート！・・・限界か」

1人呟いて体を水平にした。すると眼下に広がる絶景。戦闘機の性能から見て可能だったが、一度も見たことがなかったので思わず見惚れてしまう。

《高度、約15000mで止まりました》

《おいメビウス、どうした。もう戻ってきていいぞ》

「・・・ああ。こんな絶景はあまり見たことがなくてね」

《なに！どんなだったか基地に戻ったら教えろよ！》

《高度15000mからの風景・・・私も聞きたいです》

《サーニヤが聞きたいなら興味あるな》

3人が今俺が見ている風景に興味津々のようだ。

「分かった。基地に帰ってからな。メビウス1、これより帰投する。

RT・・・」

あるものを見かけてメビウス1は黙ってしまった。あまりにも分かりすぎる異常を目にして。

「こちらメビウス1、ミーナ中佐。聞こえるか？」

《聞こえるわ。どうかしたの？》

メビウス1の通信に応答するミーナ。

「南の空・・・大陸の空に黒い積乱雲のようなものが視認できるが」

そう。メビウス1は大陸の空を覆っている黒い雲を見つけたのだ。

それがただの雲ではないとメビウス1は感じ取っていた。

《それはネウロイの巣よ。そこからネウロイが生まれているの》

「あれがああな物の巣か・・・」

メビウス1はそれを少しの間だけ見続けた。大陸を占領したネウ

ロイ。奪われた故郷を取り戻そうと奮起し最後の砦である島国を守る人々。

(あのとときのノースポイントといっしょだな)

心の中で呟き、基地へと帰って行った。

第5話 「入隊と交流と」

試験飛行を終えシャーリー、エイラ、サーニャに飛んでいるとき見た上空からの景色を伝えて、坂本少佐と共にミーナ中佐がいる部屋に入った。

「それでああなたの処遇についてなんだけど、これからどうしようと考えているのかしら?」

ミーナ中佐の言葉で今の自分がおかれた現状を再確認した。ここは自分がいたところとは違う世界である。

「さあな。この世界どこにいても俺には分からないことばかりだ。君たちにとって俺がじゃまなら相棒と共に去るつもりだが行く当てがない」

メビウス1はそう答えた。最も相棒をここに置いていく訳にはいかない。ここに残すことはないが、あいつに乗って飛んでいき別の滑走路に着陸すれば無用な混乱が広がり面倒くさいことになる。

「・・・最悪、機体を破壊するしかないかな」

メビウス1は自身が一番やりたくもないことを口にした。あの機体をここに置いて出ていけば絶対に分解されて隅々まで解析されるだろう。ただ、この世界の技術者たちがおそらく約50年後に生まれるであろう最新鋭技術の結晶ともいえるF-22Aをすべて理解できるとは思えないが、この時代にとって俺や相棒の存在は危険すぎる。

「そこでこちらからの提案ですけど」

「なんだ?」

「あなたを第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズの臨時特殊戦闘隊員として迎えたい」

ミーナはメビウス1にそう告げた。

「・・・元の世界に帰るまでの間、居場所を提供する代わりにいっしょに戦ってくれ、と解釈していいのか」

「ああ、そういうことになるな。どうする?」

坂本少佐に再度聞かれたが、拒否はしなかった。ただ

「ひとつだけ条件がある。俺の機体に誰も触れさせないことを呑んでくれれば」

「ええ、それでいいわ」

2人はソフアーから立ち上がり握手を交わした。

「改めまして、第501統合戦闘航空団ストライクウィッチーズ隊長、ミーナ・ディートリンデ・ヴィルケです。メビウスさん、あなたを歓迎します」

「ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス隊隊長、コールサインはメビウス1。しばらくの間よろしく願います。」

「それでは改めて自己紹介させてもらおう。ストライクウィッチーズ隊所属の坂本美緒だ。主に隊の戦闘指揮官を担当している。階級は同じだから好きなように呼んでくれ」

「会って1日しかたつていない人にいきなり呼び捨ては悪いからな。坂本少佐と呼ばせてくれ」

坂本少佐とも握手を交わした。

これでメビウス1は臨時とはいえ、ストライクウィッチーズの一員として彼女たちと共に空を飛ぶことになった。

ブリーフィングルームでは、メビウス1といっしょに飛んでいた3人、シャリー、サーニヤ、エイラの話を聞こうと他のメンバーたちが集まっていた。

途中でミーナ中佐と坂本少佐、メビウス1が入ってきたためお開きとなった。

「もうすでに知っているかも知れませんがさっそくだけでも皆さんに紹介したい人がいます」

「昨日助けたウィッチのことだな。一体どこのウィッチなんだ?」

バルクホルンがメビウス1を睨みながら言う。その程度で怯みはしない。

「それがかなりややこしくて説明すると話が長くなるのだけど」「簡単に言うと、我々とは違う世界のウィッチだそうだ」

坂本少佐の言葉でざわつく。因みにミーナ中佐と坂本少佐は俺が本当は男であることを知っているが、余計な混乱を避けるため自分は

女性ということまで話を進めた。

「まずは自己紹介が先ね。お願い」

「ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス隊隊長、コールサインはメビウス1。階級は少佐だ。本日付で第501統合戦闘航空団の臨時特殊戦闘隊員として入ることになった。メビウスと呼んでくれ」

聞いたことのない名前の軍隊名に皆が話し始める。

「あいさふ?」

「聞いたことない国だな」

「ねーねー。アイサフってどんな国なの?」

皆がそれぞれで話している中、髪がツインテールの女の子が質問してきた。

「ISAFは国ではなく、軍事同盟の名称だ。正確には独立国家連合軍“Independent States Allied Forces”・・・頭文字をとって“ISAF”だ」

「じゃあ、どこの国出身なんだ?」

「ミーナ中佐たちにも言っているが本名も含めて答えることはできない」

「所属以外は答えられないだど?我々をなめているのか!」

「トゥルーデ、落ち着いて」

トゥルーデと呼ばれる女性が机を叩き叫んだ。

「あんたが怒るのも分からなくはない。だが、俺がいたところは特殊部隊のような扱いになっていてな。命令なんだ。理解してくれ」

「なんで男口調なの?」

「あー・・・ガキの頃からこうなんだ。しかたがない」

「なあなあメビウス。お前のストライカーユニットなんて名前なんだ?」

「“F-22Aラプター”だ」

「Raptor・・・猛禽類。・・・かつこいい」

医務室にいた時と同じように目を輝かせるシャーリー。

「あのストライカーユニットは未来の戦闘機ではないかとうわさがあるのですが」

「あながち間違っではないわ。あのストライカーユニットはメビウスさんの世界のもですが、今より約50年後の技術だそうです」

「「「「へ〜」」」」

目の前にいる女の子のほとんどが声を上げる。

「しつもん。メビウスは何年にいたの？」

「この世界の未来ではないが2007年の空を飛んでいた」

「なんでもネウロイと交戦して破壊したが、なぜかこの世界に紛れ込んでしまったそうだ」

「そんなおとぎ話のような話があるんですか？」

「私も信じられないが、あのストライカーユニットの存在が何よりの証明だ」

そのあといくつかの質問に答えた後、連絡事項を告げてミーティングは終了した。

皆がバラバラに動き始める。シャーリーが近づいてきた。

「私たちの隊に入ったんだな。言い忘れていたけどリベリオン出身の階級は中尉だ。まあ国名何て言ってもメビウスには分からないか。よろしくな」

「いつまでここにいるか分からないが世話になる・・・うお?!」

いきなり背後から胸を掴まれた。後ろに目を向けると先ほどのツインテールの子がいた。

「にやはは！うーん、エイラよりない」

どうやら俺の胸の大きさを調べたらしい。今は女の体になってるとはいえ気分がいいのもではなかった。お返しとして軽く頭に手刀をやった。

「いてっ」

「いきなり人の体を触るのは失礼だぞ。メビウスだ、よろしく」

「ロマーニヤ空軍のフランチェスカ・ルツキー二少尉だよ！よろしく！」

元気よくルツキー二は自己紹介する。メビウス1は彼女の頭をワシヤワシヤと撫でた。ただ心の中では別のことを気にしていた。

(ミーナ中佐から聞いてはいたが、最前線の基地で主な戦闘要員は女性。しかもこんな子供まで戦場に出なければいけないとは)

異世界の自分が言うのはお門違いだが、メビウス1はそう思っ
てしまっ。

「スオムス空軍のエイラだ。よろしくナ」

「オラーシャのサーニヤです。よろしくお願ひします」

数時間ほど前にもともに飛んでいた2人が自己紹介してきた。

「ああ、よろしく頼む」

「そういえばメビウス」

白髪長髪の女の子、エイラが近づいて小さな声で

「お前の機体、貸してもらえないか？」

と言ってきた。こいつもスピード狂の1人だったのか？

「シャーリーにも言ったが、あれは一人乗りだし俺以外動かせないぞ」

「そんなー・・・」

エイラは残念そうな顔をする。

「・・・サーニヤと二人つきりで絶景見たかったのに」(ぼそつ)

「ん、何か言ったか？サーニヤとなんだ？」

「どうしたのエイラ。私に何かあるの？」

「べつ、別になんでもないゾ！」

なんか顔真っ赤にしてエイラはサーニヤと会話してた。

「ジェット機のパイロットだね。カールスラントのエーリカ・ハルトマン、階級は中尉だよ。よろしくね」

プラチナブロンドの髪をした女の子が話かけてきた。後ろには確かトウルデーと呼ばれた女性が硬い表情をして立っていた。

「ほら、トウルデー。自己紹介しなきゃ」

「・・・同じくカールスラントのゲルトルート・バルクホルン大尉だ。我々のじゃまだけはするなよ」

「じゃまするつもりはない。ただしばらくは共に飛ぶことになるかもしれないからな。よろしく」

なんか敵対意識でもあるのか俺のことが嫌いなようだった。

「ごめんね。実はあんたを助けた時トウルデーっていつはネウロイかもしれない”て、疑ってたからさ」

「なるほど、まあしかたがないさ」

他人から見れば俺はネウロイと同様に分からない存在かもしれない。

次はメガネをかけたプライドの高そうな女の子だった。

「自由ガリア空軍所属のペリーヌ・クロステルマン中尉ですわ。メビウス少佐」

「この世界だと俺の階級は意味ないからな。メビウスと呼んでくれ。よろしくな」

そして、最後の2人に話をするのだが

「はじめまして、ブリタニア空軍のリネット・ビショップです。階級は軍曹です。よろしくお願いします」

「扶桑皇国海軍の宮藤芳佳です。階級はリーネちゃんと同じ軍曹です。えーと、よろしくお願いします！」

2人は初対面の、しかも異世界の人であるメビウス1を前で緊張して自己紹介した。

ただメビウス1は何の反応がなかった。

「……………」

「あの……メビウスさん？」

「どうかしたんですか？」

2人の言葉でメビウス1は話を始める。

「あ……ああ、失礼した、ビショップさん。それと」

「宮藤芳佳です」

「宮藤さん……か。メビウスだ。しばらくの間よろしく頼む」

「はい！」

会話が終わったと2人は晩御飯の当番とのことで食堂のほうでと向かっていった。

メビウス1はその背中と眺めていた。ただそれは穏やかな顔ではなかった。

「どうしたメビウス？なにかあったのか？」

坂本少佐が話をしてきたが

「・・・いや、なんでもない」

メビウス1は言った。

だが坂本少佐はその洞察力でメビウス1の変化を見逃さなかった。
(宮藤を見てから様子がおかしかったな。しかし今日が初対面のはず・・・)

ここまで読み取った美緒だったが決定的な答えを出すことができなかった。

夕食までの間、メビウス1は自分に割り振られた部屋にいた。そこはウィッチーズが使用する部屋の一つだった。こんな体だからしかたがないにしても調子が狂う。

因みにミーナ中佐から「変な気は起こさないでください」と忠告されたが「この状態で何ができるんだ」と即答した。それを見ていた美緒が笑ったのは言うまでもない。

メビウス1はベッドに腰掛けていろいろ考えていたが最終的にどうやって元の世界に帰るかだった。

「偶然でここに来たとしてもまた同じことが起こるとは限らないし・・・。とにかくネウロイとやらを撃墜していくしかないか。もしかして、それが俺の使命だともいうのか？」

「半分だけ正解です」

「!? つっ!」

自分の独り言に背後から返事が返される。気配がなかったため驚くと同時に反射的にホルスターから拳銃を取り出し銃口を向けるが、手に持った瞬間拳銃が弾き飛ばされてしまった。

傷は見られなかったものの拳銃を持っていた右手は鈍い痛みがあった。

「いきなり物騒なものを向けるなんてひどいですね」

「・・・軍人相手に気配も出さずに背後に立つやつには十分すぎるサービスだ」

右手を抑えながらメビウス1は声の主を確認した。

そこには聖職者が身に着ける全体的に白い服を着た女性が立って

いた。ただその体が少し光っているせいかな、あまり直視できない。

「お前が俺をこの世界に連れてきた張本人か。目的は」

「ええ。あなたにここで起こる異変の排除を依頼します」

目の前にいるやつは無表情でそう答えた。そいつに俺は疑問をぶつける。

「ちよつと待て、俺があつまつくろくろすけを全て破壊するまで元の世界に帰らせないって言いたいのかな」

「正確には違います。ここブリタニアで起こるネウロイとは違う異変の解決をお願いしたい。今は何も起こっていないが近いうちに起こるでしょう」

俺をここに飛ばしたり、よく分からないが近い未来の予言みたいなことをいったり、神様か何かかこの女は？

「・・・言葉遣いがいささか以上にひどいですが、私はこの世界の神々のうちの1人と言っておきましょう」

こいつ、俺の心を読みやがった。

「これからですが、もし何か必要なものがあれば念じてください。ものにもよりますができる限りの支援をしましょう」

「じゃあ2つ」

こちらの願いを聞いてくれると言ったのですぐに口を動かした。

「なんででしょう？」

「俺の体を元に戻してくれ」

「無理です」

「じゃあ相棒を元に戻してくれ」

「許可できません」

真顔でこちらの要望を全否定する女神。

「なんでだよ」

「決まっています。そんなことしたら面白くないでしょう？」

無表情の顔が笑顔へと形を変える。

全力で殴りたい、この笑顔。だれかアヴェンジャー持ってきてくれ。
れ。

「そんなことするなら、あんたらがネウロイや異変の排除しろよ」

メビウスの言葉に、女神の顔は厳格な表情になり

「ネウロイはこの世界が古くから存在した怪異です。この争いで何が起こっても我々はそのすべてを受け入れるだけです。仮に人類がネウロイの手により全滅されたとしても」

とはつきりと言った。

「ひどい神があつたもんだな」

「どの世界も神とはそういうものですよ。それにネウロイ以外の異変はあなたのほうが詳しいでしょう?」

俺のほうが詳しい・・・?どういう意味だ。

「おい、いったい何を言ってるんだ?」

「それよりも何か必要なものはないのですか?」

こつちの話を見殺したよこの女神様。仕方がないので気になつていたことを言った。

「そういえば相棒の整備はどうすればいいんだ。整備士を頼めばここに連れてくるのか?」

「その必要はありません。あれには私がすこし手を加えておきました。ミサイルの補給や機体の修復は魔力でできるようになっています。ですがあまりにも被害が大きいとその分の魔力が必要です。あなたの命に係わりますのでお気をつけて。機銃の弾倉の補充はこの人間でもできますからこれはこちらが用意します」

相棒の整備に俺の魔力が必要とは・・・。まあ誰かに分からないまま整備されるのよりははるかにマシだろう。

「あといくつがある。他の機体が必要だ。相棒を定期的に休ませないと消耗が激しい。あと滑走路が短い気がするが・・・まあギリギリ着陸できたし飛ぶには問題は無いからいいか」

「分かりました。それではまたいずれ・・・」

そうして、女神はだんだんとぼやけていき消えていった。

「ああおい、ちよつと・・・必要な機体言っていないのに勝手に消えるなよ」

誰もいなくなつた空間に向かってメビウスの愚痴が響いた。

一方、ミーナは書類作業に追われながら上層部に報告する内容について頭を悩ませえていた。

(メビウスさんのことはどうにか誤魔化せるとしても、あの機体はどうしようもないわ。・・・とにかく、今はまだ目が覚めていないとしましょう。それに搭乗制限をかける必要があるわね)

追々どうにかしようと考えていたがその手が止まる。

「そういうえば、彼、レシプロ機を動かせるのかしら?」

ふと疑問に思ったことを口にしていった。

翌日

(・・・こっつてこんなに広がったかしら?)

輸送機用の滑走路を見てひとり考え込むミーナ中佐。

また普段使う戦闘機用の滑走路でも

「お前たち遅れているぞ。メビウスを見習え!」

「坂本さくくん!滑走路長くなってませんか!?!」

「向こう側が遠い・・・」

「きつと気のせいですわ。きつと・・・」

訓練に参加したメビウス1はずつと後ろを走っている3人の声を聴きながら

(あの女、別にいいって言ったのに本当にやりやがった)
と心の中で思っていた。

第6話 「新たな相棒？」

1944年5月21日 11:00

「模擬戦闘をやってみたい？」

「そうだ。できるか」

先ほど訓練を終えて滑走路の端に座って休憩していると坂本少佐が話しかけてきた。

なんでも俺の実力を見てみたいとのことだ。

「今朝のミーティングのときに俺の機体は機密も含めて搭乗制限をかけられたが、どうするんだ」

「レシプロを動かせないか？」

レシプロという言葉で考え込む。

「レシプロはどうだか・・・パイロット候補生の時に操縦したことはあるが乗ってみないと何とも言えないな」

「よし。では一緒に来てくれ。確か第2格納庫に使わないユニットがあったはずだ」

というわけで坂本少佐と共に第2格納庫へ歩いていった。

「確かここに・・・あった」

第2格納庫に着いたメビウス1と坂本少佐は格納庫の端にあるユニットを見つけた。その機体は灰色と暗い緑色の迷彩の模様をした機体だった。中央には丸いマークがあり外側から黄、白、青、中心に赤色が描かれていた。

「この機体は？」

「ああ、この機体はブリタニアが製造したストライカーユニットだ。たしか名前は」

「ウルトラマリン スピットファイア Mk. Vですよ。少佐殿」

声が出したほうを振り向くと格納庫の入口に男の人が工具箱片手に立っていた。歳は40〜50くらいだろうか。作業服や顔は所々汚れている。見たところ整備兵の1人のようだがその雰囲気からかなりのベテランだとメビウス1は見抜いた。

「ホーマー曹長、どうしてここに」

「いやなに、たまたま少佐殿がここに行くのを見かけただけです。それより、彼女が例の？」

「ああそうだ。と、紹介が遅れたな。彼はブリタニア空軍のホーマー・ウィルキンズ曹長。ここ第501統合戦闘航空団で整備班のリーダーを務めている」

坂本少佐に紹介されたホーマーはメビウス1と向き合い敬礼した。「ブリタニア空軍のホーマーであります。話は聞いてますよ、メビウス少佐。中佐殿の命令でああなたの機体を整備できないのが残念だがよろしく」

「ISAF空軍の・・・いや、この肩書はここじゃ意味ないか。第501統合戦闘航空団の臨時特殊戦闘隊員に配属したメビウスだ。機体をいじりたい気持ちは分かるが我慢してくれ。しばらく世話になる」メビウス1も敬礼を返した。

「それよりも少佐殿、どうしてこの格納庫に？ウィッチたちのユニットは整備ができてますよ」

「実はメビウスの実力が知りたいから模擬戦をやりようと思ったのだが機体が出せないらしくてな。レシプロは動かしたことがあるようだから変わりの機体を探していたんだ」

ははあなるほど、とホーマー曹長は呟いていた。その間に坂本少佐はスピットファイアと呼ばれるストライカーユニットに手をかける。「これにメビウスを乗せようと思うのだが整備をお願いできないか」

坂本少佐はホーマー曹長に言ったが笑顔で返答された。

「大丈夫ですよ。いつでも出れるように俺が整備してるんですから」

「そうなのか。それなら部下の者にやらせればいいだろうに」

「あいつらを今ウィッチたちが使っているユニットの整備から外すと間に合わなくなってしまうですよ。だったら時間がある自分がやるのがいいですから」

会話が終わったところに坂本少佐が「乗ってみるか？」と目で話してきた。

それに同意してウルトラマリンスピットファイアMk.Vに入れた。が、ピクリとも動かなかった。というか魔力というものが

感じられなかった。

(・・・? 昨日の魔力が感じられない)

「動かないだと? どっか具合が悪いのか。待ってる、今すぐ直してやる」

昨日見た光景とは違うことに疑問を持つ美緒。持っていた工具箱を開けていろいろ取り出すホーマー曹長。それを見ていたメビウス1は止めに入った。

「大丈夫だ、機体に問題は無い。むしろこれは俺のせいだ」

「はあ? どういうことだ」

ホーマー曹長は分らないとばかりに顔を向ける。

「たぶんだが、こいつのフライトマニュアルを読んでいないから動かすことができないんだ」

「たいていのウィッチは魔力入れるだけで起動させるが無理なのか?」

「さあ? もしあるならこいつのフライトマニュアルを持ってきてくれないか。ないなら、同型の戦闘機を操縦したいのだが」

「戦闘機なら隣の第3格納庫に置いてあるぞ」

第3格納庫に入るとそこには先ほどと同じ模様をしたレシプロ機が置いてあった。主翼は楕円形の形をしている。メビウス1が駆け出しのパイロット候補生だったころ、練習機としてT-3に乗ったことがある。だが、戦闘用として作られた機体を見たのは初めてであった。やはり生まれた時代が違うせいかなT-3に比べに所々に古さが見られるがそれ以上の性能があることが見て取れた。

「これはさっきの同型の機体か?」

「ああ、さっき見せたもの同様にスピットファイアシリーズで一番多く作られた機体だ。今はエンジンの改良でリネット軍曹が使っている後継機のMk. IXが広まっているがまだまだ現役だ」

ホーマー曹長から話を一通り聞いた後メビウス1は機体の操縦席に乗り込んだ。

「こいつを動かすにはこれか?」

「そうだ。そしてこつちが・・・」

操縦席に座るメビウス1に坂本少佐が主翼に立ちながら操縦席にある機器を教えた。

全てを教え終わる頃にはもう12時をとつくに過ぎていた。

「午後にこれを飛ばすか？」

「そうだな。こいつを飛ばしてからさっきのストライカーユニットでやろう。もう飛ぶだけなら問題ない。」

「早いな。もう覚えたのか？」

「俺が昔乗っていた機体、ファントムはこれの倍以上の計器盤でびつしりだったからな」

操縦席から出ながらそう答えた。

13:30

滑走路にはスピットファイアMk. Vに乗ったメビウス1。そしてそれぞれのストライカーユニットを履いた美緒、宮藤、リーネ、が待機していた。

「坂本さん、なんでメビウスさんは飛行機に乗ってるんですか？」

宮藤が坂本少佐に質問してきた。口には出さないがリーネも同じことを思っていた。

「我々が使うユニットを動かすのに同型の戦闘機に乗らないと動かせないそうだ」

坂本少佐が2人に説明する。

「はあ、なんだか面倒ですね。飛行機に乗らないとストライカーユニットを動かせないなんて」

「まあそう言うな。メビウス、準備はできたか？」

「エルロン、ラダー、エレベーターともに正常。OKだ、少佐」

メビウス1の返事を確認し4人は大空へと飛び立った。

《宮藤と私は編隊飛行と障害物回避の訓練を行う。リーネはメビウスの飛行を見てやってくれ。同じ機種だからな》

「はい。分かりました。メビウスさん、こっちは」

上空2000mで坂本・宮藤の戦闘訓練グループ、メビウス1・リーネの飛行訓練グループ（リーネは同行）に分かれた。

高度2500mでメビウス1は機体の操縦を確認しながら様々な戦闘機動をやっていた。主に基本機動である垂直旋回やロール、スプリットS、インメルマンターンなどを行った。

「ふむ、思った通りいい機体だ。50年前の機体だからどうかと思っただがT-3より鋭い動きができる」

1人呟いていたメビウス1にリーネが話しかけてきた。

「すごいです。初めて操縦したとは思えないです」

「お褒めいただき光栄だ。まあ機体の良さが大きいかな。ラプターとは違うがいい機動性をしている」

メビウス1はコックピットのガラス扉を開けてリーネと話した。リーネはメビウス1が乗る機体の右5mくらいの場所を飛んでいる。

「1つ聞きたいことがあるんだが、この機体の欠点はなんだ？それと武装は？」

「私が使っているMk. IXもそうですが航続距離が短いことです。武装は20mm HS. 404機関砲 2門、0.303口径(7.7mm) 機関銃 4挺、爆弾は500ポンド(224kg)が搭載可能です」

機体の性能を聞き自分が乗る機体のすべてを理解したメビウス1。(他の機体も乗ってみたいな)

と心の中で思っていた。すると無線から向こうの訓練の音声が

《宮藤、これで6個目だぞ。あと何個気球に突っ込めば気が済むんだ！もっと周りをよく見ろ！》

《すみません！坂本さん・・・うわっ！》

声と共に何かを破るような音が一緒に聞こえてくる。その空域を見ると今まさに1つの気球がしぼんで海へ落ちようとしているのが見えた。

「・・・あんなので実戦大丈夫なのか？」

「あはは、芳佳ちゃんは実戦だとうまくいってるんですけど。あと、魔力量はみんなの中で1番多いのですよ。そのおかげでシールドも大きいんです」

「そうか。ん？シールド？」

メビウス1は初めて聞く単語・・・といっても知らないわけではないがそれについて聞いてみた。簡単に言うとな魔力でシールドを作りネウロイのレーザーを防ぐのだそうだ。

「メビウスさんはシールド張れないんですか？かなりの魔力の持ち主を聞いているのですけど」

「いや、そんなものできないし攻撃は全部避けてたしな」

気球を見ていたメビウス1はあることを思いついた。回線を開き坂本少佐に話しかける。

「少佐、この機体の機動を試すのにその空域を飛んでもいいか」
数秒後、坂本少佐から通信が入る。

《ここを飛ぶのか？ウィッチ用に多めにあるからぶつかってしま
うぞ》

坂本少佐からやめとくよう言われたがメビウス1はそれを拒んだ。
「その程度の障害物でやられる俺じゃない。宮藤軍曹を下がらせてく
れ」

《分かった。宮藤、こつちに来い》

《・・・はい》

宮藤は疲れたとばかりに坂本少佐のところへ飛んで行った。

「リネット軍曹も少佐のところへ行っていていいぞ。1人で飛んでみた
い」

「え、いいんですか？それでは失礼します」

リーネはメビウス1から離れて坂本少佐と宮藤がいる場所へ向
かった。それを見届けたメビウス1は前方に浮いている気球群に目
を向ける。確認できる数は50くらいおそらく見えないものを合わ
せたら100は下らないだろう。

「なんか、どこかで似たようなものを見たことがあるような」

目の前に広がる気球を見て何かを思い出すメビウス1。

（気球・・・飛行船・・・ああ、そういえばノーム幽谷のミッションが
あったな）

確かあのときは敵のジャミング飛行船を目視で撃墜しなければな
らなかつたな、と大陸戦争の時のことを思い出していた。

「よし、じゃあ行くか、相棒？」

まるで自身の仲間に話しかけるように呟き、右足で機体を軽く小突いて気球が漂う空域に飛び込んだ。

一言でいえば華麗の一文辞であった。気球はただ浮いている訳ではない。動かないようにしているが多少は風に流されて常にその位置を変える。そのおかげでさっきまであった空間にいきなり気球が現れることがある。先ほどの宮藤のように前方だけを見ていると横から風に流された気球に気付かず衝突する羽目になる。だから常に周りを見て

“どこに” 気球があり

“どの方向に” 動いて

“どこが” 回避するうえで最善の通り道となるか

を瞬時に判断・行動に移す必要がある。ミーナの固有魔法 “空間把握” を使えば苦勞せずに回避行動ができるが、できない者は自分の目で確認するしかない。しかも今はウィッチの訓練のためたくさんの気球が浮いている。そこを普通の戦闘機で飛ぶのは難しいと美緒は思っていた。

だがその予想が否定される。

「すごい・・・」

メビウス1の機動を見ているリーネが呟いた。リーネだけではない、隣にいる美緒や宮藤もまるで自身の体の一部のように機体を操っているメビウス機を見ながら同じことを思っていた。

「宮藤、リーネ、よく見ておくといい。他人の動きを見るのもいい勉強になる」

美緒は2人に向かってそう言った。機動を見ながら美緒はメビウス1の実力を分析していた。

（機体の性能をあの短時間で理解、回避軌道に全く無駄がない。それに気球を避けた後すぐに動き出していることから周りを十分確認している・・・）

さらに風向きのおかげで通り道が機体ギリギリとなった場所があったが、機体はかすめることなく通り抜けた。スピードを落とさず突っ

込んだことからメビウス1にはそれをやってのける実力と自信、そして覚悟があることを美緒は理解した。

「これがメビウスさんの実力・・・」

隣にいる宮藤がそう呟いているころにはメビウス1が乗ったスピットファイアは気球の塊から抜け出していた。

「これで最後・・・か。メガリスのときに比べれば結構楽だったな」

いや比べるほどでもないか、と心の中で思った。気球を全て躲したメビウス1は上昇して旋回したあと坂本少佐のところに飛んで行った。

「坂本少佐、もうあのユニットを動かせると思うがすぐに模擬戦始めるか？」

すぐにやると思っていたが明日にしようと思つた坂本少佐は言った。

そのあとはメビウス1とリーネは基地に戻り、坂本少佐と宮藤は訓練を再開した。

《うわわわあゝゝ！へぶっ！》

着陸したころに無線でそんな音声がかまた聞こえた。

21:00

夜間哨戒のため格納庫に入ったサーニャはそこに人影を見つけた。

「メビウスさん？」

「サーニャか」

そこにはメビウス1が自身の機体であるF-22Aのそばに座り右手を機体に当てていた。

「何をしているのですか？」

サーニャの質問に「相棒の整備だ」と答えた。

「いつ何が起きてもいいようにしとかなないと」

機体に顔を向けるメビウス1の顔を見るサーニャ。その顔はまるで仲間あるいは家族を見るような顔だった。

「本当に大切にしているんですね。そのストライカーユニットを」

「分かるのか？」

「はい。メビウスさんの顔を見れば」

それを聞いたメビウス1は照れ隠しに笑う。

「自分でいうのもなんだが、こいつとはもう一心同体、切っても切れない関係だな。ずっと一緒に飛んでいるから愛着がわいてくるんだよ。ところでサーニャはどうしてここに？」

「わたしは夜間哨戒でここに来ました」

夜間哨戒。この時代なら飛行機にアンテナをつけて敵の夜襲を感じ取るものだろう。

「1人だけで寂しくないか？」

「いえ、飛んでいる間は世界中のナイトウィッチと交信していますので寂しくありません」

「世界中？どうやって交信しているんだ」

疑問に思ったメビウス1はサーニャに聞いた。なんでも電離層反射による魔導波の伝播を利用して世界中のナイトウィッチと交信しているらしい。仕組みを理解することはできなかったが自分が知るころのインターネットや電子メールのようなものか、と考える。

後に、これに興味を持ったある研究者が研究と開発を重ねて、この世界オリジナルのインターネットを生み出し世に広まるのだが、メビウス1やサーニャなど今の時代を生きる人には知るよしもない。

「じゃあ、夜間哨戒がんばってくれ。あと休みの時に夜寝ないと体調崩すぞ」

「メビウスさんこそ遅くまで起きると明日に響きますよ」

それだけ話してサーニャは夜間哨戒のため飛んで行った。

「さて、エンジンの修復に取り掛かりますか」

メビウス1は相棒の整備を再開する。最初、あの神と名のる女の言葉を半信半疑で聞いていた。だが、機体に触れて、何か自分から相棒に流れるのを感じて驚いた。

「エンジンの整備終了・・・あと、は・・・サイドワインダーを」

ぽつりぽつりと言いなながら整備を続けようと機体に手を伸ばす。だがその手は機体に触れることなくメビウス1は深い眠りに落ちていった。

第6. 5話「早朝の一コマ」

1944年5月22日 05:00

夜は終わりを迎え東の空に明るみが広がっている。まだ顔を出していないが1時間もすれば太陽がその姿を現すだろう。

「・・・しまった。寝ちまったか」

相棒の整備途中で寝てしまったとメビウス1はあくびをしながら思った。

「ミサイルの補充をしないと・・・はつくし！」

くしやみをするメビウス1。体も少し震えている。

「・・・寒い」

メビウス1は1人呟く。5月に入り暖かくなつたとはいえやはり朝は冷え込む。上はジャケットを着ているからいいが下はズボン・・・いやパンツ？が1枚だけだ。この世界の女性の服装だとしても馴染めるわけがない。それにまだ眠気が残っている。

「コーヒーでも飲むか」

そう思い立ち上がろうとすると、プロペラの音に気が付いた。どうやらサーニヤが夜間哨戒を終えて帰ってきたようだ。サーニヤが格納庫に入ってくる。

「お疲れさ・・・ま？」

ストライカーから降りたサーニヤに挨拶しようとしたが目の前まで近づいたら、サーニヤの姿勢が崩れて倒れそうになった。

「ちよー！」

慌ててサーニヤの体を受け止めるメビウス1。見たところケガは見られなかったが何かあったのか!?と思い彼女の顔を見る。それを見て自分の勘違いだと理解した。

「すう・・・すう・・・」

サーニヤはどこかの物語に出てくる眠り姫のようにぐっすりと眠っていた。はあ、といらぬ心配をしたなどメビウス1はため息交じりに思った。とりあえずこのままでは風邪をひいてしまうためジャケットを彼女に着せて両手で抱えた後、彼女の部屋に連れて行こうと

女子寮へと向かった。

そこで少し問題が発生した。

「・・・そういえば部屋どこだ」

女子寮に着いた方がいいが彼女の部屋を知らなかった。この時間は誰も起きていないのだろう、鳥のさえずりしか聞こえない。適当にあたって間違えたらまずい。

「しかたないか」

このままここにおいても埒が明かないので自分の部屋に行くことにした。部屋に入り彼女をベッドに寝かせる。かさばるだろうからジャケットを取ろうとする。そのとき、ジャケットから何か2枚落ちた。それを拾い見たメビウス1は固まってしまう。

「何でここにあるんだ・・・」

拾ったものを見ながら呟き、すぐにジャケットの内ポケットにしまった。メビウス1としてはこれを他の者に見られなくなかった。いや、絶対に見せたくない。気持ちを切り替えて厨房にいきコーヒーを淹れようと歩いて行つた。

厨房でコーヒー豆を見つけだすのに時間がかかった。それだけで30分もかかってしまった。ドアを静かに開けて中に入る。サーニヤはベッドの中でまだぐっすりと眠っている。ベッドのそばにホットミルクを置いた。彼女のために用意したが意味がなかったかもしれない。

メビウス1はテーブルにある椅子に座りコーヒーを飲んだ。

「むう、やっぱりコーヒーはあいつ(メビウス3)が淹れたものがいいな」

ふとここにいない同僚のことを思い出す。メビウス3は隊の中で一番のコーヒー愛好家だ。メビウス1もコーヒーを親しむが彼以上に淹れたうまいコーヒーに未だ出会っていない。

ちなみに隊で2番目にコーヒーを飲むメビウス8のコーヒーを自分とメビウス2、3、4で飲む機会があったのだが

(r。▽。)(r (メビウス2)「おがあああああ!?!?苦い!」

(。v。((メビウス3)「・・・(ズズツ)」

(O W O) (メビウス8)「おいおい。そんな悶絶するほどでもないだろう」

(・h・) (メビウス4)「いや、これはさすがにちょっと」
普通のブラック缶コーヒーよりもものすごく苦かったのである。それを飲んだ俺は軽くむせていた。

(。v。) 「メビウス8、ちよつと袋を見せてくれ」
(O W O) / 「いいぞ。ほれ」

それを受け取ったメビウス3は袋を見るなりやつぱりと呟いた。

(・h・) 「3、何か分かったのか？」

メビウス4の質問にコーヒーを知り尽くしているメビウス3が答えた。

(。v。) 「こいつはオーシアのオーレッドにあるあまり知られていないコーヒー店のブレンドでな。通常の倍以上の時間をかけて焙煎するから苦みが強い。一部の愛好家で人気があるやつだ」

メビウス3の説明を黙って聞く3人。

(r。▽。) r 「なんだってこんな苦いもの飲んでんだよ」

(O W O) 「いいじゃないか。このコクと苦みが気にいってるんだ」

自分のコーヒーを飲みながら答えるメビウス8。

、(O W O)ノ 「まったく。この程度で根を上げていたらイジエクトに耐えられないぞ」

メビウス8の独り言に俺を除く全員が

(r。▽。) r (。v。) (・h・) 「「なんでイジエクト前提の話になってんだよ!!!」」
と盛大につっこみを入れていた。

「あいつらどうしてるかな」

元の世界の仲間たちを思い出すメビウス1。今頃自分はM I A (戦闘中行方不明≡戦死) 扱

いされているだろう。いろいろ考えていると目の前が霞んできた。

(まずい。また眠気が)

メビウス1は眠気を吹き飛ばそうと残りのコーヒーを飲みほしたが効果がなく二度寝する

羽目になった。

「・・・あれ？私」

基地に帰りいつの間にか眠っていた私はベッドで横になっていた。体を起こし周りを見渡

す。起きたばかりなのかまだ視界がぼやけているが、少しずつ見えってきた。必要最低限な

ものしか揃っていない。あまり使われていない部屋ようにみられる。

するとベッドのそばにマグカップが置いてあることに気が付いた。それを手に取り中身を

確認すると温かそうなホットミルクが注いであった。それを一口飲んでみる。

「・・・温かい」

時間がたったせいばかりちょうど良い温度になっていた。誰がこんなことをしたのだろうかと思

ったがすぐにその人物を見つけた。

「ぐー・・・すー・・・」

メビウスさんだった。おそらくここはこの人の部屋だろう。テーブルの上に突っ伏してマ

グカップ片手に寝ていた。それにこの香りはコーヒーだろうか？おそらく眠気覚ましに飲

んでいたのかもしれない。

「ふふっ」

メビウスさんの顔を見て思わず微笑んでしまった。疲れたような顔をしているが気持ちよ

さそうに眠っている。

不思議な人、とサーニャはメビウス1のことをそう思っていた。見た目はミーナ中佐や坂

本少佐に変わらない女性の姿をしているのに口調や仕草はまるで

男性そのもの。さらに男

の人が好むコーヒーを飲むから本当に男に見えてしまう。

「ありがとうございます」

届かないであろうお礼の言葉をメビウスーに送り再びベッドに横になった。そのまま眠り

につく。その顔はほんの少しだけ笑っているように見えた。

ちなみに朝食に2人が顔を出すまでの間

「サーニヤどこいったンダ。ユニットは置いてあつたシ・・・サーニヤー!!」

エイラが基地中を走り回っていたとか。

第7話 「模擬戦」

1944年5月21日

本日の天気は曇り、昼には晴れてくるらしい。

朝食後のミーティングが終わったあと第二格納庫ではストライカーの稼働音が響いていた。

「どうだ？調子は」

「ああ、問題ない」

そこには1人の男性、ホームーとストライカーを履いた女性、メビウス1がいた。今しているのはスピットファイア Mk. V型ストライカーの起動確認だ。昨日同型の戦闘機に乗ったので動くかどうかのチェックを行っていた。

「しかし、飛行機乗らないと動かないとは面倒くさいことこのうえねえな」

「同じことを昨日言われたよ」

軽く話をしストライカーから降りる。

「これなら今日の模擬戦をやるだろう」

「性能で見ればこっちのほうが劣っているがな。それと前よりも落ちて着いて見えるのは気のせいか？」

「そう見えるか？」

「なんとなくだが」

ホームーの疑問にすぐ答えが導き出された。

「たぶん。これのおかげかもな」

メビウス1はそう言いながら腰に履いてあるものに手を当てた。

少しだけ時間を遡る。

「メビウス。遅れてしまったが持ってきたぞ」

「よかった。これでこのもやもやから解放できる」

メビウス1は坂本少佐が持っていたものを見て安堵の表情をした。彼女が持ってきたものはボロボロのジーンズだった。それとベルトもある。

「もう使っていないやつらしいがこれでいいのか？」

「こっちは大喜びだ。さすがにこれ一枚は嫌になっていたから」

坂本少佐からそれを受け取る。その時に坂本少佐から一言言われた。

「だが、ストライカーを履くときは脱がないとだめだぞ」

「は？なんで・・・あー、そういうことか」

すっかり忘れていたとメビウスはそんな仕草をする。ストライカーは機体の構造により長ズボンや丈の長いスカートを履くことが出来ない。ある意味これのせいで服装がこうなっているのかもしれない。

「こっちでなんとかするさ。模擬戦の審判は誰がするんだ？」

「私だ。一つ言っておくがペイント弾を使うから撃つても大丈夫だぞ」

その後もいろいろ話した後自分の部屋に戻ってきた。そして引き出しの中にあるナイフを手にしジーンズの足の付け根あたりに刺した。それをかなり強引に切り込こむ。最終的に短パンのようなジーンズに仕上がった。分かりやすく言うなら女性が着る西部劇の衣装みたいなものだろうか。これでパンツ一枚で過ごす日からさよならだ。少し上機嫌になりメビウスは格納庫に向かった。

「・・・というわけだ」

メビウスの話を聞いたホームーは頷きながら

「そっちの世界はズボン一枚じゃないのか？」

と質問してきた。言葉だと分からないかもしれないがこっちの世界でのズボンは俺の世界ではパンツになるので本当にややこしい。

「もしそんな恰好したら一発で刑務所行きだ」

そんな会話をしながら機体のチェックを済ませていった。

11:00

格納庫内で自分が使用する武器の説明をリネット軍曹から受けていた。

「これはブレン軽機関銃と言いまして、口径は7.7mm。発射速度は毎分約500発。有効射程は550mです」

リーネからの説明を聞きながらメビウス1はうつ伏せになり銃を構える。飛んでいるときの射撃体勢を再現しているのだ。いきなり実戦で使うのはまずいので少しでも自身がこの銃に馴染むようにやった。

「よし。行くか」

スピットファイアMk. V型ストライカーを履き、魔導エンジンを起動させる。各部のチェックをしているときに横からリーネが話しかけてきた。

「メビウスさん一つ質問があるのですが、その頭のリボンはなんですか?」

「リボン?」

聞き返し頭に手をやる。すると何か布みたいなものに触れた。それを解く。それは実にシンプルなものだった。柄は一切入っていない。ただ、リバーシブルで片面が青、もう片方が白だった。それをじっと見つめる。

「ただの偶然かあるいは必然か・・・よく分からんが運命じみたものを感じるな」

「?」

メビウス1の独り言に首をかしげるリーネ。そんなことを気にせずリボンを元の位置に結び直し機体のチェックを済ませる。

「それじゃあ、行きますか」

「がんばってください」

メビウス1はゆっくりと滑走路へと向かっていった。朝食後のミーティングでは自分の相手はバルクホルンらしい。滑走路に移動するとそこには先客が待っていた。

「なんでハルトマン中尉がいるんだ?」

そこにはストライカーを履いた美緒に何故かハルトマンと一緒にいたからだ。

「ああ、メビウス。実はな」

「エイラが私もやるって言うてきたんだよ。」

それを聞いてため息を漏らす

「何かあったのか？」

「何も無い。ただ、朝食が終わってからずっと俺のことを目の敵みたいにしてるんだ。何でか分かるか？」

「私にも分からないな」

「さー。何でだろうねー」

坂本少佐は知らないと言顔をしますがハルトマンはにやけた顔で返答した。む、こいつは何か知ってて黙っているな。

「おい、お前何かし「あー！そろそろ行かなきゃ。お先ー！」……」はぐらかされて飛んで行ってしまった。まあ、これ以上相手を持たせるわけにはいかない。

「仕方ないか。俺たちも行くか」

「そうだな」

メビウス1と美緒の2人は滑走路を滑り雲で覆われた大空へと飛翔した。

「それではルールを説明するぞ。バルクホルンとエイラ、ハルトマンとメビウスでタッグマッチを行う。どちらかのチーム2人を先に撃墜したほうは勝ちだ」

審判役の坂本少佐の声が通信を通して耳に入ってくる。美緒は上空で、その下に4人がそれぞれのチームに分かれて待機していた。

「どうする。ハルトマン」

《なにが？》

折角ペアを組むことになったのだ。何か作戦を考えようと話しかけたが少しだけ拍子抜けな返事が返ってきた。

「何がって……フォーメーションの1つや2つ考えるべきじゃないか。即席だがないよ

りはましだと思いが」

2人でやるからには連携を取ったほうが戦況を有利に進めることができる。ハルトマンと一緒に飛ぶのはこれが初めてだが何もしな

いよりはマシだ。

《ん〜。たぶん向こうばらけるから考える必要無いんじゃない》
その言葉に首をかしげるがハルトマンが指差す方向を見る。そこには白髪長髪の女の子、エイラがいた。

「まさかとは思うがこの場で私情持ち込むのか？さすがにそれはないだろう」

《いや〜、あり得るかもしれないよ？》

ハルトマンは顔をにやけながら答える、それは一つの可能性として十分あった。

「じゃあ、エイラが俺のここに来たらもう片方の相手を頼む」

《いいよ。それよりさ、今朝サーニャと何してたの？》

ハルトマンは模擬戦を前に関係のないことを聞いてくる。何でそのことを聞いてくるのかと疑問に思いながら今朝起こったことそのままを伝えた。

《なるほどね〜》

「それでこれがないか関係あるのか」

《知らない》

ハルトマンは笑いながら答える。エイラが俺に向ける感情の答えが分からず、深いため息を漏らした。

一方、バルクホルン&エイラチームでは

「エイラ、どちらを相手したい。私はメビウスの実力を知りたいからあいつをやりたい」

「いや、私があいつをやるゾ」

「あとからいきなり参加したんだ。こっちの言い分を聞け」

「あいつの顔にペイント弾撃たないと気が済まないゾ」

2人の間に火花が散る。バルクホルンはメビウスの実力を知りた
い、エイラはメビウスと闘いたい（というかメビウスをぼろくそに叩
きのめさないと気が済まない）。なぜエイラがこんなにもメビウス1
のことを嫌っているか。それはエイラはサーニャのことが（ry
とまあこんな感じで険悪な状態となっていた。

「じゃあこうしよう」

「なにガ？」

「私はメビウスと闘いたい、だがお前も闘いたい」

「そこまでのいい少し間を開ける。バルクホルンは少しだけにやけて

「なら、やることは一つだ」

バルクホルンが言いたいことを理解したエイラは頷く。

「私もそれでいいゾ。でもエーリカは？」

「その時はその時だ」

《準備はいいか？始めるぞ》

坂本少佐の声が聞こえてくる。それに全員が返事をした。

《それでは、初め！》

通信から聞こえる美緒の一声。開始の言葉を聞きながらバルクホルンとエイラがメビウスに向かって突撃した。そして2人同時に同じ言葉を言う。

「早い者勝ちだ!!」

当のメビウス1は動揺を隠せていなかった。

「ちよつと待て、2人そろって俺狙いかよ！援護頼んだ！」

ハルトマンに言い終わるよりも早くメビウス1は急降下を開始、回避行動に移る。

「りようか〜い。そつちも頑張つてね」

メビウス1の緊迫した声とは逆に呑気な声でハルトマンは手を振っていた。急降下するメビウス1をエイラとバルクホルンの2人が追撃する。その距離がどんどん縮まっていく。

「ちつ、向こうの速度が上か！」

舌打ちしたと同時にバルクホルンが持つ二丁のMG42が火を噴いた。それを急旋回で躲し次に上昇を始める。その時、メビウス1の目はエイラの持つ銃、スオミKP／―31の銃口が自身の進路延長線上を向いているのを見逃さなかった。

咄嗟に減速し右へと旋回する。その瞬間自分がいたと思われる空間にペイント弾の雨が降り注いでいた。

《え、躲しタ?!》

エイラの驚いたような声が聞こえてくる。よほどあの攻撃に自信があつたのだろうか。そんなことなど構わずにすぐさまエイラの背後を取ろうと動く。バルクホルンが接近してきたが、メビウス1とバルクホルンを遮るように銃弾が撃ち込まれた。

《一人ぼつちは寂しいな。私も混ぜてよ》

《くつ、ハルトマン！じやまするな！》

バルクホルンはハルトマンの銃撃を避けようと回避行動をとる。ハルトマンの相手をしている間にメビウス1と間が開いた。

「ハルトマン、そつちは任せた！」

《いいよ。メビウスも頑張つてね》

メビウス1はもう1人の相手、エイラを視野に収めて銃を構えた。

ハルトマンとバルクホルンは会話をしながら闘っていた。

《メビウスの相手をしたかつたのだが・・・》

「そんなこといわないで楽しもうよ、トゥルーデ」

互いに攻防を繰り返しながらも会話をする2人。そこでバルクホルンは少し思ったことを口にした。

《ハルトマン。お前メビウスにエイラの固有魔法の話をしたか？》

》

「あ・・・忘れてた。あははー」

《それではあいつがエイラにやられるのは目に見えているぞ》

途端に「やっちまったぜー！」みたいな顔をするハルトマンを見た

バルクホルンは諦めの表情をした。

（あちやうメビウスに悪いことしたな。ごめん）

ハルトマンは心の中で謝罪しながらバルクホルンに銃撃した。

一方、メビウス1はエイラに対して攻撃を行うが、顔は冴えていなかった。エイラはポイント弾をかすることなく回避する。傍から見ればその動きは無駄がなく見える。だが、メビウス1はある疑問を抱いていた。

（俺の攻撃はこれで4回目、あいつの攻撃を躲したのが7回目・・・な

んだこの違和感は)

エイラの動きを隈なく見て、それはエースに匹敵するものと瞬時に理解した。だがそれゆえに納得できないものがあつた。それはエイラの偏差射撃と回避行動である。偏差射撃は的確にメビウス1のことを捉えていた。直前に「急旋回をしなければ」確実にペイント弾の花を自身の体に咲かせていただろう。エイラの偏差射撃の技術は高い。だがここまで動きを予測できるのだろうか？もつと腑に落ちないのはこちらが攻撃した時だ。エイラは銃弾を簡単に避ける。これだけなら気にしないのだが彼女はそのとき「一度も」こちらを見ていないのだ。挙句の果てには射撃タイミングを見計らつての回避行動をやつてのける。

まるでこちらのやることが丸見えだと言わんばかりにである。

エイラには申し訳ないが彼女の実力はメビウス1にとつてはそんなに脅威ではない。なのにこちらの攻撃を見ないで容易く回避する姿にメビウス1の疑問は募るばかりであつた。

(未来が見えているとでもいうのか？・・・なら)

メビウス1は手に持つ銃を構えなおす。

(それを踏まえたいうえで行動するのみ！)

エイラを視界に入れ増速接近していった。

逆に、エイラは動揺を隠せずにした。

(なんでダ!?なんで能力使つてるのに当たらないんだ?!)

エイラの固有魔法：未来予知は相手の動きを予想することができ。それにより模擬戦・実戦含めて被弾は0であつた。またこれを使い偏差射撃を行い多くのネウロイを落としてきた。相手にとつては脅威であるこの力を使っているのに落とせないメビウスに対して同じ能力かと思ひもした。だがそのようには見えなかつた。

(それに)

エイラはメビウス1に対してある感情を抱いていた。怖いのだ、メビウスが。いや、正確には彼女の目が恐ろしく見えた。メビウスが攻撃するときも、こちらの攻撃を回避するときも、常にあの目が自分を

見ているのだ。地上にいた時とはあきらかに違う。まるで鷹や鷲を彷彿させるような鋭い眼光に人間としての本能が警報を鳴り響かせていた。こちらの拳動を一切見逃さない。そんなことをエイラは感じ取っていた。

だが大丈夫だ。こつちには固有魔法の未来予知がある。メビウスの攻撃が私に当たることはない。メビウスに少しばかりの恐怖を抱きながらもエイラはどこか余裕であった。

その間にもメビウス1はエイラに接近していた。現在のエイラとの距離は100m、ブレン軽機関銃の射程距離からみれば十分だがまだ、まだ遠すぎる。メビウス1はエイラが未来予知能力を持っていることを知らないが、これまでのエイラの動きからそのことを踏まえて行動していた。メビウス1は銃を構え引き金を引く。それを旋回でいとも簡単に回避するエイラ。

「その程度の攻撃じゃ当たらないゾ！」

エイラはメビウス1に挑発する。だがそのあとに聞こえたのは死神の声であった。

《そうか。だが後ろがから空きだぞ》

「えっ？」

エイラは後ろを振り向く。そこには銃を構えたメビウス1がそこにいた。

「なっ！」

エイラはそれを確認すると同時に驚いていた。なぜなら自分とメビウス1との距離が5mもなかったからである。メビウス1は銃撃をエイラに当てるのにある結論を出していた。エイラはこちらの攻撃を予知していたみたいに回避行動を行った。ただの攻撃では簡単に避けられてしまう。ならどうすればいいか？メビウス1は出した答えは実に単純なものだった。

(避けられるのなら、絶対に避けられない距離から攻撃を仕掛ければいい)

さらに回避しているときにこちらを見ないことを利用した。エイラに銃を乱射して回避行動をとらせる。つまり、この攻撃を囮にした

のだ。その間にメビウス1はエイラを見ながら未来位置を予測。エイラがこちらを見るころは攻撃するには十分すぎるところまで間合いを詰めていた。

エイラがすぐさま離れようと動き出すが、それよりも早くメビウス1は引き金を引いた。

毎分500発も放つブレン軽機関銃から放たれるペイント弾がエイラに襲い掛かり、彼女を

黄色に染め上げた。

《エイラ、撃墜！》

坂本少佐の撃墜判定の声が通信を通して聞こえてくる。

あまりのことに頭が追いつかず呆然とするエイラ。メビウス1はそんな彼女に言いたいことがあつたが今は模擬戦中こともあり終わってからにしようと考えた。メビウス1はバルクホルンとハルトマンが闘っている空域に飛んで行った。

《エイラ、撃墜！》

その言葉を聞いた瞬間、バルクホルンとハルトマンは互いの攻撃を中断した。それほど

までに先の言葉が信じられなかったからである。

「まさか！エイラがやられた!?!」

「へー、メビウスやるじゃん。どうやったんだろう」

驚きを隠せない2人、それもそのはずだった。なんせエイラの未来予知を知らないのに彼女を倒したのだから。

「くそーあいつが来るまでに何とかしないと」

「じゃあ続きやろうか、トゥルーデ」

バルクホルンはメビウスが来る前にハルトマンを倒そうとした。このままではこちらが不利だ。

2人が離れて互いに向き合う。ヘッドオン、そして互いに手に持つ銃の引き金を引く。

ここで変化が起きた。

ガガガガガガガガガガガガガガガガッ!!

ガガガガガガガガガガガチン!!

「うえっ!マジ?!」

ハルトマンの持つ銃が弾切れを起こしたのだ、遊びすぎたことを後悔した。その隙にハル

トマンの背後を取り両手の銃を構えた。

「捉えた!」

《こちらもな》

いきなり通信から声が聞こえてくる。言いようのない悪寒がバルクホルンに襲い掛かり、

咄嗟にバレルロールを行った。その瞬間ペイント弾の嵐がさつきまでいた場所を通り過ぎ

た。

《あれを避けるとは、いい腕だな》

「エイラを落としたからといって調子に乗るなよ、メビウス!」

バルクホルンはメビウスに向けて銃を乱射するが後ろを取っている訳ではないので簡単に

避けられる。回避行動を取りながらメビウスはハルトマンに通信を送っていた。

「ハルトマン、そっちの状況は?」

《大丈夫だけど弾が切れちゃった。メビウスのほうはどうなの?》

》

「残弾残り僅か、エイラ相手に使いすぎた。あと1回が限界だ」

《難しいね》

どうしようかと2人は頭を抱え込む。メビウスは今の状況を考え直していた。

メビウス1：残弾僅か

ハルトマン：残弾ゼロ

バルクホルン：二丁の銃健在

エイラ：メビウス1によりリタイア

実に芳しくない状況である。こちらは2人健在なのに実質1人と変わらないのだ。しかも

攻撃できる回数はあと一回のみ。バルクホルン相手では一回の攻撃は絶対に避けられる。

これを当てるには相手の虚を突いた奇襲が一番だが、一対一の状態
で奇襲という形に持ち

込むことは難しい。そう考えている間にもバルクホルンの銃撃を
メビウス1は回避してい
た。

(どうする。このままじゃジリ貧だ)

どうにかしないと考えていると雲の切れ間から太陽の日の光が射
しているのが見えた。

それを見たメビウス1はあることを思いついた。

「ハルトマン聞こえるか」

《なーに？メビウス。もしかして、何か思いついたの》

遠くのほうでメビウス1とバルクホルンの闘いを見ていたハルト
マンを確認する。

「思いついたといえば思いついたのだが・・・かなり賭けに近い作戦だ
ぞ？失敗すればこ

っちは残弾ゼロで逃げ続けなきゃいけない」

《なにになに？聞かせて聞かせて》

ハルトマンに急かされてメビウス1は自分がつい先ほど思いつい
た作戦を伝えた。

「どうする？」

《いいよ。おもしろそう》

ハルトマンの了承を得て2人は行動に移った。

バルクホルンはメビウスに対して射撃しているが全く当たらない。

また、メビウス1の目

を見てエイラほどではないが似たような感情を抱いていた。

(なんて目をしているんだ。私やハルトマンはともかくリーネやルツ
キーニは怯えて動け

ないだろうな)

メビウスのことを見てバルクホルンはあることに気が付いた。奴が固有魔法を使っていないことに。

「おい、メビウス。なぜ固有魔法を使わない。私は全力のお前とやりたいのだぞ」

バルクホルンは苛立ちを隠せていない。手抜きをしているメビウスに対して少しばかりの

怒りを感じていた。だが、聞こえてきたものは信じられないものだった。

《固有魔法ってなんだ?》

「・・・は?」

バルクホルンにしては間抜けな声を出しただろう。それほどにメビウスの言葉が理解でき

なかった。固有魔法を知らない? ウイツチとして常識である固有魔法を知らないと言った

のかこいつは。

「貴様それでエイラを落とすとしたのか!?!」

《やりにくかったぞ。あいつこっちの動きはお見通しだ、みたいに動くしな。なんだ? あ

いつなんか魔法使ったのか?》

バルクホルンはメビウスの言葉に驚愕した。能力を使用するエイラ相手に実力だけでやっ

てのけたのだ。

「おもしろい。なら私をやってみせろ!」

バルクホルンは銃を構えなおした。

(よしよし、やる気になってくれたな)

メビウス1はバルクホルンを見つめながらそんなことを考えていた。メビウス1はジンキ

ングという回避行動でバルクホルンの射程に入らないようにしていた。

ジンキングとは機体を上下または左右とランダムに動かして相手の照準から逃げ続ける機

動である。低速で行えば追うほうは失速による墜落を恐れて照準がつけにくくなる。ただ

一般的にこれを使うときは相手に食いつかれて逃げの一手で使う最終手段、悪く言えばた

だの時間稼ぎだ。それをひたすら続ける。なかなか当たらずバルクホルンが少しだけ苛立

ちはじめたころ、メビウス1に通信が入った。

《メビウス、配置完了したよ》

「よし、始めるぞ」

メビウスは上昇を開始、それを追ってバルクホルンも上昇を始める。そしてメビウスは雲

に突っ込んだ。その次に聞こえてくる1発の発砲音。バルクホルンは身構えたが何もな

ったのでそのまま雲に突入した。

雲の中を上昇すること10秒ほど、バルクホルンの前にメビウスの姿があった。それに雲に

入る時よりも距離が短い。それは機体の性能差が原因であった。

「もらった!!」

バルクホルンが銃を構え照準をメビウスに合わせる。それを見計らっていたかのようにメ

ビウス1はバレルロールを行った。

瞬間、メビウス1によって隠れていた太陽の陽の光がバルクホルンに降り注ぐ。

「くそっ」

雲の中にいたせいで余計に眩しく見え、片目を閉じる。

その一瞬の隙を見逃さなかった。

《もらいー!!》

「なっ!」

バルクホルンは心底驚いただろう。なにせ太陽を背に急降下銃撃

を仕掛けているのがハル

トマンなのだから。それになぜ攻撃できるんだ。あいつの銃は弾切れのはず——！

1秒もかからずに考察するが答えが出るはずもなくすぐさま回避行動に移るがあまりにも

遅すぎた。バルクホルンはハルトマンから放たれたペイント弾でストライカーに黄色い斑

点が描かれた。

《バルクホルン撃墜！メビウス&ハルトマンチームの勝利！》

模擬戦終了のホイッスルが響く。模擬戦の結果はメビウスとハルトマンの勝利で修まった。

メビウスとハルトマンは近づき、パチンと互いの左手を叩いた。

「お疲れー。いやあ、こんなにうまくいくななんて思わなかったね」

「ああ。まあ、成功したからよかった」

メビウスはハルトマンの右手に持っているものを見る。それはメビウスが使っていた

ブレン軽機関銃だった。

メビウスが考えた作戦とはこういうものだった。

まず、メビウスがバルクホルンを引き付けその間にハルトマンは雲の上に移動する。そ

の後にメビウスが雲に突入するのだが、そのときにメビウスは1発だけ垂直に上昇する

自分の前に向けて撃っていた。これはハルトマンに対してこのあたりから出てくるとい

合図だった。雲から出て来るやいなや、メビウスは魔力による身体強化を利用してハル

トマンに向けて銃を投げた。それを受け取りハルトマンはメビウスに向かつて急降下を

開始。擦れ違いざまにハルトマンがバルクホルンを攻撃する。

太陽の光を利用してひるむこと、攻撃できないはずのハルトマンの銃撃による動揺

を合わせた奇襲を考えたのだ。

「それにしてもさ、どうやってエイラに勝ったの？」

「それについていろいろ聞きたいのだが、あいつの固有魔法？はなん
だ」

「言い忘れてたけど、未来予知」だよ」

「・・・はい？ちよつと待て。詳しく聞かせろ」

そのあと、メビウス1はハルトマン、美緒、バルクホルン、エイラ
に対して固有魔法につ

いていろいろ質問していた。

ちようどそのころ、基地から10kmほど離れた場所である人物が
スナイパー銃についてい
るスコープを覗きながら空を眺めていた。

「雲の中に入ったか。これじゃあ見えないな」

そう呟きスコープから手を放す。それは二十歳を超えた黒髪長髪
の凛々しい女性だった。

それにこんな季節にも関わらずマフラーを着用している。車に乗
り運転手に伝える。

「基地に向かつてくれ」

動き出した車の中で女性、アドルフイーネ・ガランドはある一人の
ウィッチのことを考え

ていた。

（あのウィッチは誰だ？報告にあつた所属不明のウィッチのだろう
か）

そう、彼女はメビウス1の機動を固有魔法である魔眼でスコープ越
しに観察していた。

（そいつにあのエイラがやられていた。しかもあんな至近距離まで接
近してやるとは・・・

何者だ？）

あのウィッチの動きは明らかにエースに相応しい動きだった。だ
が何故だろうか？

確証はないが本気を出しているようにも見えなかった。もし出したら501のウィッチ全員

が束でかかっても無傷で返り討ちにしような実力の持ち主のよう
に見えた。

「まずは会ってみるのが一番だな」

ガラントは呟き、知らないウィッチに対して無意識に高揚感を抱いていた。

第8話「初陣」

上空でメビウス1は美緒、ハルトマン、バルクホルン、エイラから固有魔法についての説明を受けていた。空は少しずつ晴れてきて雲の量は半分ほどになっている

「えーと、話を簡単にまとめるとウィッチには個々人に固有魔法というものがあり、その力は人それぞれなのか」

「そうだ、参考に私は右目に魔眼を持っている。ハルトマンは気流操作、バルクホルンは怪力、エイラは先ほども言った通り未来予知の能力の持ち主だ」

美緒の説明を受けて「ほうほう」とメビウス1は頷く。

「ということ、それを利用した攻撃も可能ってことか」

「そうだ、例としてバルクホルンの怪力を使えば強力な銃撃になることもできる」

「なにそれ。なんかずるいな」

「ずるいとはなんだ。ずるいとは」

バルクホルンが怒る。だがそれもすぐに治まった。

「メビウス。私からも質問がある」

「なんだ？」

バルクホルンはかなり真剣な表情で話してきた。それによりこちらにも気持ちを切り替える。

「お前はどうかやってエイラを倒したんだ？それが気になっているのだが」

「あ、それ私も気になってたんだ」

バルクホルンとハルトマンがああ時の模擬戦について質問してきた。チラリとエイラのほうを見る。彼女はずっと俺に顔を合わせていない。

(・・・しかたない)

メビウス1は溜め息ひとつした後話し出した。

「エイラに対しての攻撃がすべて回避されたから、至近距離からの銃撃にしたんだ。いかに未来予知で銃弾のなかを潜り抜けることがで

きても近距離からの銃撃は避けようがない。そう判断したまでだ」

「能力も知らずにたった数回のアプローチでそれを実行に移すのがすごいな」

「でもどうやってエイラの攻撃を避けたの？」

「勘だ」

「え、勘？」

「勘だ」

メビウス1の発言が参考にならなかったとばかりにバルクホルンとハルトマンの2人はがつくりと肩を落とす。

「エイラ相手に対策できると思ったのに」

「はっはっは。そう気を落とすな2人とも。運も実力の内だということじゃないか」

美緒が笑い2人を励ます。その間にメビウス1はエイラに近づいて小声で話しかけた。

「(エイラ、ちよつといいか)」

「(・・・なんだヨ)」

相変わらずの反応を無視して話を続けた。

「(お前の弱点だ。攻撃されているときに一度も俺の姿を見なかっただろう。それだとさつきみたいに懐に入られてやられるぞ。未来予知に自信があるのはいいが頼りすぎてはいけない)」

「(・・・なんでそれを教えるンダ?)」

こちらは言っている真の意味を理解できないのかそんな表情をするエイラ。その顔を見ずにメビウス1は答えた。

「(そうすれば今より強くなれるだろう?)」

「え?」

エイラはつい声をあげてしまう。

「(一つ言っておくが、お前の攻撃を避けたのは勘だけじゃない。お前の目線、銃口の向き、あと顔の表情から攻撃のタイミングを予測したからな。それに俺の私見だが、エイラの未来予知は他の奴より起こり得る未来が見えるだけで確実な未来が見えるわけじゃないと思う)」

そこまでいうとメビウス1はエイラと向き合ってこう言った。

「確定された未来は存在しない。未来っていうのは、あやふやだから未来なんだ」

エイラはメビウスの目を見る。それはさっきの模擬戦のときの目ではなく、地上にいるときのいつものメビウスであった。

「なんていうか・・・お前に指導されるとは思わなかったゾ」

「だてにISAFのアグレッサーを務めている訳じゃないよ」

「アグレッサーってナンダ？」

「そっちは何を話しているのだ？」

と、ここで坂本少佐たちが合流した。アグレッサーという言葉を知らないのか質問してきたので簡単に説明した。

「メビウスは私と同じ教官なのか」

「少し違う気がするが、他の部隊の実力を上げるために訓練で敵役をやるんだ」

「へー、メビウスがいたところはそんなことやってたんだね」

メビウスの説明に納得する。

「あ、でもときどきその訓練に俺だけ省かれるんだよな」

「何故だ？敵役を務めるならその部隊の隊長もでるべきだろう？」

「いや、それはそうなんだが、な・・・」

バルクホルンの指摘で途端に歯切れが悪くなるメビウス1を見て全員が首を傾げる。

「前にスカイアイ、君たちからいえば司令官のような存在から言われたんだが『君が出ると相手が落ち込むだけだ』と」

「・・・」

静寂がメビウス1たちを包む。唯一、美緒だけが平然としていた。

「はっはっは！メビウスがやると訓練にならないからやるなど言われたんだな」

「そういうことだ少佐。こっちは手を抜いているのにそれでも言われる時がある。まあ、教えることに関しては隊の中で一番だと言われたけど」

メビウス1と美緒が会話している中、バルクホルンとハルトマン、

エイラは同じことを思っていた。それを言われるメビウスの実力は一体どれほどなのかと。

だがそれを中断するかのようには、甲高い音が鳴り響いた。

「なんだ!？」

「敵襲?」

あまりに突然のことにメビウス1は動揺を隠せない。その間にも警報は鳴り響いている。

坂本少佐が通信越しに怒鳴りつけている。

「ネウロイか!? 今までの周期からあと3日後のはずだろう!？」

《こつちでも分かりません! ですがガリアのネウロイの巣から小型3機、中型1機のネウロイが出現しました! まっすぐこちらに侵攻しています》

突然の敵襲に美緒は悪態つく。そのあとすぐにミーナから通信が入ってきた。

《聞いたわね、皆さん。私とシャーリーさん、ペリーヌさん、ルツキーニさん、リーネットさん、宮藤さんのメンバーで迎撃します! あなたたちは基地で待機してください!》

「ミーナ、私はもしもの時に備えて実弾装備にしていたからだから大丈夫だ」

《そう。では坂本少佐も参加してください。いいわね?》

「「了解!」」

すぐさま行動を開始。美緒を残して滑走路へと向かい、そして離陸してきた者とすれ違う。

「お前ら、死ぬなよ」

「ありがとう、行ってくるわ」

「はい! みんなの役に立ちます!」

「メビウスさんは基地で待っていてください」

「大型ではありませんし、問題ないですわ」

「すぐに終わらせるからな、メビウス」

「行ってきまーす!」

メビウス1の言葉にそれぞれが返事を返す。彼女たちにとってこ

れはいつも道理なのだろう。だが——とメビウス1は一つの不安を抱き思う。大陸戦争で多くの戦場の空を飛び、闘い、生き残った彼だからこそ言えることがある。

たとえ相手がネウロイ——人間じゃないとしても戦争、戦場ではない何が起こりても不思議ではないことを。それが時には自身の理解を超えるものだとしても、普通に起きることを。

「シャーリーさんとルツキーニさん、ペリーヌさんは小型をお願いします。私と坂本少佐と宮藤さんは中型の足止めを」

「二二了解」

すぐさま戦闘が始まった。

ミーナ、坂本、宮藤の3人は中型に取り付きコアを探しながら攻撃していく。

シャーリー、ペリーヌ、ルツキーニたちはすでに3機のうち2機の小型ネウロイを破壊していた。やはり、大型でないことが功を奏し、戦いを有利に運んでいた。

《最後の小型ネウロイを破壊しましたわ!》

《よし、全員で畳み掛けるぞ!》

《はい!》

レーダー機器や通信機器が置かれた管制塔の中でメビウス1たちは戦いのようすを通信越しに聞いていた。レーダーにも映るのだが、時代が時代だけに戦闘しているおまかな場所しか映し出されていない。

「会敵から1分で小型ネウロイを撃墜か、全員いい腕だな」

「メビウスが言うとなんだか嫌味にしか聞こえないゾ」

「今日はそんなに脅威でもなかったね」

《コアを見つけたぞ! やつの先端だ!》

「おまえは少しは危機感を持たないのか。だがもう終わりだな」
通信から多くの銃声が聞こえてくる。すぐに静かになった。

《ネウロイを全て破壊した。レーダーのほうはどうだ》

美緒の声が通信越しに聞こえてくる。それにバルクホルンがレーダーを見ながら答えた。

「こちらでも確認した少佐。ネウロイの反応は見られない……ん？」
話していたバルクホルンの会話が止まった。彼女はじつとレーダーを見つめている。

《どうした？》

「少佐、敵の増援だ。さっきと同じ方角から数は8……なんだこいつは!？」

途端、バルクホルンが大声を上げる。

「少佐、そっちにネウロイが8機接近している！それにこのスピードは!？」

《なに？……！全員、シールドを張れ!!》

坂本少佐の危機迫った声が聞こえた数秒後、爆発音が管制塔の中に響いた。

「坂本少佐！ミーナ!!」

「なに？何が起こったの!？」

「それにさっきの爆発ハ……?」

いきなりのことにハルトマンやエイラも動揺を隠せていない。

「坂本少佐！ミーナ！誰でもいい、聞こえるか！」

バルクホルンはマイクを握り何度も大声を上げている。しばらくのあと向こうの音声が届いてきた。

《はなれ——で——全員——!》

《なん——あ——ネウ——は!?!》

《き——あああ——!》

《——ネちゃん!》

《だいじ——か!リネ——ん》

《ありが——ペリ——》

《う——はや——よ!》

《メビ——いいしょ——いか!》

向こうの通信が届くが、そのほとんどは爆発の音にずっと続いている轟音で聞こえなかった。途切れ途切れの通信だが混乱してい

るのは明らかだった。

「くそ！エイラは基地に残れ。私とハルトマンで救援に向かう！」

「わかったゾー！」

「うん！」

すぐさま救援に向かおうとバルクホルンは決心する。ハルトマンやエイラもそれに従った。とここでハルトマンがあることに気が付いた。

「あれ、メビウスは？」

メビウス1だけがこの場所から忽然と姿を消していたことに今頃になって気が付いた。

メビウス1は基地内を全力で走っていた。目指す場所は自身の相棒が置いてある第2格納庫。メビウス1は通信を通して聞こえた爆発音に紛れていた轟音を聞き洩らさなかった。残る3人のことを気にせず動き出していたのだ。そして、メビウス1の頭の中ではずっと同じ疑問が出ては自ら否定したりを繰り返していた。

(まさかそんなことは・・・いや、あの音は間違いないはず)

あの轟音をメビウス1は知っていた。たとえ2年、いや正確にはカティーナ作戦を含めると1年経つが忘れることはなかった。そしてあの女は言っていた『あなたのほうが詳しい』という言葉が離れなかった。

「これが、この世界で俺がやるべきことなのか・・・？」

メビウス1の言葉は誰に聞かれるでもなく、急いで自分の機体のところへ走った。第2格納庫に着くや否やそこにいた整備班の者に大声で叫ぶ。

「おい、俺の銃は？」

「はい？」

「俺がここに来た時に持っていた銃だ！坂本が試し打ちしたと言ったからあるんだろ」

「あれは弾切れです。バルクホルン大尉がその時に使い果たしました」

「なに!?」

弾切れという言葉に舌打ちする。持っていたものが何か分からなかったが、戦闘機には効果があるに違いないと思ったのにまさか弾切れとは――!

「おい!何でもいいから威力の高い銃を用意してくれ。今すぐに!」

「はっはい!」

怒鳴られてビックリしながらも慌ただしく整備班の人たちは動きだす。

その間にメビウス1はF-22Aストライカーに乗る。そうしているうちに全長1.5mくらいの銃が運ばれてきた。そばにはホーマーの姿もある。

「おい!メビウス。一体なにがあった?」

まだこちらが説明していないのにホーマー曹長は聞いてきた。おそらく長年の勘だったのだろう。

「ミーナたちが敵に囲まれているんだ。急いで救援に向かう」

「なんだと!?了解した」

ホーマーはすぐに理解してくれた。持ってきてくれた銃を確認する。

「こいつは」

「扶桑の九九式二号二型改13mm機関銃だ。これでいいか?」

「13mm?20mmのやつはないのか?」

「あるにはあるが修理中だな。大丈夫かこれで」

「ああ、選り好みしている場合じゃないしな。借りるぞ」

銃を受け取りエンジンを起動させる。甲高い音と風が発生する。

「どいてくれ。すぐに出撃する!」

「おーし、お前らあ!道開けろ!!」

さながらモーゼの十戒のように、どたどたと開かれたところをメビウス1は移動していく。滑走路に着き管制塔に連絡した。

「管制塔、そこにいるのはエイラか?これより離陸する」

《メビウス!?お前どうしてそこにつてちよつとま・・・おい!メビウス!何をしている。貴様その機体は許可が出ないと乗れないはず

だろう!?!」

エイラだったがバルクホルンが強引に通信に入ってきた。

「相棒で飛んでいったほうが速い。メビウス1、離陸する」

《おい!まだこっちの話は——》

うるさいので通信を切り離陸した。すぐさま索敵レーダーに切り替えて戦闘空域を確認する。方位170、高度5000mで小さな7つの光点を取り囲むように大きい光点が8つ。2機づつに分かれて動いているのが確認できた。距離は100kmほど、F-22Aの性能ならあつという間だ。

「いくぞ、相棒!」

メビウス1は自身の愛機に呼びかける。それに答えるかのようにF-22AのF119エンジンが唸りをあげた。

「全員!シールドを張れ!!」

「美緒どうしたの?」

突然のことにほとんどの者が反応していなかった。ただ、宮藤だけ咄嗟に自身の魔力で全員をカバーできるほどの巨大なシールドを展開した。

その直後、何かが命中。爆発が発生した。

「きゃあああー!!」

「なに、何が起こったの!?!」

「ネウロイだ。速いぞ!」

爆発音が治まる前に巨大な物体が、彼女たちの横を爆音を上げて通り過ぎた。

「は・・・?おい、今横を通り過ぎたよな。見えたか?」

「シャーリー、速すぎて見えなかったよ」

「一体なにが・・・」

「話あとよ!右から2機、接近して来るわ!!」

ミーナは固有魔法・空間把握を使い敵の動きを皆に伝える。その方向を見たとき、全員が言葉を失った。

外見はネウロイと変わらない。だが巨大な機体、全長20mくらい

の体にそれに見合う大きな主翼、二つの垂直尾翼を持ち、特徴的な形状は、そこにいる誰もが目にするのは初めてだった。

当然だった。彼女たちを襲っているその名は、M i g—29 フアルクラム”。ユーク版のF—16と呼ばれ、格闘戦能力に優れた機体だ。

「離れないで、全員で対応するのよ！」

ミーナからの指示で攻撃を開始するが全く当たらない。敵ネウロイに銃弾がかすることなく音速を超えるスピードで通り過ぎた。

「なんなのだ、あのネウロイは!？」

坂本少佐が叫ぶ。その間に上空から接近してきた別の2機がR—73E短距離空対空ミサイルを発射する。それをシールドで防いだ。リーネは防いだものの耐え切れずふきとばされた。

「きやあああああ！」

「リーネちゃん！」

宮藤が悲痛な表情で叫ぶが、そばにいたペリーヌが飛ばされた彼女を抱き止めた。

「大丈夫ですか!?!リネットさん」

「うん。ありがとう、ペリーヌさん」

「ウジュウジュ、速すぎるよ！」

「メビウスのやつといい勝負じゃないか！」

スピード系の攻撃が得意なシャーリーとルツキーニは敵の速さについていけないことに苦虫をかんだ表情をする。M i g—29は全機集結してミーナたちにR—27E R 1長距離空対空ミサイルを1発ずつ計8発、発射した。ペリーヌが前に出る。

「あまり調子に乗らないでください。トネール！」

ペリーヌが自身の固有魔法を使用、自分を中心に電気が発生し徐々に大きくなり、それは雷のようになる。それにふれたミサイルは誤作動を起こし目標に当たる前に自爆した。

「これで——」

「ペリーヌさん、あぶない！」

ペリーヌの前に宮藤が出てきてシールドを張った。瞬間、シールド

に何か当たる鈍い音が聞こえてくる。敵は自爆したミサイルの爆発に向けてGSh-30-1 30mm機関砲をばら撒いたのだ。宮藤が出てきたのはほぼ直感だった。

「あ……あいがとうございます。宮藤さん」

突然のことに動きが止まりかけるがそれに美緒が叫ぶ。

「気を抜くな！敵はまた分かれたぞ！」

敵はまた2機編隊の4つのグループに分かれていた。その中の一つが機首をこっちに向ける。また仕掛けてくる！と皆が気を引き締めた瞬間、接近していた敵2機が突然爆発した。

「え……？」

「何が起こったんだ？」

いきなりのことに皆は反応していなかった。ただ一つ言えることは、小さいものの敵が撃ってきた矢のようなものと同じものが敵の側面にぶつかる場所を全員が目にしていた。

「一体誰が……」

誰かが言いかけた時、爆音が響き渡る。見るとひとりのウィッチが彼女たちの上空を飛んでいた。スピードのせいか顔は確認できなかったが、彼女の髪に結んであるのと同じ色をしたリボンのマークがはつきりと見えた。

《こちらメビウス1、ミーナ聞こえるか》

通信が入ってくる。それと同時に皆が顔と合わせて理解した。メビウスが来たのだ、と。

「全員無事だな」

A I M-120C AMRAAM 中距離空対空ミサイルが命中したのを確認し、メビウス1はミーナたちが無事だということを確認した。

「こちらメビウス1、ミーナ聞こえるか」

《メビウスさん、どうしてここに》

「状況が状況だったんでな。バルクホルンの奴には怒られたが勝手に来た。」

話ながらメビウス1は敵機を見る。

(あの音、やはりMig-29だったか)

大陸戦争のとき、エルジアは多くの機種を揃えていたが、その中でMig-29は2番目の数を保有していた。多くの戦場で必ずと言つていいほどの機体と交戦していた。

「こいつらの相手は俺がやる。ミーナたちは低空に退避してくれ」

《そんな！いくらなんでも無茶よ。6機相手にあなた1人なんて！》

ミーナは俺の心配をしてくれるがそれを断った。

「大丈夫だ、心配すんな。伊達に“死神”呼ばわりされたわけじゃない」

「死神？」

ミーナがあの子を反芻する。とにかくこの脅威を排除しなくては

「そういうわけだ。手早く頼む」

それで通信を終了して敵機のほうを見る。形状はMig-29だが外見はネウロイと同じ色をしている。しかもあの動き・・・生き物かどうか分からない存在だとしても本当に“人が乗っているような動きをしている”。

「メビウス1、交戦！」

メビウス1とジェット戦闘機の形をしたネウロイとの戦闘が始まった。

敵機Mig-29全機と正面から向き合う。メビウス1はフレアとチャフを放出、敵のミサイル攻撃を封じ機銃攻撃に入った。敵も同様に機銃攻撃に入る。ほぼ同時に撃ったがメビウス1はラダーを活かし自らの位置をずらして敵の銃撃を回避、メビウス1の攻撃で1機のエアインテークに命中、失速し海へ落ちていった。

「くそ、やっぱり初速が遅い」

自身が持つ銃をダメ出しする。ジェット戦闘機相手だとやはりM61A2 機関砲が断然やりやすい。

自身と敵が交差する直前にメビウス1はインメルマンターンを行い、敵の背後に着く。

「メビウス1、FOX2!」

ストライカー側面にあるウェポンベイが開きAIM-9L/Mサイドワインダー短距離空対空ミサイルが発射され鈍重な回避行動をしていた1機に命中した。残り4機になったとき敵機が別れた。2機は別々の方向を取りながら旋回を始める。他の2機は左スライスターンを行い下降していく。すぐさまレーダーを確認する、その方向に7つの光点――

「あいつ」

自分と彼女たちへの攻撃へと別れたのだとすぐに理解し、2機の後を追う。武装を変更し下面ウェポンベイが開く。

「メビウス1、FOX3 FOX3!」

AMRAAM中距離空対空ミサイルを発射した。だが2機はフレアとチャフを放出、急旋回を行い回避する。だがその動きを予測していたメビウス1は回避行動を続ける2機に九九式二号二型改機関砲の13mm弾をお見舞いする。うち1機のエンジンに命中、もう1機にも撃ち、片方のエンジンに命中した。片肺飛行となったMig-29は飛んではいるが先ほどと比べればかなり減速していた。両のエンジンに被弾した敵機は出火、ほどなくして爆散した。

「ミーナ、その手負いのやつを頼む」

片方のエンジンだけで飛行しているMig-29を任せる。

メビウス1は普通のパイロットがかかるであろう時間の半分もかからずに4機撃墜または戦闘不能状態にした。残り2機、自分の後方にしっかりと張り付いている。その距離はほんの少しだけ敵機の機銃射程外だった。Mig-29がメビウス1を追いかける。メビウス1は逃げるが少しづつ減速、距離を詰めていた。

(まだまだ!もうすこし)

後方の敵機を睨みながら思う。そして敵の機銃射程に十分な距離になった。Mig-29の機銃が火を噴くが、そこにメビウス1の姿はなかった。実はその時メビウス1は攻撃を見計らってコブラ機動

を行っていた。スホーイ系の戦闘機が得意なこの機動はF-22Aでも可能だった。大陸戦争で黄色中隊がよく使っていたので戦争終了後にこの機動をマスターしていた。実戦で使ったのは今回が初めてだったがうまくいったようだ。

「メビウス1、FOX3！」

間髪入れずにAMRAAMを発射。もう片方の敵に機銃を掃射した。ロックオンした敵は回避もままならず被弾し、火の玉となって落下していった。もう片方の敵は左翼に命中したが、バレルロールで決定打は当てられなかった。

(このミグ・・・、本当に人が乗っているみたい動く)

ジンキングで逃げるMig-29の後ろを取りながらメビウス1はあることに気が付いた。被弾させた場所がなくなっていることに。

「メビウス1よりミーナ、被弾したところが修復されている。どういうことだ？」

《なんですって？おそらくそのネウロイはコアが存在するわ。それを破壊しないと何度でも再生するわ》

「コア・・・」

ふと元の世界で遭遇し交戦したときに見つけたあの赤い結晶を思い出す。あのときは偶然見つけたがどこにあるのか。

「そのコアはどこにあるか分かるか？」

《私だ、メビウス。私の魔眼はコアの場所が見える。だが、あのスピードだ。何とか速度を落とせないか？》

「メビウス1、了解した」

メビウス1は武装のチェックを行う。機銃はまだ余裕がある、ミサイルはAMRAAMが残り1発。

「ケチってる場合じゃない。メビウス1、FOX3！」

最後のミサイルが放たれる。それに対し、敵機はチャフを散布した。だが、距離があまりに近かったこと、AMRAAMの特徴でチャフに強い作りになっていたこともあり、直撃はしなかったが近距離で爆発。発生した爆風と衝撃波と飛び散った破片により右エンジンに被弾、煙を上げ速度が大幅に下がった。本当は回避したところを機銃

でやるつもりだったが運がよかった。

「坂本、敵機を失速させた。見てくれ」

《よくやった、メビウス》

美緒は右目の眼帯をはずし紫色の瞳——魔眼を使い片肺飛行をするM i g-29を隈なく見る。

《見つけたぞ。コアは先端の盛り上がっている部分にある》

「コックピットか。了解した」

すぐさま動きだし、敵機に接近する。敵機と10mもない近距離を並走、そして操縦席の場所に九九式二号二型改機関砲を構えた。

「インガンレンジ、ファイア！」

九九式二号二型改機関砲全弾を惜しむことなく発射した。敵機のコックピット部分はヒビが入り、細かく砕け、蜂の巣にされていく。全弾使い切るのと同時に命中箇所が赤く光りだした。攻撃かと思いすぐさま離れる。そのあと、なにかが砕け散り、それに追従するように爆散した。

「こちらメビウス1、ミグ……じゃなかった、敵ネウロイを破壊した。ミーナ、そつちはどうだ？」

《こちらもうすぐ終わりそうよ》

見るとかなり失速したM i g-29に全員が取りつき蜂の巣にしていた。弾丸の一発が発射されずにあつたミサイルの弾薬に命中、爆発を起こし砕け散った。索敵レーダーを起動し頭に入ってくる情報を確認する。

「レーダーに反応なし。戦闘終了」

本当ならAWAXのスカイアイが言うのだが、本人はいないので自分が代わりに言った。

「こちらメビウス1、全員無事か？」

《ええ。あなたのおかげだわ》

《すまないなメビウス。助かった》

その他の人からもいろいろお礼の言葉が贈られる。

シャーリーだけは一つ余計なことが加えられていたが。

「俺はミーナたちの後ろで警戒しながら帰投する。また何か来たら厄

介だからな」

《お願いするわ。全員基地に帰投します》

「坂本、その銃を貸してくれ」

美緒が投げた銃を受け取り、周辺・・・特に南の方角を警戒する。メビウス1を除いた全員が疲れた表情を隠すことなく基地へと帰り始める。

そんな中メビウス1は最後に撃墜したあのミグのことを考えていた。

(あのミグの動き・・・いや、気のせいか)

敵機の動きが気になるが、ただの思い違いだろうと決めつけた。

こうして、メビウス1にとってこの世界で初めての、彼女たちにとって未知の敵との戦闘が幕を閉じた。

第9話 「メビウスの懸念」

《全員帰投します》

「了解した」

ミーナの声を聞いてバルクホルンたち3人はほっと胸を撫で下ろした。

「いきなり飛んで行ったけど、交戦してからあつという間だったね」

「そうだよナ。それにフォックスってなんだ？」

ハルトマンとエイラは先ほどの通信から聞こえてきた内容を話しているが、バルクホルンだけ何か考え込むような顔をしていた。

「どうしたのトゥルーデ？」

「ん、ああ少し疑問に思ったのだが、メビウスのやつネウロイのことをミグと呼んでいた」

そういえばとハルトマンとエイラは思い出す。通信からもメビウスは訂正していたがネウロイのことをミグと言っていたのを聞いていた。

「ミグっていえば、サーニヤのストライカーと同じ名前だな」

「たしかに何か知っているような感じだった」

さらにミーナの口からも出た “死神” という言葉。

「メビウス・・・お前は一体何者だ？」

「そのメビウスってやつのこと、詳しく聞かせてもらえないかい？」

「「え？」」

だれだろうと思いい3人は後ろを振り向いた。

基地に着くまでの間メビウス1はミーナに報告していた。

《レーダーに反応なし。基地のほうにも警戒を厳にと伝えてくれ》

ミーナたちが基地へ帰る後ろ10kmをグルグルと旋回しながらメビウス1は飛行していた。ミーナはメビウスのストライカーのことを考えていた。ストライカーが開きあの矢のようなものが出てくるのを確認していた。そして今もその機体に備え付けてあるとされ

るレーダーで私たちのことを守っている。スピードだけでなく多くの謎が出てきた。

「了解したわ。聞こえるトゥルーデ。レーダーから目を・・・どうしたの？」

通信から聞こえてきた内容を基地に伝えようとしたが向こうの様子がおかしいことに気が付いた。

「なんですって？・・・分かりました」

《どうかしたのか》

メビウスからの通信を聞きながらミーナは先ほど入ってきた情報に頭を悩ませていた。よりによってこんな時である。

「ええ、1つだけあるわ。最もメビウスさん、あなたにですけど」

《俺に？》

「ええ、”お客様”よ」

皆が滑走路に着陸し最後に自分が着陸する。格納庫に入るとそこにはストライクウィッチーズの隊員全員が揃っており、その中に知らない女性がいた。

「へえ、君がメビウス。そしてそれが未来のストライカーか」

黒髪長髪の女性が話しかけてきた。凛とした姿、強い意志が見える瞳。皆の表情がかなり固まって見える（坂本はいつも通り）から彼女たちの上官だろうか。

「あなたは？」

どこのだれかを聞こうとし相棒と彼女の間に立つ。彼女の目が好機の目に見えたからだ。シャーリーとは違う。まるで獲物を見つけた獣にも似たような目に見え、無意識に機体を守る位置に立っていた。

「私はカールスラント空軍ウィッチ隊総監、アドルフイーネ・ガランド少将だ」

「あの、ガランド少将。なぜここに・・・？」

あのミーナが怖気凜いているように見える。それほどの人物なのだろう。

「なに、君たちに内緒で基地に行こうかと思ってね。近くまで来

た時だ」

そこまで言いメビウス1のほうを見る。

「君がそれに乗って飛んでいくのを目にしたというわけだ。なによりスピードが桁違い、ジェットストライカーの開発に携わっているがそれすらも凌駕するのが分かる」

F-22Aのことを絶賛するガランド。彼女は先ほどメビウス1が緊急出撃したのを見ていたのだ。魔眼の有効距離から外れるまでじっくりとラプターを観察していた。

その言葉の中に隠れるものをメビウス1は感じ取っていた。

「・・・単刀直入に言ったらどうだ」

メビウス1はガランドに言い放つ。 “なにを企んでいる”と。

「話が早くて助かる。そのストライカーを調べさせてほしい。その技術があればジェット機の開発が大きく進み、ネウロイを殲滅できる」彼女の言っていることは理解した。メビウス1がいた世界でも1940年代に世界最初のジェット航空機、後に第1世代ジェット機がベルカで開発されたことは知っている。おそらくこの世界でも同じ時期にジェット機の開発があることは薄々気づいていた。確かに相棒の技術が加われば開発は大きく前進するだろう。

「断る」

メビウス1はそれを拒否した。ここにいることになった時と同様に相棒は危険な存在だ。もしこの世界の国家が知れば何が起こるか容易に想像できる。それにこの世界にとって相棒の存在は俺の世界の “あの兵器” と同じだとメビウス1は考えていた。

「・・・はー」

ガランドは大きく息を吐く。

「済まない。少し言葉を間違えたのでもう一度言わせてもらおう・・・そのストライカーを貸せ、我々に協力しろ」

鋭い眼光で睨み脅迫とも取れなく口にした。それと同じに濃密な魔力が放出される。

「何度でもいう、断る」

メビウス1はガランドの睨みと膨大な魔力から怖気凜くことなく

それを肌で感じながらも同じように睨みかえす。同様に魔力が漏れ出す。メビウス1本人は魔力を放出している自覚などないのだが、相手の威圧に反抗しようとし無意識でそれが起こっていた。二人の膨大な魔力がぶつかり合い混ざり合う。それにより格納庫内は暴風のように吹き荒れた。

「うわわわわ!!」

「う・・・もうだめ」

「わっ、リーネちゃんしっかり!」

「少将!それにメビウスもやめてください!」

あまりのことに皆が戸惑い、あまりの魔力の中には気を失いかけるものも出てくる。ミーナが止めようとするがそんなことを無視し、2人は自身の魔力のぶつかり合いを続け――

ガン!ガン!!

大きく鈍い鉄の音が響く。

「おおおおおおおおお・・・!」

「・・・いたた」

「メビウス、それにガランド少将、場を弁えてください」

メビウス1は頭を押さえて悶絶。ガランドはほんの少しだけ涙を浮かべていた。

坂本が扶桑刀を抜き二人の頭に峰打ちしたのだ。さすがに上官にあたるガランドには手を抜いて刀を振り下ろした。メビウス1には手加減なしでやったが

「いたた、確かにわたしが悪いな。場所を変えよう」

「それでは少将、こちらへ」

「ほら、いくぞ。メビウス」

ミーナはガランドを先導するように二人は歩き出す。坂本はまだ頭を押さえるメビウス1を引っ張るように歩いて行った。残された宮藤たちは散らかった格納庫の後片付けに追われる羽目になった。

執務室に移動した4人はソファに座り込む。さきに口を開いたの

はガランドだった。

「二応君のことはバルクホルンたちから聞いているけど、君が別の世界から来たというのは本当らしいね。ISAF空軍メビウス隊隊長、メビウス1、本名は明かせないため皆からメビウスと呼ばれている。これで合ってるかい？」

ガランドの話に「ああ」と返事をする。

「先ほどはこちらとしても申し訳なかったと思っているが、なぜ要求を拒んだのだ？君も人々を守る軍人だろう。君のストライカーの技術があれば、ヨーロッパ大陸を取り戻すことができる・・・祖国を開放できる日が近くなるかもしれない」

そう語りかけるガランドを見てメビウス1は理解した。彼女も奪われた故郷を取り戻すために戦っているのだと。そのために相棒の技術がほしいと。だからあんな脅迫染みた要求になったのだ。奪われた故郷を取り戻す。大陸戦争を経験したメビウス1にとって十分すぎるほど理解できることだ。正直なことをいうと彼女たちに協力したいとさえ思っている自分がいる。しかし、それでも——断らなくてはいけない理由がある。

「この世界に来た時にミーナから今の戦争について聞いた。各国が協力し合っていることも」

「それとこれと何が関係あるのだ？」

ガランドの疑問にメビウス1は口を開いた。

「似てるんだ」

「なに・・・？」

「似てるんだよ、状況が。俺の世界で起こったことと、今君たちの世界が」

ミーナと美緒はメビウスのいうことが何がなんなのか分からなかった。ガランドも同様でメビウス1に何が似ているのか聞く。

「ミーナには言ったが、俺たちの世界は巨大隕石が落ちてくること分かってどうにかしようとして各国が協力し合った。敵味方と争ってる場合じゃなかった。ここからは言っていないんだが隕石そのものを破壊、消滅させるために馬鹿でかい大砲をたくさん作った。そして隕石

の脅威が薄れたころ……その兵器をどうするかで問題が起こった。この兵器はストーンヘンジと違って正式名称は確か……120cm対地対空両用レールガンだったか、それを巡って戦争にまで発展した」

メビウス1はISAFを長く苦しめた巨大兵器ストーンヘンジの説明を3人にしていった。メビウス1は記憶が曖昧なせいで名前を省略したが正式には『120cm対地対空両用磁気火薬複合加速方式半自動固定砲』である。

「それが敵の手に渡り、対空砲として使用された。射程1200km、高度600mより上空にいる航空機を跡形もなく破壊する広域多量破壊兵器として、俺の言いたいことが分かるか？」

3人は黙ってこちらを見ている。自分が言わなくてもすでに分かっていると思われるが口にした。

「人々を守るために作られたものでも、人を殺す兵器に成り下がる。それを見てきたからこそ相棒は渡せない。確かに相棒の技術があればネウロイを殲滅するのは容易になるだろう。だがそのあとは？今度は人間同士の戦争になりかねない」

それはメビウス1がミーナからこの世界のことを聞いたときに思ったことだ。メビウス1からしてみればネウロイはユリシーズ、F-22Aラプターがストーンヘンジという位置づけになる。

「強すぎる力は、その存在だけで新たな争いの引き金になりかねない。俺も、あの機体も、本来はこの世界にあってはいけないものなんだ」

一通り話し終えたあとガランドが口を開いた。

「一筋縄ではいかないか？」

「俺たちと同じ過ちを繰り返してほしくない。それだけだ」

メビウス1の主張を聞き、ガランドは両手を上げて言った。

「降参だよ。そこまで言われたら私が引くしかないね」

参ったというしぐさをし、緊張した空気が解れて少しばかりミーナは安堵のため息を漏らした。

「君のストライカーを取るようなことはしないと誓おう。ただ、どんな性能、武装をしているか教えてくれ。分からないままだと信用することもできない。あと今日現れた謎のネウロイについても」

「ああ、情報は共有したほうがいいしな」

メビウス1はガランドにラプターの性能を教えた後、今日遭遇した敵について話し始めた。

「今日現れたあの敵、名前はM i g - 29　ファルクラム。俺の世界で超大国ユークトバニアが1980年代に開発した戦闘機だ」

「なぜこの世界にある？」

「知らん。ただほっておくこともできない。なぜこの世界にジェット機が出てくるのか知らないが君たちではどうにもできないのは身に染みただろう？ ジェット機の相手は俺に任せてくれないか」

「ふむ・・・ミーナ中佐はどう思う？」

「私としてはメビウスの力が必要になると思います。もし今日のような敵が来たとき我々だけで守り抜くのは困難と判断します」

「そうか」

実際に敵とメビウスの戦闘を見たミーナが言うのだから、間違いないだろうとガランドは判断しメビウス1に言った。

「メビウス。ミーナ中佐に言われた通り特別隊員として、この基地に残りブリタニアの防衛に協力してくれ。可能な限り私も助力しよう。あと、航空機の操縦に長けているらしいな。可能なら航空機部隊の教育に協力してくれないか」

「ああ、俺なんかでいいなら喜んで引き受けましょう」

ガランドとメビウス1は握手を交わす。メビウス1はガランドという大きな後ろ盾を得たのだった。

メビウス1とミーナは基地を去っていくガランドに敬礼し見送った。その後は警戒がとかれて夜になった。皆が寝静まった頃ミーナから呼び出しを受けた。ノックして中に入る。

「今日のあなたには感謝しています。もしあなたが来なかったら私たちはここにいなかったでしょうね」

「俺は独断で動いたんだ。命令違反だったが皆無事でよかったよ」

メビウス1もミーナはソファに座り今日のことを話す。

「メビウスさん少し聞きたいことがあるのですが、あの時言っていた

“死神”とは何ですか？」

「ん、それか。あとメビウスでいいとあったろう。いちいちさん付けで呼ばなくていい」

ミーナがメビウスのことを呼んだのはこれを聞くためだった。半分ただの興味だったのだが気になっていた。

「“死神”ってのは、敵からのあだ名だ」

「敵から・・・？」

「正確には“リボン付きの死神”味方からは“ユージアの猛禽”とか、どこの誰が言ったか知らないが“一人で大陸戦争を終わらせた男”とか言われる」

3つ目のあだ名は迷惑な話さとメビウスは言った。

「あの時は誰もが必死に戦っていた。確かに俺の戦果がすごかったのも事実だが、知らないやつが結果だけ見て勝手に決めつけるのが気に入らないのさ、俺は」

メビウスはあの戦争を一人で終わらせたという自覚などない。自分からしてみればそんなものは慢心だと思っっている。皆であの戦争を終わらせたのだとメビウスはそう確信している。

「戦争があなたを強くしたのですね」

「あの戦いで成長したと言える・・・皮肉なもんさ」

そこまで話しミーナは棚から瓶を取りだし持ってきた。

「ウイスキーですけどいいですか」

「酒か。そういえばこの世界のお酒をまだ飲んでなかったな」

「ならちようどいいわね」

ミーナ中佐はグラスにウイスキーを注いで、メビウスに渡した。

メビウスとミーナの2人はゆっくりとウイスキーを飲みながら語り合った。

「メビウス！今すぐ厨房からおつまみ持ってきてきなさい！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ」（どうしてこうなった）

酔ってしまったミーナを見て心の中でそう呟いた。このあとメビウスはミーナの暴走に付き合う羽目になったのはいうまでもない。

第10話「夢・記憶」

気が付くと、私ははるか上空の空の中にいた。下に広がる大地は見渡す限り荒野、ほぼ平原の大地に長年の川の浸食によってできたの大きな谷が見える。

だがその高度がだんだんと下がっている。地面が迫るがスピードが落ちることはない。

《警告！ストーンヘンジからの砲撃を確認。全機南へ撤退せよ。高度は2000フィート以下に保て!!》

《2000フィート?地面になんか潜れないぞ!》

通信から怒鳴り声が聞こえてくる。空を見たとき同じように高度を下げる機体を確認した。

(レシプロではない...だと?)

その機体を初めて見た。飛んでいる機体は二種類。彼女は知らないが今見える機体はF-16ファイティングファルコン、F/A-18Cホーネットだ。そして、今彼が使っている機体はF/A-18Cである。

《谷だ。谷に逃げ込んで高度を下げろ!》

《あんな狭いところを飛ぶなんて自殺行為だ!》

《このまま吹っ飛びたいのか馬鹿野郎!!》

皆が罵詈雑言じみた言葉が飛び交うほど混乱していた。1機、また1機と谷の中に入り込む。谷の中を見た彼女からしても今のスピードと比べれば狭すぎるのが見て分かった。我々が開発しているジェット機に乗ったことがあるが、あの機体で飛ぶと谷の壁に激突してしまうと分かるほどその谷は狭かった。

《弾数4、弾着まで15秒》

《各機弾着に備えろ!》

《弾着まで10秒!》

《レイピア12!速く谷に入れ!》

上空を見ると何機かがまだ上を飛んでいる。それにさつきから聞こえてくる通信に紛れていた『ストーンヘンジ』という言葉は確か

《来るぞ！5、4、3、2、1、弾着、今！》
通信越しのカウントダウンが終わった瞬間

空が、砕けた

《あああああああ！！》

《レイピア12が巻き込まれた！》

《ほかの何機か巻き込まれたぞ！》

《ヘイロー7、通信途絶！》

《何て威力だ！》

《ヴァイパー11とオメガ5もやられた！》

《ヴァイパー9、応答しろ！応答しろ！！》

味方から聞こえてくる悲鳴にも似た通信。それよりも今の光景が私には信じられなかった。

谷より上、上空を飛んでいた飛行機が一瞬のうちにまるで木の葉が強風に飛ばされるが如く、木つ端微塵に爆散したのだ。見ただけでも10機近くが私の目の前から消えてなくなった。

《ストーンヘンジからのさらなる砲撃を確認》

《また来るのか！》

《1000kmさきから狙い撃ちか！》

《死にたくなければ谷から頭を出すな！》

よく見ると私は戦闘機の中にいるようだ。しかし、自分が操縦している訳ではない。私自身は操縦席の後ろからこの機体を操っているパイロットを見る。ヘルメットをかぶり顔は酸素マスクと飛行メガネのようなもので隠れて見えない。一つだけ確認できることはこのパイロットはかなりの腕の持ち主だということだ。谷がかなり狭くなっており蛇行しているとところをスピードを落とすことなく、谷の壁

ギリギリの場所を機体をかすめることなく飛んでいる。

「なるべくスピードを落とすな。追撃する敵機に追いつかれるぞ！」

操縦している人が後続の味方機に連絡する。帰ってくる返事は様々だった。

《壁にキスだけはごめんだ！》

《機体が岩にこすりそうだ》

《だめだ、ぶつかると脱出する！》

何機かが壁に激突してしまう。全員が無事脱出したと祈る暇などなかった。

《弾着まで15秒！》

《ばかすか撃ちやがって！》

《ミサイル！ダメだ振り切れない。オメガ1、インジエクティング！》

その間にも味方が敵にやられている。そして再び空が轟音を上げながら崩壊する。

《神様・・・!!》

《祈る暇あるならさっさと逃げることを考えろ！》

《おい、あそこを飛んでいたやつらはどこ行った?!》

《くそ！くそ！くそ！エルジアの野郎!!》

それぞれが敵に怒りを上げている。

・・・無事に作戦空域から離脱した。

《聞こえるか。無事な機体はそのまま高度を維持、帰投しろ》

おそらく司令官からの声なのだろう。了解と伝えた後、周りを見た。来る前と比べて味方の数が半分以下まで減っていた。

「・・・畜生!!」

私の目の前にいるパイロットは声をだし、操縦桿を強く握っていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

目が覚める。外はまだ夜が支配していた。時計を確認し今が深夜3時過ぎだと知る。

「水でも飲むか」

のどが異様に乾いているのと、寝汗がひどく背中にシャツがベツタリとついている。気持ち悪いためそれを脱ぎ捨てる。上が下着姿だけになるがここにいるのは自分だけなので気にする必要はない。

(さっきの夢は)

コップに注いだ水を飲みほしその女性、ガランドは窓わきにあるイスに座り夜空の星の見ながら、つい先ほど自分が見ていた夢のことを考えていた。

自分が知らない空、知らない場所、知らない飛行機、知らない兵器。明らかに私の記憶ではない。そして最も自分の脳裏に焼き付いているのはあの巨大な爆発だった。これらから導き出される答えはただ一つ。

「メビウスの記憶・・・か」

そうとしか考えられなかった。だがメビウスは女性だったはずだ。目の前にいる人はヘルメットとバイザー、酸素マスクで顔が隠れて見えないが声からして男性だろう。

何故メビウスの記憶を夢という形で私が見るのか、分からない。だがこの夢を見たおかげでメビウスの世界の戦争がどんなものかを知ることができた。一瞬にして多数の敵を殲滅できる兵器。その兵器本体を見ることはできなかったが夢の中の情報からどんな兵器か予測できた。おそらくあれがメビウスが言っていた『ストーンヘンジ』の破壊力なのだろう。もしこの世界にあったのなら空のネウロイはすぐさま殲滅できただろう。しかし、あれが後に空を支配するのが簡単に想像できた。

「人を守るために作られたものでも、人を殺す兵器に成り下がる、か」
メビウスが言っていた言葉を口にしながら、ガランドは夜空を眺めていた。

「今日はネウロイの襲来はない・・・という情報ですが昨日のこともあ

りますので・・・」

朝食後のミーティングに全員が参加する中、一人だけぐったりとしている者がいた。

「む、こちらメビウス。ミーナの話を知っているのか」

「あー・・・聞こえてます。今日一日警戒を厳とせよですね」

坂本の声に少しだけ返事をしまたぐったりとする。隣にいるシャーリーが声をかけてきた。

「おいおいもしかして寝不足か？」

「・・・ああそうだ。ちよつとひどい夢見てな」

「へえ、どんなだ？」

それに少しばかりの興味を抱いたシャーリーが聞いてきたがメビウス1本人はしゃべりたくなかった。だが追及されると面倒なのでかなり省略したことを話す。

「・・・暗闇の中誰だかわからない女が笑いながら襲ってきたらどう思う？」

「あーそれは怖いわ。災難だったな」

「えっ？メビウスもその夢見たの？」

シャーリーの隣にいるルツキーニが話しかけてきた。というかお前どんな夢だったのだ？

「うーんとね、顔は見えなかったけど女の人が追っかけてきて・・・確か『何とかだったら堂々としろ』とか言っていたような」

「・・・」

ルツキーニの話を聞くなりメビウス1は黙り込む。実はみんなが寝ている間、ずっとミーナの世話をしていたのだ。

『おいおい、いくらなんでも酔いすぎだ。もう酒のむのやめろ』

『いいえ、私はまだ酔ってなんかいいわよう』

こちらの制止を聞かず少しづつではあるがウイスキーを飲んでいく。水が必要になるなと思いつつ立ち上がった瞬間。

『・・・ん？つて、あぶねえ！』

ミーナがいきなり俺を掴んで顔を迫らせてきたのだ。それを振りほどいて回避するとミーナはメビウス1が座っていた場所にボタン

と倒れる。

『おい、大丈夫か?』

『うふ』

『は?』

『うふ、うふふ．．．うふふふふふふふふふふふふふふふ——』

その時メビウス1は直感した。これはもう酔っているどころではない、悪酔いかそれ以上だ。このままだと犠牲が出るのは

『申し訳ありません。ミーナ中佐。急用を思い出したため失礼します!』

適当に理由を言ってここから逃げることにした。部屋を出て小走りで廊下を歩く。そして左に曲がったとき

『みーつけた』

『ちよおおおお?!』

ミーナが立っていたのだ。俺の目の前に、しかも足音たてづ先回りして。顔は笑っているのだが夜なため、この状況だと軽くホラーだ。すぐさま反転してダッシュで逃げた。後ろを振り返るが追ってこない。

(諦めたか．．．?)

そう思いながら前方を見ると

『うふふ』

『はあああ!?!』

また先回りされていた。つーかもう怖いんですけど!—こんどは追ってきている。

『あら、なんで逃げるのかしらあ?』

『お前が絡んでくるからだろう!』

『私がキスをしてあげようとしているのに』

『お前さらつとすごいこと言ったよな今!?!それは禁止されてるんじゃないのか!?!』

『ふふ、私がルールよ♪』

(だめだ。はやくなんとかしないと)

『男だったら堂々としたらどうなの!』

『それは大声で言うな!』

・・・ということが今朝4時くらいまで続いたのだ。途中で倒れた(眠くなっただけ)ミーナを抱えて彼女の部屋に寝かせて、やっと自分の部屋に戻ってきたのだ。結果、かなりの寝不足状態。朝食後に夜のことをミーナに聞いてみたが

『なんのことかしら?』

すっかり記憶が飛んでいた。これはもう溜め息しか出てこなかった。

「そういうえば、補給物資が午前中に船で来る予定だったな?」

「そうよ。そのときになったら皆さん自分が使うものが揃っているかどうか確認してください」

「すまない、ミーナ中佐。何もなければ寝ててもいいか?」

話を聞く限り、その補給船以外何もないので自分は自室で寝ようとした。

「別にいいけど、スクランブルの時はちゃんと起きてね」

「了解」

「よし、では解散」

美緒の言葉で全員がそれぞれしたいことをしようと動き出した。少しでも仮眠を取ろうとメビウス1は自室のベッドで横になった。

そこは夜の空。本来そこは暗闇が支配しているのだが、空は黒ではなく赤く染めあがっていた。下を見る。

目に映るのは赤、赤、赤。

今まさに燃えてなくなろうとしているどこかの都市だった。その上空に黒い巨大な物体が浮かんでいる。

(あれは、ネウロイか?)

そしてその周りを人型の何かが数名飛んでいた。その顔に見覚えがある。

(ハルトマンにバルクホルン、ミーナとガランドか)

そのほかのウィッチもネウロイに攻撃を仕掛けていた。

「このおおおおー!」

「よくもベルリンを！」

「いい加減に墜ちろおおお!!」

皆が皆悲痛な叫びをあげている。そして現れたコアにバルクホルンがとどめを刺した。

コアを失ったネウロイは碎けて燃え盛る街に落ちていく。その中に一人の女の子が見えた。

「クリス！」

バルクホルンがその子を助けようと全速で降下していった。残された皆は火に包まれる都市を見下ろす。

「ひどい……」

辛うじて出た言葉はそれだけだった。必死に戦ったのに自国の首都を守れなかったのだから。呆然としている間にバルクホルンが先ほどの女の子を抱えて戻ってきた。

「私だ……なに!? ……分かった。司令部より全員に通達する。これより生存者の搜索と救助を行え。そのあと我々はポツダムへと撤退」

「な！」

ガランドの言葉に全員が息をのむ。彼女が言っていることを信じたくなかったのだろう。

「首都ベルリンを放棄する」

「そんな！我々はまだ戦えます。敵に首都を奪われるわけには——」

「聞け!!」

ガランドの声に全員が沈黙した。

「一時撤退した後、部隊を立て直して反攻へと移る。今は生存者の救助に専念してくれ。これは命令だ」

「……了解しました」

誰もが悔しく思っていただろう。祖国の首都を守りきれず、敵に明け渡すことになるだから。

「全員散開！ひとりでも多くを救助しろ！」

ガランドの命令にばらけて要救助者の搜索を始める。1人残った

ガランドは

「くそ」

誰にも聞こえない声で燃え広がるベルリンの町を見下ろしながら
呟いた。

「——スさん。起きてますか。メビウスさん」

「・・・ああ、今起きた」

宮藤の声で目が覚めた。時計を見ると1時間くらいしか寝ていない。
い。

「ミーナ中佐と坂本さんが呼んでますよ。なんでも届いたものによく
分からないものがあるからみてほしいだそうです」

「分かった。少し待て」

寝間着姿から普段着に着替えながらメビウス1はついさつきまで
見ていた夢のことを考えていた。

（確か夢にいたミーナたちはカールスラント出身だったな。というこ
とはベルリンはカールスラントの首都か）

しかし、なぜ彼女たちの記憶を部外者の俺が見るのか？そんな疑問
がでたが答えが見つかることはなかった。

第11話 「ジェット戦闘機」

ミーナに言われて積み下ろしをしている場所に行く。ミーナと坂本が待っていたが彼女たちの前にコンテナが2つ開かずに置いてあった。

「それがどうかしたのか？」

一見普通のコンテナにしか見えないのだが、ミーナはコンテナの開ける所を指差した。

「これなのだけど、あなたの所属マークじゃないの？」

「ISAFの…？」

言われてメビウス1はコンテナに描かれたマークを確認する。そこにはISAFのマークである『スリーアローヘッズ』が描かれていた。

(もしかしてこれがあの女神に頼んだものか?)

心の中で思いながら片方のコンテナを開けた。

「これは…」

最初に開けたコンテナの中にあつたものは、M61機関砲と思われる銃が2丁、手で持てるように改良したのか原物より小さく見える。あとは20mm擬製弾がありつたけ置いてあつた。もうかぞえるのを躊躇うくらい。あとジェット燃料が置いてあつた。…ん？ちよつと待て。なんで燃料があるんだ。それに無誘導爆弾もある？

「もしかして」

もうひとつのコンテナに手をかける。そのなかにあつたものは「…は？」

コンテナの中身の正体を知ったメビウス1は言葉を失った。確かに自分は予備の戦闘機を頼んだ。そのときにどれがいいかなんて言えなかったからしょうがないとしても

「なんでよりにもよってこいつなんだ」

俺はもう複座の機体には乗らないと決めたのに…！

とりあえずコンテナから出すことにした。外には皆が集まってい

る。メビウス1は機体を操作してコンテナの外に出た。そして露わになる深い青色の機体、全体に比べて少しばかり小さいように見える後退主翼、斜め下に向いた尾翼、見ただけでも分かる力強さを内包した巨大な胴体。そして、垂直尾翼に大きく描かれたメビウスのマーク：

その機体は F-4EファントムII かつてメビウス1が乗っていた第3世代型戦闘機だ。しかもコックピットに乗り込んだ時に気が付いたが、これに改良を加えたようなあとがあり、見覚えがあるように感じた。もし間違っていないならこれはあの時と同じ機体？

「——っ」

いやでもあの時の光景を思い出す。それを振り払うように今のことに集中した。

機首を海の方角に向けて停止させた。コックピットから降り、彼女たちを見るとなにやら言葉を失っているような表情をしていた。

「でっかーいー！」

「この前の敵と同じくらいの大きさだな」

「これが未来の戦闘機ですか」

皆がそれぞれの反応をする中、ミーナたちに説明した。

「こいつは F-4EファントムII オーシア連邦が開発した第3世代戦闘機だ」

「第3世代？」

「なにか違いがあるのか？」

まあ、当然そんな質問が来ることは予想していた。彼女たちに少しばかりジェット戦闘機の世代について話すことにした。

「ジェットエンジン搭載の戦闘機は5世代に分かれていてな。単純に飛行動力にジェットエンジンを搭載した第1世代。そして、音速：時速1225km以上のスピードを出す第2世代。第3世代はそれにミサイルを搭載した戦闘機があがるかな。で、この機体はその第3世代だ。第4世代にはいると最新機器を取り入れた高性能機が登場するが、戦闘機一機を開発・維持するのに莫大な金がかかる問題が出てきたから多種多様な任務に対応できる戦闘機が作られた」

「やっぱりお金の問題が出てくるのね」

「新しい機体の開発に出てくる問題はメビウスの世界も同じか」

「で？　で？　第5世代はどんな戦闘機なんだ!？」

第1世代から第4世代までの戦闘機の説明を終えた。皆真剣に聞いている。シャーリーだけは第2世代の戦闘機のことを聞いてからかなりはしゃいでいるが。

「第5世代戦闘機は第4世代の戦闘機よりも高い機動力と推進力。そして第5世代の特徴ともいえるのがステルス能力だ」

「ステルス？」

「stealth：隠密？　偵察機の事か？」

どうやらピンと来ていないようだ。シャーリーが何でか知らないがオースシア語でステルスの意味を知っていた。

「ステルス能力。それはレーダーに映らないことだ。サーニヤが一番分かるんじゃないか？」

「レーダーに映らない…ということはメビウスさんのストライカーは」

そこまで言ってサーニヤは口を止めた。察しがいい。

「そういうことだ。俺の相棒、F-22Aラプター　は第5世代戦闘機だ」

「え!?!　メビウスさんのストライカーは第5世代なんですか？」

「レーダーに映らない戦闘機を開発するとは…我々の未来でも同じものが出るのだろうか」

「さあな。だがこうして俺が君たちに言っている時点で、そのきつかけが出来たんじゃないか？」

今この機体や相棒の情報を彼女たちが知ること、この世界のジェット機の開発に多少なり影響が出てくるだろう。願わくばその矛先が人間に向かないでほしいと静かに願うメビウスだった。

「さてと、こいつをどこに置くか…待てこらシャーリー、コックピットに乘ろうとするな」

少し目を離した隙にシャーリーが乗り込もうとしたのを止めに入る。とりあえずロックがかかっているから動き出すことはないはず

だが、いじられては困る。コックピットに乗る直前に止めた。
「いいじゃないかよ。少しくらい…うん？ おいメビウス、なんか紙
が置いてあるぞ」

「紙？」

シャーリーから渡された紙切れを受け取る。それを見たが
「……………んん？」

そんなよく分からないような声を出す。気になったのか他の人も
見ようとする。だがそこに書かれていたものが理解できなかった。

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

猫q根dcjljhfgk;い英jfdjv:暗視絵mcjld自営:
亜;l s子郁夫tgmvc、znbs;くあw背drftgy富士子
lp;;座sxdcfvghnjmk、l。/qzwえc、(0w
0)ノrvtbodyぬみ、お。p.@』^:|;0l9k8j7hg
5fd3s2ア:@;pお喜寿yhtgrふえdwsくあ/;。l、
kmjnhbghvdcさzkあw背drftgy富士子lp;
……………(とにかくいろいろな国の文字がごちゃまぜ)

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

「……………なんですかこれ」

誰かがそんなことを言ったがメビウス1には聞こえなかった。
じつとこのよく分からない文章を見つめている。実をいうとメビウ
ス1はこの文章を理解できていた。メビウス1本人も最初これを見
たときは「なんだこりゃ？」みたいな感じであったが、何故か知らな
いが読み取ることができた。そこに書かれていた内容は

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

予備機の件ですが以前貴方が使用していたものになりました。

ミサイルは機体に取り付いているもののみとなります。

補給はできませんので慎重に使ってください。

ミサイル以外の弾薬は願いとあらば用意しますので…

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

と、あの女神からのメッセージが書かれていた。しかしなんでよりによって ファントム を寄越したのだろうか。この機体はもう旧式が旧式なだけに、今では骨董品同然の代物だ。今でも僅かに飛んでいるらしいが、どこも辺境の基地とかにしか置いてないだろう。そう思いながら手紙を読むが

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

どの国もすでに退役してしまつて探すのに苦労しました。

幸いにもオーシアの辺境にある基地に同型の機体を見つけたのでそれを拝借しました。

当時に使っていたものと同じように中身も外見も合わせて置い
ておきましたので感謝してくださ

※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※※

最後まで読まずに紙を破いた。

「メビウスさん…どうしたんですか？」

「ワケガワカラナカッタカラ、ビリビリニヤブイタ」

なんか俺に少しばかり皆が引いている。とにかく俺はあのバカ女神の
ことを思っていた。

用意してくれるのはありがたかったが、その方法が拝借という名の
強奪かよ！

今頃そのオーシアの基地ではその機体のパイロットが大騒ぎして
いるんだろうな。

いきなり自分の機体が消失したのだから。

(いろいろ終わった後、謝ったほうがいいか…?)

「はあ…」

オーシアのパイロットに同情するのとなんだか申し訳ない気持ち
になり、メビウス1は深い溜め息を吐いた。

それからF-4Eは輸送機用の滑走路にある地下格納庫に置くことになった。そのあと普段通りの日常になったのだが面倒くさいことが1つ。

「メビウス。ジェット機乗せてくれよう。いいだろう？ あれ見たところ二人乗りじゃないか」

「……………」

あれからずっとシャーリーがべったりついてきているのだ。是非でもファントムに乗りたいたいらしい。

「…なあシャーリー。ひとつ聞くんが」

「なんだ？」

「ジェット機乗ったら絶対に吐く、と言われても乗るか？」

「乗る！」

即答だった。吐く覚悟があるのか、それとも絶対に吐かないという自信があるのか、ただの考えなしなのか。

「…分かった。いいだろう、乗せてやる」

「ほんとにか!? じゃあさっそく」

「ただし」

メビウスはシャーリーに分厚い辞書みたいなものを渡す。

「これを読んでからだ」

「なんだこれ？」

「F-4Eの後部座席のフライトマニュアルだ。それと坂本の訓練に参加しろ。いきなりジェット機だと胃が裏返って失神するぞ」

自身の経験も含めてメビウスは言った。どんなエースパイロットでも最初のころはジェット機の動きに耐えられないものだ。かくいうメビウスも初心者だったころは毎回吐いた。(なんとか降りるまで我慢できたが)

「…いつと訓練を済ませればいいんだな。イエッサー!!」

そういつたシャーリーはフライトマニュアルを持ちどこかへ走って行った。たぶんいろんなことをすっぽかしてあれに専念するんだろうな、とメビウスは思いながらコーヒーを啜った。

第12話 「原初の誓」

1944年5月31日

グシヤリ

「ダー……ダー!!」

「メビウス少佐落ち着いてください!」

ある意味悲鳴に似た声を上げるメビウス1を少し離れた場所からペリーヌが心配して言う。2人は今戦場の真っ只中にいた。ただその中で苦戦しているのはメビウス1だった。

「畜生…俺は…」

メビウス1は自身の目の前にある“敵”を見つめる。その敵はメビウス1に対し攻撃もなにもしてこない。ただそこにいることとその後の惨状を見せつけるだけで効果は十分だった。それほどまでにメビウス1を苦しませている敵とは

「卵を上手に割ることすらできないのか!」

メビウス1の叫びが厨房という名の戦場に響き渡った。

時間を遡ること今朝のミーティング。普段と変わらぬと思っていたが最後の一言が違った。

「尚、今日の夕食の当番はペリーヌさんとメビウスでお願いします」

「分かりました」

「りようか……は? 俺が!」

あまりのことに驚いて立ち上がってしまった。

「ええ、そうよ。皆交代制でやってるからメビウスもやってください
ね」

「いや俺は料理なんてで「あたしメビウスの料理食べた〜い」な!」
声のしたほうを見る。ルッキニーが満面の笑顔でしゃべっていた。

「メビウスの世界の料理食べてみたいんだよね」

「あ、それは面白そうです」

「じゃあ、メビウス期待しているゾ」

女子特有の会話で話が盛り上がり終了となった。それを見ていたメビウス1は溜め息ひとつする。

「俺は過去10年料理したことないんだぞ……」

メビウス1の呟きを聞いたものはいなかった。

午後の訓練風景をメビウス1は眺める。

「うおおおおお!!」

上空ではシャリーが急旋回をスピード落とさずにやっていた。これと言って何もアドバイスしてはいないのだがこの前の俺の闘いを参考にしているようだ。正確には分からないがシャリーのスピードは時速700km以上を出しているように見える。

（確かシャリーのストライカーユニットの性能だと最大速は703kmが限界だったはずだが……彼女専用のカスタムでもしているのか？）

彼女が乗っているストライカー、P51ノースリベリアンマスターグの資料を見ていたメビウス1は思った。実際、彼女は整備班のホーマーと結託して速いストライカーユニットを造っている。そんなことよりも夕飯の料理をどうするか悩む。

「とりあえず食糧庫に何があるか確認するか」

これといった料理が思い浮かばなかったので食糧庫にあるものを見てから考えることにした。

厨房の隣にある食糧庫に到着して中身を確認する。

「おお、こいつはすごいな」

中にある物は野菜や肉類、さらには魚介類も置いてある。小麦粉や米などもおいてあり軽くどこかのショッピングマーケットのようだ。これだけ材料があればどんな料理でもできるだろう。

「さて、どうしようか……」

目の前にある食糧の山を見つめてメビウス1は1人考え込む。だが思いつかない。だったらノースポイントの料理を思い出してみるか。

「刺身、寿司、天ぷら、おでん、鍋、肉じゃが………」

ノースポイント料理をいろいろ思い出す途中で気が付いた。

(…あれ？ これ全部もうこの世界で食べたな)

メビウス1が思うのは当然だった。先ほどあげた料理はすべて宮藤が扶桑料理として振る舞っていたのだ(さすがにおでんはなかったが)。なら別の国の料理にしようかとも思ったが、知識のない自分が作ってはその国の人たちに申し訳ない。

「どうしたんですか。そんなところに座り込んで」

「ん？ ああペリーヌか」

そうこうしているうちにペリーヌがやってきた。もう夕食を作る時間になったのだろう。

「いや何作ろうか悩んでさ…というか俺料理できないんだが」

「え…それほどなのですか？」

「10年くらいはやっていない。料理に関しては全部任せていたからなく。精々卵焼きくらいしか——」

自分がおそらくできると思われる料理、卵焼きからふとある料理を思いだした。

「…そうだな。これにするか」

「どうしました？」

「作る料理が決まった。材料言うから探してくれないか」

ペリーヌと一緒に材料を探し始める。どんな料理かペリーヌには言っていないがひとまず夕食の調理がスタートした。

「ダー—————!!」

そして、今。メビウス1は卵を割ることに大苦戦していた。景気よく卵を割ろうとしたが最初の1個目で割るのに勢い余って。2個目では力を入れすぎて。3個目は割れたはいいが殻が紛れ込んで
……………

とそんな感じに数多の卵たちを犠牲にしてもメビウス1の卵割の技量は上がらなかった。

「メビウス少佐落ち着いてください。私が変わりますから人参と玉ねぎ

ぎを切ってください」

「…了解した」

一人落ち込みながらメビウス1は人参を切り始める。

「ところで…」

慣れない手つきで人参を切っていたメビウス1にペリーヌが話しかけてきた。

「メビウス少佐はどうして軍にはいったのですか」

「軍に入隊した理由？」

動かしていた手を止めてメビウス1は考える。自分が軍に、戦闘機に乗り、この道を進む切っ掛けは――

「自分の家族…大切なものを守るためだ」

当時、ノースポイントの空軍学校に入学したときの志していたものを思い出した。あの時のユージア大陸はクーデター軍との戦い、その後のエルジアとの武装平和と不安定な状態が続いていた。だから軍に入隊した。自分の大切なものを守るために。あのとき、そう心に誓った。

「そういうペリーヌはどうしてウィッチになったんだ？」

「…私の故郷はガリアということは知っていますか？」

「ああ」

その後はペリーヌの独白だった。当時の彼女は軍とは関係ない貴族の娘だったらしい。だがネウロイの侵攻で家族を失い故郷を奪われた。ブリタニアに逃げ延びる船上から燃え盛る街を見て自分の無力さを噛みしめた。

「私一人出たところで戦況が変わるとは思いません。ですが思ってしまうのです。あの時ウィッチとしての力があつたなら、全てでなくとも何かを失うことは無かつたのではと」

だからウィッチとして戦うことを決心した。奪われた故郷を取り戻すために。

「そうか…ペリーヌは強いな」

彼女の話を最後まで聞いたメビウス1はペリーヌの心の強さに驚いた。いくらウィッチとしてネウロイに対抗できるほどの力を持つ

ていても、所詮はただの15歳の少女だ。普通ならショックで泣き崩れているのに彼女は立ち止まることなく前に進んでいる。自分とは大きく違う強さにメビウス1は心を打たれた。

「そんな、私は強くありませんよ」

「いや強いさ。精神で比べれば君のほうが強い。俺なんかよりもはるかに」

そしてメビウス1は調理を再開しようとして手を動かし始め――

「メビウス少佐の御家族はお元気なのですか？」

ペリーヌの何気ない一言にすべての思考が停止した。厨房に静寂が訪れる。

「……………」

「あの…メビウス少佐…？」

「…：俺はなにも守れていない」

「え？」

メビウス1は顔を俯かせていたが、顔を上げて窓越しに広がる青空を見上げた。とても哀しい顔で。

「8年前に全員死んじまった」

「……………」

ペリーヌは言葉を失う。

「ある天災に巻き込まれてな。大勢の人が亡くなった。あの時の俺はそのことが信じられなかった。…いや、信じたくなかったんだろうな。軍に入ったばかりでやっと守る力を手に入れた矢先、守りたい存在が消えちまったんだから」

まるで独り言のように言う。それはペリーヌに聞かせるために言っているのか。それとも、自分に言い聞かせるように言っているのか。

「(ネウロイに殺されたほうがましだったのかもな、そうすれば怒りの矛先を向けられたのだから)」

「？ なにかおっしゃいましたか？」

「いや、なんでもない。家族を失ったという点だと俺たちは似た者同士だな。つまらない話をした。忘れてくれ」

そして、メビウス1は玉ねぎをみじん切りにしようと切り始めた。
「痛っ！」

指を切った。

そして夕食時

「メ〜ビ〜ウ〜ス〜。腹減った〜」

「お腹すいた〜」

「ご・は・ん〜♪ご・は・ん〜♪」

「食事前に騒ぐなりベリアン！ あとハルトマンは歌うな！」

厨房隣の食堂は全員集まっており、皆が『早く食べたい』という名の統一性のない大合唱(?)を歌っている。これ以上待たせると下手したら暴動に発展するやもしれない。メビウス1が思い出した“ある料理”の最終段階を終わらせてテーブルに並べた。

「なんだこれ？」

「でっかいオムレツ？」

「これと違って特徴は無いナ」

「これだけ？ パンもお米もなし？」

皆の目の前に出された料理に疑問の声が上がる。メビウスの、異世界の料理に期待していた皆は少しだけがっかりしていた。

「とりあえず食ってみろ」

『いただきます〜す』

いただきますの号令があがりその食べ物にスプーンが刺し込む。
すると――

「おお!? なんだこれ」

「中にご飯が詰まってる」

「赤いわね」

「気に入ったか？ それはオムライスっていうんだ」

メビウス1が思い出した卵料理、それはオムライスだった。一般的な家庭料理なので俺の世界代表と言えるかは分からないが。

「おいし〜」

「この味はトマトケチャップだな」

「調理はほとんどがペリーヌがやったから彼女のおかげだけだな」

「い、いえ、それほどでも…」

「ふんふん♪」

ルツキーニとハルトマンが鼻歌を歌いながらケチャップで絵を描いていた。あの二人なら絶対やるだろうな。

「お、ルツキーニ面白いことしてるな。おかわりしたら私もやろう」

訂正、もう1人いた。

「御口に合ってなによりだ」

「たまにメビウスの料理食べたいな」

「期待しているよ」

「……しまった」

へんなプレッシャーがメビウス1に襲った。

第13話 「こつくりさんと、とばっちり?」

この世界に来てからメビウス1は通常のネウロイとの交戦を基地の通信越しで何度か聞いた。自分も参戦したいのはやまやまだが、レシプロのストライカーで基地から離れた時、もしあの時のようなジェット戦闘機型ネウロイが現れたら手も足も出ない。よってメビウス1は基地に待機状態となりもしもの時に備える方針で決まっていた。

昼間に宮藤がバルーン回避訓練で多くの気球を割ったある日。

「…で、何やってんだお前ら」

時間は午後3時過ぎ。ウィッチ控室ではルツキーニたちがテーブルを囲んで何やらやっていた。

「今から交霊会をやるんだよ。芳佳に憑いている霊を呼ぶんだ」

「……………」

さっぱり理解できない。詳しく聞いてみたら、宮藤の実戦と訓練があまりにも違うのは何かものすごい霊が憑りついているからだ。と、ルツキーニが主張し、それを確かめようとのことになったのだそうだ。交霊会、分かりやす言うなら降霊術。そんなオカルトみたいなことがあるのだろうか。

「戦闘待機中にやることか?」

「まあまあ、いい時間つぶしだって」

「メビウスさんもやります?」

「遠慮しとく。なんだか眠くてな」

あんまり騒がないでくれよ、と言い残しメビウス1はテーブルの端っかで眠り始めた。

「じゃあ始めようよ。芳香、なんて言うんだっけ?」

「はい。じゃあ私がさつき言ったのを一緒に唱えてください」

そして、芳佳、ペリーヌ、ルツキーニ、シャーリーの4人は呼吸を合わせて

こつくりさん こつくりさん

いらっしやいましたら、北の窓からお入りください

こつくりさんが始まった。

のだが、

「お前な、馬鹿か？ 誰も答えを知らないんだったら、これが正解かどうかも分からないだろうが？」

「それを気が付いていたなら、先におっしゃるべきではなくって！」
シャーリーとペリー又ははにらみ合う。結果からいえば、こつくりさんは成功した。ただ、本当にこつくりさん（幽霊）なのかペリー又は疑ったため誰も分からない質問をした。その内容と答えのせいで気まづくなつたのだが。

「じゃあさ。メビウスだけが知っていることを聞けばいいんじゃない？」

ルツキーニの言葉でそこにいる全員がなるほどと同意した。そうすれば本当にこつくりさんかどうか証明できる。

「あれ？ でもこつくりさんはメビウスさんのこと分かるのでしょうか？ 私たちと世界が違うんですよね？」

宮藤はふと思つた疑問を口にした。私たちとは違う世界であるメビウスのことをここの世界の霊であるこつくりさんは分からないのではないか？

「まあまあ、そんなのやってみなけりや分からないって」

「じゃあ私が聞くな。こつくりさん、こつくりさん、メビウスの本当の名前は？」

ルツキーニはメビウス1の本当の名前は何か？ をこつくりさんに質問した。これは皆が気になっている内容で少しばかり期待したがコインの反応はなかった。

「あれ？ 動かないね」

「やっぱり、無理じゃないですか？」

「今度は私が質問。こつくりさん、こつくりさん、メビウスの故郷の国の名前は？」

次にシャーリーが質問した。皆は先ほどと何も変わらないだろう

と思っていたが…

N・O・R・T・H・P・O・I・N・T

コインがゆつくりと動き出し、言葉を示した。

「ノースポイント?」

「これがメビウスの国の名前ですか?」

「次誰が聞く?」

「じゃあ私聞きます。こつくりさん、こつくりさん、メビウスさんの好きな食べ物は何?」

「宮藤お前無難な質問だな」

平凡すぎる質問に少し責められながら聞いてみるとコインが動き出す。

な・つ・と・う

「なんですの!?! メビウスさんはあの臭い食べ物が好き物ですか?」

「でもメビウス来てから納豆食べてないよね?」

「なんで納豆を知ってるんだ?」

「メビウスさんの世界にもあるんじゃないですか? 納豆」

出てきた答えに騒ぎながら(主にペリーヌ)端から見ていたエイラが口を挟んだ。

「なあ、メビウスは強いけどあいつと対抗できるやつっているのか?」

「そういえばエイラは初めての被弾をメビウスにやられていたんだよね。悔しいのか」

「うるさいナア、いいだろ」

「それでは私が。こつくりさん、こつくりさん、メビウスさんが認めるお相手は誰ですか?」

エイラの質問をペリーヌが代わりに聞く。

Y・E・L・L・O・W・1・3

「Yellow 13?」

「だれでしょう?」

人の名前とは少し違う言葉に全員が頭を抱えた。ただ分かることは誰かの仇名、二つ名だということだった。

「じゃあこれが最後の質問ね。こつくりさん、こつくりさん、メビウ

スが嫌うものは？」

ルツキーニがメビウスに対しての最後の質問として、ふと思ったことを口にした。食事に関しても訓練に関しても、メビウスは好き嫌いなくこなしている。同じ部隊にいる者にとって彼女の苦手なもの、弱点(?)みたいなものが気になつていた。それに応えるかのようにコインはゆつくりと動き出す。だが、導き出された文字を見て余計に分からなくなった。

「…これってどういう意味？」

「さあ？」

「なにかの暗号でしょうか？」

皆がそれぞれで話し合う。出された言葉は…

1・9・9・4・X・F・0・4

もはや本人しか分からない言葉だった。

「まあいいや。それじゃあ、本題。こつくりさん　こつくりさん、あなたは芳佳に憑りついていているのですか？」

「ルツキーニちゃん。私霊に憑りつかれてなんかないよ」

ルツキーニの物騒な質問に芳佳はぶうつと頬を膨らませる。だがコインはそれを無視するかのように『Yes』のところに動いた。

「えええ〜!?!」

「誰ですの!?!　動かしましたの?」

「わたしじゃ…」

「ありませんわよ」

シャーリーとペリーヌは顔を見合す。ルツキーニは質問を重ねた。

「こつくりさん　こつくりさん、あなたは一体誰ですか？」

再度、質問をする。しかし、反応がない。

「こつくりさん　こつくりさん、あなたは一体誰ですか？」
すると

バンッ!

風にあおられた窓が開き、風にぶつかり激突した。

「もう、窓がうるさいですわね!」

眉をひそめたペリーヌがコインから指を離し立ち上がる。そして、

窓を閉めカーテンを閉じた。

「だ、ダメですよ！ こつくりさんが帰れなくなります！」

とその時

びいう！

「うわー！」

「きゃあー！」

突然、旋風が発生しテーブルに置いてあった紙とコインを巻き上げた。ロウソクの火が消え部屋の中が真っ暗になる。

「ど、どうなったのですの？」

「ちよつと、明かりは？ カーテン開けてよ！」

「あくん、なんか踏んじやった！」

「サーニヤ、頼む〜」

「……電気」

エイラに言われてサーニヤはすすつと扉のそばに辿り着き、照明のスイッチを入れた。

照らし出される室内。テーブルの上が散らかっている他に、異常はないようだ。だが

「え？ ちよつと？」

宮藤が両手を伸ばして、テーブルに突っ伏していた。まるで凍りついたかのように動かない。

「宮藤、寝てるのか？」

シャーリーは芳佳の肩に手をかけようとした。その時

「……無礼者。触れるでない」

芳佳の手が、乱暴にシャーリーの手を払った。

「宮藤？」

「宮藤？ 宮藤とは、何者じゃ？」

ガタン！ と椅子を鳴らせて芳佳は立ち上がる。

キラツとした目。

凛々しく結ばれた口元。

普段の芳佳とは、まるで別人の顔である。

芳佳（？）は周りにいる人物を見つめる。

「その瞳、その髪の色。…うぬら、物の怪、妖怪の類か？」

「失つ礼な憑き物ね〜」

ルツキーニは腰に手を当てて、芳佳を睨み返す。

「そ、そういうあなたは何者ですの!？」

顔を強張らせながらペリーヌは詰問した。

「我は中原兼遠が娘、巴。旭將軍、木曾義仲殿が従者」

芳佳は——または芳佳に憑いた何者かは——そう名乗った。

「巴御前…とよぶ輩もおる」

「…ええつと？」

「巴つてだれ？」

「さあ？ 名前からして扶桑の人じゃないか？」

顔を合わせるルツキーニたち。

「…：…：…：そういえば聞いたことあるぞ。スオムス義勇軍所属の穴拭少尉の異名が…：…：確か『扶桑海の巴御前』だったような」

エイラは書架に行き、扶桑の歴史関連の本を探しに行った。

「ということは巴は扶桑の昔の英雄か何かか？」

シャーリーが答えるが知る人がいないので分からない。程なくしてエイラが分厚い本を片手に持ち戻ってきた。ページをめくりとある人物について書かれた場所を開く。

「…：平安時代末期の伝説の女武者。平家を打ち破った木曾義仲の従者。色白で美しい女武者として有名。木曾義仲の討ち死にの直前に別れ、後に出家して義仲の菩提を弔った…：とされる」

「そもそも平安とか武者とか平家とか…：なんですかの？」

ペリーヌは首を傾げる。やはりヨーロッパには扶桑の文化…：それも歴史はあまり知られていないようだ。

「それよりも！ 豆狸を元に戻しなさい！ このままでは坂本少佐にどんなお叱りを受けることかー！」

「ええ〜いいじゃんこのままでもや」

ペリーヌとルツキーニは互いににらみ合う。それを余所に

「だから。ここはブリタニアという西の島国。扶桑は東の島国だから文化も人も違うんだよ」

「そうか。ここは大陸の向こう側か」

「それに時代もあんたのいた頃からずくと先。たぶん800年くらいの未来なんだって」

「我が生きた時から800年か。不思議なこともある物よな」

エイラが巴御前？ に話し込み、何とか状況を納得させていた。その時、基地のサイレンが鳴った。

「！」

「こんなときにも！」

全員が動き出す。ネウロイの迎撃に向かうためシャーリーとペリーヌは宮藤Ⅱ巴御前を両側から挟むように、ハンガーに向かう。横を見るとうるさいサイレンがまだ鳴っているのにメビウスは眠り続けていた。

「エイラ！ メビウスのやつ起こしといてくれ！」

「分かったゾ」

「…気を付けて」

エイラとサーニャは手を振り見送った。メビウス1の傍に近寄り肩をゆする。

「おーい。メビウス。起きろ」

「……………うん……………うん？」

「起きたか。敵襲だぞ」

エイラの言葉を無視してメビウス1は肩をゆすり続けるエイラの手を掴んだ。そして、立ち上がる。メビウス1の顔はいつもと比べ、目が空戦の時のように鋭く、わずかだが雰囲気も違っていた。

「メビウス…………？」

「……………どうしたの？」

2人はメビウスを見つめる。メビウス1は2人を交互に見つめて答えた。

「おぬしら、何奴じゃ」

第14話 「憑依と激しき風」

ルッキーニたちがこつくりさんをやっているところ。美緒とミーナは執務室でのんびりお茶をしていた。ちなみに飲んでいる物は美緒がお茶、ミーナは紅茶である。

「今日の宮藤さんの訓練でまた仕事が増えてしまったわ…」

「ふむ、あいつは訓練ではまるで素人だが実戦ではいい動きをするのだがな」

お茶をすすりながら今日の宮藤の訓練を思い出していたが、ミーナの一言で中断される。

「そういえば美緒。宮藤さんが来た時に一緒に来た『あの機体』は？」

「ん？ ああ、あれか。そういえば、宮藤が赤城を守ったり、隊に入隊したりといういろいろあったから忘れていた。はっはっは！」

それにはさらに宮藤の特訓に力を入れすぎたせいもある。

「それにストライカーだけでなく同型の戦闘機も寄越してくるなんて」

「ああ、向こうの開発陣たちがいうには『試作段階ですので、両方乗ってみての評価をください』とのことだ。私好みの機動戦重視の設計になっているらしい。私の戦闘スタイルを知っているせいか、テストパイロットを依頼された」

すっかり忘れていたとまた豪快に笑いだす美緒。彼女が言うには扶桑の量産機『零式艦上戦闘脚』の次世代型の試作機と言ったものだろうか？

「あら？ そういえば、扶桑の次世代戦闘脚は『紫電改』ではなかったかしら？」

「それはそうなのだが、あれは零式に比べ速度、上昇力、降下性能は大きく上回るが旋回性能が劣る。竹井醇子のことは知っているか？」

美緒の質問にミーナはええと答える。ヨーロッパ出身のウィッチにとつて彼女の名前を知らない者はいない。

竹井醇子

扶桑皇国海軍遣欧艦隊リバウ航空隊所属、第504統合戦闘航空団
戦闘隊長。坂本美緒と同期であり、ともに戦場を駆け抜けた戦友だ。
大戦初期のリバウ基地では当時、坂本美緒、竹井醇子、西沢義子の3
人と共に空を飛び、「リバウの三羽鳥」の異名を持つ。さらに竹井醇子
は『リバウの貴婦人』の二つ名を持つ。

「あいつの戦闘スタイルは編隊戦闘重視だから『紫電改』との相性はいいんだ。だが、聞いての通り私は単騎戦闘重視だ。だから今まで零式に乗っていた。宮藤をスカウトしに扶桑に戻っているときに」

「試作ストライカーのテストパイロットに選ばれたと」

「そういうわけだ。いつまでもそのままにしておくわけにはいかないしな。明日あたりでも——」

美緒が言い終わらわずに基地の警報が鳴り響いた。それにすぐに反応し2人は動き出した。

「全機、スクランブル！ 私も出ます！」

ミーナはそうウィッチたちに指示を出すと、ハンガーに向かいながら通信兵に尋ねていた。

「どうして発見が遅れたの？」

「はっ！ どうやら、海面100m前後の超低空を飛行していたらしくレーダーに引掛からなかったようです」

ミーナの横を歩きながら通信兵は得られた情報を伝える。

「また反応によるとネウロイは小型が10機以上、中型が1機だそうです」

「ネウロイの狙いがペンシーのレーダー基地なのは本当？」

「はい。進行方向からして間違いありません」

（ネウロイが我々の眼を潰そうとしている？…まさかね）

自身の中に生まれた疑問を否定しながらミーナはハンガーに急いだ。

一方その頃

「出撃？……戦か？ 我も出よう」

「いいのか？」

「我は戦いしか知らぬ女子おなじなれば」

ハンガーに着いたはいいが巴御前に憑りつかれた芳佳をどうするかで迷ったが彼女は一緒に出ると言った。ストライカーも難なく動かし、

「これが未来の弓か…ここまで武器が変わるとはな」

銃も多少驚きながらも受け入れていた。すべてを装備し終えた芳佳は巴御前はさながら戦に出る前の生前の彼女に重ねて見える。

「巴、いざ参る！ 飛べ、天馬！」

凄まじい魔力と小さな旋風を発生させながら発進する。

こうして平成の女武将は、ブリタニアの空へと飛び立った。

ミーナたちが飛び立ったころ、エイラたちはハンガーのほうに歩いていった。

「なあ、こつくりさんって宮藤に憑りついたものだけだよな？ なんで他の奴がでるんだ？」

「私は分からないわ…」

「儂も詳しくは知らん。だが、あの妖術はあまりせんほうが良い。此度は儂のような亡霊だから良いが、あれはなにが呼び出されるが皆目見当がつかん。悪霊の類であつたのならば…おぬしら、今頃この世におらぬぞ？」

いつもと口調が大きく違うメビウスの言葉にエイラとサーニヤは背筋をゾツとしながら歩き続ける。

「…なあ、1つ聞いていいか？」

「なんじゃ？」

エイラの質問にメビウス1（？）は立ち止まる。

「なんであいつと別れたんだ？ 本に書いてある通りだと…よく分かんないけどなんだか口喧嘩して別れたみたいだけだよ」

「うむ…」

メビウス1に憑りついた何かは1人黙り込む。この顔は後悔というよりも、なにか申し訳ない気持ちを抱いているような表情だった。

「あの時は、儂は朝廷と対立し、同じく血を分けた兄弟たちと戦うこととなった。戦に敗れ、我が命は風前の灯。だが、あやつだけは死なせとうなかつた。じゃから儂は武士の誇りを言い訳にあやつと今生の別れとなった。……あやつ^の心を知らずにな」

それは動乱の時代を懸命に生き、戦場を駆け抜け、そして儂く散つたある男の物語。彼は自身の人生において後悔はしていなかった。ただ、自身がいなくなった後、彼女のことを見守っているとき、自分はなんと愚かなことをしたのかと、死後初めて自分の生前の選択を悔やんだ。だからこそ――

「あの小娘に転生して、おぬしら^がやった妖術でわずかな時とはいえ、前世の記憶が蘇ったのであろう。故に、儂は行かねばならん。あの別れからあやつはずつと一人だ。あの顔は見るに堪えぬ。この体の持ち主に憑りついてしまったのはすまぬが、今の儂にとっては儂倖^{ぎやうこう}。生前の後悔を晴らさねば」

そういい、メビウスは歩き出した。ハンガーにつき乗り物を探すが

「なんじゃこれは？　これがこの世の馬なのか？」

メビウスのストライカー F-22A の前に立ち顔をしかめる。

「そうぞ。それに足を入れるんだ」

「こいつに足を入れるだど？　だめじゃ。これでは落ち着かん。なにか鞍に跨るような乗り物はないのか？」

「は？　いやいや、お前はそうかもしれないけどメビウスは基地で待機命令なんだ。出ちやだめだろう」

「だめなのか？」

メビウス（？）は聞いたがエイラは上官命令だから駄目だ、と言つた。隣にいるサーニヤも無言でうなずいている。

「…しかたないの」

メビウス（？）はそう呟きエイラの前に立つ。エイラをキツ、と睨む。すると

「うあ…」

「エイラ!？」

エイラは姿勢を崩して前に倒れそうになる。それを抱きかかえるようにメビウス1(？)は受け止めた。そして、ハンガ―の壁にエイラを寝かせる。

「何を…したの？」

「なに、殺気を流してこやつを気絶させただけよ。しかし、動かなくさせるだけに抑えたのだがな…まあそんなことは良い」

メビウス1(？)は立ち上がり、サーニャに言った。

「じき、こやつも目が覚めるじやろう。手荒な真似をしてすまん、小娘。じゃが、儂は行かねばならんのでな」

それだけを言い残し、メビウス1は――メビウス1に憑りついた何かは――別のハンガ―に歩いて行った。

別のハンガ―に着いたメビウス1はそこにいた新人の整備員に声をかけた。

「そのもの、空飛ぶ馬を探しているのじゃが、何処にある。扶桑のものが好ましいが」

「あれ？・メビウス少佐。飛行機に乗るのですか？ ミーナ中佐に言われて？」

「さようじゃ」

「扶桑のもの…。あ、そういえば第4ハンガ―に置いてあったな。ついでってきてください」

「うむ、感謝する」

メビウス1は新人整備員のうしろを歩く。道中、壁に置いてあったパンツァーフアウストを2本ほど拝借した。そして、第4ハンガ―につく。そこには深い緑色をした零式戦闘機よりも少しだけ大きい飛行機が置いてあった。

「ついこの前届けられたものですけど…これでいいでしょうか？」

「構わん。手間をかかせたな。礼を言うぞ」

「いえいえこれくらい…しかし、なんかいつもと比べて口調おかしくないですか？」

「気のせいじゃ」

メビウス1はそれに乗り込みエンジンを始動させる。

「うむ、メビウスとやらの記憶のおかげか、儂でも動かせるぞ」

そうしている間に機体はハンガーから出て滑走路に向かう。エンジンの音が響き渡る。

「うん？ 何の音だ？………はあ!？」

別のハンガーにいたホーマーは音の正体を見て驚愕した。なんであれが動いてるんだ!？」

急いで置いてあつたハンガーに走る。そこにいた新人に怒鳴った。

「おい！ あれに誰が乗ってるんだ!？」

「ほ、ホーマー曹長。実はメビウスが…イテツ!」

「メビウスが?! この馬鹿野郎！ あれは試験飛行済ませてねえんだぞ!」

新人に思いっきり拳骨食らわせながらホーマーはメビウスが乗る機体を見る。もう滑走路に着き、動作確認を済ませてしまっていた。

「さて、参ろうか」

エンジンの出力を上げる。プロペラの音がさらに大きくなる。

「戻れ！ 戻ってこい!」

「もうワシらには止められん…行かせてやれ」

ホーマーは諦めたかのように他の整備員に言った。

プロペラが動き出し機体を前に進ませる。そして、浮遊感が襲い、機体は宙に浮かび上がった。

ちょうどそのころ、ミーナたちはネウロイと会敵していた。

「報告よりも多いわね」

敵は中型を中心に15機の小型が編隊を組んで海面すれすれを飛んでいた。小型の大きさは4 mほどの円盤型。まるで空飛ぶお皿のようだ。

「新型だな。随分と小回りが利くようだ」

坂本は口元に笑みを浮かべる。

「バルクホルンとハルトマンが先行し、他のものは援護に当たれ!」

「了解、サムライ」

「りょうか…い？」

美緒は全員に指示を出す。だが1人だけ命令を聞かない者がいた。バルクホルンたちよりも高速で、2人の間を通り過ぎる。白い水兵服に、零式艦上ストライカーを履いたそれは…

「宮藤だど!？」

「あちやく」

「きやああ、芳佳ちゃん!」

シャーリーは手のひらで顔を覆い、リーネは悲鳴を上げる。

芳佳Ⅱ巴御前は、猛スピードでネウロイに接近する。

「宮藤さん! 指示に従って!」

「あれが敵…じゃな。怪異も変わったものじゃ」

ミーナの声を無視した芳佳Ⅱ巴御前は小型ネウロイの1機に13mm機関銃の銃口を向けトリガーを引いた。

銃弾がネウロイの中心を貫く。いや、射貫くと言ったほうが正しいだろうか。

「まずは一騎」

黒い爆煙を上げながら崩壊する円盤型のネウロイ。

「宮藤!？」

啞然とする坂本。他のものたちもあまりのことに言葉が出ない。事情を知る者を除いてだが。

「ほらほら! あれやっぱり巴だよ! 芳佳じゃないって!」

「……………なあ、あれほんとに巴なんとかに憑かれてるんじゃないか？」

「暗示! 暗示に決まっていますわ!」

当事者たち（主にルツキーニ）はひそひそと宮藤の豹変ぶりを見て話す。隊長であるミーナも宮藤の変わりように思考が停止していたが、すぐに指示を出す。

「え…と、バルクホルンとハルトマンは宮藤さんの援護を! 美緒もお願い!」

何しろ今の宮藤は速すぎる。Wエースのバルクホルンとハルトマン、それに坂本しかついていけそうにない。その間に芳佳Ⅱ巴御前は

もうすでに6機の小型ネウロイを撃墜していた。

だが、ネウロイもやられてばかりではない残り9機を分けさけ、3機を坂本たちに、残り6機を宮藤に、戦力を分断させて1番の障害である芳佳Ⅱ巴御前を仕留めようと動き出した。

「我を殺るつもりか。よかろう。かかってくるがよい！」

それが合図であるかのようにネウロイは芳佳Ⅱ巴御前を包囲、レーザー攻撃を始めた。

「宮藤！」

「全員、宮藤さんを援護して！」

宮藤を助けようとしたいが彼女との間に小型3機、さらに中型がじゃまをし近寄れない。宮藤Ⅱ巴御前は1機撃墜したが絶望的状况は変わらない。

「木曾殿！ 義仲殿！ 何ゆえ…何ゆえ、巴を解き放たれた!? 巴は何時何時までも、殿のために獲物を狩る鷹でおりたかったのに！」

其の目に涙が浮かぶ。ネウロイのレーザーをぎりぎり避ける芳佳Ⅱ巴御前。

「巴は最後まで、一緒に戦いとう御座った！」

生前の記憶が蘇る。

平安末期、平家の暴政に対して挙兵した木曾義仲は、京に入って征夷大將軍になった。

だが後に朝廷と対立。

みなものりより よしつね
源範頼、義経の軍に敗れ、敗走の折、おうみあわず近江粟津で巴を一人、落ち延びさせて自らは討ち死にを遂げたとされる。

「何ゆえ——！」

涙を流す芳佳Ⅱ巴御前の心の揺れが隙を生む。それを見逃すわけでもなく後方にいたネウロイはレーザーを撃とうとし…

《お主に、生きてほしかったからじゃ》

「え…？」

耳に入ってきた声。それと同時に何かが飛んで後方のネウロイに命中。爆発を起こし、砕け散った。

「なっ、なっ？」

「誰が…」

小型3機を落とし、中型に阻まれていたミーナたちは何が起きたか分かっていない。そして、上空から聞こえるプロペラの駆動音が聞こえ、その方角を見た。

それは急降下をはじめ、中型に接近する。中型から放たれるレーザーを華麗に躲して胴体に着いていた60kg爆弾を投下。大きな爆発が発生し大穴を開けた。だが、コアには当たらなかったが動きを止めることに成功し、その横を通り過ぎた。

その機体を見た坂本は驚きの声を上げた。

「あれは十七試艦上戦闘機?! だれが乗ってるんだ?」

彼女が驚くのも無理はない。

十七試艦上戦闘機（仮名）

扶桑の次世代戦闘機の一つとして開発が進んでいたが度重なる失敗と試行錯誤の結果、ほかの開発チームより後れを取ることとなりつい最近になって試作型が完成した、美緒がテストするはずだった戦闘機だった。

それに乗っていたのは右手にパンツァーハウストを構えた――

「こちらミーナ。その戦闘機、誰なの?」

「うん? それは儂に対して言っているのか?」

「メビウス!! あなたなにしているの?!」

ミーナは声を荒げる。基地に待機という決まりだったのにメビウスはなにをやっているのか。

「ふむ、すまぬがミーナとやらよ。我はメビウスであつてメビウスでない。儂はこの体を借りているにすぎぬ亡霊じゃ」

「? あなた何を言つて?」

「詳しくはこのメガネとやらをかけている女子おなごと胸の大きい女子おなご、背の小さい小娘に聞け。儂を呼んだのはそのほうらだからな」

「え?」

「私?」

「わたくしも?!」

「ほう、それは…」

「これが終わったららじつくり聞きますからね」

ミーナと美緒は3人に顔を向ける。その顔は笑顔だったがほんの少し青筋が浮かび上がっていた。

「ふむ、確かに名のらないのは武士の恥。儂がだれか答えよう。」

儂は源義賢が次男、信濃源氏の棟梁、木曾義仲であるぞー！

通信越しに聞こえるメビウスの声。それを理解したのは美緒とこつくりさんをやった3人。そして、芳佳Ⅱ巴御前だった。

「殿！」

巴はメビウス：義仲が操る戦闘機に近づく。操縦席の開閉部分を開けてお互いの顔を見つめた。

「久しいな巴。儂はこの者に憑りついているが：儂が分かるか？」

「何を、おっしゃいますか。そのようなことすぐ分かります」

「そうか」

芳佳に憑りついた巴御前。メビウス1に憑りついた木曾義仲。生前、今生の別れとなった2人は偶然とはいえ、800年の時を経て、異国の空で再開した。

「お主に謝らねばならん。巴、すまなかった。あの時、お主の気持ちを理解することなく、武士の誇りを盾にお主を遠ざけた。儂の選択がお主を苦しめてしまった」

メビウス1は——木曾義仲は深々と頭を下げた。自分の過ちにより苦しませてしまった自身の片腕ともいうべき女に。

それを見ていた芳佳は——巴は涙を流しながらも、笑っていた。「殿、顔を上げてください。もういいのです。過去は過去、もう終わってしまったことを悔いても仕方ありません。それに、巴は喜んでいきます。こうして、仮初とはいえ、殿に、貴方様にお会いできたのですから」

「左様か。：お主も儂も現世にいられるのも時間の問題。巴よ。お主に最後の命を下すぞ」

「はっー！」

芳佳Ⅱ巴は姿勢を正す。

「儂に最後まで仕えよ。その覚悟はあるか？」

「いうまでもなく、巴は、いつでも殿の御傍に。たとえ地獄の道行きでもお供致します」

「よくぞ言った！ ゆくぞ、巴。久方ぶりの戦、存分に暴れようぞ。背は預けたぞ」

「御意のままに！」

1人はストライカーに乗り、もう1人は試作の戦闘機に乗る2人の武人。対するは4機の小型ネウロイ。そのど真ん中に2人は飛び込んでいった。

ネウロイはレーザーを放つも芳佳Ⅱ巴御前どころかそれよりも大きい戦闘機を操るメビウスⅠⅡ木曾義仲に当たるところかかすりもない。

「隙だらけじゃ。もつと精進してから出直すのじゃな」

トリガーを引き、十七試艦上戦闘機に搭載された三式13・2mm機銃が火を噴く。中・大型でも傷をつけることができるそれは、小型ネウロイには十分すぎるほどの威力だ。蜂の巣になりボロボロに崩れ落ちる。飛行機の死角である真下から別のネウロイが攻撃を仕掛けるが、芳佳Ⅱ巴が張るシールドに阻まれる。

「殿は殺らせない！」

そして、そのシールドの外側に移動したメビウスⅠⅡ義仲は勝手に持参した最後のパンツァーハウストを発射。命中、爆散させる。

「ふむ、どうやら腕は鈍っていないようじゃな」

「殿のほうこそ」

「馬とは勝手が違うがな。じゃがこれもなかなかじゃ。いや、まったく面白いのう！」

がはははははっ！ とメビウスⅠⅡ義仲は豪快に笑い、それを見て芳佳Ⅱ巴は微笑む。

それを遠くから中型を仕留め終えたミーナたちが見ていた。

「あれってメビウスさんと宮藤さん…よね？」

「さあ、だが木曾義仲、巴御前……宮藤の奴ならまだしもメビウスのほうは何故扶桑の過去の人物を知っている？」

「さて、どういふことか説明してもらおうかしら、ルツキーニ少尉？」

「え、えっとね、実は——」

ルツキーニはこつくりさんのことを全て話した。芳佳に巴御前らしきものが憑依したがメビウスのことは知らないという。基地から通信が入る。

《うえ、気持ち悪。ミーナ中佐聞こえるか?》

「エイラ少尉どうしたの?」

《そつちにメビウス来てないか? いや、メビウスなのかあれ?

止めたんだけど気を失ってさ》

「メビウスなら今、宮藤さんと一緒に戦っています」

《どんな感じ?》

「そうね…」

ミーナは2人を見る。残り2機となった小型ネウロイをメビウスと芳佳は取り囲んでいた。

ネウロイのレーザーを華麗に躲す。その姿は、まるでダンスを踊っているかのように見えた。

「巴、そろそろ終いにしようぞ」

「いつでも」

「よし……構え!」

左手を掲げる。生前、軍を指揮していたころのように声をあげる。

「矢を放てえ!!」

芳佳Ⅱ巴の九九式二号二型改13mm機関銃が、メビウスⅠⅡ義仲の機体翼内の九九式20mm二号機銃四型が同時に火を噴いた。

閃光を発してネウロイは飛び散る。

「終わったか」

「はい…」

義仲を巴は見つめ合う。

「さて、限界のようじゃ。巴、達者でな」

「たとえ離れ離れでも、巴は殿の御傍におりまする」

「はっはっは…忠道、大義である。……次に会うのは…いつ……であらうな」

「願わくば……戦場ではない……どこか……で……」

「はは……それも……良い……なあ」

突然、芳佳とメビウス1は気を失った。ストライカーのプロペラが止まり宮藤は真つ逆さまに落ちる。メビウス1の乗る機体もゆつくりと降下し始める。

「きやああああ、芳佳ちゃん！」

「…あれ、私………ストライカーつけてる？」

「メビウスく、お・き・ろ！」

「イテっ！ なにすん……な！」

自分の姿を見て、宮藤は素っ頓狂な声をあげた。メビウス1もいつのまにか飛行機に乗っていることに驚き慌てて機首を上げる。

「いつの間に出撃してたんですかっ!?!」

「俺……なんで戦闘機に乗ってたんだ？ 寝てたはずなのに」

「覚えてないのか？」

近づいたシャーリーが顔を覗き込む。ミーナに事情を説明してもらうとルツキーニたちのこっくりさんのせいで何者かの霊に憑りつかれたのだそうだ。

「でもでも！ 毎回こっくりさんやれば戦力倍増だよ！ 微妙に役立つはずの芳佳がたちまちエースパイロット！」

「いいわけないだろう！」

「微妙につて……」

「もう止めてくれ」

一番の被害者であるメビウス1は溜め息交じりに答えた。そんなことをされたら命がいくつあつても足りない。

「はあ、とりあえず今後一切こっくりさんは禁止。分かったわね」

「え〜」

「返事は？」

「………は〜い」

ミーナの目が笑っていないことに気付いたルツキーニは小さくなり、うなずいた。

しかし、

数日後

「中佐！クロスステルマン中尉がルツキーニ少尉のダウジング占いでジャンヌダルクになってしまいました！」

「……ルツキーニ少尉をここに呼んで」

ミーナはこめかみを押さえ、頭を振った。

その数日後

「中佐！ イエーガー大尉がルツキーニ少尉のダイス占いで、カラミティ・ジエーンになってしまいました！」

「ルツキーニ少尉を呼びなさい！」

ミーナはパンツと執務机に手を突いた。

またまた数日後

「中佐！ 今度はリーネ軍曹がルツキーニ少尉のルーン占いで不思議の国のアリスになってしまいました！」

「ルツツツツツキイイイイイイニ少尉！」

ミーナは頭を掻きむしり、悲鳴を上げた。

その後、ありとあらゆるオカルト儀式が禁止になったのは言うまでもない。

第15話「老兵、出撃」

澄みきった青空。その中を2つの何かが飛んでいる。1つは飛行機、濃い緑色をした機体には黒い丸を覆うように赤い三日月が描かれている。そして、もう1つの影は人型、ただしその足には何かが履かれている。

《よし。このくらいでいいだろう。基地に帰るぞ》

「メビウス1、了解」

大空を飛んでいたのは美緒とメビウス1の2人。今日は扶桑から持ってきた試作機：十七試艦上戦闘機のテスト飛行を行っていた。本来ならメビウスは関係ないのだが、成り行きというか、それに乗り込み戦闘に参加したので、メビウスからの評価を聞いてみたいと坂本から言われた。

基地に戻るなり美緒から聞かれる。

「それで、メビウスから見てどう思う？」

「そうだな」

戦闘機と戦闘脚の2つを乗り、現在の扶桑皇国の主力戦闘機&戦闘脚である零式のデータを見比べる。

「確かに旋回性能と火力に関しては十分だろうな。だが…」

「だが？」

「上昇力が全然だめだ。これ(データ)を見る限り零式は高度6000mまでに7分もかからないが、こいつは9分もかかっている。それに速度がたった50kmだけ増加だと前とあまり変わらない」

自身が動かした感想とデータを見比べて、メビウス1はバツサリと言う。かくいう美緒も頭を頷かせていた。俺と同じことを考えていたのだろうか。

「私も同じことを思ったが、そこまで辛口かというとは思わなかったぞ」「直せるものは直しておかないと、欠陥機出すわけにはいかないだろう。正直に言うと、俺からしてみればこれは零式の後継機になるにはもう少し努力だな。もし零式を継ぐ機体にしたのなら、最高速度は可能であれば時速650km、最低でも時速600km出すようにする。あ

と、上昇力を高度6000mに6分で辿り着くようにしないとな」

「なるほど、今度本国に帰ったときそう伝えよう。開発チームの落ち込む顔が目には浮かぶが」

「まあ、それに関しては頑張ってくれとしか言えないがな。じゃあ、俺はこれで」

「ああ、すまないな。つきあってくれて」

「いいさ。これくらいしか俺にはできないから」

一通り言い終えたメビウス1は別のハンガーへと足を向ける。そこにはかつて共に空を飛んだ機体が鎮座していた。

そこにはすでに先客の人が1人。

「遅いぞメビウス、早くしようぜ」

「そう急かすな」

眩きながら、メビウス1はシャリーのところへ近寄った。彼女の瞳はメビウス1が見た中で一番輝いて見える。それもそのはず、今日は彼女にとって待ちに待った、メビウス1にとってはとうとう来てしまった、F-4Eの試運転の日だった。この日のためにシャリーはフライトマニュアルを読みあさり、メビウス1から直々に後部座席の簡単な操作を教わった。そのときに「私が操縦したい!」と言ってきたメビウス1に「そんな危ないことできるか」と一蹴された。

「さて、これに乗り込む前に…こいつを着てもらおう」

メビウス1はその手に持っていたものをシャリーに渡した。

「なんだこれ」

「耐Gスーツだ。それを着ないと乗れないからな」

対Gスーツ。ジェット式の戦闘機に乗るに欠かせない物だ。操縦にあたり急激な重力が発生し、それに対処するために開発された。これを着ないと意識を保つこともできない。それを着替える。

「よし、いくぞ…どうした?」

「いや、なんか体が圧迫される感じが…それにこの格好は」

見ると彼女の顔は若干赤い。それもそのはずだろう。耐Gスーツは操縦者の体に合うようにできている。普通の服とは大きく違う代物だ。そのせいでそれを着たシャリーは体の輪郭がくつきりと分

かかってしまっていた。

「メビウスは恥ずかしくないのかよ」

「（恥ずかしいというか、俺はもともと男なんだがな）もう慣れてる」
会話を短く済まして、シャーリーを後部座席に乗せた。取りあえずというか、念のためにフライトマニユアルを渡しておく。彼女にベルトをつけてヘルメットとマスクも装着し、自分も乗り込む。

「今日の飛行は北海と呼ばれる海域の大陸側を高度1000m以下で飛行する」

「1000m以下？　なんでそんな低空を」

「えー…とな、このまえ俺と宮藤が憑りつかれたときに来たネウロイは高度1000m付近の低空にいたからレーダーにひっかからなかっただろ。こいつだとすぐにレーダーにかかるからいろいろ面倒なことになるんだ」

もし味方のレーダーに映るとネウロイと勘違いされる可能性がある。さらにこっちのほうが重要になるのだが極力人目につくのを避けたい。ヨーロッパ大陸はネウロイに支配されているため人はいない。もしネウロイに襲われたとしても、相手がジェット型ネウロイでないかぎり逃げ切ることができる。

「それじゃあ、行くか」

「オーッ！」

「……そんな冒険に行くんじゃないんだから」

ゆつくりと機体を動かし、滑走路に移動する。

《メビウス、離陸を許可します》

「了解。メビウス1、離陸する」

《シャーリーいつてらっしやーい！》

「ああ、ルッキーニもあとで乗ろうな！」

（……なんで遊園地のアトラクションみたいな感じになってんだ）
決して楽しむ乗り物じゃないのに。そう思いながら速度を上げて操縦桿をゆつくりと引く。目の前の計器に出される高度を確認する。もしここでレーダーにかかるとうイツチーズ基地からネウロイらしきものがいきなり現れたと騒動になる。高度1000mより上にいか

ないようにしながら離陸した。

「シャーリー、聞こえるか」

「なんだ？」

「今日の飛行は基地から東に30km離れたところで北東に向き、100kmほど飛行して終了だ。その間はお前がこの機体の目だ。レーダーに注意してくれ」

「わかった」

シャーリーの返事を聞き、まずは東に機首を向けた。F-4Eは前席が操縦担当、後席がレーダー・航法担当になる。シャーリーには主にレーダーを見て周辺の状況を知らせるようにした。そうしている間にもう基地から30km離れる。

「よし、じゃあ速度のテストをするぞ」

「了解」

北東の方角に機体に向けてスロットルをあげる。エンジンの音と振動が直接自分に伝わってくる。全身がシートに押し付けられ、シャーリーは体がおいてかれるような錯覚を感じる。

そして、速度を上げていく途中で爆発音に似た音が伝わった。

「？ メビウス、もしかして故障か？」

「ん？ ああ、違う違う。今のはソニックブームっていつてだな…」

メビウスは先ほどの現象について説明しだした。

ソニックブーム

それは機体が音速、時速1225kmを突破するときが発生する現象である。またこのときに衝撃波が発生し、地表にそれが伝わるとガラスが割れるなどの被害が発生する。高高度を飛んでいても影響があるので、戦闘以外ではあまり音速を超えない速度で航行している。

「これが音の世界…！」

「正確には音速よりも300km速いスピードだ。どうだ？ 音速の世界は」

メビウスはシャーリーに感想を聞くが当の本人は何も聞いていなかった。

(これが…これが私が目指すスピード…！)

誰よりも速く飛ぶことを夢見ていたシャーリー。自分が挑戦する速さを彼女は全身で感じていた。彼女はもう自分の世界に入り、メビウスの問いかけなどしばらく耳に入ってこなかった。

「どうだった。音速を超えた時は」

「なんていうかな…正直に言うのと、最初、私は死んだと思ったんだ」

「…へー、あの名言を聞くことになるとはな」

帰りの飛行でメビウス1は素直に驚いた。何故なら、シャーリーの言った言葉とメビウス1がいた世界の「初めて音速を超えた男」の台詞が似通っていたからだ。

「あの名言ってなんだ？」

「いや、俺の世界で『初めて音速を超えた男』の二つ名を得た人物が音速を超えた時に言った言葉が『その瞬間、静寂に包まれた。私は自分が死んだのだと思った』と言ったのに似てたからさ」

おかしな偶然があったものだなとメビウス1は思った。

「そうなんだ。で、その男の名前ってなんていうんだ？」

「えーっと、たしか……」

随分前に見た資料に書いてあった人物の名前を思い出すとする。

（えーと…ち、ち………だめだ思い出せない。それじゃあ下の名前はたしか…イェーグ）

「あれ？ メビウス、レーダーに何か映ってるぞ」

「なに？」

考え事を中断し、シャーリーに状況を説明してもらおう。どうやら基地から何か…おそらくウィッチだろう、が飛び立っているのだ。今日は訓練の話は聞いていない。ということはスクランブル？

「通信つながるか？」

「ちよっと待ってくれ。今つなげるから…えーっと、回線の開き方は…」

シャーリーはフライトマニュアルの本をめくり、通信の仕方が書いてある部分を見つけ出す。彼女の目の前にある多くの機器から必要

な部分进行操作して、基地との回線を開いた。

「こちらイエーガー機、管制塔聞こえるか」

「こちらメビウス1、なにかあったか？」

《ミーナよ。ついさつき大型1機と小型ネウロイ数機を探知したの。それにその方角にはアフリカ行のブリタニアの輸送船がいるのよ》

「なんだって!」

聞こえてきた内容に驚くシャーリー。必ずしも敵は首都ばかり狙ってくるわけではないのか。

「場所は？」

《基地から西南西、方位100距離200 km先にその輸送船が…どうするつもり》

輸送船の位置を聞かれて答えるミーナだが、メビウス1の考えていることに気づき質問してくる。

「シャーリーはどうする?」

「そんなの言わなくても分かるだろう」

「決まりだ、な。こちらメビウス1、先行して輸送船が逃げる時間を稼ぐ」

《許可できない…と言っても無駄でしょうね。いいわ、輸送船の救援に向かってください。それとワイト島分遣隊も急行しているので彼女たちの援護を》

「メビウス1、了解」

「シャーリー、了解!」

ミーナからの許可をもらい、輸送船がいる方角に機首を向けた。しばらく高度100 m以下で飛行していたが、基地から50 kmほど離れたところで上昇した。

「シャーリー、アフターバーナーを使う。頭をシートにつける」

「アフターバーナー?」

「急加速、マッハ2以上のスピードだ」

マッハ2と告げるとシャーリーは「本当か!」と歓喜の笑みを浮かべていた。何せ今日で音速を超えるだけでなく、その2倍の時速2

510 kmで飛行するのだから。高度12000 mで機体を安定させる。

「レーダーに何か映ったら言ってくれ。…準備はいいか？」

「ああ！ どころからでもかかってこい！」

「舌噛むなよ。いくぞ、アフターバーナー点火！」

F-4Eのエンジンから炎が伸びる。急激な加速に体がシートに打ち付けられる。速度はマッハ2を超えた。

「……………ッ!!」（これが音速の2倍！）

声に出さなくとも彼女、シャーリーはそのスピードに驚き、瞬きすらしていないかった。外の風景がどんどん変わっていく。今まで経験したことないスピードを出す機体に自分は乗ってるんだ！ シャーリーはそれを理解する。マスクで見えない彼女の口は誰が見ても分かるような大きな笑みを浮かべていた。

宮藤、坂本、ペリーヌ、バルクホルン、エーリカ、エイラの6人は高度5000 mを全速力で向かっていった。しかし、距離があるため到着するのに20分はかかってしまう。そんな中通信が入ってきた。

《美緒、聞こえる？》

「どうしたミーナ」

《メビウスとシャーリーが『例の機体』で先行します》

「分かった——」

美緒が言い終わる前に轟音が鳴り響く。全員が耳を押さえながら上空を見るとメビウスとシャーリーが乗るF-4Eが猛スピードで彼女たちを追い越していた。

「うわ、速いね」

「ぼーっとしていられるか。私たちも行くぞ」

ハルトマンの呑気な言葉をバルクホルンは少し叱る。

少しでも早く追いつこうと再び前進を開始した。

ワイト島から50 km離れた海上では、5人のウィッチが数機の小型ネウロイと戦闘をしていた。

「アメリカ、目の前の敵ばかりに気を取られないで！」

「は、はい！」

「もう！ 鬱陶しいわね。さっさと墜ちなさい！」

小回りで動くネウロイを相手にしながら彼女たちは闘っていた。ただ動きが良かったため残り7機に減らした今でも手こずっている。

「全員、急いで撃破して輸送船の救援に向かうわよ！」

「でも隊長さん。こいつらしつこいし時間かかるぞ」

「あと4機……」

最初、小型10機と大型1機を見つけたが敵は分散して、小型が私たちの足止めを仕掛けてきた。これ以上時間をかけると輸送船が大型ネウロイの射程距離に入ってしまう。

「急がないと……」

隊長の角丸美佐の顔に焦りが見え始める。しかし、そんな彼女たちに通信が入ってきた。

《輸送船に向かったネウロイは俺たちに任せろ》

「え？」

「誰？」

いきなり入ってきた通信にほんの少しだけ動きが止まる。だが、残りの小型ネウロイ2機は彼女たちに目もくれず東の方角、輸送船とは反対方向に反転する。だが、小型ネウロイの間を蒼いなにかが高速で通り過ぎた。敵はそれに反応しきれず、何かが通ったときに発生した風圧と衝撃波を受けて回転する。蒼いなにかは小型を無視し、轟音を唸らせながら、彼女たちの上空をあとという間に輸送船方角へと飛んで行った。

「なによあれ……いくらなんでも速すぎじゃない……」

「味方でしようか……？」

フランシー・ジエラードとアメリカ・プランシヤールはつい先ほど通り過ぎた何かを見て言った。少なくともネウロイではなかったが、味方とも断言できなかった。それにあまりにも速すぎて蒼いなにかとしか分からなかった。

「……飛行機」

「え？」

隣にいたラウラ・トートが小さく呟いた。

「速かったけど…飛行機の形をしていた」

「ラウラもそう見えたの？ やっぱり私の見間違いじゃなかったのね」

高速型のネウロイを今まで見てきたがそれ以上のスピードで飛ぶ謎の飛行機をラウラと美佐は初めて目の当たりにした。もしあれが敵だと戦うのは困難だ。

「なあ、隊長さん私の見間違いかもしれないけどさ」

「何かしら、ウイルマさん」

つい最近ワイト島分遣隊に配属になったウイルマ・ビショップが自信なさげに言った。

「あの飛行機みたいなやつにさ、リボンのマークがあったんだ」

「艦長！ あと一分でネウロイの射程内に入ります！」

「くそ、とにかく機関全速で離脱しろ！」

ポーツマス港から出港したアフリカ部隊への補給物資を詰め込んだ輸送船は大型ネウロイの攻撃にさらされていた。ネウロイの出現周期からこの日を選んだが、出港初日に気まぐれで動いていたネウロイに見つかってしまった。

「救援要請は！」

「現在、ワイト島分遣隊が別のネウロイの足止めをくらっていて、501部隊も向かっているようですが…」

副長の言葉に艦橋が絶望の空気に包まれる。今回は護衛艦も何もないため成す術がない。もはやこれまでかと心の中で思った瞬間、いきなり爆発音が聞こえた。

「なんだ！ 被弾したのか!？」

「か、艦長！ ネウロイが！」

外を見ていた乗組員の声を聞き、全員が窓に集まる。見ると大型ネ

ウロイの体の一部が大きく抉れていた。

「一体何が…」

それを言い終えずに轟音が聞こえてくる。

「うるさー！」

「なんだあれは!?!」

「ウィッチ…じゃない?!」

自分たちの頭の上、大空を得体のしれない蒼いながかが飛んでいるのを乗組員が目にする。

「すごい！ 何だか知らないけど撮らないとー！」

その中で写真が大好きな乗員がこの不思議な出来事を写真に撮ろうと自分のカメラを取りに走り出てしまった。

「あー！ ばか！ 勝手に持ち場を離れるな！」

「ほっとけ、それよりも今のうちに離脱するぞ！」

艦長の声に皆我に返り、自分の持ち場に着こうと走る。

(何者か知らないが…感謝する)

艦長はかぶる帽子を正しながら、心の中で今も未知の何かに対し礼を言った。

そのころ、F-4Eは大型ネウロイの取りつきながら、輸送船が逃げける時間を稼いでいた。

「クソ、貴重なスパローを2発使っても落せないのはつらいな。なんとかコアを見つけないとー！」

今のところ、残弾は機銃があと400発、赤外線誘導ミサイル4発、セミアクティブ空対空ミサイルが2発。敵の気をそらすために遠距離からスパローを二発撃ち命中したが敵の再生能力でほとんどがもう治ってしまったている。

「なあ、コアってどこにある法則とかないのか」

「そんなのないなあ。探すとしても坂本少佐の魔眼じゃないと見つけれられないし」

「じゃあどうすれば…」

そのときメビウス1はあることを思い出した。

(そういえば、スカイアイはどうしてコアの場所が分かったんだ?)

この世界に来る前に遭遇したやつのコアを直接見たのはメビウス1だけだ。スカイアイは直接見ていない。なのにたしかあの時敵の弱点らしき部分を見つけたと言っていた気がする。あのときスカイアイが言っていた言葉は――

――不明機の中心部に高熱源反応を感知した――

「:…そうか、その手があったか!」

「なんだメビウス、なにか思いついたのか?」

「ああ、もしかしたらうまくいくかもしれない。それと言い忘れたけど、吐くなよ?」

「誰が吐くか!」

シャーリーの返事を聞きながらメビウス1は機体をネウロイから遠ざけた。そして、反転し、敵ネウロイの背後に着く。距離はサイドワインダーのギリギリ射程外。

「メビウス1、FOX2、FOX2!」

メビウス1は2発の赤外線誘導ミサイルをノー・ロックでネウロイに放った。そして、そのミサイルはネウロイに吸い込まれるように進み――右側の部分に誘導されるように命中した。

「そこか! シャーリー、一撃離脱で片づけるぞ!」

「了解!」

アフターバーナーを使用せず、機体を増速させる。急接近するフロントムを近づけさせまいとネウロイは反撃を始める。前方からは銃弾の雨ならぬレーザーの雨。だが

「こいつを舐めるなよ…!」

旧式でも乗り手によって化けるF-4Eを最大限に活かして接近をやめない。十分な距離にまで近づき

「インガンレンジ、ファイア!」

20mm弾をありつたけ撃ち込んだ。ミサイルが当たった部分を舐

める様に蜂の巣にする。

そして、一瞬赤く光ると白い破片となり崩れ始めた。

「ターゲット撃破。レーダーの反応は？」

「なにも映ってないぞ。どうやら分遣隊のほうも終わったようだ。少佐たちが合流している」

「そうか：輸送船のほうにあいさつしに行くぞ」

「いいのか？ これ見られたらまずいんだろ？」

「もう見られてるからな。それに被害にあってないか確認する必要がある」

そういつてメビウス1は機体を輸送船のほうに向け飛行した。

「艦長。大型ネウロイの沈黙を確認しました」

「そうか。あれがやってくれたんだな」

報告を聞いた艦長はふう、と安堵の息を漏らした。その間に新たな情報が入ってくる。

「か、艦長！ あれが接近してきます！」

「なに？」

まさかこちらを襲うつもりかと思ったがそうではないと分かった。それはネウロイではなく、けれど我々が知る飛行機の形をしていない。先ほどよりもゆつくりと、だがプロペラの機体より速く、大きく旋回している。まるで我々を見守っているかのように。

「？ 艦長、通信が聞こえました」

「なに？」

「なんとだね？」

もしかして、あの飛行機からか？

「それなんですが：『We wish you a happy voyage (よい航海を)』：です」

その内容を聞き顔を見合わせる副長と艦長。あの未知の飛行機は我々に航海の無事を通信越しで祈ってくれたのだ。そう思うと自然と顔が緩んできた。艦長は艦内放送装置に向かい言った。

「船内で手の空いている物は甲板に行き、上空を飛んでいる命の恩人

に敬礼しなさい」

輸送船の周囲を回るように旋回しながらメビウスとシャーリーは船の被害を確認していた。だが、見たところなにもないようだ。

「どうやら大丈夫なようだな。帰るぞ」

「そうだな。…お？　メビウス、見てみるよ」

「うん？」

シャーリーに言われて輸送船を見る。船の甲板には乗員が集まり、半分の人はこちらに敬礼し、もう半分は手を振っていた。それに応える様にメビウスは機体をロールさせた。

「うわ！　や、やるならやるって言ってくれよ」

「ああすまんすまん。じゃあもう帰ろう」

「そうだな」

機体を上昇させて加速し、輸送船と別れた。基地に帰ったときに聞いたがワイト島分遣隊の人たちには美緒が直接話して口外させないよう約束してくれたそうだ。

後日、ヒスパニア沖を航行しているあの輸送船の船内

乗員A「あの飛行機なんだったんだろうな」

乗員B「さあな。お前は見たのか？」

乗員C「うう、見たかったけど無理だったんだよね…」

乗員D「じゃあこれやる？」

乗員C「ん？　て、これは!?　いつのまに撮ったんだ?!」

乗員D「ふっふっふ。お前たちが手を振っているときに連写しまくったのさ。ほとんどぼやけていたけど、これだけは良かったんだ」

乗員A「俺にもくれないか。記念にとっておきたい」

乗員D「いいぞ。ただし、帰ったらなにかおごれよ」

乗員A「おお！」

彼がうまく撮れたという写真にはその中心に小さいながらも知る人にははつきりわかるほど、きれいにF—4EファントムIIが映っていた。

この写真が後に、ある有名人がブリタニアに来るきっかけになるのは、まだ誰も知らない

第16話「夢・心の傷」

1944年7月1日

「だめだ。それには賛同できない」

ブリタニア空軍省の建物内、薄暗いどこかの部屋。そこでブリタニア空軍大将トレヴァー・マロニーと彼の配下の者たちが集まっていた。

「ですが閣下。あれを利用すれば我々の軍事力は飛躍的に上がります」

「そうすればネウロイどもを殲滅、その後のヨーロッパのイニシアチブは我々が握れます」

「確かにあれの技術は今の私たちにとって喉から手が出るものだろう。だが、あれが必ずしも我々が求めるものなのか分からなければ意味がない。ましてや、調査のためにそれを起動させるなど暴走したらどうするつもりだ」

「ですが…」

マロニーの言葉に言い返せない者たち。マロニーの言っていることが分からない彼らではない。しかし、ウィッチに頼らない戦力を求める彼らにとって、偶然発見したある廃墟の技術力を手に入れたい。目的は同じだが彼らの上に立つマロニー一人だけ消極的だった。

「我々が作り上げたものならまだいい。だが、正体不明のものに頼ることはできない」

「しかしこのまま何もしないのもどうかと思いますが」

マロニーと部下たちはともに一步も譲らない。しばしの沈黙が続いた後、マロニーは小さく溜息をついた。

「分かった。許可しよう」

「あ、ありがとうございます！ それではさっそく「ただし！」!?」

配下の者の言葉を遮りマロニーは言った。

「前から我々が進めている計画で安全性が保障されてからだ。これだけは譲れん」

「……了解しました。ですが、準備だけは進めておきますので」

それだけを言い残し、部下たちは会議室から去って行った。マロニーは一人になってもその表情は固いまま資料に張つてある写真をじっと見つめていた。

真っ暗な闇の中に俺は一人立っていた。周りを見ても何も見えな
い。だけどもなにも怖いとは感じなかった。なにげに上を見上げる。
そこには満天の星空。技術が進み空気が汚れてしまった俺たちの世
界では特別な場所に行かなければ見ることができないほどきれいな
星々が輝いていた。誰が見ても息をのむ光景。だが、その中で一番輝
いていた星がバラバラに砕け、墮ち――

「うああああああ!!!」

悲鳴のような声をあげてメビウスーは目を覚ました。体中が汗で
ぐっしよりとしている。

「はー………はー………」

飛び起きてからメビウスーは動かなかった。いや。正確に言えば
動けなかった。メビウス自身この体になり、異世界にとんでしまつて
も“あの日”が近づくと見てしまう。あの光景を。ユージアを恐怖
に陥れたあの流れ星を。メビウスーの大切なものを奪つたあの光を。
「墓参り………行けないな……」

目覚めてからなんとか絞り出した言葉だった。

今日の訓練風景を眺める。空にはカールスラントが誇るトップ
エース、ハルトマンとバルクホルンが飛んでいる。それを横目で見な
がらメビウスーはある特訓をしていた。

「ほああああああああ!!!」

両手を前にかざし魔力を放っていた。いまやっているのはシール
ドを張る練習。エイラたちから教わっていたのだが、全くと言ってい

いほど形にならない。魔力は出るが魔法陣が形にならずどれも歪んでいる。因みに今は扶桑式の魔法陣の練習をしているが、ナスのような形になっている。

「これもだめだナ」

「メビウスつて、シールドへただね」

「これでリベリオン、ブリタニア、ガリア、ロマーニヤ、オラーシヤ、スオムス、扶桑すべてのシールドをやったけど…メビウスつて才能があるんかないのか…」

「うるせー」

エイラ、ルツキーニ、シャーリーにダメだしされる。

「そもそもこつちにはシールドつて概念がないんだ。それにどつかのエースが言つてたぞ『当たり前じゃなければどうということはない』と」

「いやそんなこと言われても」

「そつちの常識なんか知らないし」

そうだよなあ。と思いつながらメビウス1はばたりと地面に座り込んだ。彼女たちにはいつていないがメビウスの世界にウィッチはいない。それに魔法なんでものも存在しない。その世界の人間が魔力を扱えるからといってすぐに理解・活用できるわけがない。そんな非科学めいたことはさっぱりだ。

「ひとつ聞くんが、お前らはどうやってストライカーを動かしているんだ？」

「どうつて、普通に魔力を送るだけだけど」

「そうか」

何気ない会話をしながらメビウス1はあることを思っていた。

(なんだかみんなが言っている操縦と少し違うな)

小さな疑問をメビウス1は抱いていた。彼女たちはストライカーを動かすときはただ魔力を送るだけと言っている。

だが、メビウス1はF-22Aストライカーを動かすとき頭の中で操縦桿を握っているイメージをしている。飛んでいるときは頭の中で実際にコックピットに乗っているイメージをしながらでだ。別に苦ではないのだが、それなら実物の戦闘機に乗ったほうが自分として

はそれがいい。こんなメンドクサイことを彼女たちは毎日しているのかと思っただがどうやら少しばかり違いがあるようだ。

(これがあの時動かせなかった理由か?)

模擬戦前にスピットファイアMk. Vが動かせなかったことを思い出しながらメビウス1は仰向けになり空を見上げる。そこには二つの飛行機雲が新しいループを描いていた。

その日の夜。バルクホルンは自室から出て窓から夜空を眺めていた。眠ることができず気晴らしに歩いていたのだ。ふと今朝見た夢を思い出す。

焼け野原になった故郷を、守れなかったカールスラントを、クリスを守れなかった、あの夢を。

「くそ、こんなところでうだうだしているわけにはいかない」

今こんな悪夢に苛まれている暇は私にはない。祖国を取り戻すまで、クリスの仇を取り戻すまで私は闘うんだ。それだけが私の戦う理由だ。そのためなら例えこの身がどうなろうと――

「どうしたの? こんな夜遅くに」

「ミーナか」

「妹さんのことでも考えてたの?」

「!!」

一瞬で見抜かれてしまった。やはり彼女には敵わない。

「:あれはあなただけのせいじゃないわ」

「いや、もっと早くネウロイに攻撃を仕掛けることができたら、クリスまで巻き込むことはなかった」

ミーナがフォローしてくれようとするが、そんなことは関係ない。

「敵の侵攻を遅らせて、街の人が避難する時間は作ったわ」

「国を守れなかったのは事実だ!」

そうだ、私は守れなかった。クリスを、自分の国を。

「それは私たちも同じだわ」

「…すまない」

そうだった。国を守れなかったのはミーナやハルトマンも同じだった。それに気づかない私はどうしようもない。

「そうだ！ 休暇もたまってるし、しばらく休みをとったらどうかしら？ お見舞いにも行つてないでしょ？」

ミーナが勧めてくれるが、ネウロイを倒すまで休んでなどいられない。

「その必要はない。私の命はウィッチーズに捧げた。クリスの知っている姉は、あの日死んだ。次の作戦も必ず出してくれ」

そう言つて私はミーナを残して部屋を出た。去り際にミーナが何か言つていたが、よく聞こえなかった

「……………なるほどね」

ミーナとバルクホルンが話していた部屋から少し離れた場所。そこに隠れるようにメビウスがいた。メビウス本人も夜眠れず、なんの目的もなく歩いていたが偶然ミーナたちの話し声が聞こえてきた。盗み聞きは趣味ではないが、話している内容を聞いていくうちに真剣になつてしまった。

（私の命はウィッチーズに捧げた…か。お見舞いと言つてたからクリスつて子は入院中か？）

バルクホルンが言つていた言葉を心の中で繰り返す。その後、二人に気付かれないようにその場を後にした。

次の日の練習風景。いま空ではメビウスとシャーリーとルツキーニが飛んでいる。今回、メビウスが敵役となり、シャーリーたちがメビウスを仕留めるという方式を行っていた。2人の攻撃を十七試艦上戦闘脚を履いたメビウスは躲し続ける。

《動きが単調すぎる！ 得意な技でやるのはいいが同じことを繰

り返さず、もつとランダムに動け、相手に動きを悟られるな！》

シャーリーとルツキーニは得意の一撃離脱戦法で戦っていた。一撃離脱戦法はその名前の通り高速で相手に近づき相手と交差する瞬間攻撃、離脱する戦法だ。単純ではあるが相手との接触時間が短いため被弾の危険が少ない。生存率が高く、ヨーロッパ出身のウィッチがよく使う。さらにシャーリーの高速魔法とルツキーニの攻撃系の魔法によりこの戦法の相性が抜群だ。この連携攻撃で多くのネウロイを撃墜している。だが、この通りメビウスにダメだしされていた。決して彼女たちの腕が悪いわけではない。

《《シールド無しでここまでやるとはな。ルツキーニ、もう一度仕掛けるぞ》

《OK！ シャーリー》

それを地上から美緒とミーナが見ていたが2人の顔は芳しくなかった。

「美緒、彼…じゃなかった彼女を見てどう思う？」

「そうだな強いて言うなら…」

いつもの覇気がない。美緒はそう言った。

「やっぱりそう思うかしら」

「ああ。まだメビウスに会って2カ月くらいだが最近あいつの調子がおかしく見えるんだ」

「目元にうつすらと隈が出来てたわね」

「ただの寝不足だといいたが…バルクホルンに続いてメビウスもこうだと」

「2人がこんな調子じゃあね。なにも起こらなければいいのだけど」

「そうだな」

美緒とミーナが話している間にも空には新たな3つの飛行機雲が互いに絡み合いあいながら渦状の形を作っていた。

第17話「短い休暇」

7月6日

「メビウスさん。夕食の時間ですよ」

「ああ。今いく」

リーネに言われてメビウスはテーブルにあるものを片づけて部屋を出る。

「一体何をしているのですか？ ドアにこんな張り紙をして」

リーネはドアに張り付けてある紙を指差して言う。そこにはこう書かれていた。

『現在作業中。用のある者はノックしてくれ。それ以外のものは立ち入り禁止』

3日からこのようなことになっているのだ。そのときにメビウスが1週間分の新聞紙を部屋に持ち込んでいるのを他の人が目撃している。

「とりあえず今は秘密だな。あまり追及しないでくれ」

「はあ、そうですか」

「それよりメシだメシ」

そう言いながら2人は食堂に歩いて行った。

「休暇？」

夕食後、ミーナに呼び出されたメビウス1は明日休んではどうかと言われた。なんでもこの頃の自分は疲れて見えるらしい。確かに最近いろんな奴から心配かけられているような気がする。

「ええ。少しはあなたも休みを取ったほうがいいと思ってね。それに最近ずっと部屋に籠っているけどなにをしているのかしら？」

「それについてはノーコメント。なに、大したことないものだよ」

「大したことない物なら教えてくれないんじやないかしら」

ミーナは笑顔で言っているのだが何故だろう…怖い。

「あー…ひとつ聞いていいか？ バルクホルンのクリスって子なんだ

が

「? なぜあなたがクリスのことを」

「先に謝っておくが実はな…」

メビウス1はこの前、ミーナとバルクホルンの話を聞いてしまったことを話した。

「そのクリスって子は入院中か」

「ええ。意識は回復してるけどまだ療養中よ。でもそれと何の関係が」

「ん? ああ、あまり言えないけど一言でいうならそのクリスちゃんに贈るものだよ。それにしても休暇か…すこし調達したいな。分かった。明日だけ休みをもらってもいいか?」

「そう。じゃあこれ」

そう言いながら彼女はメビウス1に封筒を手渡した。その中に入っていたのはブリタニアのお金だった。

「皆さんのと比べると少ないですが使ってください」

「いいのか? 俺は正規軍じゃないし居候の身だぞ?」

「いいのよ。これくらいしかお礼ができないから」

「そうか、ありがたくもらうとするよ」

もらった封筒をジャケットの内ポケットに入れながらメビウス1はミーナに敬礼した後部屋を後にした。

7月7日

基地に置いてあるトラックの荷台に乗り込む。運転はシャーリー。助手席がルツキーニ。荷台にはメビウス1とハルトマンが乗った。その荷台に置いてあるものが1つ。

「わざわざストライカーを持っていく必要ないんじゃないかな」

「念には念を入れてだ。俺がいない間に襲撃があつたら事だろう」

そこにはスピットファイアMk.Vが置いてあった。もしものためにすぐに基地に戻るようにするためである。最初は十七試艦上戦闘機を持って来ようとしたが、美緒に断られた。なんでもあれば扶桑の機密に関わるから基地の外には出さないでほしいと言われたの

だ。しかたないので以前使ったストライカーを持っていくことにした。

「つと。これでよし」

シャーリーが荷台に乗ったストライカーをロープで固定する。それを手伝っていたが何故か異様に使うロープが多すぎないだろうか？

「なあ。ここまで固定する必要あるのか？」

「ん？ ああ、少し訳があつてね。あとで分かるさ」

「？」

疑問に思いながらもメビウス1はそんなに深く追求しなかった。

「ぐー……すー……」

基地を出たトラックの荷台の中でメビウス1は横になり寝ていた。道があるとはいえコンクリートで整備されていないから所々段差がありその度に揺れるが戦闘状態のコックピットに比べれば揺り籠のようなものである。

「メビウス寝てる？」

「うん。寝てる」

「さして今日は記録更新なるか」

「メビウス驚かそうよ」

「ククク…どんな顔するか」

不敵な笑みを浮かべながらシャーリーは準備を進める。

「いくぞ！」

一気にアクセルを全開にした。

「ヒヤッホー……！！！！」

「あははははは！ 速ーい！！」

トラックを勝手に改造して普通じゃ出せないスピードを出した瞬間、スピードのことだけ考えメビウスのことを忘れる2人。急加速したトラックに慌てずハルトマンは縁にしがみついている。彼女もこのスピードを堪能しながらメビウスのほうを見る。しかし――

「すー……ぐー……」

「………どれだけ肝が据わってんのさ」

バウンドし揺れる状態でも、メビウスはほんの少し顔をしかめながら眠っていた。

そうこうしている間に到着した。基地から十数キロ離れた場所にある湾岸都市、フォークストン。ドーバー海峡に臨み、古くからヨーロッパ大陸との連絡港として重要な場所であり交易と漁業で栄えてきた。19世紀中期以降、海岸保養地としても有名となりホテルや娯楽施設が整備されたが、ネウロイとの戦いで最前線に最も近い町となり依然と比べると活気が落ちている。しかし、それでも人々は町を盛り上げようと活動していた。

その町の中心広場にシャーリーは車を停止させる。

「おーい。着いたぞ」

起こされたメビウスはあたりを見渡す。そこは住民の待ち合わせ場所としても役に立っているためかなりの人が集まっていた。

「じゃあ各自好きにしていーぞ。メビウスはどうする？ 案内しようか」

「大丈夫だ。この程度なら迷子にはならない」

そして、皆がそれぞれ別々に別れた。シャーリーとルツキー二は一緒に行った。

「さて、どうしようかな」

両手をポケットに入れたままメビウスは道に並んでいるお店を見ていく。正直言うと今の自分はほしい物なんてなかった。こんな体になってしまい、自分が女物の服を買うという想像を全力で否定した。しかし、せつかくもらったお金を使わないで置くのは勿体ない。どうしたものか……

「……ん？」

ふと横にある店から聞き覚えのある声が聞こえてくる。

「これとこれとこれに……あれもいいな」

そのお店は玩具やアンティークなどいろいろなものが並んでいた。

雑貨店のようなものだろうか。そのお店に入るとそこにはハルトマンが両手いっぱいいろいろなものを抱えていた。

「なにしてんだおまえは」

「あれ、メビウス見て分らない。これ買うんだよ」

「これって…これ全部か？」

メビウスは山になっているものを指差す。正確な数は分からないが30は超える量の商品が置かれていた。

「いくらなんでもこれは買いきりじゃないか？」

「いいじゃないじゃん。全部私の部屋に置くんだからさ」

「まあ、別に俺は関係ないが………ん？」

メビウスはハルトマンが集めた山の中にあるものを見つけた。それを取り上げる。

「おいこれって」

「ああそれ？ 実はそれ置いてあった場所に人だかりができていてさ。メビウスに聞こうと思っていただけ、これ、あれに似てるよね？」

「似てるも何も……」

メビウスは言う言葉を迷う。手にした玩具。それはこの世界に絶対にあるはずがないものだった。

ハルトマンにそれが置いてあった場所を聞いて探すとすぐ見つかった。小さい男の子たちが集まっていたからだ。そこに近づき置いてあるものを見た途端盛大に溜め息をついた。

(……………なんで置いてあるし)

はああ、と大きくつく溜め息など気にせず子供たちは並んであるものを見ながらワイワイ騒いでいる。

「俺こいつー」「あれがいいなあ」「これ強そうじゃん！」「この小さいもいいな」

子供たちが指差す先に置いてあるもの。

それは約100分の一の大きさになったジェット戦闘機の模型たちだった。しかもちやつかり塗装もされている。とりあえず店員に

聞いてみた。

「あの商品ですか？ 何故か分かりませんがうちの倉庫に置いてあったんですよ」

捨てる勿体なかったんでお店に並べたんです、と言っていた。値段はその価値が分からなかったのとそんなに量が無かったのでそんなに高くない価格にしたとか。いろいろ聞き終えた後、戻るとそのほとんどがすでに無くなっていた。まあ、確かに戦闘機の玩具は子供から見ればかっこいい対象だしな。しかし、そこに1人だけ男の子が残っていた。

「坊主、どうした？」

「え。お姉ちゃん。だれ？」

「おれ……あー……」

男の子の少しだけ怖がっているような顔を見て思った。もしかしてこの口調がいけなかっただろうか？ ……しかたないと思いつながらなれない女口調をする。

「わ、私は、ただの通りすがりよ。それよりも、ここでなにをしてるのかな？」

「えっと……あれ買いたいけど、僕のお小遣いじゃ足りなくて……」

しよぼんとする子供の頭を撫でる。しゃがんでこの子の目線と同じ高さで言つてあげた。

「よし。じゃあお姉ちゃんが買ってあげる」

「いいの？」

「ええ。そのかわり約束して。壊れるまで大切に使うこと。いいわね？」

「うん！ ありがとう！」

笑顔でいう男の子の頭を撫でながら自分も笑顔を返す。女の体になつてしまった自分の顔はちゃんと笑顔を造れているのだろうか？ 内心想う。

「それで、どれがいいのかしら？」

「うーんとね。あの青いの！」

「あれね。分かったわ」

男の子が指差したものを手に取る。それはメビウス1が最もよく知る戦闘機のひとつだった。

(F-2Aバイパーゼロ…こんなかたちで会えるなんて)

F-2Aバイパーゼロ

F-16を基にノースポイントが開発した第4、5世代戦闘機。F-16よりも大型化した機体に最新の機材を投入、最大4発の空対艦ミサイルを搭載でき、対艦戦闘機のなかではトップの戦闘能力を持っている。

さりげなく玩具の裏側を見るとそこには『Made in China』と刻まれていた。

(China …どこの国よ。っと、ここまで女口調する必要ないな) そう心の中で思いながらメビウス1は男の子と手を繋いで店員がいるほうへ歩いて行った。

「ありがとー!!」

満面の笑顔で走っていく男の子を見送る。その子に手を振りながら、世界が違っても子供のうれしがる顔は変わらないんだな、と心の中で思う。

と。その子が道を曲がって見えなくなったところで遠くから何かがちらに近づいてくるのが見えた。

猛スピードで、土煙を上げながら。

「メービーウースーうっ!!」

「…………少し落ち着け。それと周りの迷惑になるなお前らはシャーリーとルツキーニだった。片手で顔を覆いながらメビウス1は溜め息をつく。やってきたのはシャーリーとルツキーニだった。

「基地にあるあれと同じ玩具があるって聞いたんだけど!」

「どこにある!? ねえ! どこにあるの!」

2人の勢いに少しばかり押されながらあのお店を指差す。

「あそこか! いっくぞ〜!」

「あ! 待ってよシャーリー!」

バタバタと騒がしくお店の中に入っていく2人を見送りメビウス

1はトラックが置いてある場所に歩いて行った。

トラックが置いてある広場に着くとそこはメビウス1にとってな
んとも奇妙な光景が広がっていた。

「いっけ〜」 「ぶくんぶくん」 「ダダダダダダダ！」

あのお店にいた子供たちが手にした戦闘機で空戦ごっこをやつて
いた。しかし、レシプロ機の模型から第5世代までの戦闘機が入り乱
れて空を飛んでいるように見える様はなんともシニールだった。

「おかえり〜」

「ああ。しかし、おもしろい光景だな」

メビウス1は子供たちの遊びを眺める。

「ねえねえ。聞くけどこれはなんて名前なの？」

「ああ。この戦闘機はタイフーンだ」

タイフーン

1980年代後半にベルカ公国、サピン王国、ファト連邦の三国が
共同開発した戦闘機だ。デルタ翼とコクピット前方にカナード翼を
備え、カナードデルタと呼ばれる形式の機体構成をもつマルチロール
機である。機動性が非常に高いがその分癖が強い機体だ。

「世代でいうなら4. 5世代型だ」

「4. 5? それって4と5の中間の能力を持つてる戦闘機ってこと
?」

「ああ。機体に若干のステルス能力があることg——」

その時。町中にサイレンが鳴り響いた。音が聞こえるとメビウス
はすぐにトラックの荷台に置いてあるものに被さる布を取る。ス
ピットファイアMk. Vが姿を現す。

「先に基地に戻るからハルトマンはシャーリーたちを拾ってくれ！」

「分かった！」

すぐさまストライカーを履きエンジンを回転させる。幸い広場に
つながる道は真っ直ぐなので飛び立つには問題ない。そう問題ない
のだが…

「わー。ストライカーだー！」

「すつげー！ 本物だ本物！」

「お姉ちゃんウィッチだったんだ！」

そこで遊んでいた子供たちがストライカーを見つめるなりトラックに集まってきた。

「ちよつとー！そこどいて！ あくもく!!! ハルトマンお願い！」

子供とはある意味すごい生き物なのかもしれない。興味や好機なものを見つけた子供は例えどんな状況でもお構いなしでそれを優先するからだ。このままでは埒が明かないのでハルトマンに助けを呼んだ。

「はいはい。さあ、危ないからこっちにいこうねー」

ハルトマンが子供たちを誘導する。それでも行こうとしない子供を周りの大人たちが抱きかかえて防空壕へ連れて行く。ようやく人だかりも無くなってきた。これなら飛ぶのに支障はない。

「よし。メビウス1、離陸す「お姉ちゃん！」!?」

飛ぼうとしたとき呼び止められ立ち止まる。声のほうを見るとそこにはあの男の子が。

「がんばってね！」

「ほら行くわよ！」

大人に抱きかかえられながら左手でF-2の模型を離さないように持ち、右手でこちらに敬礼している。

その子に微笑みながら敬礼を返す。そして、前に向きなおり自分の心に喝を入れ気持ちを切り替えた。

「メビウス1。離陸する！」

だれもいなくなった街道を砂埃を上げながら飛翔する。メビウス1は基地がある方角に機体が出せる全速力で飛んで行った。

第18話 「怒り、エースとは、英雄とは」

町を出てからフルスピードを維持し、5分もせずに基地に到着、滑走路に着陸する。だがスピードを落とさず格納庫に入り、そしてストライカーをまるで靴下みたいに脱ぎ捨てた。それを見ていた整備員たちが「ああ!」と小さな悲鳴を上げていたがそんなことなど気にしなかった。

「状況!」

整備員に怒鳴りつけて今どうなっているか問い詰める。格納庫には基地に残っているはずの皆のストライカーが無くなっていて。自分が付く前にスクランブル発進したのだろう。ホームーが地図を片手にやってきた。

「敵の位置は」

『グリット東07地域 高度15000』でネウロイ反応が15分前に出た。そこで…おい! 今どこらへんにいるんだ?」

「少し待っててください! ……分かりました! 指令所が言うに今は隣のブロック08地域で2分後に会敵するだそうです」

受話器片手に言ってくれた整備員の言葉を聞き、すぐさま地図を見る。

「大陸の内部…ネウロイの拠点は?」

「ここだ」

ホームーが万年筆で地図にバツ印を書く。そこと交戦位置を交互に見つめる。

「自分も出る。M61と13mm銃を用意してくれ」

「この前の敵はまだ出てきてないぞ」

「今回の交戦空域は敵拠点に近すぎる。もしもを考えて出たほうがいい」

すぐさまF-22Aストライカーに乗り込む。準備している間に整備員から13mm銃を背負い、M61銃を手を持つ。

コンテナで渡されたときに銃の中身を調べたが、手で持てるように改良されたせいだ銃弾は全部で350発くらいしか装填できなかった

た。戦闘機相手だと20mm弾が有効であるが装填数が通常より少ないと速く弾切れになってしまう。エンジンやコックピットを狙えば十分かもしれないが、念を入れて以前使った13mm銃を持っていくことにしたのだ。

「遅れてシャリーリーの奴らも帰ってくるからな」

「了解した。行って来い」

「メビウス1。出撃する」

灰色の猛禽は力強く羽ばたく。目指すはヨーロッパ大陸のガリアに広がる森があるほうへ。

リーダーを確認すると、大きい光点を取り囲むかのように小さい6つの光点が動いている。

向こうの無線が聞こえてくる。

《トウルデー！ 前に出すぎよ！》

トウルデーとは確かバルクホルンの仇名だったはずだ。これまでの闘いで彼女の腕の高さは理解している。だがそこまで無茶をするやつではなかったはずだが。

「妹さんがいるっていうのに、なにやってんだあのバカは…！」

バルクホルンとミーナの2人の会話を盗み聞きしてしまったとき、バルクホルンに妹がいることを知った。そのときに言った彼女はそれよりも戦うことを優先した。

祖国を取り戻すまではクリスに顔向けが立たない

そんなことを言っていた彼女の言葉を思い出す。それを頭の中で繰り返す。

「…チツ」

無意識に、メビウス1は自身ですら気づかず舌打ちしていた。彼女は、彼女が、知らないうちに苛立っていた。あと10kmで交戦空域に到着する。

《うあ!?!》

《きやつ!?!》

聞こえてくる2つの声。そして一筋の光線が伸び、爆発した。

《ぐああっ!》

《バルクホルン!》

「くそー。あのバカ!」

バルクホルンが持っていた銃にレーザーが当たり詰まっていた縦断が誘爆した。メビウス1は落下する彼女を見つける。すぐさま自分も急降下を開始。彼女のすぐ横に着くように減速をかける。ジェット機のスピードだと速すぎる。ケガをした彼女の体の負担にならないように落下速度を合わせようとする。

「もうすこし……抑えて……抑えて」

口から自然と声が漏れる。相棒に乗った状態で落下している人を捕まえるなど、元の世界では絶対にできないことだ。メビウス1は今まで養ってきた集中力を駆使してバルクホルンを捕まえ、負担をかけるように止まった。

地面まであと約50m。ギリギリのところだった。

「おい! 聞こえるかバルクホルン!」

「う……あ……」

息はしているが返事がない。気絶しているだけだと思うがそれよりも深刻なのは胸のあたりにある傷だ。服が血で赤く染まっている。傷の状態が気になるが両手がふさがっているため分からない。しかし、胸が被弾箇所ならもし肺にまで達していたら重症だ。

「こちらメビウス1。バルクホルンは胸に被弾、はつきり分からないが重症の可能性あり! どうすればいい? 医療道具をもっているやつは!」

「メビウスさん! 私は治癒魔法があります。治してみせます。必ず!」

「わかった。メビウス1と宮藤はバルクホルンを連れて戦線を離脱する。敵を近づけさせないでくれ」

「私が護衛します!」

「頼む」

護衛を申し出たペリーヌも加わり4人は下に広がる森林の中へと降りて行った。

地面に降りすぐにバルクホルンを寝かせる。血でまみれた上着を取ると傷の状態が分かってきた。上着で隠れていたせいで気づかなかったが小さな金属片が彼女の胸に刺さっている。

「こいつはひどいな。宮藤、頼む」

「はいっ」

すぐさま宮藤はバルクホルンに刺さっている金属片を抜き取る。

「うぐっ！」

「気づきましたか。動かないでください、いま治療します！」

金属片を取ったときの痛みでバルクホルンが目を覚ます。取った後出血の勢いがあがったが宮藤の治癒魔法でその勢いも治まる。これなら傷も治るだろう。

だがその安心を消すかのように無線が入ってきた。

《メビウス。基地からの報告でガリアの巣から何かが4機高速で接近中!》

「やはり来たか。ペリーヌここを頼んだ」

「任せてください！」

相棒に乗り込み各種のチェックを済ませる。急いで飛ばうとするが

「待て……」

バルクホルンの言葉で止められた。見ると彼女は痛みのか顔を歪めながらもメビウスのほうを見ていた。

「何故私を助けた? ……私のことなんか気にせず貴様が戦ってればあのネウロイなど……」

弱弱しい声でバルクホルンは呟く。メビウス1は彼女を言葉を静か聞く

「お前たちも、私のことなどほうっておいて行け。……その力を敵に、使え……!」

「いやです。必ず助けます！」

「たった一人の妹を、クリスを守れなかった私などどうでもいい。私の命など捨て駒でいいんだ……」

バルクホルンは目を閉じる。もうここで死んでもいいと諦めたよ
うな、覚悟を決めたような顔で。

「ふぎけんじゃねえよ。小娘」

それにメビウス1が待ったをかけた。

「なに……？」

「自分の命はどうでもいい？ 総撃墜数200越えのエースがそんなことを言うなんてな。……じゃあ聞くが、お前が死んだら妹さんは、クリスちゃんがどんな顔をするか、分かってそんな戯言を言ったのか!!!」

宮藤、ペリーヌ、バルクホルンは驚いていた。あのメビウスが怒っている。静かなイメージが強いメビウスが、顔を憤怒の形相に変えて。3人は黙っていた。いや黙っているしかなかった。怖いとかそんなんじゃない、別の何かを感じさせたから。

メビウス1は自分がバルクホルンに対してひどく怒っている理由が今になって分かった。自分とは違い、大切なもの、家族がいるのにそれをないがしろにしている彼女が許せなかったのだ。

「……あるエースパイロットがいった言葉だ」

メビウス1は自分を落ち着かせようとする。いつもの表情に戻ったがその眼は怒りに染まったままだった。

『エースは3つにわけられる。〃強さを求める者〃 誇りで戦う者〃 戦況を見極める者〃 この3つだ』とな。……これらのエースか

ら英雄が生まれるが必ず条件がある。それは 〃生き残ること〃だ」

大陸戦争の戦局が大きく変わる先駆けとなったミッション『ストー
ンヘンジ攻撃作戦』。そのときにきこえた無線。

《犬死するな。生き残ってこそ英雄だ》

今でもあれを言った人物がだれか分からない。だが鮮明に思い出

せる言葉だ。

「別に英雄になれとは言わない。だけど簡単に命を投げ出さないでくれ。残されるものの気持ちを考えてほしい」

《4機こちらに接近中！ メビウス、何をしている!? 早くしてくれ!!》

美緒から通信が聞こえてくる。

「たった一人の家族だろう？ 彼女のためにも死んじやいけないんだお前は…」

メビウス1はバルクホルンを見つめる。先ほどは怒りの目で見ていたが、今は悲しそうな目で彼女を見つめる。

「クリスを1人にするな。あんな思いをするのは、俺一人だけで十分だ」

それだけを言い残しメビウスは飛び去って行った。

「あいつは何故あそこまで」

「メビウスさん……過去になにかあったのでしょうか…?」

「……………随分前に言っていました」

「ペリーヌさん？」

宮藤とバルクホルンの疑問に代わりにペリーヌが答えた。

「メビウス少佐の家族は……彼女が軍に入った年に全員災害で亡くなっています」

「え…」

「それにこんなことも言っていました」

「こんなこと？」

『『ネウロイに殺されたほうがマシだったかもしれない。怒りの矛先を向けられたのだから』……………と』

「ネウロイに殺されたほうがよかったって、そんなのあるわけ……………」

宮藤はそれを否定しようとする。ネウロイと災害は違いすぎる。その二つを一緒に考えるものじゃないと思ったからだ。

「メビウス少佐の考えに口出しする権利は私たちにはありませんのよ。でも自身の肉親……大切なものを失ったからこそあんなに怒ったのでしょうか」

「……………そう、か」

「バルクホルンさん？」

小さく呟くバルクホルン。彼女はメビウスがなぜあんなことをしたのかを理解した。1人残された悲しみと苦しみを知っているメビウスは自分と同じ思いをする人を出したくなかった。その一心であそこまでした理由を知った。

そして、自分がどんなに愚かだったのかを。

そうだ。自分はまだ死ねない。

祖国を取り戻すためにも

仲間のためにも

クリスのためにも

そして、自分自身のためにも———！

「宮藤、早く傷を治してくれ」

「あ、はいー」

「あの敵は、私が倒す」

バルクホルンは上空でミーナたちが戦っているネウロイを睥む。

彼女の目には、もう迷いはなく、決意の炎が宿っていた。

メビウス1は接近する機影4機をレーダーで捕捉していた。速さからしてこの前のジェット機と同じに違いない。次第に目標が見えてきた。ヘッドオン。敵機の正面にAMRAMを4発撃ちこんだ。中央にいた2機に命中。左右にいた2機はフレアとチャフを散布し、その機体の高い機動力でミサイルから逃れた。

「あの機動性、カナード付きのデルタ翼……タイフーンか！」

ハルトマンが買った模型のモデル、タイフーンと同じ形をした黒色のネウロイだった。あの機動性にはF-22でも手を焼かせる。あれに取り付かれたらかなり厄介だ。

「すぐに仕留めるしかない」

近くにいるもう1機のタイフーンに接近、照準を合わせる。

「インガンレンジ『Warning Warning!?!』」

ロックオン警告がなる。後ろを見ると背後にもう一機のタイフーンが後ろを取っていた。

「チイツー！」

思わず舌打ちをする。すぐさま右上に上昇、回避運動を取る。だが後ろの敵は執拗に後ろを取り続ける。

「こいつー！ しつこいー！」

後ろの敵との距離は機銃の射程内に入っているのに撃つて来ようとしなない。それどころかさらに接近しようとバーナーをふかしている。まるで絶対の間合いから仕留めようと見える。

「確実に私を殺すつもりか！ なら、ついてこい！」

メビウス1はスピードを上げ、タイフーンとの距離を離す。それに対し敵も距離を離さまいと加速する。ミサイルを使う気配はない。機体の性能を活かしてあくまで機銃で仕留めるようだ。しかし何故だろうか。この戦法、すでに知っている気がする…？

「なんだ？ どこで見た？ 思い出せ…思い出せ…！」

動きながらもメビウス1は必死に思い出そうとする。

浮かび上がるのは暗くなった夜空

一斉に灯された都市の明かり

大通りで練り広げられる敵味方入り混じつての戦車戦

その上空でそれ以上の戦闘機たちが暗い夜空の中を飛ぶ光景――

その中にいた。あのタイフーン――！

「あの動きは…まさか『オルムステッド』!?!」

ありえない。そう思うメビウス1だったが今まさに彼女を追い詰めているタイフーンの動きはあの時の動きと同じだった。

オルムステッド

エルジア軍のエースパイロット。サンサルバシオン解放作戦でF-22Aに乗り換えたメビウス1と対峙。戦闘の末、メビウス1が撃った弾が取り付けてあったミサイルに着弾。誘爆し機体が爆散した。記録では戦死となっている。

思い返せばあのM i g-29も見覚えがあった。

そうだ。思い返してみればあのときのMiG-29の動きも自分は知っている。コンベース港の石油タンク精製所と備蓄施設を破壊するミツシヨンで出会った。

マルコス

エルジア軍のエースパイロット。彼も戦死となっている。

だが、なぜこの世界にいるのか？ 最初は自分と同じようにこの世界に飛ばされたのかと思ったがそれはなかった。MiG-29——マルコスとおなじ動きをする機体のコックピットを狙ったが人なんていなかった。ということは、ネウロイが彼らを模倣している。そう考えるのが妥当だ。

「っ。 それよりも・・・！」

未だに後ろから迫ってくる敵を見る。やはり動きは『オルムステッド』にそっくりだ。

自身の速度はマッハ1.9ほど。タイフーンはマッハ2で距離を詰めてくる。

(確かあの敵の間合いは…)

急いであの時の戦闘を思い出そうとする。メビウス1にとっての強みは一度敵エースと戦っていることだ。

ネウロイはどんどん近づいてくる。そして

「今だ！」

敵の間合いを思い出しバレルロールを行った。敵の銃弾が何もいない場所を通過する。その射線上にもう一機のタイフーン型ネウロイ。銃撃をまともにあびたネウロイは蜂の巣になり墜ちていった。

味方を誤射してしまつたからか、敵の動きが止まる。残つた1機の後ろに回り込みながらメビウス1は横目でそれを見る。

(思った通りだ。あのネウロイは『オルムステッド』を真似ている)

記憶を頼りにオルムステッドの間合いで回避してみたらドンピシャだった。そして、別の怒りが生まれる。

「お前がどう思っているか知らないが…」

アフターバーナーを点火。最後の1機に接近する。

「死んだ奴を真似るな」

戦闘機パイロットそれぞれ飛び方は異なる。エースになるとそれは顕著に表れる。その飛び方ひとつひとつがパイロットの生き様、誇りだとメビウス1は思っている。だからそんなことを知らないネウロイがそれを真似るのは同じ戦闘機パイロットとして許せなかった。「消えろ！」

あのとときと同じようにコックピット部分を狙い、引き金を引いた。飛び散る破片。そしてコアが姿を現す。そのまま全弾使いコアを破壊した。もう二度と真似されないように。

「敵ネウロイ4機撃墜。レーダーに反応なし。基地のレーダーは？」
《こちらでも確認しました。接近するネウロイ反応はありません。お疲れ様でした》

「ええ。あとはあのでかぶつだけだけど——」
見ると白い光が生まれ砕けたガラス細工のように消滅した。どうやら彼女たちがやったようだ。

「敵ネウロイの沈黙を確認。帰還する。RTB」
メビウス1とミーナたちは基地へと戻った。

7月8日

バルクホルンは身支度を急いで済ませる。昨日の戦闘が終わった後ミーナに休暇をお願いしたのだ。理由はもちろんクリスマスに会いに行くため。

「バルクホルンさくん。ハルトマンさんが待っていますよ」

「ああ。今いく」

部屋を出て廊下を歩くと通路の隅のほうにメビウスがいた。

「メビウス…」

「クリスマスちゃんに会いに行くのか？」

「ああ」

会話が進まない。別に悪い雰囲気ではないのだが。

「メビウス」

「なんだ？」

「あのとときはすまなかった。そして、ありがとう。私にも大切なもの

「がやつと分かった」

「そうか。バルクホルン、これを」

「そう言いながらメビウス1は手にしたものをバルクホルンに見せ渡す。それをみたバルクホルンは少しばかり驚いた。

「な、なんだこれは？」

「千羽鶴だ。故郷のノースポイントで病人の早い回復祈って贈るものだ。もっとカラフルにしたかったが紙が無くてな」

メビウス1が最近まで一人で作っていたもの。それは千羽鶴だった。ノースポイント文化の一つで有名な折り紙であり、最も有名な折り紙である折り鶴を1000羽作り、糸などで綴じて束ねたものである。長寿のシンボルでもある折り鶴を1000羽折ることで、病氣快癒・長寿がかなうという俗信があり、入院者への贈り物などとしてよく用いられる。これの起源はじつのところ分からない。1970年代以降に生まれたことは記録に残っているが、いつ、だれが、誰のために作ったのかが一切謎である。だが千羽鶴は人々の間に浸透し誰もが知っている折り紙となった。

メビウス1が作った折り紙はそのほとんどが新聞紙で、少しばかり色のある紙がある。なんとか物足りなさを紛らわすためにランダムに色の突いた折鶴を入れてある。

「クリスちゃんに渡してくれ」

「分かった。ありがとう。クリスもきつと喜ぶだろう」

バルクホルンはメビウス1に礼を言い、ハルトマンが待つ車のほうに走って行った。

それを無言で見送りながらメビウス1は自分の部屋に入る。内側から鍵をかけて厨房から無断でくすねたもの——ノースポイントのお酒と風味がよく似る扶桑酒をグラスに注ぎそれを飲み干す。

昼間からお酒を飲むことをメビウス1は絶対にしない。だが今日だけはメビウス1にとって許されていた。

「——Everyday I wake up unsure——」

メビウス1は1人歌い始める。大陸戦争が終わった次の年に作曲

され、瞬く間にユージア全土で愛されるようになったあの歌を。
空を見ながらメビウス1は歌い続ける。
その目には、一筋の涙が流れていた。

第19話 「顔を知らない旧友」

1944年7月9日

基地の滑走路でメビウス1はあるものを振っていた。

「249……250……251……」

あるもの、それは美緒から受け取った扶桑刀だ。先日メビウス1が幼いころに剣道をやったことがあると口にしたとき

『ほう。なら、手合わせしてもらえないか?』

それに興味を持った美緒がメビウス1に試合をお願いしたのだ。結果は惨敗。メビウス1は一度も彼女から一本を取ることもできずに終わった。

メビウス1自身もかなりのブランクがあつたから仕方ないと思つてもやはり負けっぱなしは自分の気が治まらない。一回だけでもいいから美緒に勝ちたいと思ひ予備の扶桑刀を借りて今こうして素振りをしていたのだった。

「いつまでそうしているつもりなの?」

「ハルトマンですか」

ハルトマンは手にタオルと水筒を持っていた。ありがとう、といいながらそれを受け取る。

「そんなに悔しかったの?」

「ええ。私の実力不足だけど一度でいいから勝ちたいし、それに負けず嫌いだし」

「へ〜……ところでさ」

「なに?」

「なんで女口調にしているの? いつもは男みたいに言っているのに」

「え……………はっ!?!?」

思わずメビウス1は口に手を当てる。

(なんで私、じゃなくて! 俺は女口調になつてるんですか?! それにどんなに頑張つても女口調になつてしまう!)

「ずつと気になつてたけどさ。朝からそうだったよ?」

「そんなああー……！」

メビウス1の絶叫が基地中に響き渡る。男なのに女の体にされていろいろあつたのに口調まで女になっちゃうなんて。

「もう………どうにでもなれ」

「なにがさっ！」

「いろいろ…夢なら覚めてほしい。本当に」

メビウス1は諦めることにした。いい意味で解釈するとこの状況を受け入れること、悪い意味では現実逃避すること。

「それよりもさ。以前からあつた親睦会に参加しなくてよかつたの？」

「このまえみたいなのがあつたらまずいでしよう？ これからは基地に残ることの」

「おとといあつたばかりだし、無いと思うけどなく」

ハルトマンは私も行きたかつたなくとひとり愚痴っていた。

今日は前々から予定されていた基地近辺にある村との親睦会が行われていた。

ミーナは歌

坂本は剣舞

宮藤とリーネはお国料理（この場合は扶桑料理かな）

ペリーヌは着ぐるみらしい

エイラは教えてくれなかった（不敵な笑みをしていたけど）

シャーリーはストラライカーの説明

ルツキーニは分からないが楽しみにしてるようだった

皆それぞれでお披露目をやるようだ。

ハルトマンとバルクホルンは機体の整備、サーニャは夜に備えて就寝中のため今回は不参加となった。まあ基地に誰か残らなくてはいけないのでこれは仕方がない。

「なんだお前たちそこにいたのか」

2人の話にバルクホルンが入ってくる。

「そういえばメビウス。聞きたいことがあるのだが」「なに？」

「この前言っていたエースのことだ」

「なにになに？ 気になる気になる」

エースという言葉にハルトマンが食いついてきた。

「お前が言っていたエースについて少し話してくれないか？」

「分かったけど。…直接話したわけじゃないからそんなに詳しくないけどそれでいい？」

「ああ。構わない」

「いいから話して」

「そのエースパイロットの名前は——」

メビウス1はオースシアのテレビ局がドキュメンタリーとして流した番組の内容を思い出しながら話しはじめる。といっても彼女たちに人間同士の戦争のことは話せない。どうにか最後までそのことを言わずに済めばと思いつながらメビウスは話を続けた。

同日 ブリタニア首都ロンドン グリニッジ・パーク

グリニッジ・パークはブリタニア連邦首都ロンドンの南東部グリニッジにある総面積74ヘクタールの広大な公園である。その場所は市民の憩いの場として使われているがその場所の半分は別の目的で使われている。それは

「全員200m匍匐前進始めー!!」

軍服姿の軍人がフル装備で匍匐前進を始める。その横では別のグループが上空10mくらいに浮かぶ小型バルーンにゴム玉を投げる。「馬鹿者！ 必ず当てろ！ それではこちらの位置がばれて死ぬぞ！」

「はっ、はいー」

浮かぶ風船を小型ネウロイに見立てて、それを手榴弾で破壊する訓練をしている。だが、さすがに本物の手榴弾を使うのは危険なので同じ大きさの手榴弾型ゴム玉で練習していた。

その横では高射砲が並びそれを担当する者たちがいる。

彼らの部隊名はロイヤルマーリン（イギリス海兵隊）。

1664年10月28日に設置されたデューク・オブ・ヨーク・ア
ンド・アルバーニ海上歩兵連隊(Duke of York and
Albany's Maritime Regiment of
Foot)が大元の、世界でも有数の歴史ある海兵隊である。

現在はコマンド部隊としてあらゆる戦況に対応できるよう訓練を
続けている。

その離れた場所に一台の車が止まり1人の老人が出てきた。その
老人は歳のせいか顔にはしわが目立ち、頭髪も白髪が多くもとは金髪
であったのだろうがその名残は消えかけている。外見から50は過
ぎているように見えるが背筋は真っ直ぐで、なにより彼のオーラが
違った。その目は輝いており力が宿っている。さながら歴戦の戦士
を思わせる貫録を放っていた。その彼の左腕はない。

「ニツク大尉。随分とせいがでてるね」

「た、大佐！ お久しぶりです！ 総員、敬礼!!」

大佐と呼ばれる老人を見るや否やそこで訓練していたもの全員が
動きを止めて彼に敬礼する。彼らに対し大佐も笑顔で敬礼し彼らに
答えた。

「私のことはいいから続けなさい」

「は！ 全員訓練再開！」

ニツク大尉の言葉でまた訓練が再開される。匍匐前進していた部
隊は重武装した状態で敷地内を歩かせ、手榴弾を扱っていた部隊はス
クワットを行なう。

大佐は高射砲が置いてある場所に移動し椅子に座った。

「やれやれ。彼らに加わりたいがこの体ではな。やはり歳は取りたく
ないものだ」

「失礼しますが大佐。どうしてここに？」

「書類仕事は飽きてな。早めに済ませて新しい仕事が来る前に抜けて
きた」

「よろしかったので？」

「なに、別にいいだろう。午後から陸軍学校で講義だからな」

この大佐と呼ばれる男。実はもとは陸軍の者だった。第一次ネウ

ロイ大戦のおりに数々の功績を重ねたが左腕を無くしそのまま前線から退いた。その後当時の海兵隊の臨時講師として派遣されその能力を発揮し彼らの実力を上げていった。当時は片腕の状態でも誰一人として彼に敵う者がいなかったそうだ。彼から学んだ者も多く陸軍と海兵隊ともに多くが彼を慕っている。

ポケットから葉巻を取り出して一服を始める。

「ありや？ タバコは前にやめろって言われてませんでしたっけ？」

「今やめても何も変わりはありませんよ」

「奥さんに怒られますよ」

「ばれなければOKだ」

ハツハツと短く笑いながら紫煙の味を楽しんでいた。

「——私が知っているのはこれくらいよ」

メビウス1はそのエースについて知っている限りのことを言い終えた。メビウスがしゃべっている間バルクホルンとハルトマンの2人は黙って私が言う内容を聞いていた。

「主翼を片方無くした状態で帰還するとは」

「なんか信じられないね」

「信じるも信じないも勝手だけどちゃんと証拠があるけどね。まあ、この世界じゃ証明できないけど」

F-15Cイーグルの性能と形状から生まれた偶然とそれを成しえたパイロットの技術がそのような奇跡を起こした。

とその時

「！」

「え、嘘!？」

「この前来たばかりなのに！」

基地のサイレンが鳴り響いた。一昨日襲撃があったばかりなのにいくらなんでも速すぎる。だが今は戦争中だ。そんな予想通りに事が運ぶわけじゃない。いそいで格納庫に入る。バルクホルンは壁

にかけてある受話器をとり指令所に連絡を取る。

「おい！ どういうことだ！ 一昨日にあつたばかりだろう!？」

《そんなこと私も分かりません！ ですが監視所から大型ネウロイ4機と小型ネウロイを含む編隊が高度14000で接近中………いや、ちよつと待つてください》

バルクホルンに話していた指令所の者は突然入ってきた通信を取る。

《ロンドン第1防空ラインの部隊から連絡？ はいこちら501

………はあ!? それは本当か!？」

「どうした？ なにがあつた!？」

《し、失礼します。すでに小型ネウロイ2機が内陸に先行しているようです!》

「なんだと!？」

バルクホルンの怒号が格納庫内に響く。事態は一刻を争っていた。

「監視所のやつらは何をしてたんだ!？」

「それが、現在もその2機だけレーダーに映っていないようです。地上軍が目視で発見しました!？」

「レーダーに映らないだと?？」

バルクホルンの言葉、レーダーという言葉聞いて片手に13mm銃を持ちながら近寄る。

「バルクホルンちよつといいですか?？」

「あ、ああ」

受話器を受け取ったメビウス1は指令所の者にあることを確認する。

「1つ聞くけど、その先行しているネウロイの形状って分かる?？」

《それならすでに来ています。おおよそですが大きさは20mくらい。形状は矢じり型だそうです。速度は時速700kmは超えるかと》

「分かった。ありがとう」

指令所に礼を言いメビウス1は受話器を戻した。

「私が先行している敵を叩くからバルクホルンとハルトマンは遅れて

くるやつを頼む」

「了解した！」

「OK！」

メビウス1は相棒に乗りながら先行している敵のことを考察する。
(大きさ20m、矢じり型で速度700km、それにステルス……あの機
体か?)

ひとつ思い当たる飛行機を思い出しながら準備を終えた。今回は
時間がないので13mm銃のみで出撃する。

「メビウス1、出ます」

「メビウス、出撃を許可する。ロンドンを守ってくれ！」

「了解！メビウス1離陸します」

基地を出て上空10000mに到着する。

「基地司令部、こちらメビウス。ロンドンはどっちの方角ですか？」

《基地から北西の方角だ。頼んだぞ！》

方角を聞かないやメビウス1は北西の方角に向けてスピードを
上げる。だが音速は超えない。もし地上上空をマッハのスピードで
通るとその衝撃波でガラスが割れるなどの被害が出る。

(間に合ってよ！)

音速ギリギリ手前の遷音速で首都ロンドンを目指した。

突然の空襲警報でロンドンは混乱に包まれていた。

「市民の避難を優先させろ！」

「第40コマンドー部隊は市民を誘導するんだ。急げ！」

グリニッジ・パークで訓練していたロイヤルマリーン部隊は訓練を
中止し市民を避難させるため動いていた。砲兵部隊は高射砲に砲弾
を詰め込む。

「敵は何機だい？」

「は！……どうやら2機こちらに向かっているようです！」

「まずいな。今日はチャーチル首相がシテイ地区の視察に出てるの
だ。あの人のことだ、市民の避難が終わるまで動かないだろう。私た

ちが時間を稼がなくてはな」

大佐は右手に持つ杖を置き双眼鏡を受け取る。南東の方角、その空に黒い点が生まれては消えを繰り返している。味方高射砲部隊の砲撃だ。その中をもものともせず黒い点が2つ近づいている。それを確認した大佐は目を見開いた。

「……………驚いた。まさかあれをこの世界で見るとは」

「大佐？… 一体何が見えたのですか」

「いやすまない独り言だ。敵は2機！ 真っ直ぐこちらに来るぞ。速いぞ、よく狙え！」

「了解！」

高射砲部隊の皆はそれぞれの持ち場に着く。

「当てなくてもいい。ネウロイを怒らせてこちらに引き寄せろんだ」

「第一射！ 撃てー！ー！！」

10機配備されているQF 3.7インチ高射砲が一斉に火を噴く。ネウロイ襲来の知らせを受けていた彼らは場所が大陸の奥地ということもありいち早く対応できていた。続いて第2射、第3射と砲弾が撃たれる。それらの1発が編隊を組んでいたネウロイの近くで爆発し態勢が崩れる。すぐに元に戻るも2機は緩やかに進路を変更する。

「よしよし、こっちに気付いたか」

双眼鏡を手に敵を見ていた大佐は呟く。その間にも隣にいる兵士たちは高射砲の砲弾を放っていた。だがネウロイはそれを軽々とかわし接近する。

「ちよつと貸してみなさい」

「はっ！」

照準器を担当していた兵士と変わり大佐はそこから敵を睨み付ける。どんな相手でも攻撃する瞬間に隙が生まれる。それは人間もネウロイも同じこと…」

1人呟きながら敵の一機に合わせる。照準器と自分の目で交互に確認して修正する。

「右へ5度、砲を3度上げろ！ もう少し引き付けて…」

絶好のタイミングを逃すまいと集中する。そして敵の底面部分が開き何かが投下される。

「今だ！」

「発射——!!!」

一斉に放たれる砲弾。それを敵は回避するがうち一機が直撃し爆発した。だが、切り離された何かが2つこちらに落ちてくる。

「全員伏せろ！」

老人とは思えないほど大きい声で大佐は叫ぶ。それに反応し体をうつ伏せになる。大佐は迫りくる何かをじっと見つめていた。

しかし

「なに!? うお!!!」

落ちてくる物のそばを何かが通過した。そして大爆発が起こる。その爆風を受けながら大佐は先ほど通り過ぎたものを見ていた。

「大佐御無事で!」

「ああ、あのウィッチに助けられたよ」

「ウィッチ? どこに」

「ほれ。あそこだよ」

大佐が指差す方向。そこにはあのネウロイと同じスピード、いやそれ以上の速さで動いている何かを指差す。それはときどきキラリと何かを輝かせている。あれは剣だろうか?

「誰ですかあれは? 私はストライカーについて少しばかり知っていますが、いくらなんでも速すぎます」

「確かにあれは普通のではないだろう。だが信用できる」

「その根拠は…?」

そう断言する大佐の言葉が理解できず質問する。

「いやなに、私の古い友人だよ。もともと、顔は知らないがね」

大佐は笑顔で言いながら新しい葉巻を取り出して火をつけた。

もう一機のネウロイ——F-117Aの形をしたネウロイを追いながらメビウス1は手にした扶桑刀を見ていた。

「すごい。ペイブウエイを2つ斬ったのに曲がるどころか刃こぼれ1つしていない」

メビウス1は持つてきてしまった扶桑刀で落下中の精密誘導爆弾ペイブウエイを両断したのだ。その切れ味に思わず言葉を失う。

「と、それよりも」

目の前の敵に集中しようと頭を切り替え扶桑刀を鞘に収める。

F-117

オーシアが開発した世界初のステルス攻撃機。その隠密性は高いがその特殊な形状のため機動性は低い。だからメビウス1が操るF-22Aには敵わない。のだが今彼女がいるのはロンドン上空だ。撃墜できたとしても市街地に落とすわけにはいかない。

「だったら」

メビウス1は銃を構えて引き金を引いた。狙った場所はエアインテーク部分。その2ヶ所を破壊し機動性を無くす。このままでは失速して墜落するだろう。速度を失いかけたF-117の主翼の片方を掴む。

「墜ちるのいいけど、墜ちるなら…」

強く掴んだ状態のままエンジンを吹かしネウロイの墜落進路を強引に変更させる。その場所は

「あの河に墜ちろー！」

目標はテムズ川。メビウス1はかなり強引に回転をかける。強烈なGが発生するがそれに耐えながらメビウスはブーメランの要領でF-117をテムズ川に放り投げた。

水しぶきを上げて川に突っ込むF-117。完全に沈みきってから数秒後爆音とともに水柱があがった。

「こちらメビウス1。先行していたネウロイのうち一機は川に墜落。もう一機は高射砲でやられた。なかなかやるじゃない」

《分かったわ。こっちはロンドンの手前30kmで後続のネウロイと交戦中》

「了解。そっちに向かう」

メビウス1は次の戦場に向けロンドンを離れた。

その日の夕方

「明日の予定だがすべてキャンセルしてくれ。501基地に行く」

「え、何故ですか？」

「お礼を言いに行かなくてはいけないからな。(それにあのウィッチのことを確かめなくてはな)」

「分かりました」

「すまないね」

第20話「その男の正体は」

1944年7月10日

昨日の襲撃から一夜明けた今日。朝食後のミーティングが行われていた。

「昨日のこともありましたので全員基地に待機してください。それとメビウス、伝えないといけないことがあるので来てください」

普段と変わらぬ一日が始まるうとしているが、ミーナに呼び出された。

「それで、なんなの？」

「今日の午後2時にブリタニア海兵隊の者が来ます」

「海兵隊？　なんだってこの基地に」

メビウス1は疑問に思う。ここは空軍の基地だ。海兵隊が来るような場所じゃない。

「どうも昨日のロンドンで助かった礼を言いたいそうよ」

「そうですか…いつくらいにここへ？」

「午後の2時にこちらへ来るそうです」

「分かった」

昨日の出来事の礼を言いに来るなんて、手紙か何かで済ませればいいのと思う。だけど助けられた本人に直接言いたいのだろう。それじゃあその人が来るまでいつも通りにしてるか。

基地へと続く道を車で進みながら、彼——海兵隊の大佐は昨日見たウィッチが履いていたストライカーのことを思い出していた。

（あのストライカー…あれはこの世界の物ではない。私の記憶が正しければあれはオーシアの物に似ていたような）

進む車の中を無言でいながら考察を進める。実をいうと彼——大佐はこの世界の人間だが、別の世界の人間でもあった。メビウス1のように何らかの事情で別世界に迷い込んだ場合異世界の人間となるが、彼は少し違っていた。

(しかし、機体だけが迷い込んだ可能性も否定できないがあれを乗りこなせる者がいるのか？ 音速すら突破していないこの世界にいきなりマツハ2は厳しいぞ)

あれを見た最初は機体だけがこの世界に迷い込んだと思った。だがあれを使いこなせるのかどうかが問題となる。そこである答えが出た。あのウィッチはもともと別の世界の者なのではないのかと。機体と共にパイロットも一緒に来てしまったと考えるのが妥当だった。

しかし、私が前にいた世界に魔法という概念そのものが存在しない。しかし、何より機体の表面に描かれたマークは紛れもなく……「大佐、もうそろそろ着きます」

「おお、そうか。すまないね。こんな予定にないことをしてしまつて」目的地の第501統合戦闘航空団の基地に近づく。島一つをそのまま基地にしてそれをまるで山のように建造物が建っているため基地というよりも要塞に見えなくもない。だがここはそんなに対空武器が置いてないので要塞とは呼べないが。

ふと車窓から空を見上げると太陽の光に紛れてウィッチ数名とあれは…飛行機？ が飛んでいるのが見えた。

メビウス1は十七試艦上戦闘機を操りながらある訓練に参加していた。

「おい。どういうことですか？ あれだけやって1発も当てられないなんてないでしょう」

《メビウス少佐がうますぎなんですわ！》

《戦闘機なのにあんなに動けるなんて》

《なんであんなに動けるの……》

ペリーヌ、リーネ、宮藤の順に声が上がる。

今回は動く標的に弾を当てる訓練していた。そこで敵役にメビウス1が指名された。理由は飛行機の操縦に長けていることと、参加す

るのは宮藤、リーネ、ペリーヌの3人ということだ。ペリーヌはいいとしてもほか二人はまだ未熟なところがあるので大きめの的が必要になったことだった。他にあげるならもしかしたら遭遇するであろう高機動のネウロイ相手に対処できるようにするためだ。

「だから言ったでしょう？ 当てられないなら絶対に当たるなにかを模索するんだ。距離を詰める、相手の弱点を見つける、いろいろあるわよ。それにあなた達は3人いるでしょう？ もっと連携をとったほうがいいわよ」

((いや、連携とつても絶対に無理でしょ!!!))

心の中で同じ言葉を思う3人なのだった。

「今日はもういいわね。基地に戻るわよ」

基地に着いた海兵隊の者をミーナは出迎えていた。

「ようこそ。第501統合戦術航空団隊長ミーナ・デイトリンデ・ヴィルケです」

「ブリタニア軍海兵隊ロイヤルマーリン大佐のレオナード・スウィントンだ。急な訪問を受け入れていただき感謝する」

手短に挨拶した2人は歩きはじめる。

「それでは執務室へ案内します」

「いや、すまないが昨日のウィッチにすぐに会いたいのだが、格納庫に案内してくれないか」

「いえ、それはこちらとしては困るのですが」

「? なぜかね?」

疑問に思うレオナードを余所にミーナは内心焦っていた。今あそこにはメビウスのストラライカーF-22Aが置いてある。今のあれはオーバーテクノロジーなうえに他の者に見せるわけにはいかない最重要機密だ。もしもに備えて近くの場所に置いていたがそれをすっかり忘れていた。どうにかしなければと思うがそれを見たレオナードが彼女の顔を見て何を言いたいのか分かった。

「ああ。もしかしてあのストライカーの事かね？ だったら大丈夫だよ。あんなもの興味はないからね」

「は？ え、えーとなんのことでしようか？」

まさかあのストライカーを指摘されるとは凶星のようで少しばかり焦ってしまう。

「あ、いや少しばかり誤りがあるな。正確にはあのストライカーに描かれた模様が気になるのだ。見るだけでもいい。この通りだ」

深々と頭を下げるレオナードにミーナは少し考えた後承諾することにした。

「分かりました。ですが、見るだけですよ」

「感謝する」

笑顔でレオナードは答えて2人は格納庫に向かった。

格納庫に着いた2人はF-22Aが置いてある場所に歩いた。そしてその目の前に止まる。

「こちらになります」

「おお。これか」

目の前に置いてあるF-22Aストライカーを隅々まで見つめる。そして機体の裏側に回り目当てのものが見つかった。

「やはり、私の見間違いでは無かったか」

そう1人呟いたレオナードは懐かしさを感じる。そして勝手に鼻歌を歌い始めた。

「あの、レオナード大佐？」

「気にしないでください」

鼻歌を歌い始めたレオナードを見たミーナはその光景を見て疑問に思うがそれを彼の付添いの者が止めた。

「大佐は時たまに鼻歌とそれと同じ歌を歌うんですよ。そうしているときは声をかけても返事しません。少し待ってあげてください」

「はあ……そうですか」

50歳を過ぎた男性の渋い声で歌われる歌を聞きながらミーナは彼が歌い終わるのを待った。

一方そのころ、訓練を終えたメビウス1たちは滑走路に着陸しようとしているところだった。だが、少しおかしなところがあった。

「ん？ 格納庫入口に人がいる？」

よく見ると整備員の人たちが格納庫前にならんで左の広場に行くように誘導していた。何かあったのだろうかと思いつつながらその誘導に従った。

「どうしたの？」

「実は海兵隊の大物が来ているのですけど」

静かに来てくださいという仕草で格納庫の近くにきた。見ると相棒の傍にミーナと知らない人物が2人。1人は20代後半くらいの男性でもう1人は白髪が目立つ50代の男性だった。

「ミーナから海兵隊の人が来るって聞いたけど、彼らかしら？」

「中佐の隣にいる人は知りませんがもう一人のほうは知っています。超有名人ですよ」

私たちの他にも除くように彼を見ている者が大勢いた。

「そんなにすごいの？」

「すごいも何も、第1次ネウロイ戦争のときは陸軍が主力だったのですが部隊の指揮をとり占拠された拠点の奪取に成功。当時初めて開発された戦車で部隊を指揮しネウロイの撃退。銃撃戦の中を飛び込んで負傷した兵士を救助。ほかにもいろいろありますよ！ その功績を称えてヴィクトリア十字勲章を授けられていますし！」

説明してくれた整備員は興奮しながら抑えた声で説明してくれた。彼の言った通りものすごい人物なのだろう。

「♪♪♪♪」

その人物から鼻歌が聞こえてくる。それも1フレーズだけですぐに終わってしまった。

（…ん？ どこかで聞いたことあるような）

聞こえてきたメロディーが何故かよく知っているように感じたの

だ。だけど答えが出てこない。

(うーん。なんだったかな?)

何とか思い出そうとするメビウスに今度は歌が聞こえてくる。
それを聞いて、やっと思い出せた。

O' er azure skies and emerald
plains

紺碧の空と緑豊かな大地が果てしなく広がる

Where freedom and justice pre
vail with courage and strength
この地には 勇気と力強さに溢れた 自由と正義に充ち満ちてい
る

We'll fight to the end for li
berty in our land

我らは最後まで戦う 我が祖国の自由のために

最初のフレーズを聞いたとき、メビウス1は反応したただの偶然と
思ったが最後のフレーズを彼が歌い終えるときには確信に変わって
いた。

(ちよつと待った。なんであの歌をあの人が知っているんだ?)

先ほど海兵隊のものが歌っていた歌。あれは紛れもなく「ユージ
ア国歌」だ。とてもじゃないが偶然で済ませていいものではない。

「え、あ、ちよつとメビウスさん」

横にいる人の制止を気にせずメビウス1は海兵隊の人に近づいた。
確かめなくては。メビウス1の頭にはそれしなかった。

「おい、あんた」

「うん?」

「き、貴様！ 大佐に向かって無礼ではないか！」

自分より上の階級の者にかなり失礼なことを言ってしまったがそんなことはどうでもよかった。真っ直ぐにこの大佐を呼ばれる男の目を見る。

「まあまあ落ち着きなさい。君がこのストライカーのパイロットだね？」

「ああそうだ。そんなことよりも聞きたいことがある。あの歌をどこで聞いた!？」

自然と口調が乱暴になるが大佐と呼ばれる男は少し思案したかと思ふとこちらに顔を向けた。

「私の思い違いでなければ、君はISAFの関係者で間違いないかね？」

「な…!?! ISAFを知っている？ あんた一体」

まさかこの世界でISAFを知っている人に会えるなんて思いもなかった。それと同時に疑問が生まれる。一体この人は誰なのかと。

「ふむ。どうやら自己紹介したほうが早いようだな」

大佐と思われる男はメビウス1に体を向けビシッと敬礼した。

「元ISAF軍海兵隊所属のレオナード・ベルツ中尉だ。バンカーショット作戦のときは第32海兵コマンド連隊B部隊を指揮していた」

「レオナード・ベルツ中尉…バンカーショットのときの!?! 失礼しました。ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス隊隊長コールサインメビウス1。階級は少佐ですが、あの時は中尉でした」

自分に会いに来た海兵隊の大佐の正体。それがメビウス1の世界、大陸戦争のときにバンカーショット作戦で共に戦ったレオナード・ベルツ中尉だとしりメビウス1も彼に敬礼した。

「ISAFのマークを見た時もしやと思ったのだよ。あの作戦の時は私の上を飛んでいたのだろうか？ だからここで言わせてくれ。ありがとう」

「いえ、自分は何もできなかったまです。なんて言えばいいのか…」

こんなところでお会いできて光栄です」

2人はあのととき果たせなかった再会を果たし、握手を交わす。傍から見れば30歳も差が離れた2人がまるで旧知の知り合いのように見えてミーナたちは困惑していた。

「ヒソヒソ（うーんよく聞こえない）」

「ヒソヒソ（ちよつと、あまり押さないでください!）」

「ヒソヒソ（しずかに!）」

執務室のドアにベツタリと張り付いて宮藤とリーネ、ペリーヌ、は中で話しているメビウスとレオナードの会話を聞こうとするがなかなか聞こえない。メビウスとレオナード・スウィントン。この二人は全く無関係のはずなのにどうにも知り合いのようなのだ。興味がわかないはずがない。

「ヒソヒソ（でもなんであのレオナード大佐がメビウスと知り合いなのだろう?）」

「ヒソヒソ（リーネちゃん知ってるの?）」

「ヒソヒソ（うん。軍の人なら知らない人はいないくらいだよ。）」

へーと言いながら宮藤は耳をドアに押し付ける。

「もうちよつとで聞こえるのに」

「なにがだ?」

「へ?」

後ろを振り返るとそこには鬼——もとい、坂本美緒が立っていた。竹刀を持って。

「ほうほうお前たちは今暇なようだな。よし私に着いてきたまえ。特別に訓練をしてやる」

「お願いしますわ!」

「えつと…私は」

「その…」

「なんだ? 言ってみろ」

「失礼しまーす！」

美緒から逃げ出そうとする2人だったが襟を掴まれてしまう。

「よし。やるぞ」

「よろしくお願ひしますわ少佐！」

「うわーん」

宮藤とリーネを引きずる坂本はほんの少しだけ執務室のほうを見る。

(短い時間だが、水入らずの話を)

心の内でそう囁いた。

「……………そうか。戦争は終わったか」

「ああ。バンカーショット作戦から9カ月後の2005年9月15日にな」

メビウス1はベルツ…もといレオナード・スウイントンに大陸戦争を話していた。

「君が言うにはそつちでは終戦から2年経っているのか。それよりもなんで君がここにいるのだ？」

「あー…話せば長くなるんだが、ようは昨日みたいなジェット型ネウロイを破壊しないと帰れないらしい。それにあいつらのことが気に入らない」

死んでいったパイロット達の真似をするのはどうしても許せなかった。そして思うことが出てくる。

(もしかしたら、あいつも出てくるのかな……………)

メビウス1は大陸戦争で最大の宿敵であったエースを思い出した。出てこないかもしれないが、もしいたらかなりの強敵かもしれない。だが、少なくともあいつの真似ごとをするネウロイに負けることはないと思う。どんなに真似てもあいつには到底及ばないのだから。

「それと、なんでその体なのだ？ それにあの機体は？」

「言わないでくれ。いろいろあったんだ。いや、いろいろされたんだ。いろいろと…」

「そうか。すまなかつた。失礼なことを聞いて」

「こつちも聞きたいことがある。なんでこの世界にいるんだ？ 確かあんたはバンカーショット作戦の時に戦死したはずじゃ……」

「それには理由があつてな……輪廻転生というものを知っているか？」

輪廻転生

死んでも魂は新しい命として生き続ける。あらゆる生物は生まれ変わり、死に変わりし続けることである。仏教で知られる概念の一つだ。

「あるとき私は確かに死んだ。そのあと魂は新しい命としてこの世界に転生するはずだったのだが少し問題が起こつてな」

「問題？」

「なんでも、私の以前の記憶を消さずに転生させてしまったのだ。ヒューマンエラー（人為的ミス）いや、強いて言うならゴットエラー（神様のミス？）といえればいいのか。私は困惑したよ。死んだはずなのに子供の姿になっていたのだからね」

「……なんだそりゃ。それつて、その、神様のせい？」

「そのようだね。現に幼いころにその神様が出てきて私に謝つてきたぞ」

メビウスはそれを聞いてため息が出た。輪廻転生が彼らの仕事ならそれに文句は言わないが、ちゃんと仕事しろよといたい。まあ。そのせいで彼に会えたのでこの場では感謝するが。

「記憶が残った状態で新しい人生が始まったわけか」

「そうだな。最初は驚いてばかりだった。時代でいうなら50年前の世界、ネウロイという正体不明の敵、そして魔法という概念とウィッチ（魔女）……。まあ。そんな中でも精一杯生きてきたつもりだがね」

レオナードは出された紅茶を飲みながら物思いにふける。

本当にいろいろあつた。新しく始まった人生。成人と共にブリタニアの陸軍に入る。そして始まった第一次ネウロイ戦争。毎日繰り返し、勝利を収めていく……そのときに私はある兵士を助けようと思つたのだ。そしてその時に――

ふと右手が左腕があつた場所を掴む。それを見たメビウス1がどうしようかと思ひながらも聞いてみることにした。

「その腕は？」

「ああ。前回の大战のときにある兵士を助けた時に腕ごと吹っ飛ばされてね」

「……………そうか。すまなかつた。不躰なことを聞いてしまつて」

「いいさ。後悔なんてしていない。この腕のおかげで彼女を救えたのだからな」

彼女？ その言葉を聞いて質問してみることにした。

「その兵士は、ウィッチか？」

「ああ。君は知らないと思うが陸戦ウィッチが存在していてね。彼女のストライカーが故障して助けたんだ」

「彼女は？ 今何している？」

メビウス1は出された自分の紅茶を口に入れる。

「家内だ」

「そうかあんたの家内か……………ブツ!!」

驚きの言葉を聞いてメビウス1は紅茶を噴き出しそうになるが何とかこらえた。

「あんた結婚していたのか！ あ、いや年齢考えるとそうなのか」

「ははは。そんなに驚くかね？ ちなみに娘もいるぞ。大学の助教授をしている」

ちなみにその娘がいく大学は名門中の名門オックスフォード大学であつたりする。

「そうか。…会つてみたいがそれはできないな」

「やはり機密の問題か？」

「ああ。この世界でF-22Aは危険極まりないからな」

「仕方がないにしても、残念だ」

はははと笑ひながら2人は会話を進ませる。メビウス1にとって2年ぶり、ベルツにとって54年ぶりの再会だった。

時間にして一時間くらい話しただろうか。そろそろ刻限が迫ってきていた。

「時間だな。話ができてうれしかったよ」

「こっちのだよ。ああ、それと1つ聞いていいか？」

「なんだ？」

席を立ったレオナードにメビウス1が呼び止める。

「お前を転生した神ってどんなだったんだ？」

「どんなだったか？ ふむ…確か……」

右手を顎に当てて思案する格好をし考えること30秒ほど

「確か、聖職者が身に着けるような白い服を着た女性だったぞ。それがどうした？」

「……………いやなんでもない。気にしないでくれ」
「？」

レオナードから聞いたメビウス1は内心頭を抱えていた。これは感謝するべきなのか、それとも苦言を言うべきなのか。

(まあこの場合は感謝すべきかな。それにしても仕事ミスるとか、案外神様もドジなところあんのね…)

心の中で思っていた。

彼らをミーナと一緒に見送る。車が見えなくなったところでミーナがメビウス1に話しかける。

「一体どんなことを話したのかしら？」

「そうだな。強いて言うなら、向こうで果たせなかった約束…ですかね」

「…そう」

察してくれたのかミーナはあまり深く探ろうとはしなかった。

「さあ。基地に戻るわよ」

「了解」

メビウス1とミーナは基地へと歩いて行った。

北アフリカ戦線の重要拠点 トブルク

そこは北アフリカのネウロイに対し防衛している拠点。町の外は砂漠が迫り、昼は摂氏50度、夜はマイナス30度と過酷な環境だ。そこでアフリカの空を守るために戦う魔女がいる。

「マティルダ。もう一杯頼む」

「ちよつとティナ。飲みすぎよ」

ビールを飲むその少女こそ北アフリカ戦線のエース

ハンナ・ユステイナー・マルセイユ

通称「アフリカの星」「砂漠の鷲」「黄の14（ゲルベファイアツェー
ン）」

持ち前の明るさと美貌、そして輝かしい戦果でアフリカ戦線を支えるウルトラエース

他のウィッチや民間人からの人気が高いがサインはしない主義だ。

その彼女は今。毎日のように従卒のマティルダが営むバーで彼女はビールを飲んでいた。それを隊長である加藤圭子が見かねて止めようとする。

「なんだよく。私はまだ酔ってないわよ」

「ケイ。彼女の思うままにしてください。この程度で鷲の化身が倒れることはありません」

「そうはいっても」

「はっはっは！ やっぱりマティルダは分かっているな！ よーしじゃあカンパー」

「急にすいません！ マルセイユさんはいますか！ ていうかマルセイユさんここにいますよね!?!」

マルセイユが飲酒を続けようとグラスに口をつけたと同時にバーの入口が勢いよく開けられた。

「マイルズ？ 一体どうしたのそんな慌てて」

入ってきたのはブリタニア王国陸軍第4戦車旅団C中隊長のセシリア・グリンダ・マイルズだった。彼女の手にはなにか四角い紙切れがある。自分の楽しみを邪魔されたマルセイユはしかめっ面でマイルズを見る。

「なんだよ。あたしに何か用？ いま楽しんでるところだったんだけど」

「そんなことよりもこれ見てください！」

マイルズはマルセイユに手にした紙を見せる。あれは写真だろうか？ そう圭子が思っている間にマルセイユはそれを酔った目で見ていたが映っているものを理解するとそれを奪い取る。その顔はすでに酔いが醒めていた。

「マイルズ！ これは誰が持っていた!？」

「は、はい！ 今日来たブリタニアの補給船の船員が持っていました！ 彼らなた今はブリタニアの駐屯地にいるかと」

大声で言われたのでビビりながらマイルズは知っていることをマルセイユに伝える。

それを聞いたマルセイユはバーからダッシュで出ていた。

(あいつとの約束が果たせる！)

マルセイユは心の中でそう思いながらこの写真を持っていたブリタニアの兵士に詳しく聞こうとした。

「ああ！ ちょっとティナ！ 私たちも追うわよ！」

「はい！」

バーにいた圭子とマイルズは出ていったマルセイユを追いかけようとバーから出る。

「やれやれ、鷲の化身は今日も騒がしい。だが、あなたの気持ちは分かりますよ……」

マテイルダはマルセイユが置いて行ったビールを片づける。

そのバーの端に写真がいくつか置いてある。

もとはフリーのジャーナリストだった加藤圭子が持っていたカメラで撮られた写真だ。それは統合戦術航空団の先駆けとなった第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」、通称「ストームウィッチーズ」のこれまでの軌跡が映されていた。

その写真たちに映っているのはほとんどが彼女たちだが一つだけおかしな写真がある。

そこに映っているのはマルセイユと一人の男の姿。だが、その男はカメラのほうを向いておらず、背中だけが見えている。まるで彼女の背中を任されたようにも見えなくもない光景だ。

その男は、マルセイユより身長が高く、およそ180cmかそれ以上だろうか。マルセイユから一步左にずれて立っている。写真は白黒なので正確なことは分からない。分かることは短髪でマルセイユと同じかそれに近い髪の色をしている。頭には斜めに黒いひもが結ばれている。

そして、その男が着るジャケットの背中には小さく、しかしはっきりと

『13』の文字が描かれていた。

第20・5話 「訓練……?」

「うーん……ここはこの部品と交換して」

格納庫。ここではシャーリーが工具箱片手に自身のストライカー、P-51Dの内部を改造していた。理由はもちろんより速く飛ぶこと。そして自分自身の力で音速の世界に行きたいからだ。

あのとき、メビウスにあの戦闘機に乗せてもらったとき感じたあの感覚。自分が目指す世界。あれを今度は自分がやってやるんだ。膨らむ思いに高揚しながらシャーリーはストライカーの改造を進めていく。と

「さすがにこのままはまずいんじゃないか?」

「それは私も思っています。整備の仕方なんて専門外ですし……」

ふと声が聞こえてきた。この声はホームマーとメビウスだ。一体何を話しているんだと思い、今日の改造を終わりにし、ストライカーを元に戻して声のほうへと歩いて行った。見ると私が音速の世界、さらにその倍のスピードの世界を見せてくれた機体、F-4Eの前に立ちなやら二人は話していた。それに私も加わる。

「おーい。どうしたんだ?」

「うん? シャーリーですか。すこし問題があつてね」

「なにが?」

「こいつですよ」

ホームマーが親指を突き立てクイツとF-4Eを指差す。一体何なのか分からないと言った表情をしたシャーリーを見てメビウスが理由を話した。

「この前あなたを乗せた時アフターバーナーを使ったでしょう? その時のエンジンの消耗が大きくてね」

「ここじゃ修理なんてできないから、もしかしたら次が最後かもしれないだそうだ」

「え……次が最後なのか?」

「ああ」

「じゃあ今すぐ乗ろう!」

「機体なんて消耗品。パイロットが生きのこつてりや万々歳だ」

彼のいう事は俺たち戦闘機乗りの常識だ。今更言われる必要はない。

いつの時代でも戦闘機には莫大な値段がかかるものだ。俺たちの世界で戦闘機一機に数百億かかるのは当然である。だが、それよりも一番重要なのはパイロットの命だ。一般的に操縦ができるようになるまでに3年、そこからベテランのパイロットになるまで10年かかる。どんなに高性能な機体が生まれても、それを扱うことができる人がいなくてはただの鉄の塊だ。だから俺たち操縦者は生き残れるようにいつも必死だ（まあ、中には例外が存在するが）

例え長年の相棒でもその時になれば俺はラプターを見捨てるだろう。いくらエースパイロットと言われても明日には墜ちているかも知れない。そうならないように常日頃から努力をする。今日も――

「な、なんでこんなの履くんですか〜!？」

宮藤の大声が海岸に響き渡った。ここは基地の海岸岩場周辺。ここでは501部隊の皆が集まり訓練を行っていた。それはストライカーを履いた状態で泳ぐこと。

「はっはっはっ、当たり前だ！ これは訓練なんだからな！」

その二人の前には、地面に竹刀を突き立てている坂本が立っていた。ものすごくいい笑顔で宮藤とリーネに話す。

「戦闘中にもしも海に落っこちても大丈夫なようにするためだ」

訓練つて……、遊べるつて言ったじゃないですか〜！」

「心配しなくてもいいわよ。この訓練が終わったら、思いっきり遊んでいいから。……最も、遊ぶだけの体力が残っていたら、の話だけだ」

「そんな〜……」

ミーナの言葉に宮藤はがっくりと肩を落とす。そして坂本に襟首を掴まれる。

「つべこべ言わずさっさと飛び込めえ！」

「あああああー……!!」

放り投げられた二人はきれいな放物線を描きながら海に突っ込んだ。

「あれでいいのですか？」

それを傍観していたメビウスが口を出した。他の皆が水着姿なのに対しメビウスだけはいつものスタイルだが上はYシャツだった。さすがにこの暑さの中ジャケットを着る気にはなれない。

「あいつは初めてストライカーを履いた時も、飛ぶことが出来たんだ。そう考えれば泳ぐことなど簡単だ」

「……なあミーナ。私の勘違いかも知れないけど何分経った？」

「もう一分過ぎているわ」

そうしている間も海はとても穏やかだ。やがて水中から泡がぶくぶく出てきたかと思うと宮藤とリーネの顔が水面から現れた。

「うぷ、わぐ、げぼ」

「げほ、はあ、がぼ」

「いつまでやってるか」

「いや、あれはいた状態でいきなり泳ぐのはどうかと思う」

出来て当たり前だという美緒にメビウスはツツコミを入れた。

「しかしストライカーを履いたまま泳ぐ訓練をするとか、ウィッチも結構つらいことあるのね」

「なに他人事のように言ってるんだ？ メビウスもやるんだぞ」

「……………え？」

数分後――

「止めてくれ！ これって訓練じゃなくてただの拷問だと思うんですけど！」

メビウスは半分涙目になりながらミーナたちに懇願していた。彼女はいまラプターに似たストライカーの擬似体を履かされている。「お前だけがやらないのでは訓練にならないぞ。それに折角作ったの

だから使わないわけにはいかないだろう」

「くそー！ つーか誰ですかこれ作ったのは!? 形どころか色彩まで本物そっくりとかクオリティ高すぎでしょう!」

「ホーマー曹長以下整備班の人たちが一晩でやってくれたわ。本物いじれないうつつぶんを晴らすと言ったわね」

あいつらあー！ と整備班の人たちを恨む。それにどんだけラプターいじりたいんだあの人たちは!

「とにかくだ……バルクホルン、やれ」

「了解した。メビウス……がんばれ」

「ちよ、待——!」

メビウス1のことなど有無言わず、バルクホルンは能力の怪力を使いメビウス1を海へと放り投げた。

綺麗な放物線を描きながら飛ばされるメビウス1。ちょうど放物線の頂点を過ぎたところでなんとかしようとして試みる。

「こんなの脱出装置で……て無い!」

そうなのだった。これは外見のみはF-22に似ている。だから脱出装置なんてあるはずがない。今度は履いているものをどうにかして脱ごうと試みるがうまくいかない。

そして無意識に大声で言ってしまう。

「メビウス8！ 今ならお前のことを尊敬するぞー！ー！ーがばば!!!」

つい同僚のことを口にして、顔面から海に突っ込んだ。

「メビウス8とは誰の事だ……?」

「メビウスさんの同じ部隊の人かしら?」

聞こえてきた誰だかのが少しばかり気になるミーナほかストライクウィッチーズの皆さん達。

1944年7月30日14:00

ブリタニアは平和だ

第21話 「音速、そしてお疲れ様」

ストライカーを履いた状態での水泳訓練がつい先ほど終わった。体力が残っている者は海水浴を楽しみ、砂浜で日光浴を楽しんでいる。

一方、岩陰の裏側

「(自主規制) (自主規制) (自主規制)」

盛大に何かをぶちまける音が響く。岩の表側では5本くらいの水筒を用意した宮藤がいる。

「だいじょうぶですかー?」

「……………あと2本投げてください」

「じゃあいきますよー? はい!」

宮藤は水筒を岩のうら側へと投げる。そのあとボトルが開く音と水を飲む音が岩越しでも分かるくらい大きく聞こえてくる。

「うう、まずい、しょっぱい、にがい、気持ち悪い——うっ!? (自主規制) (自主規制) (自主規制)」

岩の裏側にいるのはメビウス1だ。海に放り投げられ溺れながら陸に進み、息がやばくなったら必死に浮いて空気を吸い込み、また溺れながら進みを繰り返しなんとか砂浜に辿り着いた。

しかし、海水を大量に飲んでしまいこのザマである。

数分後、砂を埋める音が聞こえ、メビウス1が岩陰から出てきた。でもその顔はかなりゲンナリとしていた。

「基地にもどって……………寝る」

「付き添いますか?」

「大丈夫。ガキじゃないし」

メビウス1は水筒片手に砂浜を後にした。道中、自分の部屋まで戻るの面倒だなくと思っていた。どうしょっかなくと思ってたときにフロントムIIが目に入る。

「ま、大丈夫でしょ」

戦時中いつでも発進できるように自分の機体の傍で寝ることも多

かった。よし、と決めた彼女は格納庫に置いてあるファントムⅡの主翼に座り込み背中を預ける様に寝た。

それから数十分後。基地の警報が鳴り響いた。ネウロイ襲来を知らせる音が木霊する。そんな中先ほどの訓練の疲労が溜まっていたせいか、いつもならすぐに飛び上がるメビウスⅠはなかなか起きなかつた。

「……………うるさい」

寝ぼけているのかサイレンを目覚まし時計の音と勘違いし止めようと手を伸ばす。次第に体が傾いていき――

「いだっ！」

主翼から落っこちた。

「いたた…て、警報鳴ってるじゃない」

慌てて立ち上がりハンガーを出る。格納庫Ⅰつ離れたところに皆が集まっていた。メビウスⅠもそれに急いで加わる。

「敵は？」

「超高速型が一機よ。でもあなたには遅い相手かも」

「現在シャーリーが先行、遅れて宮藤とリーネが向かっている」

美緒は地図を広げそこにネウロイの今までの進路と予測進路を書いていく。その線上には首都ロンドン。

「やはり首都が狙いか」

「しかも相手は超高速型。一撃離脱の拠点爆撃でもするつもりか？」

「やつらにそんな知性があるとは思えない。だがスピード勝負なのは確かだ」

「聞こえるかシャーリー！ お前のスピードを見せてやれ！」

《了解！》

シャーリーの声が通信越しに聞こえてくる。勝敗のカギは彼女の手にかかった。

「私も準備しておきます。少し心配ですがファントムⅡで待機します」

「らぶたに乘らないのか？」

「……………相棒には悪いけど、今日は乗りたくない」

先ほどの訓練のことを思い出し変な汗をかいているメビウスを見てミーナは、結構トラウマになってるのね……とそっと呟いた。小走りでF-4Eが駐機してあるハンガーに入る。かけてあるパイロットスーツを着る。と、何やら慌てた様子でバルクホルンが走ってきた。

「大変だ！ リベリアンのやつ壊れた機体で出撃したんだ！」

「は？……はあ!? 整備班は何してたの！」

「それが整備し終えたやつをルツキーニが壊したそうだ」

あのお転婆娘は何してんだ！ と心の中で叫ぶ。とにかくまずいことになった。今のシャリーリーの機体はいつ止まってもおかしくない状況だ。整備不良の機体では生き残ることなんてできない！

「だつたらすぐに呼び戻して」

「今やっているが通信が繋がらないんだ」

こんなときに！ と思いながら思わず舌打ちをする。

敵は超高速型。シャリーリーの機体だと追いつける。だけどそのシャリーリーの機体が壊れかけている。後続の宮藤とリーネだとスピードが足りない。このままでは首都は壊滅してしまう。

答えは一つしかなかった。

「俺がすぐに出る。ハンガーのシャッター開ける！」

急いでパイロットスーツに着替え、コックピットに乗り込む。ファントムIIを起動させる。その間にハンガーのシャッターが開いた。眩しい光が中に入ってくる。

「各部異常なし。エンジンは……今は問題なし。って、おいおいおい待て待て。なんでそれ着てんだ。そしてなんで乗り込むんだバルクホルン」

機器のチェックを進めている途中何かが乗り込む揺れがあったから後ろを確認すると、そこにはパイロットスーツを着込んだバルクホルンが座っていた。

「これは二人乗りなのだろう？ なら私も同行したほうがいいはずだ！」

バツと手に持つものを私に見せてくる。それは以前私がシャ-

リーに渡したフライトマニュアルだった。なんであなたが持つてるの、と思いつながらこんな無駄なことに時間を潰している暇はないと自身を律する。

「あゝもう分かりました！ でもこれだけは言わせて」

「なんだ？」

「吐くなよ」

「誰が吐くか！」

メビウス1は前席を降りて後部席のバルクホルンのスーツの着込み、ヘルメットとマスクの装着、シートベルトを着ける。最後にメビウス1は言った。

「足元に赤いレバーがあるでしょう。それは脱出用のレバーよ。それを引けば緊急時に機体から脱出できるわ」

「風防は開けなくていいのか？」

「それ引いたときにキャノピーが吹っ飛ぶから大丈夫よ。でも体は曲げないでね。でないと骨折するから」

緊急時のことを考えてバルクホルンに脱出の手順を説明する。一通り終えた後自身も機体へ乗り込みキャノピーを閉めた。機器の最終チェックを済ませ機体をハンガーから出す。

「こちらメビウス1、これよりバルクホルンと共にシャーリーを追う。彼女に連絡後は敵の追撃に移行する」

《《お願いします。二人とも気を付けて》》

「メビウス1、了解」

「ああ、任せえてくれミーナ」

短い会話で済ませる。F-4Eは滑走路へと移動する。

「メビウス1、これより離陸する」

エンジンを回し、機体を上昇させる。十分な高度まで上がり管制塔につなげる。

「管制塔。敵の位置を教えてください」

《敵は現在ここから方位020の方角にいます。進路からして北海を目指しているようです。その後方にイエーガー大尉。その後ろに宮藤軍曹とリーネ軍曹が追っています》

「了解した。いくぞバルクホルン」
「了解」

機首を方位020に向ける。今回はエンジンの調子も考えてアフターバーナーは使えない。しかし音速をギリギリ超えない遷音速で急ぐ。

「レーダーに感。手前に2つ。その先に1つ」

バルクホルンの知らせを聞いて機体を少し傾けて下を見る。自分たちの下方およそ1000メートル下を飛んでいた宮藤とリーネを追い越した。いや、それよりも

「ちよつと待て。なんで水着なんだ」

自分たちは戦争をしているのにあまりにも場違いな格好をしているので頭を痛める。彼女たちを追い越して先に進む。

「レーダーだとそろそろシャーリーに追いつくぞ」

「あいつを探してくれ。俺も探す」

機体を減速させてメビウスとバルクホルンはそれぞれの視点でシャーリーを探す。が、なかなか見つからない。ということは雲の中かその下を飛んでいるのだろうか？ そう思い機体を傾かせて下を見る。

「メビウスあそこだ。私たちより前方」

バルクホルンがシャーリーを見つけたようだ。そちらを見ると小さい人が高速で空を飛んでいる。

「確認した。通信は繋がるか？」

「シャーリー聞こえるか？ 返事しろ！ 《ガガガツ、ザザ》 くそ、だめだ」

「接近すればどうにかなるはずだ」

操縦桿を操作して、今も加速を続けているシャーリーの隣に着けるように機体を加速させる。

(なんだか速いな。時速800kmを超えている…?)

シャーリーを見ながらメビウス1はふと思った。明らかに彼女のスピードはいつも見る速さでないからだ。HUDを確認する。自身の今の速さは時速1000km。……………1000!?

「あいつどんだけ無茶してんだ!？」

「どうしたメビウス。何があつた？」

思わず大声を上げていた。今自分たちはシャーリーと並走している。だからF-4Eとシャーリーは同じ速度で飛んでいるということだ。そして、その速度はすでにシャーリーの機体P-51DMスタングの限界を大きく超えている。どうやったらそんなことできるのか知らないがこれではいつ空中分解してもおかしくない。

「早くシャーリーを止めるんだ。あいつのストライカーいつ壊れてもおかしくないぞ！」

「なんだって!? おい! リベリアン! 聞こえたら応答しろ!」

バルクホルンが怒鳴りつける。しばらくのあとこちらに気付いたのか顔を振り向かせた。

ものすごい笑顔で

《あれ? なんでそれで来てるんだ?》

「よく聞けシャーリー。お前のストライカーだが《それよりもさメビウス》なんだ？」

シャーリーが何か言いたげだったのでメビウスは聞いてやることにした。あとになって思う。あの時自分はシャーリーに強引にでも基地に帰るように言つとけばよかつた、と。

《私。今日のは行ける気がする!》

「なにが?」

《音速の世界さ!》

「……………は?」

いきなりそんなこと言われてメビウスとバルクホルンは共に言葉を失う。ただメビウスはこのあと彼女がとる行動を今までの彼女から考察し、彼女を止めようとする。が、あまりにも遅すぎた。

「待てシャーリー! お前の機体は」

《見ててくれよ? イツケー……!!!》

メビウスの制止を聞かずシャーリーは自身のストライカーに魔力をありつたけ注ぎ込む。その瞬間、ボツ! という音と鈍い振動が伝わってくる。シャーリーは傘状の雲を造りだし、メビウスとバル

クホルンが乗るF-4EファントムIIを易々と超える速さで行ってしまった。

「なんだ？　なにが起こった？」

状況の理解が追いつかないバルクホルン。そんな彼女にメビウス1はしゃべり始めた。

「あいつ……本当に音速を超えやがった」

「ほんとうかそれは？」

「ああ。間違いない」

何より加速する瞬間に彼女を包み込んだ雲。音速を超えたこと発生するソニックブームをハッキリと見ていた。まさか本当に音速を超えるとは思わなかった。魔法を使っているとはいえ、レシプロ機がモデルのストライカーで音速を超えたことに少しの間ボーっとしていたがすぐに現実に戻った。

「は！　こうしている場合じゃなかった。追うぞ。あいつの機体、絶対壊れる」

「な、そんなにまずい状態なのか!？」

「ストライカーの強度は音速用ではない。もしそれで無理にスピード出したら……」

強度が足りずに空中分解する。そのことにバルクホルンはぞっとする。今のあいつは自分で自分の首を絞めているのと変わらないのだ。

「急ぐぞメビウス！　あのバカを止めるぞ！」

「了解だ。加速して——ん？」

前方になにやら点が見えた。それは空中を舞っている。少なくともネウロイではない。なんだ？　そう思い、やけに小さいなにかを凝視する。

それは音速突破したことにより剥がれ落ちたストライカーの装甲の一部。

「やっべ!!！」

「うわ!?　どうしたいきなり」

急いで機体の向きを変えようと動かす。だがその努力もむなしく。

鉄屑はF-4Eの左エアインテークへと吸い込まれた。瞬間、内部からガガガガガガギギギ!!! と鉄同士がぶつかりあい、擦れ、傷つき、引き裂かれる音が響く。コックピットではアラートがけたたましく鳴り響いた。

「なんだ!?!」

「左のエアインテークにゴミが入った! 左エンジン停止!」

「脱出するか!?!」

「いや、まだ右エンジンは生きているから問題ない。自力で基地に戻る。それよりもシャーリーと連絡は?」

「今やっている! 聞こえるかシャーリー。基地に戻れ!」

バルクホルンは繰り返しシャーリーに言う。しかし

《《ヒヤツホオオオウ! 最高だぜえええ!!》》

明らかに自分の世界に入っている彼女に対しメビウスとバルクホルンは

「二人の話を聞けえええー!!!」

怒り交じりでマイクに怒鳴った。どうかして彼女に追いつきたいが今の状態では無理だ。悔しいが諦めるしかない。

「あとは宮藤たちに任せるしかない。ミーナきこえるか。エンジントラブルにより帰投する」

《《大丈夫なの?》》

「問題ない。あとは宮藤たちに任せる」

《《分かりました。宮藤さん、リーネさんあとはお願い》》

《《了解!》》

シャーリーのことは宮藤たちに任せて自分たちは基地に戻った。

その後、音速を突破したシャーリーはネウロイに突っ込みネウロイは破壊。しかしその衝撃で気絶してしまうがあとから来た宮藤たちに助けられた。メビウスとバルクホルンが乗るF-4EファントムIIは無事に基地に帰還することができた。

すべて一件落着! と思いたいのだが、扶桑酒を飲むメビウスは

まったく思っていなかった。

「今日の飛行で気を付ければあと2〜3回飛べると思ったのに、シャーリーの機体の破片吸い込んだせいでエンジンがイカレテしまったのよ。たしかに整備できない以上どんだん消耗して動けなくなるけど、だからといってこんなことでダメになるなんて。それにシャーリーもシャーリーです！ 彼女は少し自重してほしいと言いますか……………」

今日は珍しくメビウスのほうが酔っている。彼女は先ほどからずっとマシンガントークでいろいろとしゃべっていた。その後眠ってしまったメビウスにバルクホルンは眠った彼女に毛布を掛けた。

「眠ってしまったな」

「ええ。まさか彼女が酔うなんて思わなかったけどね」

「壊れたあの機体はどうする？ そのままにするのも邪魔なだけだぞ」

「それはメビウスさんに聞かないと分からないわ」

今日でF-4Eが飛べなくなりその後どうするか明日にしようとするミーナたちは話した。その間メビウスの夢の中

『うう。不本意とはいえ借りていた奴を壊しちゃった。どうすれば……………』

目が覚めるまですつと頭を痛めていた。

メビウスとは対照的にシャーリーはとてもつやつやした顔で安らかに眠っていた。

第22話 「闇に潜む敵」

1944年8月10日 21:00

雨天時の空は二つの世界が存在する。一つは皆がよく知る雨が降る光景。今は夜なのでただでさえ暗い夜は闇に一層近くなる。しかし雲を挟んだ上は光景が一変する。雨を降らす雲は雲海となり、雲一つない星々と月が輝く夜空が広がっている。

その中を一機の飛行機が飛んでいる。

カールスラントが開発した Ju 52 輸送機 だ。原型機 (Ju 52/1m) は1930年に単発で初飛行したが、1932年に BMWのエンジンを3発にすることによって性能が向上した。カールスラント空軍の兵士たちの間では『Tante Ju (タンテ・ユー)』と「ユーおばさん」の意』と呼ばれ親しまれている。

「むう……」

「不機嫌さが顔に出ているわよ、美緒」

正面に座っていたミーナが笑顔で窘める。だが、坂本の表情は変わらない。

「わざわざ呼び出されて来てみれば予算の削減なんて言われたんだ。顔にも出るだろう」

「彼らも焦っているのよ。いつも私たちが戦果を挙げられてわね」

「奴らが見ているのは自分の足元だけだ」

「戦争屋なんてあんなものよ。もしネウロイがいなかったら、あの人達、今頃人間同士で戦いあっているのかもね」

「さながら世界大戦か……笑えんな」

ありえたかもしれない世界。いつもなら鼻で笑う坂本だがしなかった。何故ならそんな地獄のような世界を体験した人物を知っているから。

「すまないな、宮藤。せっかくブリタニアの街並みを見せようと連れてきたのに」

宮藤が休暇だったのでロンドンの町を見せてあげたいと思い同行させたが、上層部との会議だけで時間を費やしてしまった。航空機の

窓から外を見ていた宮藤は「大丈夫です」とだけ返事を返す。

「……あれ？ これって」

インカムから聞こえてくる透き通るような歌声が聞こえてくる。

「んっ？ ああ、これはサーニヤの歌だ。基地に近づいてきたな」

「私たちを迎えに来てくれたのよ」

機体の窓から外を見る。そこにはJ u 5 2と並んで飛行するサーニヤを見つめる。宮藤は窓越しからサーニヤに手を振る。それを見た彼女は顔を染めて雲の中へと隠れてしまった。

「……サーニヤちゃんってなんか照れ屋さんですよね？」

「ふふ、とてもいい子よ。歌も上手でしょ」

ミーナが微笑んだ。と、その時

「……あら？」

先ほどまで聞こえていたサーニヤの歌声が止まった。

「どうした、サーニヤ？」

「シリウスの方角に、所属不明の飛行体、接近してきます」

謎の飛行体……おそらくネウロイだろう。だがこちらのレーダーや基地のレーダーに反応しないなんて今までなかった。例外は存在したが。

「私には見えないな」

「雲の中です。視認するのは難しいかと。会敵まであと3分」

「そうか……」

「ど、どうすればいいんですか!？」

「どうにもできないな。なにせ私たちはストライカーを持っていないからな」

そんなく、と宮藤はこの緊急時に何もできないことを悔やむ。その間にミーナはサーニヤに援護が来るまで時間を稼ぐよう指示を出す。

「はい、目標を引き離します」

サーニヤはJ u 5 2から距離を取り、目標の迎撃に向かった。高度を上げて感覚を研ぎ澄ます。彼女の固有魔法：の電波を出し、接近中の飛行体の正確な位置を把握する。

「……あ」

赤く輝く、ネウロイが高速接近しているのをサーニャは捉えた。機敏な動きでフリーガーハマーを構え、引き金を引く。

放たれる二発の時限式ロケット弾。目標の未来予測位置に向かい光球が生まれ、雲海に大穴ができる。

「反撃して……こない？」

サーニャは疑問に思う。今まで多くのネウロイと戦ってきたがこちらの攻撃を受けて反撃してこないものはいなかった。でも、目標はこちらへと接近を続ける。近づかせないようにまたロケット弾を発射する。先ほどと同じように雲に大穴ができるが命中しない。

もう一度狙いを定めようとする。雲の下から轟音が聞こえてくる。基地の方角から目標の飛行体よりも速いスピードで接近する別の反応がある。思い当たるのはつい昨日届いたものだ。とすぐに思い出した。通信が入る。

《こちらメビウス1。これより支援攻撃を行います》

接近中のネウロイのすぐ目の前の雲に数多の小さい穴ができる。メビウス1が敵の進路を塞ぐように機銃を掃射したのだ。それを回避したときに生まれた一瞬の隙を見逃さない。

「……発射」

放たれた2発のロケット弾が狙った場所で爆発する。

「……………命中。ですが損傷は軽微のようです」

さきほどのロケット弾が敵の近くで爆発したようだがあまりダメージを与えていないようだ。

「……………目標。遠ざかります」

《そのようですね。こちらでも確認できます。それではあとは彼女たちに任せますので私は先に基地に戻ります》

「ありがとう。それにサーニャさんも」

ミーナはサーニャとメビウスにお礼を言う。その後、エイラたちと合流して周辺を警戒したがなにも起こらなかった。

ミーティングルームに集まり今日の報告をしていた。

「では、ネウロイはサーニヤしか見ていないのか？」

「ああ、雲の中にいて発見できなかった」

雨天の中出撃したため帰還したとき全員びしょ濡れだったから、着替えて私服姿の人が多し。かくいうメビウス1は昨日届いてしまった機体の試運転も兼ねて出たからいつもの服装だ。

「あれ？ メビウスさんは見てないんですか？ 攻撃してましたよね」

「あれはレーダーに映っているのを捉えただけで直接は見てないわ」
「雲に隠れていても大体の位置が分かるって便利だよね」

何故敵の位置が分かったかを簡単に説明しハルトマンが素直な感想を述べる。ま、彼女の言いたいことは分からなくもない。F-22Aやあの機体に積まれているレーダーは今の時代の物よりも性能が高いから。

「何かほかに意見はないか？」

「ちようど似た者同士、気でも合ったんじゃないでしょうか？ あいた」

「少しは言葉に気を付けなさい」

「申し訳ありません…」

ペリーヌが横目でサーニヤを見ながら、一見丁寧そうに聞こえて、結構辛辣な意見を述べたので、メビウスが彼女の頭を軽く叩いて叱る。

「……ネウロイとは何か」

ミーナのつぶやきで、全員の視線が彼女に集まる。

「有史以来人類が敵と認識しているネウロイ。でも、その正体は全く分かっていないわ」

彼女たちの話を聞く限り、この世界では古くからネウロイとの戦いが繰り返されてきたのだろう。

「そこではばらく夜間戦闘を想定したシフトを敷きます。サーニヤさんと宮藤さん、当面の間、あなた達を夜間専従班に任命します」

「は？」

「え、私もですか？」

なんで私が？ と芳佳は戸惑う。

「今回の戦闘を見ているからな。それに宮藤だけが夜間飛行の訓練をしていないからちようどいいだろう」

「いやでも……むぎゅー」

芳佳は自信がないことをミーナに告げようとしたその時、エイラがソファアの後ろから芳佳の頭の上にのしかかり、手を挙げた。

「はいはいはい！ 私もやるー」

もともと宮藤だけに任せるつもりではなかったミーナは自推してきたエイラを選んだ。

「いいわ。ではエイラさんも含んで三人ね」

笑いをこらえてミーナは言った。

「そういえば、メビウスは夜間飛行できないのか？ お前の機体のレーダー性能があればサーニヤの索敵能力と相性はいいと思うのだが…」

確かに相棒のレーダーの効果範囲は前方で最大250kmだ。側面と後方はそれより距離が縮まるが、それでも十分な範囲をカバーできる。メビウスとサーニヤの2人で行動すれば夜間の哨戒任務の効率は大幅に上がるだろう。だが、そこに問題が1つある。

「できるけど、ラプターだと最低一日は休ませないといけないし、それとあれを毎日飛ばすと一週間でポンコツになるよ」

「やはりそううまくはいかないか…」

緊急時に飛ばないととなると問題になるから、夜間飛行はあの3人に任せることに決まった。

夜遅い時間。夜間哨戒の続きをしようとサーニヤとエイラが準備をしていた。今日はもう遅いので宮藤は明日からの参加になる。誰もいないはずの格納庫に入るとそこには先客がいた。

「メビウスさん？」

「何やってんだこんなところぞ？」

彼女のストライカー。F-22Aラプターの傍にメビウスが座っていたのだ。その横には寝袋のようなものもある。

「しばらくはここで寝ようと思ってね。いつでも出れるようにさ」

今日の出来事で自分もどうかしていたとメビウスは反省していた。ジェット機は夜間でも飛行可能にできている。敵も夜に夜襲を仕掛けてくることも考えられる。だからこれからは部屋に戻らずここで寝ることにした。それでもやはり一人でどうにかするには人手が足りない。でもここで誰かをお願いするわけにもいかない(あの女神ならやりかねない)

「AWACSさえ居ればなあ」

「? エーワークスってなんだ?」

「簡単に言うと、空飛ぶ管制官だよ。戦闘の指揮を任されている」

「メビウスさんの世界でいうミーナ隊長みたいな存在ですか?」

サーニヤがAWACSのことをミーナに見立てて言う。うーん、正確に言うとは違う気がする。

「戦闘の指揮を後方から指示するのが役割かな。能力でいうなら、ミーナの空間把握とサーニヤの全方位広域探査の二つを駆使して、安全な場所から私たちに指示を出すんだ」

「……すごい」

「イヤイヤ。それなんて奴ダヨ。二つの固有魔法持ちって」

「あはは。君たちから見ればすごいすぎかもね」

ここにいないスカイアイのことを思い出しながら少しだけ苦笑した。

「メビウスさん」

「ん?」

「あの時は、ありがとうございます」

あの時……ああ、さっきの戦闘の事か。

「あれは敵の足を止めただけだから、そんなに畏まらなくても」

「でもそれでダメージを負わせることが出来ました」

「皆が無事ならそれで十分さ。ん」

サーニヤと二人で会話をしていたがふと見ると、エイラがブスツと頬を膨らませて妬ましそうにこちらを見ている。ああ、またか。と思いながら会話を終わらせる。

第22. 5話 「肝油とサウナ」

1944年8月18日 9:00

宮藤が夜間飛行に参加してから1週間が過ぎた。あのとき遭遇したネウロイは姿を見せていない。そのかわり昼間ではいつもと同じように不規則な出現となっているネウロイを迎撃した。

そして今、食堂に集まっている。

「……なんですのこれは？」

ペリーヌは目の前に置かれたものをまじまじと見て疑問の眼差しを向ける。そこにはお猪口に注がれたなにやら粘度の高い液体が置いてある。

「ヤツメウナギの肝油です。ビタミンが多くて目にいいですよ」

「………なんだか生臭いぞ」

慎重に匂いを嗅いだハルトマンが疑念の表情を浮かべる。

「魚の油だからな。栄養があるなら味など関係ない」

その横では「大丈夫だ。問題ない」とは言わないがそんな顔でバルクホルンは肝油に口をつける。

「おほほほほほ！ いかにも宮藤さんらしい、野暮ったいチョイスですこと！」

「いや、持ってきたのは私なのだが」

宮藤の後ろにいた美緒が告げる。一瞬、ビシツと体が固まったかのようにになる。

「ありがたくいただきますわ！」

そしてペリーヌは、あたかも毒ニンジンをおろすソクラテスのように肝油を一気に飲み干した。

「う!?!」

とたん、顔面蒼白になり悶絶する。

「うえ〜！ 何これ〜!?!」

「エンジンオイルにこんなのがあったっけな」

舌をだし、表情も隠さずまずいと表現するルッキーニと、その横でシャーリーが顔をしかめながらソムリエよろしく肝油の味の感想を

述べる。エンジンオイルを飲んだことあるのかと皆が思うが口には出さなかった。そんな余裕がないのだ。

「ペッ！・ペッ！」

吐きだすエイラの横には無言で凍りつくサーニヤの姿。

「新米だったころは無理矢理飲まされて往生したものだ」

「……お気持ち、お察しいたしますわ」

みんなの反応に坂本は笑って頭を掻いた。気まずい雰囲気ではないのに空気が重い。

「あれ？ リーネちゃんは？」

いつの間にかいなくなっていたリーネに気が付く。すぐに答えが返ってきた。

「リーネなら口をおさえて出て行った」

「そ、そうなんだ……大丈夫かな」

「……………まずい」

栄養があるなら——と豪語していたバルクホルンは、顔面蒼白を通り越して灰色に近くなりつつある。Wエースの2人がもの見事に撃墜されてしまった強敵、肝油。無言の時間が続く中

「もう一杯！」

「おかわり」

ただ2人。上機嫌にお代わりを要求するミーナ中佐と全く動じていない顔というメビウス1。

その場に居合わせた坂本以外の全員が隊長2人（メビウスは厳密には違うが原隊の隊長という意味で）に対し、尊敬の念を抱いたのは言うまでもない。

仮眠を済ませた宮藤はエイラの勧めで初めてのサウナを体験していた。しかしお湯に浸かるのが一般的なお風呂と違いサウナは高温と高湿度だからすぐには慣れない。でも体の芯から温まる感じは同じだと感じ取っていた。

エイラとサーニヤはサウナを満喫している中、サウナ部屋の隅っこ

で正座を組み、目を閉じて何やらぶつぶつ呟いている人物が一人いる。

「379	383	389	397	401	409	419	42
1	431	433	439	443	449	457	461
4	63	467	479	487	491	499	503
9	521	523	541	547	557	563	569
5	71	577	587	593	599	601	607
3	617	619	631	641	643	647	653
6	59	661	673	677	683	691	701
7	0						
9

「.....なにやっているでしょうか、あれ？」

「さあ？」

宮藤たちがサウナに入ったときすでにメビウス1が先客としていたのだ。といってもサウナに入ってからあまり時間は経っていないときに宮藤たちがやってきた。退出しようとするところを宮藤に捕まったのだ。彼女の抵抗も空しく一緒にサウナに入ることになったのだ。それからずっと彼女は数字を数えている。

（おちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけおちつけ）

当のメビウス1は葛藤の真っ只中にいた。サウナ存在を知ったとき素直に入りたいと思っていた。実をいうとメビウス1は一度もサウナに入ったことがないのだ。軍に入ってからそんな機会などゼロに等しく。別に入りたいと強く思うこともなかった。だが、この基地にサウナが完備されていると知ったとき行動は早かった。

そして、入り少し温まったとき宮藤たち夜組の3人が入ってきたのだ。平静を装いながらすぐ出ようとしたが、3人に捕まってしまったのだ。いや、気持ちは分かるよ？ 外見女だし、口調も女だけど私男なんですよー!! 目を開いたら負けだ、見た瞬間ストーンヘンジに墜とされる覚悟を持って、そうだ落ち着くには素数を数えるといいつてスカイアイが言ったぞ。

.....とまあ始まった素数のカウント。今は100桁に到達して

いるが全然落ち着かない。

「あの、メビウスさん」

「なに？」

「サーニヤが何か聞きたいんだってサ。それとなんで目瞑ってんだ」
「聞かないで、いろいろ面倒だから」

素数を数えるのを止める。目は開けないように開けないように

「メビウスさんの国……『ノースポイント』はどんな国ですか？」

「どうしてそれを知ってるの……!？」

「あーそういえばメビウスは知らないんだツタナ。随分前のこつくりさんのときに知ったんだよ」

「ああ……あのときね」

こつくりさん。今ではその言葉すら出すのも禁止とされ、とくにミーナの前でいうのは危険と暗黙の了解となっている。とくにオカルト関係で一番の被害者はメビウス1だったのだから笑えたものではない。こつくりさんは質問に霊が答えるらしいからそのときに分かったのだろう。出身地が知れるのはこちらとしてはまずいが知ってしまったのだからしょうがない。と割り切ることにした。

「ノースポイントは、簡単に言うなら島国かな。四季があつて、その時々々の季節に見える光景が美しいんだ……」

メビウス1は自分が伝えられる限りの故郷についてのことを話した。歴史とかそういうものを教えても分からないだろうと思ひ、自然と食文化の話になってしまった。

「メビウスさんの国って、私の国となんだか似てますよね」

「扶桑が？」

「はい。刺身に鍋、ほかに季節の移り変わりとかいろいろ似てるものがありましたし」

言われてみるとそうかもしれない。実際に扶桑を見ないと断言できないうえ、ノースポイントと扶桑は似通っているところが多い。

「帰りたい……ですか？ 故郷に」

「そりゃあね。向こうにいるあいつらのためにも、こんなところにくたばりたくないし」

「あいつらってメビウスの部隊のことか？　なあ、一体どんな奴がいるんだ？」

「私を含めた8人だよ。前はその倍の人数がいましたが、部隊編成の見直しで減りました」

大陸戦争終戦後、極秘任務としてメガリスを叩く際に、ようやく皆のコールサインがメビウスになった。精鋭たち20人の部隊として戦ったが、その後経費削減等の見直しを兼て8人までとなったのだ。残りは原隊に復帰したが、有事の際にはメビウス隊として戻れるよう措置にしている。

そして、メビウス隊として最後まで残った8人が、ノースポイント防衛から終戦までメビウス1と共に空を駆け抜けた強者たちであるの言うまでもないだろう。

「私抜きで一番実力があるのは、メビウス8ですね」

「あれ、副隊長さんじゃないんですか？」

「メビウス2とメビウス8の実力は拮抗していてね。あいつのほうが紙一重強いかなあ」

「なんでその人が副隊長やらないんですか」

「ああ、それなんですけど………はあ………」
「??？」

頭に手を当てて、今までで一番の溜め息を吐くメビウス1を見る3人。しばらくしてメビウス1は話し始めた。

「メビウス8は本気を出せば私のスイッチを入れさせるほどの実力なんだ。もちろん副隊長のメビウス2も同じだけどな。だが、あいつの場合ある一点が評価を大きく落としてるんだ」

「ある一点？」

「とにかく壊すんだよ。部分的に破壊するんじゃないやなくて、機体そのものを壊すんだ。ついたあだ名が『不死身のベイルアウター』。本人はそれを誇りに思っているからいろんな意味で性質が悪い」

「はあー、とまた溜め息を漏らす。メビウス8………もとい、オメガ1の戦果はいろいろ悪い意味でずば抜けている。最初に大きな戦果を挙げたのがエイギル艦隊の空母ジオフォンを爆弾で戦闘行動不能

に、艦隊の防空の眼であるイージス艦レイヴンを脱出した機体をぶつけて撃沈させている。

ストーンヘンジ攻撃作戦のときはイジエった機体をストーンヘンジの砲口に入れて破壊させるなど奇天烈な方法でやってのけている。(さらにいうと、後日のブリーフィングにちやっかりいた。どうやって戻ってきたし)

極めつけはウイスキー回廊の敵野戦飛行場を攻撃するときA―10で出撃した後、イジェクトし敵基地に忍び込んで“Su―47ベルクト”で脱出したことは関係者以外知られていない。その時メビウス1は敵と勘違いして攻撃をかけたのを思い出す。撃墜させずに済んだのはよかったが、いろんな意味で心臓が悪い。いや、マジで！「よく壊すというなら、ニパも大概だよナ。いや、あつちは運が悪いだけカ」

「メビウスさんの周りの人たちは個性的な人が多いんですね」

「メビウス8さんかあ……どんな人かな。一度でいいから会ってみたいです」

「止めとけ。もしここに来たら人類の財政が崩壊するぞ。シャレにならない」

メビウス中隊の皆の話（といってもメビウス8の話が多くなったが）を終えた自分たちはサウナから出た。

「じゃあ、外で水浴びしに行くゾ。サウナのあとは裸で水浴びに限るんだ」

「止めてください死んでしまいます遠慮させてくださいお願いします」

「土下座するほど!?!」

丁重に断り、3人と別れた

第23話「仲間」

1944年8月18日 21:00

今日も同じように格納庫で臨戦態勢のまま待機する。夜間飛行組の3人はすでに空に飛んで行った。彼女たちが出て行ったあとすでに雲に覆われた空はしだいに泣き出した。出て行った3人のことを思うが、飛びだった時間と彼女たちの履くストライカーの性能からすでに雲の上にいるから濡れていないだろう。

「雨の時に相棒を出したくないなあ」

雨音を聞きながら呟く。ステルス塗料で塗られた機体にとって水は天敵だ。もし雨の中だとステルス性能が低下し敵に見つかりやすくなる。

「サーニヤに言われたけど、もしもの時は私が出ないと」

飛び立つ前の彼女に言われていた。

『この前のネウロイは高速型でしたが通常型のネウロイでした。もし出てきても私たちが何とかしますのでそのまま待機してください』
『まあ、そうなんですよね。そんなにはいはい出せる機体じゃありませんし……』

機体の温存も兼て、もし出てきても問題が無い限り待機することになった。1人デツキチエアに寝ながら置いてあったコーラ瓶のふたを開ける。自分の世界の物より少し炭酸が強いそれを咳き込みながら飲む。

「ごめんなさいね。昼夜問わずあなたに無理させてしまつて」

「ミーナ」

ポッドと小さい鞆を手にミーナが来た。この香りはレモンティーだ。それに鞆をあけるとそこには見慣れたものが入っている。

「チエス？」

「そ。今日はもうすることもないし、少しだけお相手願えるかしら？」
「む」

あからさまな挑戦状——といつてもそんな大それたものではないが、少しばかりやる気が出てくる。

「いいよ。やろう」

「やり方は知っているのかしら？」

「それぞれの駒の動きがあんまり。私は将棋のほう知ってるし」

「そう。まず、ポーンは——」

ところ変わって、ウィッチ控室

「トウルーデは強さだろうね」

「否定はしないが、お前もそうじゃないか」

「私はそんなにこだわっていないしな—」

「なら私はどうだ？」

「お前はイレギュラーだ。どうせスピードだろう」

「はは。違うないね」

バルクホルン、ハルトマン、シャーリーの3人はあることについて話していた。その中に様子を見に来た美緒がやってくる。

「お前たちは何をしているのだ」

「いや、メビウスから聞いたエースについて皆がどれに当てはまるか話してたんだよ」

「ほう、それは興味深いな。一体どんなものだ？」

バルクホルンが説明する。

エースとは3つに別けられる

『強さ』で戦う者・『誇り』を持つ者・『戦況』を見極める者

この3つだ。

「少佐は戦況がよめるタイプだろうな」

「いやいや、トウルーデと同じ強さかもしれないよ？ 毎日鍛錬して

いるしや」

「一概には当てはまらないのかもしれないな。私みたいにイレギュラーがあるしな」（ドヤア）

「それ自慢になる？ て、少佐どうしたの？ そんな真剣な顔して」

見ると美緒はいつもとは違う真剣な顔をして考え事をしていた。

「それは本当にメビウスが言ったのか？」
「ああ、そうだ。なにか思い当たることでも？」
「いや、なんでもない。エースは3つに別けられる。『強さ』で戦う者・『誇り』を持つ者・『戦況』を見極める者、か……」
美緒は外に顔を向ける。メビウスの言っていた言葉のどこに反応したのか私たちには分からない。一つだけ言えることは、彼女がその言葉を繰り返したとき、少しだけ嬉しそうな顔をしていた。

夜に瞬く星空の中を宮藤、エイラ、サーニヤの3人は飛んでいる。
「ねえ、聞いて」

しばらく何も無い空を飛んでいると、宮藤が唐突に呟いた。

「今日はね、私の誕生日なの」

「えっ？」

突然の告白に驚くサーニヤ。

「何で黙ってたんだよ。誕生日をみんなで祝えないじゃないか」
「うん、でも……私の誕生日は……お父さんの命日でもあるの」
「……………」

黙り込む二人。宮藤の父——宮藤一郎は現在使用しているストライカー、「宮藤理論式ストライカーユニット」の開発者である。しかし彼は大戦が始まる直前、事故で亡くなったのだった。

「……………ばかだなあ」

やがて、エイラがポツリとつぶやく。

「こくゆく時は楽しいことを優先したっていいんだぞ」
「そういうもの……かな？」
「エイラの言う通りよ、宮藤さん」

サーニヤがは続ける。

「それに、お父さんも宮藤さんの誕生日を祝ってくれているはずだもの」

「そ……そう？」

「無線の周波数を変えて」

「え？ うん、分かった」

宮藤は無線の周波数を変える。変わる瞬間

《チエックメイト。これで3連勝》

《く……まだだ！ まだ終わらんよ！》

《ほんと負けず嫌いね》

緊急時に連絡がメビウスさんに伝わるよう繋げっぱなしの無線から向こうの音が聞こえてきた。少し気になるがあとにしよう。

耳を澄ますと無線機から人の声と音楽が聞こえてきた。

「夜になると空が静まるから、ずっと遠くの山や地平線からの電波も、聞こえてくるんだ」

「へえ〜！ 凄いなあ〜！」

宮藤はそう言うと、静かに異国の音楽に聞き耳を立てる。その横で、エイラは彼女の耳に入らないよう小声でサーニヤにささやいた。

「サーニヤ、二人だけの秘密じゃなかったのかよ？」

「ごめんね。でも、今夜は特別」

「ちえつ、しょうがないな〜」

微笑むサーニヤを見て、エイラは渋々と引き下がった。と、そのとき

「——え？」

「なに」

「どうしたんだサーニヤ？」

「なに、これ……どうして？ うう」

「サーニヤ！」

頭を押さえて苦しみだすサーニヤを抱えるエイラ。その後まもなく、サーニヤのナイトウィッチの証である魔道針がグニヤリと曲がり、消滅した。

「どうしたの、サーニヤちゃん!？」

「分からない……能力が、使えないの」

「使えないって……どういことだよ!？」

「分からないわ。なんだか、頭の中がいきなり真っ白に」

いきなりというのは少し語弊があった。正確には、彼女たちの進行

方向から見て4時の方角が突然“見えなくなった”。さらに8時方向、最後に12時(前方)方向が見えなくなった。何者かに頭をいじられたような感覚に気分が悪くなる。

「とりあえず急いで基地に戻るゾ！」

「待ってください。なにか聞こえませんか？」

「これは……」

宮藤の指摘に無線機の音を聞く。そこから聞こえるのはいつも彼女たちが耳にしている歌。だけど、それにしてはどこか機械的な音で

「なんで……なんでサーニヤの歌が聞こえてくるんだ!？」

それはまさしく、普段サーニヤが歌っている歌そのものだった。

同時刻。501基地管制塔でも、ネウロイの声を捉えていた。

「これが……ネウロイの声……?」

急いで管制室に入ったミーナはスピーカーから流れてくる歌を聞きながら、困惑する。今までネウロイは鳴き声らしき声を上げていたことはあつたが、今回の様に歌を歌うという行為はいままでなかったのだ。

「すぐに呼び戻せ！」

「無理よ！ 通信が繋がらないし、どこにいいのかも……」

段階的にレーダーの画面が真っ白になり、通信も繋がらない。変わりに歌だけがスピーカーから響いてくる。

《おいミーナ、聞こえるか》

「メビウスさん?」

《こつちもレーダーを確認した。間違いない、こいつは電子戦機だ》

「電子戦機だと? なんだそれは」

電子戦機とは、電子戦を重視して設計・装備された航空機のことだ。ただ電子戦機にも種類が存在する。大きく味方を支援する機体、敵の妨害をする機体の2つが挙げられる。おそらくこいつらは後者だ。

《俺は妨害電波を出している敵を叩く。寝ている奴ら叩き起こし

てサーニヤたちの救援に向かわせろ!」

「でもどこにいるのか……」

《んなこと知るか! 散開して目で探せ。手遅れになる前に!》

「分かったわ。それまでお願い!」

《了解した。メビウス1。出るぞ》

ミーナと坂本は寝ている隊員たちを起こしに走り出す。その彼女たちを後押しするかのよう、メビウス1のF-22Aストライカーのエンジン音が聞こえてきた。

「少なくとも3機か。気持ち悪い」

雨に撃たれながらメビウス1は急上昇をしつつける。頭の中に移るレーダーは相変わらず真っ白だがジャミング電波からおよそ電子戦機は3機いることは確認できる。先に叩いておくとすれば、ガリア方面のジャミング電波だろう。いまレーダーの眼が聞かない間に敵が押し寄せてくるかもしれない。

雲を突き抜ける。アフターバーナーを点火、メビウス1が通ったあと雲海の雲が発生した衝撃波により裂ける。標的がいると思われる場所に移動する。夜、といっても今日は月が出ているから十分明るい。じっくりと目を凝らして探すとすぐに見つかった。

EA-6B プラウラー（うろつく者）

オーシアのグラメン社が開発した電子戦機。A-6 イントルーダー艦上攻撃機の改装型だ。

後継機であるEA-18G グラウラーが出回り少しずつ現役から引退しているらしい。それでも高い電波妨害能力を持っている。

だが、いくら電子戦において強者でも、戦闘能力においてF-22に圧倒的に劣る。

「まずは一つ」

メビウス1が持つ機関銃が火を噴いた。

同時刻。自身の能力の一部が回復したのをサーニャは確認した。すぐに魔導針を出す、まだ残っているジャミング電波のためか弱弱しく光っている。

接近する敵を何とか感知した。途切れ途切れの通信が入る。

《ネウロ——1——そっちに行——》

音が乱れた中で通信が切れた。

エイラの袖をつかむサーニャの指に、力が入る。

「私から離れて……一緒に居たら……」

「馬鹿！ 何言ってるんだ！」

エイラは怒鳴る。彼女には最初から仲間を、ましてやサーニャを見捨てるという選択肢などない。

「そんなこと、出来るわけないよ！」

それは宮藤も同じ。彼女も力強く首を横に振った。エイラはサーニャのフリーガーハマーをひったくった。

「エイラ……?」

「サーニャは私に、敵の居場所を教えてください。メビウスのやつがやってくればすぐに分かるはずだから」

「でも……」

「サーニャ」

エイラはサーニャをじっと見つめる。

「いつも一人で飛んでいるから忘れてるかもしれないけど、サーニャは1人ぼっちじゃないんだぞ。私たちがいるんだ。たまには頼ってもいい。それが仲間って奴だろう?」

「そうだよ、サーニャちゃん！」

「……うん」

エイラと宮藤。二人の笑顔を見て、サーニャは小さくうなずいた。「ネウロイはベガとアルタイルを結ぶ線の付近を、こちらに向かってる。距離はまだ正確には……」

「とりあえず撃って時間稼ぎだな」

サーニャの指示に従い、フリーガーハマーを構えるエイラ。だが、

敵が見えている訳ではないため合っているかどうか分からないがやるしかない。

「こっちくんな！」

フリーガーハマーから一発のロケット弾が発射される。それは真っ直ぐ進んでいき、雲に大穴を開けた。

「どうだ!？」

「爆発が早すぎた。そのまま近づいてくる」

「くそー！ 当たれよ！」

続けざまに3発発射。3つの火球が生まれるが、やはり敵が見えていない状態で撃つても当たるわけがない。

(まだか？ メビウス早くしてくれ!!)

このままではまずい。ジャミング電波の排除に動いているメビウス1にすべてが託されていた。

そのとき、レーダーに映っていた2つのジャミング電波の反応が同時に消えた。ジャミング電波が消えクリアーになったことで、サーニヤの魔導針が復活。敵の詳細な位置が分かる。

「ベガとアルタイルを結ぶ線の上を、真直ぐこちらに向かってる。距離約3200……」

「こっか？」

「もう少し手前。あと3秒……エイラー！」

「当たれ！」

残りの弾5発を全て発射する。設定された時間になった瞬間、大爆発が起こる。その火球の中から半壊になりながらネウロイが姿を現した。

フリーガーハマーを捨てたエイラーはMG42をネウロイに浴びせる。それでも速度は変わらない。ネウロイもこちらに反撃のビームを撃ってくるが、宮藤が張ったシールドに防がれる。

すると、2つの銃声が聞こえてきた。

「いっちばんのりく♪」

「今回は間に合ったようだな」

見ると横にバルクホルンとハルトマンが援護射撃を撃っていた。

その後、他の皆が駆けつけてきた。

「3人とも大丈夫？」

「無事かお前たち!？」

「芳佳ちゃん大丈夫？」

「おケガはありませんか？」

「遅れて参上！」

「うじゅー、いいから墜ちろー！」

サーニヤたちの周りには501のメンバーが揃っていた。全員がサーニヤたちを守るようにネウロイに攻撃を浴びせている。

「大丈夫！ 私たち勝てるよ！」

「それがチームだ。仲間だ！」

「……！」

サーニヤは宮藤が肩にかけていた九九式13耗機関銃を構え、援護射撃。

無数の破片を飛ばしながら崩壊してゆくネウロイ。その、剥き出しとなったコアにとどめの止めの一弾が命中した。

「……まだ聞こえる」

ネウロイが消えたはずの澄み渡った空に、サーニヤの歌が響いている。

「どういうことだ？」

「まさか、まだ他にネウロイが」

「……ちがう」

サーニヤは空を見上げると、月に向かって上昇していく。

「これは、お父様のピアノ」

「そうか！ ラジオだ！ この空のどこからか届いているんだ……す

ごい！ 奇跡だよー！」

「いや、そくでもないかも」

「えっ？」

興奮する宮藤に、エイラは言った。

「今日はサーニヤの誕生日だったんだ……正確には、昨日かな？」

エイラは腕時計で確かめる。既に零時を回っていた。

「えっ……じゃあ、私と一緒に……!?」

「そう言うことだ」

エイラは、頭の後ろで手を組んだ。

「宮藤さん」

宮藤はサーニヤの呼ばれ、振り向く。

月明りに照らされ、輝くサーニヤは告げた。

「お誕生日おめでとう」

「サーニヤちゃんも、お誕生日おめでとう！」

誕生日を迎えた二人は、微笑んだ。

一方。メビウス1は最後の一つのジャミング電波を発信していた敵がいたであろう空域に向かっていった。そう。メビウス1は最後の電子戦機だけ仕留めていなかった。2機目を撃墜したとき何故か3機目の反応が消えたのだ。そのかわりに、何やら小さい反応が1つだけレーダーに映っている。大きさはウィッチたちが映る時と同じくらいの大きさだ。その反応の場所にゆっくりと近づいてゆく。その間に、あることに気が付いた。

「……んん？ IFFに反応?」

この世界に来て今までなかった反応であった。明らかにネウロイではない。しかしこの世界で反応する物なんてない。

とすれば、可能性は1つ。

(まさか)

もしやと思い回線を開く。周波数はISAFのもの。

「所属不明機に告げる。貴機の所属を明らかにせよ」

《……良かった。通信が回復した》

《ひとまず安心だな。まったく、なんだったんだあの黒いグラウラーは》

通信越しに2つの声が聞こえてくる。レーダーをもう一度確認す

るが反応は1つだけだ。もしや、ステルスが一機紛れ込んでいる？

《と。済まない。こちらの所属を答えよう》

少し間を開けてメビウス1の質問に答えが返ってくる。聞いた瞬間、メビウス1は頭を痛めた。

《ISAF空軍所属の空中管制指揮官、コールサイン〃スカイアイ〃》

《ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス隊8番機〃メビウス8〃》

「……………まじか」

この時、メビウス1の心労がものすごく増えた、と思われる。いろいろな意味で

第24話「誕生日パーティー」

1944年8月19日17:00

厨房ではリーネ、ペリーヌ、エイラがせっせと調理をしていた。今夜は芳佳とサーニャの一日遅れの誕生日パーティーをやる。その準備をしていた。大体の料理は作り終わり、今メインのケーキを作っているところだ。だがここで少し問題が起きている。

「……なかなか固まりませんわ」

ペリーヌが担当していたポイップクリームができないのだ。ちゃんと冷やしながらかき混ぜてるがまだ七分立てにもなっていない。

「代わろうか?」

「いえ、この私がきっちり果たして見せますわ!」

エイラの助けを拒み、ペリーヌは泡立て器をかき回し続けた。

格納庫

「これでどうだい?」

「ふむ。これなら楽に装着できる。手間をかけてしまった。感謝してもしきれない」

「いやいやこっちは現場の要望に応えるだけさ。それに、これを造れるのはこのなかで私だけだからな」

格納庫の一角。ここではホームマーと金髪の女性が話している。女性の方は若干青いどこかの軍服を着ている。

「たしか、旧式のランドセル型だったか?」

「ええそうですよ。あのころは発動機を背中に背負って飛んでましたからね。宮藤理論が採用されてから見なくなっただけですが」

ホームマーは言葉を切り、目の前にあるランドセル型ストライカーに似たものを見つめる。それは今主流になっている宮藤理論とは違う形をしている。背中に飛ぶための翼、主翼が取り付けられ、さらにその場所にエンジンがある。現在主翼はエンジンの外側が折れている。さながら折り畳み式になっている状態だ。また、背中部分には60c

mくらいの円盤が取り付けられている。

「いや、未来の機体にまた採用されていると思うと、思うことがありましてな」

「我々の世界の国であるノースポイントに『古きを温め新しきを知る』という諺があります。昔の事柄の研究を通して、新しい意味や価値を再発見する。例え廃れたとしても、そこから新しいなにかを見出すことが出来ることもある」

「なるほど。意味深な言葉ですな。いい話聞きましたよ、スカイアイさん」

「こちらこそE-767の置き場所を造ってもらい感謝する」

金髪ショートボブの髪型をした女性、スカイアイは整備班長のホーマーとの会話を終わらし同じ格納庫内の人だからができている場所に向かった。

同型のF-22Aストライカーの前にバルクホルン、ハルトマン、美緒、ルツキーニ。そしてメビウスと襟首を捕まえられて取り押さえられているシャーリーがいた。

「いいかシャーリー。いくら1機増えたとはいえこれはISAFのものだ。こつちも火の車だからむやみに乗って壊されるわけにはいかないんだよ。わ・か・つ・た・な？」

「わ……分かった……もう乗らないから、いいからどいてくれ！

痛い痛い!!」

「懲りないやつだな」

一機増えたラプターに乗ろうとしていたシャーリーを捕まえて軽く説教をしていた。増えたほうの機体はメビウスが使うものと変わらな。ただ機体に増層がついていることだけが違いだった。

「増層タイプか。これで航続距離が延びるのか？」

「ああ。そのかわり、ステルス性は低下するがな。戦闘になったら切り離せば済む話だ」

「ねえー。もう1人の紹介はしないの？ スカイアイはしたのにさ」

「すまないな。明日まで待ってくれ。こっちにも事情がある」

「少佐が言うならしかないさ」

皆ちりぢりに去っていくのを見送りながら、メビウス1は美緒に小さい声でひっそりと伝える。

（恩に着る）

（ああ。あの顔をだといろいろ面倒だからな）

（繰り返すようで悪いが、そんなにそっくりなのか？）

（似すぎだ。中身は違いかもしれんが外見で違いを探すのに苦労するくらいだ）

昨日現れた2人は当初メビウス1の判断で皆に合わせずミーナと美緒だけに合わせた。スカイアイの方はすんなり通ったのだが、メビウス8のとき彼女たちの表情が一変したのだ。その理由が（カールスラントの対地エースに似てるねえ。対地ってあたりになんか気になる）

メビウス1が対空エースならメビウス8は対地エースだ。実際の戦争の時のメビウス8の地上目標撃破数はメビウス1より上だ。（それでも十分エースとして祭り上げられるのだが、そうっていないのは言わずもがな）

「メビウス1。ちよつといいか？ 私たちが来たことのごたごたであり話してないだろ」

「そういえばそうだったなあ。しかし、スカイアイも災難だな。そんな恰好になって」

「お互い様だろう。それに8のやつも」

「あいつは楽しむだろこんな状況でも」

「違うない」

ははは、と2人は笑う。昨日スカイアイとメビウス8がこの世界に来た。それでまたあの女神の仕業かと思いきや詰めたが違うらしい。『極まれに、私たちが知らないところで世界の壁を越えてしまう現象があるのです。空間に切れ目が出来たり、ゲートが開いたりと分かりやすいものから気が付いたら変わっていたという突発的なものまで』とこんなことを言っていた。結論から言うには別世界に行く手段

としては

- ①・その世界の神様の力が必要
- ②・死後に転生すること。但し、前世の記憶は消去される
- ③・突発的な現象に巻き込まれること

らしい。スカイアイとメビウス8から聞いた話によると急に目の前が真っ白になったらしい。そして、視界が回復すると自分たちがこの姿になっていたことに驚いたようだ。因みにいうと、2人はメビウス1ほど困惑してはいなかった。もちろんそれなりにしていたが、なったのが自分だけじゃないとわかったから少しだけ安心できたからだとか

「確認するが、スカイアイがここに来る直前は俺が消えた日の翌日なんだよな？」

「ああ。お前の捜索をしている最中だった」

「俺がこつちに来てから3カ月たつのに、こつちとそつちじゃ時間の流れが違うのか」

「かもしれないな」

話しながら歩く。目指すはメビウス8を軟禁している俺の部屋だ。部屋の入口は基地の衛兵に任せてある。中から開けてくれと頼まれても絶対に開けないようにきつく言っている。

部屋について中に入る。

「おーい。8、元気か……あ？」

中に入るが誰もいなかった。窓が開いている。

「おいおいおいおい。まさか」

イヤ々な予感がする。この部屋は5階に位置している。しかもロープも何も降ろしてないから飛び降りたら死ぬぞ。

「メビウス1。確か、ウィッチは身体強化が自然と付加されるのだったな？」

「ああそうだが……まさかそれで着地したってのか？ あ、いや、有りえそうだから笑えない……」

メビウス8の恐ろしい技はどんな攻撃を受けても必ず機体から脱出できる被害になるよう操作することだ。一体どうやっているのか

分からないが、あいつの生存率は目を見張るものがある。

「じゃあ私はあれをやりに行く」

「ああ、例のあれな。それまで探してみるよ」

メビウス1とスカイアイは二手に別れた。メビウス1は8を探しに、スカイアイは基地の放送が使える管制室に

17:30 厨房

「ああもう！ ぜんぜん固まりませんわ！」

あれからかき混ぜて30分。なんとかスポンジケーキの表面を塗る七分立ちになったが、デコレーションができるくらいの固さにならない。氷をなんども変えて冷やしているが、暑いせいかすぐに溶けてしまう。

「新しい氷持ってきたゾ」

「急いで作らないと……」

パーティー開始まであと30分を切った。それまでにクリームを固めないといけない。

冷水のなかに氷を入れ、クリームが入ってあるボウルをつけようとしたとき

「氷水に塩を入れたほうがいいぞ」

「え？」「はい？」「んー？」

後ろを振り向くと、そこにはメビウスと同じ服装をし、グレー色の髪を後ろで結った女性が立っていた。顔の左頬に大きな切り傷がある。見た目から私たちがより年上だと分かる。誰？ とペリーヌとリーネが頭を傾げるがエイラだけが反応した。

「なあ！ なんてあんたがここにいるんだ!？」

「うーんどこいったんだ？」

思いつく限りの場所を隈なく探したが、一向に見つからない。そういえばあいつのスニーニング能力高いんだよなあ。と思いつながら歩くと基地内に設置されたスピーカーから音声が届いてきた。

《あー、あー。私は一昨日この基地に来たスカイアイだ。これから言う事はミーナ中佐の許可を得ているので無視してもらっても構わない。それと、今から大声を出すので耳を塞いでくれ》

すうううーっつと空気を吸い込む音が聞こえてくる。メビウス1は慣れているため放送後に聞こえてくるであろうあいつの声を聞き洩らさないよう聞き耳を立てる。そして――

《オメガ11！ インカミン、ミッソー！！ ミッソー！！》

.....

「デイスイズオメガ11アイムインジエク
テイニング！ヒヤッホオオオー！！！」

「厨房か。しかし、相変わらずだなあいつ」

似たような通信があるとあいつは必ず反応する。そんなことは絶対にやらないのだが、居場所を見つげるときは使える。厨房に行くともビウス1が思っていたとは違う光景が広がっていた。

「すごいです！ あんなに早く混ぜていたのにクリームの滑らかさがちゃんとある！」

あはははは、と笑い声があがる。一日遅れてのサーニヤと芳佳の誕生日パーティーが始まった。みんながやがやとパーティーを楽しんでいる。

それをメビウスとスカイアイは少し離れたところで見ていた。

「あなたたちは混ざらないの?」

「見ているだけで十分だよ」

「こんな姿とはいえ、事情が事情だからな。軍人と言っても皆20になつてない女の子だ。そこに部外者が入るわけにもいかんだろう」

グラスに注がれたシャンパンを飲みながらミーナに答える。

「そういえば、オメガの奴はどうしたんだ?」

美緒が見当たらないオメガ11のことを聞きに来る。パーティーが始まる前にメビウス8を皆に紹介したが、俺と同じく本名を名乗ることはできない(もちろんスカイアイも)

しかし、メビウス8だとしてもメビウス1と被るからどうにかしてくれないか? と言われ前に使っていたコールサイン「オメガ11」で皆から呼ばれるようにした。スカイアイだけメビウス8と呼ぶのは変わらない。

「あいつなら今厨房にいるぞ」

「待っていれば分かる」

しばらくするとメビウス8がトレーに飲み物を乗せて出てきた。

「メビウス1。しばらくぶりの味を楽しめ。それとスカイアイの分」

「そんなに俺は飢えてねえ。だけどありがたくもらうよ」

「この道でやっていけると思うのだがな」

「はっはっは。私から飛ぶことを取り上げたらなにも残らないぞ」

(どうだかなあ…)

メビウス8はミーナたちにも飲み物を勧めた。それを受け取り一口飲む。

「これは……カクテルかしら?」

「おいしいな。この味はブルーベリーか」

メビウス8が作っていたもの。それはカクテルだった。冷蔵庫にあったブルーベリーとイチゴを潰し、砂糖を少々加え、そこにウオツ

カ40mlと牛乳を混ぜてたカクテルだ。口当たりがよくブルーベリーとイチゴの風味がよく出ている。

「カクテル上手なのは知ってるが、必ず牛乳入れるよな」

「私が好きだからな」

「あ、おいしそう。飲ませて」

「お酒だから君にはまだ速い。もう少し年取ってからだ」

ジューズだと勘違いしたルツキーニに言う8。今のあいつはワイシャツを着ているからどこかのバーテンダーみたいに見えた。

「おおい。写真撮るぞ集まれ」

「いくぞ隊長！ 私たちも加わるんだ！」

「いだだだだ！ なぜ耳を引っ張る!?!」

「それでもしなけでば来ないだろう?」

後日撮られた写真が芳佳の父親、宮藤一郎博士の墓前に添えられていた。

1944年8月20日11:00 トブルクから南約500km付近大陸の内地という地理的条件と気候条件が重なり、この場所一帯は年中乾燥している。オアシスが無ければ植物が育たない過酷な環境。北アフリカと南アフリカを分断するサハラ砂漠が広がっている。

その、人を寄せ付けない場所に2人の人影が見える。「アフリカの星」ハンナ・ユステイナー・マルセイユと彼女の隊長、加東圭子だ。2

人は5mくらい、巨大な鉄の板の前にいた。それはどうやら飛行機の垂直尾翼だ。機体からもぎ取られたのか本体は周りには見当たらない。しかしその表面は風化により少しづつ剥がれ落ち、今は辛うじて模様が分かるくらいだ。

圭子が腕時計の時間を確認する。

「時間よ。急がないと船が出ちゃうわ」

「——分かった。上で待っていてくれ。すぐに行く」

圭子は自身のストライカー三式戦闘脚I型甲を履き、飛び立つ。しばらくして、マルセイユは立ち上がり圭子と同じ三式戦闘脚I型甲を履き起動させた。

何故彼女のストライカーであるメツサーシャルフ B f 1 0 9 G — 2 / t r o p ではないのか？ それは航続距離の問題だ。彼女の機体では帰りにトブルクまで着くことが出来ない。だから、航続距離の長い扶桑のストライカーを借りてここまで来た。

飛ぶのに十分な強さになったエンジンを確認した後マルセイユは後ろへ振り向いた。

「行ってくる」

マルセイユは正面を向きなおり飛び立った。風が生まれ、砂塵が舞い上がる。さながら黄色い風が掛けぬけたように見えた。

去ってゆく2人。残されたのは機体の一部だった鉄塊のみ。

よく見るとその表面の片方はナイフで切り込まれており楯の形をしていた。その中に鳥のようなものが描かれており、後ろに5つの横線が刻まれている。おそらく消えないように線だけでも残そうとやったのだろう。

その、マークのようなもの下に、カールスラント語で文字が刻まれていた。

『アフリカの空を取り戻した英雄
ゲルベドライツエーン黄色の13

『ついに眠る』

第24・5話 「ルツキーニを探せ！」

早朝7:25

隊の中で朝早い人を順番にするなら、毎日朝の訓練を怠らない美緒。朝食の当番に当たる2人。その後は、個々人の起床時間になる。その中でもバルクホルンは早い方だ。カールスラント軍人たるもの常に余裕をもって6:30に起きる。その後20分間じっくり時間をかけて柔軟体操をし、7時までに身支度を整える。そして、食堂に移動する。あまりの模範的な動きに自画自賛だと理解するが誇らしく思う。

目の前の、ゴミ屋敷の中に寝る同僚を見なければの話だが

「起きろハルトマン！ 朝食の時間だ！」

「うくん……………あと50分」

「いいわけないだろー！」

毎朝恒例のハルトマンの寝坊を何とかしようと奮闘していた。あと5分で朝食の時間になってしまう。そう思った矢先部屋のドアが思いっきり蹴り開かれた。そして、ジュワ〜ン!! と銅鑼を叩いたような音が響き渡る。

「朝食だ起きろ……………1人は起きているようだな」

「オメガか……………なんだその手に持っているものは」

「何って、中華鍋だが？」

メビウス8もといオメガ11が持っているのは中華鍋とすり鉢用の棒だ。それを太鼓のように鳴らしている。

「飯だ。起きろ〜」

ジュワ〜ン!!ジュワ〜ン!!ジュワ〜ン!!

「う〜る〜さ〜い〜。分かった分かったから、その音止めて」
「すぐに来るんだぞ」

それだけ言い残し8は部屋を後にした。ものすごく眠たい表情のまま起き上がるハルトマン。

「これから毎朝これなの？」

「いや、奴が朝食当番の時だけだろう……………おそろく」

これがフラグなのかどうかは、読者のみぞ知る。

「ルツキーニがない?」

午後3時過ぎ。宮藤が作ってくれたおはぎを食べていたメビウス1はミーナから聞かされた内容を復唱した。聞いた話によると、ルツキーニは出撃以外は好きにしているようである。基地中に隠れ家というか秘密基地を多数作っているらしい。

「ええ。昨日の夜から見かけていないのよ。ごはんの時間には戻ってくるのだけれど…」

「そういえば、お昼ごはんのときオメガさんも見かけませんでしたね」「あいつなら確か朝食終わった後ルツキーニ探しに行ったはずだぞ」

朝食終わった後ルツキーニがないことに気が付いたメビウス8は探しに行ったのだ。

『いい年頃の嬢ちゃんが朝食抜くとかいけないな。どこにバイルアウトしたんだ?』

とかなんとか言ってたそうなの。

「とにかく、彼女を見かけたら伝えてくれる? 連絡事項があるの」
それだけ言い残しミーナは出て行った。

「どうせそこらの隠れ家で寝ているんですわ。私は部屋に戻ります」
辛口な言葉をいいペリーヌも出て行った。が

「……あっちって、外だよな」

「うん……」

部屋に戻るなら階段を使わないと行けない。しかし彼女はそれとは逆方向に向かう。あまりの演技力のなさに顔を見合わせる芳佳とリーネ。

「私たちも行くぞう!」

「うん!」

宮藤とリーネの2人もルツキーニを探しに部屋を出て行った。それを静かに見送る。

「これ食べ終わったたら俺も行くかな」

まだ残っているおはぎを見て食べるのを再開する。

「あくいいお湯だった。なにか冷たい物無いかな」

どうやらお風呂から出てきたハルトマンとバルクホルンが何かを飲もうと食堂にやってきた。そしてメビウスの顔を見る。

「なんだその顔は」

「あはははは！ 髭が出来てるよ！」

「む……」

指摘され人差し指を口のまわりにつけるとそれはおはぎの餡子が。間抜けなように見えるメビウス1だが、その光景はおはぎを美味しく食べる大和撫子そのもので絵になっていた。

「ここも違う」

「次で最後だね」

シャーリーさんとルツキーニさんの報告だと隠れ家を造る為の木製の板とカナヅチ、ロープ、そして懐中電灯を買っていたことが分かった。木の板とロープは分かるけど懐中電灯を何に使うのだろうと考えた結果地下に新しい隠れ家があると予想した。しらみつぶしに地下室を探索したが見つからない。

そして最後の部屋に入っているものを見つけた。

「これって」

「造りかけのイスに、ロープだね。それにカナヅチもある」

それはルツキーニが買っていったであろう物だった。どうやらここで間違いないようだ。よく見ると壁にぽっかりと横穴が開いてある。人ひとりがよく通れるくらいのだらりだらりの広さだ。

「もしかしてこの中にいるのかな？」

穴の中にライトを照らすが見えない。

「とりあえず行ってみよう」

芳佳の提案に乗り2人は穴の中へと入っていく。そしてガラガラガラガラ!!

足元が崩れ、2人の姿は穴の奥へ消えた。誰もいなくなった部屋にしばらくした後

「ここで最後だな」

バルクホルン、ハルトマン。そしてメビウスーが入ってきた。

「いたたたた」

「芳佳ちゃんだいじょうぶ?」

「大丈夫。私たち落っこちちゃったのかな」

「そうみたい」

何とか無事だった懐中電灯を手に周りを照らす。先ほどの穴と違い、どこか人の手が加えられたような、それで時代を感じさせる通路だった。空気は温かく湿っぽい。

「出口はどこか探そう」

「うん」

こんな状況ではルツキーニの搜索どころではない。ここからの脱出を考えないと。そう思い暗い通路を歩いてゆく。すると

「――」

「あれ?」

「どうしたの?」

「今人の声が…」

何を言っていたか分からないが、確かに人の声が聞こえたのだ。音がしたほうを凝視すると明るい。どうやらあそこに明かりがあるようだ。

「行こう!」

リーネの手を引っ張り明かりのある方へ走る。そして目の前が開け、明かりに目が慣れ、それを見た。

「な、何これ!」

女神のような大理石の像

古代の戦争を描いたレリーフ

壮麗な白い柱

そして、滾々と湧き上がるお湯を湛えたプール

それは遙か昔、古代の文明が栄えていたときに使われていた大浴場だった。そしてその一角に、人影が二つ。

「はあ……………いい湯だなあ」

「気持ちいいね……………」

探していたルツキーニと、オメガさんが温泉を堪能していた。

「お、芳佳君にリーネ君じゃないか！ 君たちもどうだ？」

「芳佳！ それにリーネも一緒に入ろうよ！」

「いや、えくつと」

「なんていうか」

現実には頭が追いつけていないようなそんな錯覚がする。と、その時

「「うわあああああ!!?」「」

ドボボボオオオオオオooooooooooooooooon!!!

何かが温泉の一角に落つこちた。そしてすぐに

「冷たooooooooooooooooい!?!」

「さつ、さぶいッ!?!」

水の中から出てきたのはバルクホルンさんとハルトマンさんだった。急ぎ足で温かいお湯の方へと走る。どうやら墜ちたあの場所は水風呂のようだ。

「凍え死ぬかと思った」

「ここは温泉か？ 地下にこんなものがあつたなんて——て、ルツキーニとオメガ！ それに宮藤たちも！」

どうやらルツキーニを探していたのは私たちだけではなかったようだ。

「あれ？… そういえばメビウスは？」

ハルトマンの指摘に全員（オメガとルツキーニを除く）が固まる。落ちてきたのは二人の他にメビウスの3人だったようだ。でもバル

クホルンとハルトマンしかない。

「そういえば、あの水風呂の底。やけに柔らかかったような……」

おそろおそろ水風呂のほうへと目を向ける。

ぶかあ~~~~~………

「メビウスきーん!？」

メビウス1の救助に動き出す芳佳たち。それを見ていたメビウス

8は

「イジェクト失敗か。まあいい訓練だろ」

1人そう呟いていたそう。

その後。ルツキーニ発見と古代大浴場遺跡発見のむねを伝えた宮藤たち。遺跡は基地の者で有効活用していくことが決定した。

「まったくひどい目にあった」

「あつはつは。それは災難だったな」

皆が発見した大浴場を楽しんでいる今、メビウス1、8、スカイア
イは普段ウィッチが使っている浴場に入っていた。夜空に浮かぶ三
日月を肴に扶桑酒を飲む。今日飲んでる扶桑酒の名前は『空誉』と
いうらしい。お米の風味が効いて自分好みだ、とメビウス1は思っ
た。

「基地の酒蔵覗いたが、さすがに黒竜はなかったな」

「あんな高級品求めんな。記憶に留めるだけにしろ」

「せっかくこんな月に月が綺麗なのになあ」

「確かに……向こうじゃ見れないかもしれないな」

メビウス8の眩きにスカイアイも頷く。メビウス1も「だな」と頷き空を見上げる。

此処よりも未来に位置する自分たちの世界。技術が格段に進歩した変わりに空気が汚れ、大半の星が見れなくなった。月は見えるが、やはり今見る月と比べるとどこか濁っている。

ある意味、本当の月の輝きを楽しみながら3人はゆっくりと語り合った。

第25話「苦悶」

ミーナは自室の窓辺に佇んでいた。いつもは聖母のような笑みを湛えているその顔が、今は悲しみに満ちている。その先にあるのは海、いや、その向こうのガリアの地だ。

「聞いたぞ」

「……美緒」

いつの間にか時間が経ち、夜になっていた。部屋に坂本が入ってくる気配にも気が付かなかった。

「手紙を突き返したそうだな？」

扉に寄りかかって立つ坂本は尋ねる。

「そういう決まりだもの」

再び窓の外を見ながらミーナは言う。

「……まだ、忘れられないのか？」

坂本の問いにミーナは沈黙で答える。

坂本には分かっていた。ミーナが隊規を振りかざすのは、若い芳佳たちを傷つけまいという思いのためであること。かつて自分が味わった悲痛と同じ思いをさせたくないという思いのためであることを。

（私には到底分からないか……祖国も愛する人も失ったことがないからな）

ミーナは坂本を残しどこかへと行ってしまった。1人残った坂本は虚空に向かって呟く。

「こんなとき、お前たちならなんて語りかけるんだろうな。

????、
????」

ここにいない、かつて共に空を駆け抜けた友人に問いかけるように呟いた。

「……………そうね。ここで過去を清算するのが、私の——」

1人歩くミーナは、決意した目で呟いた。

翌日 8月26日

ミーナはひとつの段ボールを持ち歩いてきた。だが歩きに落ち着きがない。

(なんで今ごろになって……もう決意したことなのに)

自分が何をしようとしているのか十分理解している。だから前を見るために、後ろを振り返らない。自分でけじめをつけようとこうして誰にも(特に美緒)見つかからないよう移動していた。あと少し。あと少しなのに一歩を踏み出す足が重く感じる。

なぜこんなにも胸が締め付けられる思いなのか。ミーナは認められなかった。一度分かってしまえばずっとこんな思いを抱いてしま

う。

「どうした。 顔色が悪いぞ?」

声をかけられる。そこにいたのはオメガさんだった。

「辛そうだな。 私が持とうか?」

オメガさんはミーナが持つ段ボールを指差す。ミーナはビクツと体が震えた。しばらく黙ってた後ミーナはいつもの顔をしながら言った。

「オメガさん。 私少し気分が良くないから変わりにこれをお願いできるかしら」

「これをどうすればいいんだ?」

「この通路を真っ直ぐ進むと基地の焼却所があります。そこに捨ててきてくださる」

彼女は、卑怯な手を使った。

「分かった。これを捨ててくればいいんだな？」

「ええ。お願い」

オメガ11は段ボールを受け取る。遠ざかる彼女を見送りミーナは執務室へと戻る。

「ごめんなさい——ごめんなさいクルト。さようなら」

大粒の涙を流しながらその場を後にした。

焼却炉に到着したオメガ11は投入口の扉を開ける。中は前のゴミが燃え残り燻っていた。段ボールを開けて要らなくなった書類を数枚掴み軽くクシャクシャに丸め、トングでまだ燻っている場所に押し付けた。すぐに炎があがる。

そこに書類を数枚つつ掴んでは燃やした。段ボールを丸ごと入れると燃え残りが出てくる。ちゃんと燃やすには面倒だがこうするほうが良い。それに軍事関連の書類だ。相手はネウロイという黒い敵だが不明な点が多く残る存在だ。人間の言葉を理解しているとは思えないが、念には念を入れてこちらの情報が漏れないようにする必要がある。

(正体不明の敵か………これ以上に恐ろしい敵はいない)

聞いた話だとネウロイの存在は古くから存在している。そしてどの時代も人類の敵として歴史に刻まれていた。生物のようで生物ではない。個別で動いている者もいれば集団で連携を取るものもある。さらにメビウス1からエルジアエースを真似る存在もいると聞いた。なぜこの世界で俺たちの世界に関係することが出ているのか。なぜ真似をするのか謎のままだ。もしかしたら

「奴らが出てくるかもしれない、か」

炎を見ながらオメガ11は呟く。メビウス隊にとって永遠のライ

バルであるあの部隊が現れる可能性。メビウスもそれを察しているはずだ。その時は、今までで一番過酷な戦闘になることは必至。戦争終結後知ったことだが、ファアーバンティの決戦では黄色中隊は部隊の弱体化と質の悪い燃料で人材、機体共に練度が落ちていたらしい。だがそんな状態でも彼らは私たちと死闘を繰り広げた。

（仮に出てきたとするなら相手は5機編隊。それに対しこっちは私入れて隊長の2機。どうなるか）

やられる気持ちなど無いが不安が残る。それでも、やらなくてはならないし、ここで死ぬわけにはいかないのだ。

「ん？」

段ボールの中に書類に紛れて本のようなものが入れてあった。よく見ると何かのファイルのようにも見える。それを手に取り開いた。

「これは……」

そこには、ミーナ中佐と男性の2人が写っている写真が貼ってあった。それも一枚や二枚ではない。たくさん写真が一枚一枚きれいに、丁寧に張られている。そこからかなり大切にしてきたことが分かった。どの写真も写っているのは2人だ。そして、その写真に写っている2人は幸せそうに笑っていた。それを見てオメガ1は先ほどと昨日のミーナ中佐の様子を思い出し、察した。

（なるほど。分からなくはない。が、無視などできない）

オメガ1はアルバムを取りだし、残りの書類を焼却炉の中に放り込む。そして、それを持ちだした。向かうはミーナ中佐がいる執務室。

執務室で仕事をしていたミーナは突然開かれた扉の音に驚く。入ってきたのはオメガさんだった。彼女の手には段ボールの奥に入れたあのアルバムがあった。それを私の前に置いた。

「なんのつもり」

「それはごっちの台詞だ。なぜこれを捨てようとした」

仏頂面でオメガさんは私を睨んでくる。私もそれに睨み返した。

「あなたには、関係のないことです」

「昨日の様子から見ると、自分と同じ苦しみを味あわせたくない。だから、扶桑の艦長の要望を突き返した。違うか？」

「……………」

ミーナはなにも言い返さない。それはオメガ1が言っていることを肯定することに他ならない。

「お前は、忘れてしまっているのか」

「なにを——」

「彼と過ごした時間のすべてを。本当の意味で、彼を永遠に死なせるつもりか？」

「!!」

オメガが言う意味をミーナは理解した。どこかの哲学者が言っていた。人の本当の死は、人に忘れられた時だ、という考え。例えば肉体が無くなっても、その誰かを覚えている限り自身の中で生き続ける。私がクルトのことを忘れると本当に彼を死なせてしまうことになる。オメガはこのことを言っているのだ。

でも——

「あなたに、私の何が分かるっていうの！」

今まで溜めてきたものを吐きだした。涙を流しながら激昂する。

「私は！・クルトの死を乗り越えて501の隊長になった。私と同じ人を出さないよう厳しい規律を作って、今までやってきた。でも……もう3年経つのに、今でも彼を思い出す。その度にこんな想いをする！・こんな想いするくらいなら——」

「君にとって彼は、そんなに軽い物だったのか？」

オメガの言葉にミーナはギツと睨み返す。そこに宿る答えは否。今でもクルトとの思い出は大切な、大切なものだ。ミーナは無意識に主張していた。オメガは続けて言う。

「君の言う通り、私はミーナ中佐の苦しみ全部は分からない。私の苦しみが中佐に分からないように」

オメガは目を閉じ、頬の傷跡に手を当てる。その傷跡に、一体どんな過去があったのか。

「これは返しておく。もう一度よく考え直せ」

オメガは部屋を出て行った。ミーナは置かれたアルバムを抱きしめる。

「私は――」

ミーナの呟きは誰にも届くことは無く、アルバムを抱きしめたまま静かに涙を流した。

メビウス8は執務室を出て、扉を閉めた。と横から

「一体どういうつもりだ」

と口を出された。そちらを見ないで答える。

「スカイアイか」

スカイアイは壁に寄りかかり手を組んでいた。表情はいつもと変わらない。だが、雰囲気はまったく違う。

「お前があそこまで気にかけるのは珍しいからな。思うところがあつたのか」

「言う必要があるのか」

私の問いにスカイアイはいいやと答える。おそらくスカイアイは私がやった行動の意味を知っているのだろう。だけど、あえてそれを口にしないのは私のことを思っていることだ。だが、スカイアイは大丈夫と答えたのに、自然と口が動く。

「そうだな。強いて言うなら、昔の私を見ているようだな。余計なお

世話かもしれないが……放っておけなかった。それだけの話だ」
メビウス8はそう言い、スカイアイをおいて去って行った。

（傭兵上がりのお前にとって、あの戦争はずっと地獄だったのだろうな）
心の中で呟き、スカイアイはメビウス8とは反対の方へと去って行った。

第26話 「パ・ド・カレー」上空戦―君を忘れない―

8月27日

基地にネウロイ来襲の警報が響き渡った。ウィッチ全員がブリーフィング室に集まる。

「ガリアから敵が侵攻中とのことですよ」

「今日は珍しく予想が当たったな」

いつもは外れる予測が当たる。本来は当たるのが当たり前なのに最近の不規則な襲撃のせいで皆予想通りになるとは思わなかった。

「それで、進路は？」

「現在高度15000m。進路は真つ直ぐ基地に向かって来ているわ。現在基地上空にいるスカイアイさんからの情報だと敵は1機。形状はキューブ型。大きさは300mくらいだそうよ。」

「よし、バルクホルンとハルトマンは前衛。ペリーヌとリーネは後衛。宮藤は私とミーナの直援に当たってくれ。他は基地にて待機！」

「了解！」

坂本の号令で呼ばれた7人は格納庫に向かい、大空へと飛び立っていった。

ドーヴァー海峡上空

「敵機発見！」

美緒は魔眼でネウロイの姿を捉えた。

「報告通りだな。さすが未来の技術と言ったところか」

スカイアイの情報通り敵は300mクラス、巨大なキューブ型のネウロイだった。今までリーダーに捉えた敵は大中小の大きさは分かるが正確な大きさとその形状まではつきりと分からなかった。それを私たちの後方30kmの基地上空から探知、さらに戦っている者に戦闘状況を把握・伝達できるなどすごい一言では片づけられない。しかもその効果範囲がまだまだ余裕があるというから驚きを隠せない。

い。

「わかったわ。全機！いつものフォーメーションにて突撃！」

出る前に言われた編制に別れて行動に移る。とネウロイに変化が起こった。

「え!？」

「分裂した?!」

先制攻撃をあたえようとしたバルクホルンとエーリカの目の前でネウロイは突如小型のキューブ型に分裂した。

「右下方80、中央100」

《左30。合計210だな。ロットを組んでいるものと単機で動いているやつがいる》

遙か後方にいるスカイアイさんから敵の動きの詳細が伝えられる。あれほどの数を把握するとは彼女の能力は底知れない。

「スカイアイさん。報告だとネウロイのコア的位置が分かるそうですがどうですか？」

《すまない。どれも同じ反応なうえ数が多い》

「となると、あれをしらみつぶしに叩いていくしかないか」

「美緒は私と共に敵のコアの搜索を、宮藤さんは私達の直衛に。バルクホルン隊は中央、ペリーヌ隊は左をお願い。スカイアイさんは周辺の警戒をよろしくお願いします」

「了解！」

《もしもの時は任せろ》

ミーナの指示に従い、それぞれに散らばる。

《バルクホルン機、前方にネウロイ郡約30機》

「了解。いくら数ばかり多くても！」

バルクホルンは手にした銃を乱射する。数機を撃墜され銃弾を避けようと動く。それを誘導だと気付かず一つに集められた瞬間上空から接近してきたハルトマンの銃撃を喰らった。ネウロイは慌てて回避行動をとるが各々で動きがバラバラのせいで空中衝突を起こすものも出た。そんなことお構いなしに攻撃し、そのほとんどを撃墜する。

「やリー♪」

《気を抜くのはまだ早い。新たな敵機が君たちを包囲しようとしている》

「了解した。支援感謝する。いくぞフラウ」

はいはいといい、全速力で2人は散開した。

ペリーヌの周りを複数のネウロイが囲んでいた。それを見て怪訝そうな顔をしながら彼女は目を閉じ集中する。

「トネールー！」

雷撃魔法で彼女の周りを囲んでいたネウロイを一掃する。そして、仕留め損ねた敵をリーネが狙撃した。

任された場所で皆が能力を使い1つまた1つとネウロイを撃墜していく。だが、いくら数を減らしても全体でみるとあまり変わらない。やはりコアを破壊する以外勝利はなく、坂本は魔眼を使いコアを探した。

「どう坂本少佐。コアは見つかった？」

「いや、どうやらあの中にはいないようだ」

「そう」

このまま長期戦に持ち込まれるとこちらが不利になる。と宮藤が前方を指差した。

「ミーナ中佐！ 坂本さん！ 敵がこっちに来ます！」

交戦していた敵の一部がこちらへとやってくる。指揮系統を無くすための行動なのか、それともそんな意味など無いのか分からない。一部、といってもその数は20を超えている。コアを探している坂本さんの邪魔をさせないためネウロイと彼女たちの間に入る。

銃を構える。が通信が入った。

《その敵は引き受けた》

何かが高速で急降下し通り過ぎる。前方にいたネウロイ2機が突如真つ二つに切り裂かれた。通り過ぎた影を見る。メビウス1とオメガ11だった。

「どうしてここに？ 基地に待機のはずだろう」

《私の独断で出撃させた。下を見てくれ》

スカイアイの言う通り私たちが飛んでいる下を見る。海の上だと思っていたが、私たちは気づかないうちにヨーロッパ大陸の海岸線まで近づいていた。

《それ以上だと間に合わない判断した。罰則なら後で受ける》

スカイアイは謝るが彼女の判断は正しい。射程距離が100kmを超えるミサイルに先制攻撃をされたら絶対に関に合わない。いくら速度が出る機体でも飛び立ってから交戦空域まで辿り着くのに時間がかかる。その間に被害が出ているだろう。

《それにミーナ中佐。昨日はすまなかった。メビウス8が迷惑をかけた》

「……………いえ。私は別に」

《彼奴も貴女と同じだ。あの戦争で部下を目の前で亡くしている》

「亡くなってるって…………」

意外な言葉に宮藤は言葉を失う。美緒は何も言わず。ミーナも同様だった。いや、昨日のオメガ11とのやりとりからなんとなく分かっていた。

《スカイアイ》

《……………ああ。分かっている。それよりもこっちが優先だ。メビウス隊、交戦を許可する。可能なかぎり弾薬の消費は抑えろ》

《了解。散開するぞ。メビウス1、交戦》

《メビウス8、交戦》

2人は編隊を解き、各個撃破に動き出した。

「敵機約150機か。コモナ防空戦を思い出すな」

メビウス8は呟く。大陸戦争でユージア大陸に戻るために必要不可欠だった偵察衛星の打ち上げ。それを阻止しようとエルジアは戦

闘機・爆撃機の大部隊を投入した。それに対しISAFも出せる航空戦力と艦隊を集結させた。航空機だけでも敵味方ともに200機を超える数がコモナ諸島上空で繰り広げられた戦争史に名を残すことになる大空中戦。

当初ISAFはイージス艦の対空能力も加えて敵勢力の迎撃として島周辺に展開させた。が戦闘が始まると予想していなかったことが起こった。それはあまりにも数が多すぎてレーダーが役に立たなかったのだ。しかも戦闘開始直後で撃ち落とそうと放ったミサイルが味方に当たるといふ事態に陥り、さらなる被害が出るのを避けるため攻撃中止になった。

また、それ以上に上空の戦闘は混乱を極めた。敵味方関係なく機体の空中接触や衝突。あまりの入り乱れように両軍の空中管制官が指示を諦めたくらいだ。スカイアイもその一人であり、これを機に日々精進している。

そして、この戦闘で隊長、メビウス1が頭角を現すことになったことを忘れてはいけない。

「さて。真面目にやりますか」

メビウス8は持つ得物を構える。しかしそれは銃ではない。彼女が持つのは2mを超えるハルバード。メビウス1のように近接武器がほしくなり整備員に聞いたところこれがあつたので拝借した。剣も勧められたが両手持ちのほうがいいと断っている。銃はMG42を二丁借り背負っている。例のジェット機型が来るまで温存する考えだ。

「せーい！」

ハルバードを振りかぶり一気に接近、振り下ろす。ネウロイが避けようと動く前にメビウス8の一振り一度に3機を仕留める。

「次！」

メビウス8は新たな得物を探し機体を加速させた。

メビウス1は扶桑刀を左手に持ち一機、また一機と少しずつ着実に

仕留めていた。右腕にM61機関銃を装着し13mm機関銃を一丁背負うが8と同じようにジェット型が来るまで可能な限り温存する。

《メビウス1。後方から10機》

スカイアイからの報告を受け後ろを見ると、ネウロイが10機俺を追ってきている。こちらの速度についてくる個体もいるのだなど改めて確認した。急降下それらを振り切るふりをする。案の定追ってきた。速度はそのまま、高度を下げる。

高度3000……2000……1000……500……

機体を水平に戻す。高度はすでに50フィートをきっている。メビウス1が通った海面に水しぶき上がる。それにかからないよう敵は追ってくる。メビウス1は少しづつ速度を落としていた。自分と敵との間が詰まる。一定の距離まで近づいたのか、ネウロイが攻撃を始めた。撃ってきた赤いレーザーが海面に着弾し水柱が上がる。

《メビウスさん！アフターバーナーというもので振り切つて！

》

「これでいいんだ！」

見かねたミーナからの通信を大声で言い返した。レーダーと自身の眼で敵を確認する。

「バーナー！」

水力偏向ノズルを利用しストライカーを90度にした後、アフターバーナーを点火した。ロケットの打ち上げよろしく垂直に上昇する。その推進力により発生したエンジンの噴射を盛大に受けた海面から海水が爆弾の様に巻き上げられた。

追っていたネウロイから見ればいきなり海水の壁が現れたことに驚いただろう。すぐさま緊急回避をするが追ってきた10機のうち7機が突っ込み失速。海へと落ちた。先ほどの目くらましで完全にメビウス1を見失った3機は動きが鈍る。それを見逃す彼女ではない。

「インガンレンジ、ファイア！」

右腕のM61機関銃が火を噴く。引き金を引いた時間は1秒も満たない。だが十分すぎるほどの銃弾が放たれ標的のネウロイを蜂の

巢にした。

「スカイアイ。指示をくれ」

新たなネウロイを落とすためスカイアイに指示を仰ぐ。

メビウス1は気付いていない。

先ほどの機動で高Gが発生していたにも関わらず、それに見合った負担が身体にも機体にも無かったことに

「……………すげえ」

目の前で繰り広げられる戦闘を見て宮藤はただただそう呟いた。もちろん501部隊の人たちの実力もすごいがメビウスさんとオメガさんも一騎当千と言っても過言ではない。やはり機体の性能の違いが如実に出ているのだろう。ネウロイの総数は正確には分からないうが宮藤から見てもあと半分だということが分かった。でもまだコアを発見できていない。

通信が入ってきた。

《メビウス隊。方位180から高速で接近する機影を確認。数は

7

《おいでなすったか》

《了解した。これより迎撃に向かう。いくぞ8》

了解、オメガさんはいい2人は合流。高度を上げて私たちから離れて行った。

「向こうは二人に任せよう。だが」

「ええ。これ以上はこちらが不利ね」

ミーナたちが呟く。戦闘が始まってからすでに20分は経過して

いる。予備の弾倉を持ってきているとはいえこれ以上時間をかけると弾切れを起こすかもしれない。

宮藤が何かを感じ取り、上空を見上げた。

「！ 上！」

「なに!?!」

宮藤が上空から逆落としを仕掛けるネウロイを発見し、坂本も振り向く。が、太陽の光のせいで見えない。

「行きます！」

宮藤は坂本の前に移動し、彼女を守るようにシールドを張り手に持つ機関銃を発射する。放たれた大量の12.7mm弾は、五機のネウロイを粉々にし、白い破片へと変えた。

「いいぞ。その調子で頼む」

毎日の訓練の成果が出ている宮藤を見て、坂本は少し微笑む。と

「！ いたぞ！」

今彼女たちの脇を通り抜けた一機。その中心部にコアがあるのが見えた。

「あれね？」

「ああ」

「全隊員に通達。敵コアを発見。私達が叩くから、他を近寄せないで！」

『了解！』

この戦闘に勝つため、彼女たちは疲れている自身の体に喝を入れる。

「行くわよ！」

「了解！」

ミーナは坂本と宮藤と共にコアを追う。ネウロイは追われるも不規則な動きで逃げつつける。が、坂本、ミーナ、宮藤の3人から放たれる弾幕のすべてを避けきれず、一発がかすめた。

「宮藤。逃すな！」

「はー！」

被弾し動きが鈍くなったネウロイを逃すまいと追いかける。そし

て、コアに狙いを定めて引き金を引いた。ありったけの銃弾を受けたコアは白い破片となつて砕け散つた。

一見綺麗に見えるそれは銃弾の雨のようなもの。シールドを張りそれを防ぐ。しかし

(っ!?)

「!・美緒!」

砕け散つた破片の一つが坂本のシールドを突き破り、坂本の側頭部をかすめた。

作戦が終了した後、ミーナは1人廃墟となつた街に降り立った。

ここはパ・ド・カレー。ブリタニアとヨーロッパ大陸との交通の要所としてかつて栄えた港湾都市。ブリタニアへの撤退作戦の最終重要拠点であり、民間人の避難に時間を稼ぐため多くの軍人たちが殿を務め、命を落とした激戦地である。

そしてこの場所が、ミーナの恋人、クルト・フラツハフェルトが亡くなつた場所。

ミーナは廃棄された車に近寄つた。人がいなくなつてから3年手つかずのままだったせいだろう。車全体に錆が広がっている。まだ、彼がいたところに同じ車に乗つたことがある。これがその車なのか確認できるものがない。別の人が使つていたものの可能性が高い。なのにどこか懐かしい感じがするのだ。錆びついたドアは軽く引いただけで簡単に開く。

「……あ」

そこには赤いリボンのついたかすみ色の包みが、運転席の上に鎮座していた。彼女に見つけてもらうように置いてあつた。包みを開ける。その中にあつたのは一通の手紙と赤いドレス。

ミーナは、それを残したのが誰なのか、分かつた。

(クルト……)

共に音楽の道を志し、しかし戦争の影響でミーナは音楽の道を諦め、彼女だけを戦わせないと彼も音楽を捨てて彼女の整備兵となり、そしてこの地で散った。

「クルト……」

涙が頬を伝う。その雫は抱きしめるドレスを濡らしていった。

彼女たちのいる場所から南の方角100kmの空域。その場所でメビウス隊とそれらは闘っていた。だが、その戦闘は傍から見て戦術・戦略なんてものが見られなかった。何故なら――

《メビウス1！ 何故攻撃しない!?》

「……………ッ!!」

《クソこいつら！ 隊長ばかり付きまといやがってー!》

メビウス8はM42をそれに向けて引き金を引く。何発か被弾させるが、それはすぐに再生した。それを見たメビウス8はある事実に驚く。

《こいつも再生した。まさかこいつら全員コア持ち?》

今まで複数編隊を組んだジェット型ネウロイを相手したが、どれも一機のみ。そして、エースパイロットを真似たやつだけだった。それをメビウス8は耳にしていた。

だが――

今相手をしているそれらの飛び方はまったく知らないやつだった。そして、それら全機がメビウス8を無視。7機全機がメビウス1に襲い掛かっていた。

《メビウス1！ 一体どうしたんだ!?》

8はメビウス1に怒鳴る。メビウス1は自分に襲い掛かる敵を見た。その顔はいつもの彼女ではなく、苦悶の表情に歪んでいる。

「……………違う」

小さく呟く。M61機関銃を隙だらけの一機に照準を合わせる。そして、引き金を——引けなかった。手が、震えていた。

「違う。違う違う違う違う——ツ!!!」

メビウス1はそれらと会敵して、すぐに分かった。

エルジアのエースパイロット？ 黄色中隊？

どちらも違う。

その飛び方をメビウス1は誰よりも知っていた。

だって、一番長く自分の隣を飛んでいたのだから

メビウス1に襲い掛かるその機種は

F-2A バイパーゼロ

第27話「慟哭」

2004年7月26日

「そんな。教官も行かれるのですか」

「ああ。リグリー空軍基地の防衛に着くことになった」

緊張を崩さない顔で俺たちの教官は言った。彼は今パイロットスーツへと着替えている。

「知っていると思うがリグリーがエルジアの手に墜ちれば航空機がわんさかやってくる。それこそ1年前のサンサルバシオンの空襲が私たちの国で起こっちゃう。それだけは阻止せにやならん」

教官は自身の機体F-2Aに乗り込んだ。

「気にすんな。お前たちが出張らんようにする」

「気を付けてください」「御武運を」

教官は何も答えず親指を立てて俺たちに答えた。

《メビウス隊。離陸するぞ》

機体が滑走路を滑り浮き上がる。それを見ながら俺たちは手を振った。割り当てられた部屋——といっても俺たち4人で使う相部屋に入る。そこから会話などない。皆が皆何を話したらいいか分からないのだ。

「……戦火がここまで来ると思うか？」

誰かがそんなことを言い声が出たほうを見る。

「なんだよジュン。お前教官たちが負けると思ってるのか」

「そう言ってるんじゃないよ。ただ戦略的なことを言ってるだけさ」

ジュンの発言にハヤトは少し怒った顔で言う。

「もし……リグリー基地が堕ちるとISAF本部が置いてるセントアークは放棄せざる負えなくなる。そうなると残るは俺たちの国だけだ。そうなるとここは最前線基地になる」

「俺たちが出るかもしれないってことか」

俺の指摘にジュンは頷いた。確かにその読みは間違いないだろう。今や残されたISAF陣営は本部が置いてある港湾都市セントアーク。大陸の東南に位置するコモナ諸島、フォートグレイス諸島、ロッ

キー諸島。そして東側に位置する島国ノースポイントのみ。この中でセントアークの次に狙われるのはノースポイントだ。残る陣営で軍隊を持つのはノースポイントのみ。ここさえ落せばISAFの敗北は確実である。ゆえに大陸に一番近いこのアランフォート基地が最前線と最終防衛ラインの両方を担う可能性が出てくるのだ。

「その時は俺たちが飛ぶだけだ。そうだろう」

「そうだな」「ああ」

「頼りにしてるぜ？ 相棒」

俺の前に座っている男、ケンが拳を突き出してくる。それに自分も拳を造り叩いた。

「こっちの台詞だ。バカ」

2004年9月10日

その日。基地にいる者全員慌ただしく動いていた。今ここで動いていない人は誰一人としていない。

3日前。8月28日 リグリー基地が敵の手に墜ちた。それによりISAF本部はノースポイントへの撤退を決定した。

そして、俺たちはこの撤退作戦の防衛任務にあたることになる。俺たちにとって初陣になる。

「カザ」

「やっと来たか。急げ」

「わーってるよっ」と

慌ててパイロットスーツを着たせいで少しだらしない状態のケン

に俺はヘルメットを投げた。それを片手で掴み取る。

「他の奴が言ってるのを偶然耳にしたんだけどよ。リグリーを襲った敵の中にあの黄色中隊がいたらしい」

動かしていた手が止まった。

「奴らが教官たちをやったのか……？」

あの時基地を飛び立った教官と先輩のF-2Aの4機編隊が脳裏をよぎる。彼らはノースポイントでもトップの実力をもつ部隊だった。俺たちが知る中で他の部隊との模擬戦で負けたことは一度もない。だけど敗れたのだ。噂のエースパイロット部隊に。

「なくに暗い顔してんだ。これから出るんだ。気持ちを切り替えろ」

「あ、ああ。分かってるさ。それより連絡取ったのか？」

「ついさっきな。それと姉さんから伝言。『死なないで』とさ」

「———そうか」

「……………いい加減顔見せに行けよ」

「いいんだよこれで」

「(……………馬鹿野郎が)」

「? 何か言ったか？」

「いや。さあ行くぞ」

ケン俺の方を軽く叩く。俺たちは自分の機体F-2Aに乗り込み出撃した。

《こちらは空中管制官 “スカイアイ” だ。君たちはこちらの管制下に入った。よろしく願います。ソラ・カザマ中尉。先方から今のメビウス隊の中で実力があると聞いている。君が編隊の指揮を取れ。君のコールサインはメビウス1だ》

基地内の一角。俺は自分がかぶっていたヘルメットを地面に叩きつけた。

「畜生っ!!!」

叩きつけたヘルメットが転がる。それをびしょ濡れの状態のケンが拾った。

「カザ。落ち着け。お前のせいじゃない」

「これが落ち着いていられるか！ ジュンとハヤトがやられたんだぞ」

荒れる俺を落ち着かせようとする。がとても落ち着ける気分ではなかった。

結果だけ言えば、作戦は成功した。撤退する部隊の8割を追撃するエルジア軍から守り通すことが出来た。

だが、航空部隊は甚大な被害を受けた。開始早々敵は電子戦機を投入。通信手段を奪われた俺たちにエルジアの戦闘機Su-27は容赦なく襲ってきた。後ろを取られた俺とケンは今読んだ本に乗っていた戦闘機動を行い強引にオーバーシュートさせた。突然目標が消えたことに気付いていない敵にミサイルを発射。相手を撃墜させた。だけどその間に2人が別のスホーイに落とされていた。

「整備班が言ってた。お前のF-2はムリだ。とても直せる状態じゃない」

あの時の戦闘。後ろを取られた相手をオーバーシュートさせるためランディングギアを下した。急激な空気抵抗が発生したおかげで成功した。だけど、そのせいでランディングギアがイカれた。俺の機

機体は着陸して滑走路を滑っているとき左後輪のギアが根元から折れた。そのままバランスを崩した機体は滑走路を逸れて機体が地面に埋め込む形で止まった。機体が爆発しなかったのは奇跡だった。

ケンの機体は被弾により油圧系統が損傷。着陸が難しいため機体は海に放棄させベイルアウトした。

「ほかに機体は？」

「言わなくても分かるだろう？ 表は傷だらけの機体だらけさ。正直よくあんな体制で1年持てたと思うくらいだ」

ケンの言う通りだ。俺はアレンフォート基地に集まったISAF軍の航空機を見る。エルジアと対抗するために結成された軍事同盟だったが急だったため使用する機体は各所属する国の機体だった。同じ軍隊でも別の機種で今まで戦ってきた。統一されてなかったため整備と補給等の必要なものがバラバラだった。

なんとかここまで辿り着いたが肝心の機体が修理もできない状態になった。それに対してエルジアは多数の機体を持ちながらエンジンなどは統一しているため効率がいい。

今ここにはパイロットはいても肝心の機体が圧倒的に揃っていなかった。まさに張り子の基地である。

「聞いた話じゃF-2の製造再開を決定したらしいが、間に合うのか？」

「分からない。そこはもう上に任せるしか……」

「次は絶対に勝つぞケン。あいつらのためにも」

「ああ。俺たちの帰る家を守るために」

俺たちは自分に言い聞かせるように誓った。

9月19日13:30 イズモ型二番艦『ヒヨウ』艦内ミーティング室

「早速だが出撃任務だ。先ほど早期警戒レーダーが敵の工作員に破壊され、爆撃機数機が領空に侵入した。敵は30分後にアレンフォート飛行場上空を通過、それを爆撃したのちノースポイントへ向かうつもりらしい。我が軍の防空火力は脆弱で、総司令部は張り子の基地も同然だ。

作戦は島の山脈を陰にしながら迂回して飛行しろ。そうすれば敵爆撃機の背後を取れるはずだ。ニューフィールド島を通過する前にすべての爆撃機を撃墜し、爆撃機の侵入を絶対に阻止せよ。諸君らはノースポイント防衛線の先陣だ。ISAFの延命に全力を尽くしてくれ」

作戦内容を伝えられた俺たちは急いで艦内格納庫へと走った。自分の機体に取り込み準備を始める。乗り込んだ機体。それは退役まじかのノースポイント空軍の前主力戦闘機F-4Eだ。

なぜこれなのか？ それはノースポイントで唯一数が揃っている機体だったからだ。そして作戦の上で艦載機として使えることがつけられた。

敵はノースポイントへ攻撃するにはどうしてもニューフィールド島のアレンフォート基地を叩く必要がある。通常はそこに戦力を集中させて防衛線を張るだろう。しかし向こうもそれ相応の大部隊で来る可能性がある。それではこちらに勝ち目はない。

そこでISAF司令部は1つの賭けに出た。それはアレンフォート基地を囮として利用すること。航空戦力の大部分を本島に撤退させたの見せかけ油断を誘い出撃した敵部隊を後方から奇襲をかけて殲滅する。という作戦だった。それには空母と艦載機が必要だった。

戦争の経過を見て最悪の事態を想定したノースポイント政府は急遽完成まじかだったイズモ型DDH二番艦『ヒヨウ』三番艦『ジュンヨウ』を軽空母に改造した。そしてノースポイント各基地に眠りに着こうとしていた老兵F-4Eを呼び起こし1日ですべての整備点検

を終了させた。

前席に俺。後席にケンを乗せ機体を動かす。エレベーターが動きだし飛行甲板に出た。自然と周りを見る。左洋上には自分がのる艦の同型艦『ジユニヨウ』からF-4Eが離陸したところだった。

機体がカタパルトに接続される。最終チェックに入った。

「機体正常。システム、オールグリーン」

「レーダーシステムも異常なし。いつでもOK！」

《メビウス1。発艦を許可します》

「了解。いくぞ相棒！」「ああ！ レーダーは任せろ」

「メビウス1。テイクオフ！」

そして俺たちは再び空へと飛び立った。

その後、侵入してきた爆撃機を全て撃墜。ほんの少しづつだが俺たちは勝利を重ねてきた。

いつしか自信がついていた。

お前となら絶対に大丈夫だと

お前と一緒にこの戦争に勝てる

そう心の中で、俺たちは思っていた

あいつらに、出会うまでは

「しっかりしろ隊長！」

「！」

頬を叩かれる痛みで我に返る。目の前にメビウス8がすごい剣幕で俺を見つめていた。俺の方を掴み言う。

「どんなに辛くてもお前がやるんだ……彼らを楽にさせてやれ」

分かっているのだろう。あのF-2Aの動きが誰なのか察したのだろう。それを自分でやらず俺に任せたのは、彼女なりの配慮だ。

そうだ。あれは俺自身がやらなくちゃいけないんだ。例え、かつての隊の仲間と同じ飛び方だとしても。

あいつの、親友と同じように飛んでいたとしても――

「――嗚呼。すまないメビウス8」

左手で顔を隠す。それは気持ち落ち着かせるためか。それとも隊長として見せてはいけないものを隠すためか

「手を出さないでくれ」

彼女はいつもの顔に戻る。敵を刈り取る死神の顔に。

1機のF-2Aとヘッドオンになる。同時に火を噴くM61機関砲。被弾したのはF-2Aだった。すれ違う1人と1機。ボロボロのF-2にメビウス1は左手で静かに敬礼した。

1機。1機と墜としていく度に敬礼する。M61の弾が無くなり、肩に下げていた13mm機関銃を取り出す。やがて、それも使えなくなった。敵はあと一機残っている。

「――」

メビウス1は何もしゃべらない。最後に残った武器である扶桑刀を抜く。

最後のF-2Aが近づいてくる。それは敵を殺さんがために向かうのか、それともようやく見つけた僚機の隣に並ぶためなのか。

その近づいたF-2Aのコックピット部分に、扶桑刀を振り下ろし

た。

陽が西に傾き空を赤く染める

耳を澄ますと歌声が聴こえてくる。彼女たちの隊長であるミーナ中佐が歌っているのだ。

聞くものすべての心を癒す歌。だが、基地の一角だけその歌は届かない。部屋の前にスカイアイは座っていた。そこにウイスキーとギターを持ってきたメビウス8がやってくる。

「どうだ？」

「いや、何も変わらない」

「……………そうか」

メビウス8も座り込む。2人はメビウス1の部屋の前にいる。そこで誰も入らないよう見張っているのだ

「!!!」

部屋からなにかが聞こえてくる。

聞かなくても分かる。

隊長が、声にならない叫びをあげているのだ。本当は大声を上げてはズなのに皆に心配をかけまいと静かな慟哭を繰り返す。

メビウス8はポケットからあるものを取りだしスカイアイに渡す。それはハーモニカ

「できるだろ」

「ギターのほうがいいが、偶にはいいか」

メビウス8がギター、スカイアイがハーモニカを構える。演奏する

曲はどこか哀愁を漂わせる。しかし、なぜか一日の終わりに聞きたくなる魅力を持つ曲だった。

それは静かにメビウス1のことを案じていた。

翌日 1944年9月1日 ブリタニア 港湾都市ポーツマス

「んんんんん!! 久しぶりの陸だあ。思ったよりかかるもんだな」

鷺が舞い降りた。約束を果たすために

第28話「邂逅」

1944年9月2日

朝のブリーフィング。いつもと同じ、変わらない一日が始まる。

「——い……おい。メビウス1。隊長」

「! あ、ああなんだ」

「しつかりしろ。今ブリーフィング中だぞ」

メビウス8につつかれて現実に戻る。いつもと同じでも大事なブリーフィングを聞き流してしまうとは。

「それと今日この基地にウィッチが1人いらつしやいます」

「ん? 一体誰が来るんだ。まさか新たに入隊するウィッチか?」

ブリタニア防衛に完璧とは言わないが501部隊の基地は十分に人が揃っている（非公式的にはメビウスたちも含まれる）。ここに配属という事は宮藤のような新人かもしれない。だがミーナが言った名前に皆が驚きの声をあげる。

「いいえ。来るのはハンナ・ユステイナー・マルセイユ大尉よ」

「え。なんで?」

「あいつがここに来るだ?!」

「おいおい。こっちは置いてきぼりなんだが、誰だそのハンナ・マルセイユは」

皆が驚く中で話が分からない。というか知らないためついていけないISAFの3人。坂本が変わりに説明した。

「ハンナ・ユステイナー・マルセイユ大尉。カールスラント空軍 第27戦闘航空団 第3中隊。現在第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」通称「ストームウィッチーズ」の戦闘隊長だ」

「アフリカ戦線のエースだよ。スコアは確か158だったかな?」

「158…すごいな。でもハルトマン大尉やバルクホルン大尉よりも少ないのだな」

「だがアフリカはここよりも強いネウロイが出るから撃墜数は私たちと並ぶかそれ以上だ。そんなことより、どうしてやつがここに来るんだ」

それほど有名な人がなぜこんなところに来るのだろうか？ ミーナなら答えを知っていると思うが。

「それが、私にも分からないのだけど……メビウスさん。彼女と面識はある？」

「いや、そんなのあるわけないだろう」

本来自分はこの世界の住人じゃないのだ。彼女の事なんて知る術なんてない。

「そうですよね。この際だからいいいます。連絡によりますと、メビウスさん。あなたに用があるそうです」

「え。なんでメビウスなんだ。というかどうやってメビウスのことを知ったんだ」

そんなの私にも分からないわ。とミーナは言う。

「もしかしたら、勝負を挑みに来たんじゃないの？」

「いくらあのバカでもそこまでして——いや実際問題どうなんだ？」

ハルトマンが茶化すようにいい、それに真面目に受けて考え込むバルクホルン。

「いいえ。そんなことをしに来たのでは無いそうよ。なんでもメビウスさんに渡したいものがあるそう」

「は？ 俺に？」

どうやって自分の情報を得たか知らないが、しかも赤の他人である自分に渡し物？

「でも人違いかも知れないから直接会って確かめたいそうよ。今日のお昼前に到着するそうです。その時間は開けておいてください。それ以外の皆さんはいつも通りに。それでは解散」

皆がバラバラに出て行く。メビウスも同じだが、スカイアイはハルナ・マルセイユの情報を集めていた。

「マルセイユについての情報が知りたい？」

「そうだ。我々は彼女のことを知らないからな」

ミーナ中佐からバルクホルンとハルトマンが詳しいと聞き2人に直接聞きに来た。

「やつは自分勝手に我が儘で飛んでいるようなやつだ。私は奴のこと

が気に入らない」

「エースなだけに仇名もあるんだよ。アフリカの星、砂漠の鷲、それとゲルベファイアツェーン」

「ゲルベ……？」

「カールスラント語で『黄色の14』て意味だよ」

「黄色、だと」

黄色という単語が出た時、スカイアイの雰囲気が変わったのを二人は感じた。いつもは規律正しくしつかりものでメビウスやオメガ2人の面倒をよく見ている上司としてやっているのを見ているが、ここまで神経を尖らせた状態を見るのは初めてだった。

「彼女の戦闘スタイルは？」

「あ、ああ彼奴は勝ち負けに強くこだわる性格だな。戦場では勝利以外に価値はないが持論になってる。そこは私も分からなくはないが」
「……そうか。ありがとう。参考になった」

お礼を言いスカイアイは去って行った。残された2人は先ほどのスカイアイのことを思い出す。

「黄色の14の名前が出た時いつもと違ってたね」

「ああ。なにか気になることもあるのか」

そのことをすぐにでも知ることになるとは2人は思いもしなかった。

リーネと芳佳は当番の掃除をしていた。話しても手を休めることは無い。が、宮藤はあることを思い出し掃除の手を止めてしまった。
「どうしたの芳佳ちゃん？」

「あのねリーネちゃん。思ったんだけど、私一度もメビウスさんに名前前で呼ばれたことないの」

「えっ？」

「皆もオメガさんもスカイアイさんも呼び方は違うけど一回は名前で呼ばれたことはあるんだ。でもメビウスさんだけ私のこと苗字でしか呼んでない」

そう。宮藤はメビウス1に一度も名前で呼ばれたことがないことに気が付いたのだ。それに思い返してみると

「なんだかメビウスさん私のことを避けてるように見えてね」

本当に注意しなければ分からないくらいの仕草。それを宮藤はなんとなく感じ取っていた。

「なんでなんだろう……？」

その掃除の後一人きりになっているとき宮藤はペリーヌから決闘を申し込まれた。

待機室のなか。ここではメビウス8とスカイアイが置いてあるチェスで対決していた。

「で？ その黄色の14て呼ばれてる彼女はどなんだ？」

ビショップを使い前の方に置く。

「少なくともこちら側の人間ではないな」

ナイトで敵の動きに制限をかける場所に置く。

「話は変わるが、今の隊長は出撃させないほうが良い。普通の敵なら大丈夫だが、もしやつを真似た敵が現れたら」

「いや、それはない。と。チェック」

クイーンを囷に使いそのほかの駒を回していたスカイアイがメビウス8のキングを捉える。

「どうしてだ？」

メビウス8はキングを逃す。スカイアイはそれを追撃する。

「これは秘密事項だが、ファールバンテイでメビウス1と黄色の13が

戦っただろ。メビウス1に撃墜された彼の機体が見つかってないんだ」

「なに……?」

「ISAFは彼ら、とくに隊長の黄色の13に散々辛酸を舐めさせられたからな。どうしても彼を墜とした決定的な証拠がほしかったらしいが欠片も見つからなかったらしい。はい。チエックメイト」

「あ!?! はあ、やっぱりお前に勝つなんて無理か」

チエスの軍配はスカイアイに上がった。

「ということは今日ここに来るのは本当に赤の他人ってわけか」

それにしても、とチエスを片づけながらメビウス8は言う。

「黄色の13は隊長にやられたのは確実なんだろう。じゃあ一体どこに消えちまったんだ」

そんなこと私が知るわけない。とスカイアイは返した。

そのとき、基地に警報が鳴り響いた

《グリッド東23地区。単機よ。ロンドンに向かうコースを——
——》

滑走路で空を眺めて呆けていたメビウス1は誰よりも速く格納庫に辿り着いていた。状況を説明する放送が途中で途切れる。

《なんですって? そんなの聞いてないわよ……! あなた達はそこに待機してなさい!》

かなり慌てた様子で通信が途切れた。ふと見ると宮藤とペリーヌのストライカーが無い。近くにいた整備員に聞くと訓練で飛んで行ったそうだ。予定になかったんですけどね。と最後に付け足すように言う。

となると今すぐに出られるのは俺一人だけだ。

「自分が先に先行する。あとから来る連中に伝えてくれ」

すばやく13mm機関銃を持ちラプターを履いた。出ようとしたところでスカイアイとメビウス8がやってくる。

「隊長おまえ大丈夫なのか？」

「ああ。俺は大丈夫だ。先に先行してくる」

「メビウス1。君は自分の状態が分かっているのか」

自分の事なんて分かっているとスカイアイに返した。いつまでも引きずっているわけにはいかない。

「無理はするな」

「了解。メビウス1。先行して敵を足止めする」

相手は単機。しかもレーダーに映るか映らないかぐらいの小型らしい。たった一機でなにをするというのか。もしかして偵察だろうか？何はともかく急ぐことにした。

反応があつたグリッド東23地区から少し離れた場所に1つの反応が確認できる。近づくとそこにいたのはペリーヌだった。だが宮藤の姿が見えない。

「ペリーヌ。宮藤はどうした？」

「実は宮藤さんは敵に逃げられるから先に行く……」

「なに？」

すぐさまレーダー索敵範囲を広げる。すると遠くに反応が1つ。いや、これは2つだ。

いくらなんでも近すぎる。

「自分が行く。ペリーヌは後続と一緒に来てくれ」

返事を待たず、俺はバーナーを吹かした。海の上に出る。そこからアフターバーナーを点火させた。音速を倍の速さで飛ぶ。すぐに宮藤が見えてきた。そして、その隣に並ぶ黒い者も。

「人型!？」

初めて見た。ネウロイは決まった形がなく小ささまさま。行動も規則性もなければ統率がないわけでもない。そろそろ半年になるメビウス1でも人型のネウロイを見るなんて思わなかった。

「何をしている宮藤!」

人型ネウロイに手を伸ばす宮藤に怒鳴りつけた。

「メビウスさん待つてください！ このネウロイは」

宮藤がネウロイとメビウス1の間に割り込む形で入る。

「そこをどけ！ お前自分が何してるか分かっているのか?!」

「このネウロイは敵じゃありません！」

「そんな保証がどこにある!!」

ネウロイが敵か味方か、そんなこと俺にとつてどおでもいいこといいことだ。ただ、敵となったエルジアのエース達やかつての俺の仲間を模倣してくるこいつらを自分は許せなかった。

だがここで人型ネウロイが宮藤から離れる様に動いた。まるで撃たれても大丈夫になったと思われないばかりでだ。

「逃さんー!」

底部ウエポンベイが開く。ターゲットをAMRAMでロックオンした。そして発射ボタンを

『Warning Warning! Missile! Missile!
!』

「な——!?!」

突然のミサイル警報。レーダーに映る超高速でこちらに接近する光点が4つ。すぐに回避行動をとりチャフでミサイルと欺瞞させた。いきなりなこと息が上がっている。レーダーを確認するとおそらくミサイルを発射したものの反応が高速でこちらに向かつてくるのを確認した。速度はマツハ2を超えている。

迎撃すべく自分も敵に向かつてバーナーを吹かした。距離が近づくとつれ、シルエットがはつきりしてきた。高度は共に同じ、真正面に向かい合っていた。

「!? こいつも人型ー!」

驚くことに敵はもう一体の人型ネウロイだった。先ほどの正面からしか確認できないがさきほどの人型に比べ長髪で紅い瞳。そして

左目に眼帯をしている。

俺と敵はヘッドオン。同時に引き金を引いた。どちらの弾も当たることなく。二人は交差した。

「うそ、だろ——」

交差した瞬間。俺は見た。信じられなかった。自分の見間違いだと思えば後ろに通り過ぎた人型ネウロイを見る。

その思いは崩れ去った。

その人型ネウロイは先ほど宮藤の隣にいたやつと同じ場所にコアがある。常に剥き出しの状態だ。紅い瞳をし、全身が漆黒の色に染まっている。

その、足に穿いているものを除いて。

それはメビウスの目にしっかりと焼き付いていた。その形状も、そのペイントも忘れるわけがない。人型ネウロイが履くそれは、S u 3 7。そして、その主翼の先端が黄色で塗装され、何より機首に黄色で「13」と描かれていた。

ネウロイが俺たちのエースを真似た動きをすることが分かったとき薄々気づいていた。だから分かり切っていたことだった。あんたを真似た奴がでてくることくらい。でも違った。

銃を握る手が震える。メビウス1は確信する。こいつは、本物だ。

「——Yellow 13!!!」

人型ネウロイ、黄色の13は少しだけ笑い、メビウス1に襲い掛かった。

第29話「Yellow」

ベルツは執務室である資料を漁っていた。それは今日501基地に訪れるウィッチ、ハンナ・ユステイナーナ・マルセイユについての資料とストームウィッチーズの資料である。

昨日、彼女がこのロンドンに来ていたという情報を耳にしたとき正直に驚いた。なにせ彼女はウィッチの中で一番の有名人といって間違いない。そんな彼女が来ているという情報が人々に知られればいような意味で大混乱になるだろう。故に、情報が漏れないように統制していたため、いろいろなコネを持っている彼でも知ったのが直前だった。さらに彼女はメビウスに用事があるという情報もあつたため、不思議に思い彼女の経歴を見ているのだった。

そして、1943年の作戦の戦闘被害の詳細に目が止まった。

「1943年当時のリベリオン試作重爆撃機B―29編隊による高高度からの絨毯爆撃。航空部隊に敵を低空へ誘導、その後高高度で爆撃部隊が浸入し敵を殲滅する作戦……か」

作戦内容を読み上げた後次の欄に書いてある文字に移る。そこに書いてあるのは『失敗』の文字。

作戦は順調に進んでいたそうだ。だが肝心の爆撃部隊が全滅。作戦中止になった。そして、そこに書かれている内容に彼は顔をしかめる。

「ネウロイによる長距離空間砲撃……?」

その言葉に彼はある光景を思い出す。それは生前に見たあの光景だ。しかし、すぐに自分の思い違いだろうと考える。仮に先ほどの推測が当たってたらとつくにアフリカ戦線の部隊は壊滅しているからだ。そして、彼らだけであの兵器を破壊できるとは不可能である。

しかし、その後の資料を漁ってもそれきりその攻撃記録が全くない。

「なにか、あるな」

確証はないのに、彼の中では何かを確信していた。

そして、501基地内 管制塔

「宮藤さんがネウロイに接触したのは間違いはないわ」

管制塔にいるミーナはサーニヤの魔道針の結果を坂本たちに伝えた。

「でも、そこから先はサーニヤさんも分からないって」

「すいません」

《スカイアイのほうはどうなんだ》

《メビウスの返事が来ない。宮藤軍曹と接触してからレーダーの反応が無くなった。一体どうなってる》

メビウスが撃墜されたわけではない。レーダーが壊れたわけでもジャミングを受けてる様子もない。こんな状態は初めてだった。

《オメガだ。自分も出撃するか？》

滑走路に待機しているオメガさんから通信が入る

「いいえ。オメガさんはここに残って。敵が一機とは限らない。これ以上戦力の分散は好ましくないわ」

《確かに一理ある。だが、なんだこの胸騒ぎは……？》

メビウス8の第六感が何かを告げていた。

「くそ。一体なにが」

坂本たちが宮藤とネウロイがいる場所を目指して飛んでいる。1人で先行した宮藤と追ったメビウスとの連絡が取れない。あのスカイアイの能力をもつてしても2人を捕捉できないなんて。

と、思っていると遙か前方で火球が生まれた。よく見ると複雑に絡み合う飛行機雲が生まれては消えてを繰り返していた。

「なんだあの爆発は!? まさか宮藤のやつやられたんじや」

坂本は魔眼を使い神経を集中する。見えてきたのは宮藤の姿。そ

してその先では戦闘が繰り広げられている。おそらくメビウスが戦っているのだ。それもかなりの機動で飛んでいるのが分かる。坂本は敵の姿を見ようとさらに神経を集中した。

「メビウスが戦っている。敵は——馬鹿な！」

坂本は魔眼で敵の姿を捉えた。同時に見えたものを否定する。

「どうした少佐。なにが見えたんだ？」

バルクホルンが坂本に聞く。だが彼女はまだ困惑していた。

「敵は……ネウロイだ、ウィッチの姿をした」

「ちよつと待つて。メビウスたちのようにジェットストライカーってこと？」

坂本は答えなかった。つまりは肯定。だけどまだ何か困惑しているように見えた。

「まだ、なにかあるのか？」

「ああ。だが、正直見えたものが信じられない。一体なんの冗談だ」

坂本が皆に言おうとしたとき。宮藤が手に持つ銃を構えたのを見た。

「！ ダメだ宮藤！ 撃つな!!」

美緒は出せる限りの大声で叫んだ。しかし、それは宮藤に届かなかった。

今まで以上の機動で動き回る。それでも俺は黄色の13の後ろを取れないでいた。Su-37はステルス能力がない代わりに高い機動性を誇る機体だ。そして、それはF-22ラプターを上回る。だが、それでも自分は長く黄色中隊のSu-37と戦ってきた。今では彼の部隊の十八番であるコブラ機動もできる。だから、俺は奴に後ろ

を取らせた後コブラを実践。オーバーシュートを成功させた。兵装、AIM-9短距離空対空ミサイルを選択。AIM-9の弾頭が作動し、Su-37のエンジンから放たれる赤外線を捉える。

「FOXツ——何！」

ミサイルを発射しようとした瞬間。黄色の13はフレアを放出させた。フレアの赤外線レーダーを惑わす熱量を出されたおかげで目標を見失い、その隙に黄色の13はロックオン範囲から逃れていた。そして、メビウス1は黄色の13の実力に背筋が凍った。

（こいつ、ロックオンのタイミングを見切ったのか……!?）

驚愕するもすぐに頭を切り替える。いつまでも引きずっていたらやられてしまう。それは戦場の常識だ。そうしている間に後ろを取られたら自分が落とされる。奴の後ろを取り直し13mm機関銃を構え、撃った。しかし、その銃弾を黄色の13は余裕で躲す。

「くそつ、初速が遅すぎるこのシオンベン弾め！」

13mm機関銃は当たればジェット戦闘機にもダメージを与えられる。しかしやはり技術の問題でその弾速と初速はM61と比べ圧倒的に劣っていた。天と地では済まない。月とすっぽんくらいの差だ。

すると追われる形になっていた黄色の13は急降下を始めた。自分もそれに続く。俺と奴が直線に並ぶ。これならこの銃でも当たるかもしれない。俺は照準を合わせた。そのとき、後ろを向いていたはずの黄色の13が反転急停止。完全に向き合うと同時にその手に持つ銃が火を噴いた。

「な!?!」

突然のことに驚きバレルロールで銃撃を躲し、黄色の13の横を通り過ぎる。後ろを確認すると奴はまた反転し今度は俺の背後を完全にとっていた。そうして何が起きたのかようやく理解する。

「クルビット……!」

クルビット。戦闘機機動であるコブラの応用技。コブラは機体を垂直にしてから前に機首を倒すが、これは機体を一回転させる。Su

—37のような特に優れた機動性と失速時の操縦性を持った機体だからこそ可能な空戦機動だ。自分が乗るラプターでも可能だが、一度もやったことがない。フアーバンティでそれはやっていなかった。ということは今回が初めて実践したということだ。

けたたましく鳴るロックオン警報。黄色の13から見れば今の自分の位置は絶好の的だ。

やられる——!!

そう思ったとき、黄色の13はミサイルを撃たずに急旋回した。先ほどまでいた場所に銃弾が通り過ぎる。

一体誰が。その方角を見る。そこにいたのは、宮藤芳佳だった。

《メビウスさん！ よか「下がれと言っただろ、馬鹿野郎!!!」》

宮藤は俺を助けるために攻撃したのだろう。現に俺は助かった。だが、彼女はやってはいけないことをしてしまった。

黄色の13の鋭い眼光が、宮藤を捉えていた。

「やめろ。133！」

メビウス1は叫ぶ。しかし、Su—37の懐にある一発のR—73が切り離され——火が付いた。

私の目の前でメビウスさんが戦っている。それは戦場でいつも見慣れた光景。ただひとつ違いがあるとするとするなら、あんなに苦戦するあの人の顔を初めて見たことだった。メビウスさんは強い。それは私も理解している。なのに、今の彼女は、私が見ても追い詰められているのがはつきりと分かった。

戦闘が始まる前、メビウスさんは私に遠くに行けと言っていた。危険だから基地に戻れ。だけど、それでいいのだろうか？ ふとそんな疑問が私の中に沸いていた。確かにメビウスさんの戦闘について行けるとは思っていない。だけど、私にも何かできることがあるのでは

ないか？ そう思い、ずっとこの場に留まっていた。

そして、ネウロイが急に止まり、メビウスさんの後ろを取った。あれだとメビウスさんが撃たれちゃう！

(止まっている今なら……！)

クルビット……芳佳は知らないが……で一時的に空中に制止している状態となったネウロイに銃を向け引き金を引いた。銃弾は当たらなかったがメビウスさんへの攻撃はなくなった。

「メビウスさん！ よか《下がれと言っただろ、馬鹿野郎!!》」

メビウスさんに怒鳴られる。それはバルクホルンさんのときよりも怖く感じた。そして、ネウロイから一本の、みさいる、と呼んでいるものが切り離され、私に向かって飛んできた。それは速い、当たれば私は死んでしまうだろう。でも私たちにはシールドがある。だから私はすぐさま前方に直径10mのシールドを展開する。シールドでみさいるの爆風は防げる。

高速の何かが私の前を通り過ぎる。みさいるは私ではなく、通り過ぎた何かを追って私から離れた。ミサイルが追っている先にいたのは——メビウスさんだった。

「そんな……なんで？」

シールドで防げることが分かっているのに、なんで自分を犠牲にするようなことをするんですか。そんな疑問を余所に、メビウスさんはストライカーから火の粉を撒き、急旋回した。みさいるは——メビウスさんを追い続けた。彼女は逃げながら持つ機関銃をみさいるに向け撃った。しかし、どれも当たらない。そして銃撃が無くなった。みさいるは健在。メビウスさんは迫りくるみさいるに13m機関銃を投げつけた。それはミサイルに命中し、爆発する。その爆風に包まれ

「メビウスさん！」

黒煙の中から、メビウスさんが落ちていった。

その光景を見た坂本はすぐに命令を出した。

「全員最大速度でメビウスを助ける！」

『了解!!』

誰が何をするなんて考えている暇など無かった。とにかく撃墜されたメビウスが海に落ちる前に助け出さなくてはならなかった。全員が出せる最大速度で向かう。最初に追いついたのは、シャーリーだった。

「メビウス大丈夫かって、こいつは……………!!」

「!・メビウスしっかりしろ。おい！」

シャーリーがメビウスの体を支え、後から来たバルクホルンが能力の怪力を使いストラライカーを支える。遅れてきた者達も到着する。そして目に入るそれに皆が絶句した。

全身が爆風で飛び散ったミサイルと機関銃の破片が刺さり血が流れている。そして、一番目を背けたくなるのが、メビウスの右胸の下に、13mm機関銃の銃身の破片が身体を貫通したままの状態だった。誰が見ても重症。命に係わる傷だった。

「メビウス、メビウス! 返事をしろ!!」

「は……………ああ……………ゲボツ」

坂本の返事に全く反応しない。呼吸は小さく。口から血を吐いた。傷の場所が場所だ。息をしようにもその度に激痛が走り、満足に呼吸ができないのかもしれない。両の目は光を失い、虚空を眺めている。

「メビウスさん！」

宮藤が遅れてやってきた。そして、その惨状に言葉を失う。ペリーヌが宮藤の頬を叩いた。

「貴女のせいですわよ! 貴女が自分勝手なことをしたせいでメビウスさんがこんな目に!!」

「ペリーヌさん。落ち着いて……………」

「これが落ち着いていられますの!？」

「いい加減にしろお前たち!!」

見かねた坂本が叱責する。

「それより……見ろ」

坂本が上に指をさす方向を見る。そこからゆっくりと、メビウスと闘っていた人型ネウロイが降下してきた。皆がメビウスを守るよう銃を構える。そして、その顔がはつきりとわかる距離まで近づき、さらに驚愕の空気に包まれる。

「な——?!」

「…………マジ?」

「夢でも見ているのか……?」

人型ネウロイはメビウスと同じジェット機型のストライカーを履いていた。それだけ黒でなく、灰色迷彩をしたペイント、主翼を黄色で塗っている。

だが、彼女たちが驚いているのはそこではない。ネウロイの顔。それはあまりにも良く知る人物の顔に酷似していた。

「マルセイユ……」

そう。今日基地に来ると知らされていたウィッチ、『ハンナ・ユステーナ・マルセイユ』と瓜二つだったからだ。唯一違いがあるすれば左目に眼帯をしていることだろう。

沈黙に包まれる。坂本は混乱していた。すぐにメビウスを治療しないといけない。これが最優先事項だ。だが、この目の前のネウロイをどう対処する? あのメビウスに一撃を加えたほどの相手だ。相当の実力を持っているのは確かである。どうする。どうする。どうする——!

その沈黙を破ったのは、メビウス1だった。

「さー、ティー……ん……………」

「メビウス。目が覚めた——!?!」

全員がメビウス1の方を見て、言葉を失う。

「ふーッ! ふーッ!」

彼女は意識が朦朧とする状態で、扶桑刀をネウロイへと向けていた。血を流しすぎたせ

いでもう目がろくに見えない状態なはずなのに、その目は真っ直ぐ

ネウロイを睨み付けていた。

ネウロイはメビウスを見つめた後ゆっくりと上昇。ガリア方面へと去って行った。

そして、緊張の糸が溶けたかのようにメビウス1はぐったりと体を支えるシャリーに倒れ込んだ。

「おい！ しっかりしろメビウス！」

「メビウス！」

「メビウスさん！」

「ミーナ聞こえるか！ メビウスが被弾重症。緊急治療の準備を——」

第30話 「死の足音」

基地の廊下。そこはいつも以上に慌ただしかった。

「緊急手術の準備。包帯と輸血パックあるだけ持つてきなさい！」

「メビウスさん！ 私の声が聞こえますか!？」

「……………死ぬな……………生きる……………しぬな……………」

「メビウス！ 聞こえるなら返事をしろ！」

タンカに乗せられ運ばれるメビウス1。運ばれる間、ずっと彼女は「死ぬな。生きろ」それだけを繰り返していた。基地に降り立った後、彼女の血でぬれた服を脱がせ応急処置をしながら運んでいた。そしてそれを追うように宮藤たちがついてきている。そして手術室の前に辿り着き、医師が皆の前で言った。

「我々も全力でやります。が、正直手遅れと思われれます。ですが」

医師は宮藤のほうを見た。

「宮藤さんの固有魔法を使えば望みはあるかもしれませんが。できますか?」

その問いに宮藤は強く頷く。

「分かりました。では入ってください」

宮藤は手術室の中に入り白衣に着替える。手袋をし、消毒をし、メビウスが横たわる手術台の前に立った。そして、説明が入る。

「他の者が刺さる鉄を抜きますので、宮藤さんは胸の傷を固有魔法で治してください。私たちは他の傷をやります。それともう一つ」

医師は宮藤の肩を抱き、真剣に言った。

「麻酔は胸に打つだけで全部使ってしまいます。ですから他の傷は麻酔なしでやります。それで患者が暴れるかもしれません。落ち着いて自分のやるべきことをやってください」

「は、はい」

「では、始めます」

長い手術が始まった。

手術室の前。ここではペリーヌと美緒、シャーリー、ルツキーニの4人が座っていた。

「——ッ!!!」

手術室から抑えたような叫び声が聞こえてくる。それが聞こえるたびメビウスの傷の深さを思い知らされた。

「大丈夫でしょうか。もし死んでしまったら……」

「大丈夫だ。宮藤もいるんだ。今は祈るしかない」

「坂本少佐……」

美緒がペリーヌの頭をやさしく撫でた。そういえばさ、とコーラ瓶を開けて飲んでいたシャーリーが思い出したように言った。

「コックリさんのとき、『Yeellow13』て言葉が出てきただろ？」

「そういえば、そうだね」

シャーリーに指摘に横にいたルツキーニが同意したように言った。ペリーヌも思い出した。確かに、メビウスさんが唯一認める相手の名前という質問に出てきた言葉だった。

「あのネウロイ。メビウスのやつ『13』って呼んでた」

「まさか、メビウスさんがいた世界でマルセイユさんと同じ姿をしている人が『Yeellow13』と呼ばれてる人……?」

「そういえば、こんなこと聞いたことあるよ?」

ルツキーニが軍に入る前にある老人から聞いた言葉だそうだ。

なんでもこの世界と似てるようでほんの少しだけ違う世界が幾重にも存在する。ある世界では商人の男性が違う世界だと奴隷、貴族、もしかしたら王様と違う人生を送っていることがあるIFの世界が存在するという考え方。

「そしたら似てたのも説明が付きますわ」

「だけどなあ」

シャーリーが両手を組み言う。

「奴さんはそれを真似したネウロイだ。それはいいとしてあのメビウスが出したあの殺気はどう説明着くんだ?」

「それは、知り合いの真似事をネウロイがしたから」

「私からすれば、あれは異常すぎると思うね。現にスカイアイとオメガの2人はずっとあのままじゃないか」

メビウスが基地に帰還しても、スカイアイは上空に留まり、メビウス8は滑走路脇でストライカーを履いたまま戦闘待機状態をといていない。今回の人型ネウロイの特徴を聞いてから臨戦態勢のままだ。

「“ただ”の知り合いにあそこまで意識を変えるか？」

「どういう意味ですか」

「本当は分かかってんじゃないのか？　なあ。どうなんだ少佐？」

あえてこの場で言わなかったのはシャーリーの配慮だ。メビウスの自己紹介のとき言っていた。『俺たちの世界にネウロイは存在しない』その世界の軍人が戦う相手は？　そんなの深く考えなくても分かり切っていたことだ。それを誰も聞かなかったのはそこまで頭が回らなかったか、その事実を聞くのが怖かったからかもしれない。故に回りくどく、メビウスのことを少しは知るだろう美緒に聞く。

「今ここで、私に彼らのことを言う資格はない。それはメビウスたちが決めることだ」

「はいよ。そんなじゃ、命令通りその時を待ちますか」

シャーリーは新しいコーラ瓶のふたを開けた。

執務室でミーナは連絡を受けていた。

「はい。……………はい。わかりました。それでは」

「それで、ガランド少将からどんな連絡だミーナ？」

受話器を置いたミーナはどうしたものか、と頭を痛めていた。

「今日のマルセイユ中尉の訪問は中止。なんでもここに向かう途中パパラッチに追われたらしくて。そこからロンドン市民に広まって街はパニック状態になったみたい」

「うわー。それは災難だね」

有名人になるとマスコミが敵になる。ブリタニアのそれのしつこさは各国の追隨を許さないほどだ。

「今もまだ追われているみたい。でも、かえって良かったかもしれないわね」

ミーナの言葉にその場にいたバルクホルンとハルトマンは頷いた。今のメビウスの状態はとも面会できるものではない。

「それよりも、今はあのマルセイユ似のネウロイのことだ。オメガとスカイアイの2人、あれから全く口をききやしない」

あれからずっと誰と話さず、ずっと臨戦態勢のままだ。メビウスのことを我々に任せたままである。

「それほど警戒しないといけない相手ってことでしょ。その……『黄色の13』だっけ?」

「偶然にもマルセイユの仇名に酷似した名前……そしてそのマルセイユがこのブリタニアにいる。一体なにがどうなっているんだ?!」

どんっ! とバルクホルンは机を叩いた。それを見てミーナは溜め息をつく。

「彼らにも事情があるの。メビウスさんが目覚めたら、たぶん私たちにも教えてくれるはず——」

ミーナの声を遮るかのように、電話が鳴った。

「はい。こちら501」

《ベルツだ。いまよろしいかね》

「大佐。一体なんでしょう?」

《マルセイユ君のことは耳に入っていると思う。彼女だが今私のところに匿っているところだ。ほとぼりが冷めるまでしばらくここにいてもらうことにする》

「ええ? いいのですか?」

《構わない。幸い、ここに置いてある酒を満喫してくれている》

酒、という言葉聞いてミーナは溜め息をついた。そういえば彼女は無類の酒好きだったのを思い出した。電話の会話の途切れ途切れに《おお!? これ結構有名なスコッチじゃん!》とか聞こえてくる。

そう思っているとミーナはあることを思いついた。ベルツ大佐はメビウスたちと同じ軍隊に所属していた。ということは『黄色の13』についても何か知っているかも知れない。メビウスたちには申し訳ないが、彼からなにか情報が得られると思いついてみることにした。

「レオナード大佐。『黄色の13』という言葉に聞き覚えはありますか？」

「む？ 『黄色の13』だと……？」

ベルツが『黄色の13』の言葉を口にしたとき、ガシャン、とグラスを落とした音が聞こえてくる。すると誰かが受話器を奪い取る音が聞こえた。

《もしもし。今『黄色の13』で言ったよな？ 誰から聞いたんだ

!?!》

「マルセイユさん。いきなり何を」

《いいから答えてくれ!》

「メビウスさんです。でも今彼女は……」

どう言えいいのか分からず黙ってしまふ。しかし、向こうはそれを聞かないで受話器を放り投げた。

《あ！ 待ちなさい今外に出るのはいかん。誰か彼女を止めろ命令だ——!》

向こうのドタバタした状況が受話器から聞こえてくる。どうやら彼女は受話器を放り投げて部屋から出て行ったようだ。それを止めるようベルツ大佐の大声が聞こえてくる。これ以上繋げているのも意味ないと判断しミーナは通信を切った。

「レオナード大佐から連絡。今マルセイユさんを匿っているそうよ。それと1つ分かったことがあるわ」

「なんだ？」

「レオナード大佐、それにマルセイユさんの2人は『黄色の13』について何か知っている」

「なんだと。マルセイユのやつが何故それを知っているんだ」

「分からないわ。それは、彼女から聞いてみるしかないわね」

もしかしたら、その関係でメビウスさんに用があるのかもしれない

い。そうミーナは確信した。

空中に制止した状態のまま、目の前に投影された画面を操作する。現在501基地上空10000m 彼——いや、彼女のもつストライカーは普通とは違う造りになっている。

スカイアイ本人は知らないが、スカイアイの固有魔法は広域空間把握と広域探査の珍しい二重固有魔法の持ち主だ。しかし、これは今の時代では便利ではない。二つの能力を使用するとその分魔力を消費する。個人差はあるが、単純に同じガソリンで一つのエンジン搭載のものとの二つのエンジン搭載のもので比較すればどちらが長く持つか簡単に予想がつく。

これを解決するために、将来発案されたのが宮藤理論型とそれ以前のランドセル型のハイブリット方式。魔力以外に機械的な補助を付け加えることでギリギリ実用レベルに達し、さらに魔力増強装置も搭載したものが、今スカイアイが身に着けているストライカーユニットE-767早期警戒機なのだ。

この世界の未来で誕生するストライカーだが、そんなことスカイアイは知るよしもない。真剣に投影されたレーダー画面を見る。今は何も異常はない。しかし、とうとう現れたとなれば警戒をといてはいけないと頭の中で警鐘を鳴らしていた。

「代わるぞ。少しは休め」

メビウス8がやってきた。どうやら交代に来たらしい。

「いや。私は大丈夫だ。私のことは気にせず「スカイアイ」？」

「心配してくれるのは助かる。だが自分自身のことも考えろ。あれから3時間ずっとだろ？飛行機の中にいるのと違うんだ。正直きついんだろ？2時間が限界だが休んでこい」

メビウス8の気遣いに正直感謝した。感覚が似ているとはいえ機

内にいるとは大きく違うこのストライカーで、性能上可能とはいえ3時間も飛んでいるのは人間にはつらいことだ。

「分かった。そうしよう。それよりもこれを見てくれ」

スカイアイはあるものを投影した。それは以前カレー上空で空戦したときの三次元空戦データの記録だった。そして隊長、メビウス1のそのときの機動が映される。それを見た時言葉が出なかった。

「おいおい……………これ本当か?」

メビウス8はただ信じられないと呟く。その機動は、明らかに人間には耐えられないGが発生する動きだったのだ。確かにメビウス1は隊の中でも激しいGに耐えることができることを知っている。しかしこの機動はおかしすぎた。あの時の、戦争時のデータと比較してもこつちのほうが鋭い。しかし、これを繰り返したら機体も持たないのでは?」

「だが、機体もメビウス1本人も目立ったものは見られなかった。それに聞いた話だが、ウィッチの能力は少なからず機体にも影響されるらしい」

その話を組み合わせたうえで出た結論を言った。

「メビウス1の固有魔法は、非常に高い『身体強化』ではないだろうか?」

治療室のランプが消えた。扉が開く。医師が出てくる。彼女の着る白衣は、返り血を浴びたように真っ赤に染まっていた。

「先生。メビウスさんは……………」

「手術は成功しました」

手術室からメビウスさんが運び出される。しかし、死人の様に眠っていた。

「宮藤さんのおかげで傷ついた組織も治りました。私たちにできるこ

とはここまでです。あとは、メビウスさんの生命力に賭けるだけです」

「宮藤はどうした?」

遅れて宮藤が運ばれてきた。疲れたように眠っている。

「手術が終了したと同時に倒れました。魔力を使いすぎたための疲労と思います」

「そうか。よかった……」

「坂本少佐。少しお話があります。ミーナ中佐にも伝える必要がありますのでよろしいですか?」

そして、執務室にミーナ、坂本と担当した医師の3人が集まり、手術の報告をした。

「手術は成功——しましたが、お伝えしなくてはいけないことがあります。メビウスさんがここに来たとき指の内出血のことを覚えていますか?」

ミーナと美緒は思い出した。始めてメビウスに会ったときその報告を聞いていた。

「調べたのですが、あれは急激なGによってできた可能性が高いと思います」

「それとなにか関係が……?」

「メビウスさんの胸部に刺さった鉄屑。あれが肋骨の一本を破壊し、破片が散らばっていました。取り除きましたが、見えない破片がまだ多数肺に残っています」

「つまり……?」

医師はしばし言うのを躊躇った後、非情な現実を告げた。

「もしまたあのストライカーに乗った場合、Gで残った破片が肺組織内で傷つけ内出血を起こし……死にます」

第31話 「戦間の静寂」

気温40℃。炎天下の環境で半袖を着たいと思う気持ちになるが、ここではあまりの暑さに肌が焼けてしまう。この気候に住んでいる人々は全身を覆う服を着て体を守っている。しかし、目の前の男が着る服は誰から見ても暑そうに見えた。

「待て！ 私に反対だぞお前の作戦は！」

その男の背後から私は声を荒げて言った。

「敵の拠点にお前1人で行くなど自殺行為だ。だったら私たちも」

「その隙を狙ってカイロからのネウロイに襲撃されたらどうする」

「ぐっ……それは」

ここトブルクは北アフリカ戦線の最前線基地。ここが落ちると地中海の向こうに位置するロマーニヤが南北から挟まれる状態になる。故にこの基地の戦力が落ちることは許されない。そんな中ここから南500km付近の砂漠地帯で新たなネウロイの巣らしきものが確認された。そしてそれが目の前の男がよく知るものだという事。

「もし俺の予想通りなら、君たちは近づく前に落とされるほどの防空兵器。実際あれを破壊したほうも戦力の50%を失うほどだった。その状態でも半数をあいつ——リボン付きが沈黙させたんだ。あいつにできて俺にできないはずはない」

そして、男は私に封筒を手渡した。彼のという言葉聞き、私は反論する。が、彼はそれを私に押し付けた。ハンガーの中へと入る。そこには彼の愛機が完全武装で鎮座していた。

「本当に行くつもりなの？」

機体のそばに圭子が立っていた。

「あれを野放しにはいかない。——ふん、皮肉な話だ。あれを守る部隊の隊長だった俺が今こうして破壊しようとしているのだから」

「一枚。お願い」

「手短にな」

写真を一枚撮り、彼は愛機に乗り込んだ。主を迎え入れた鉄の大鷲が目覚めます。あの空の戦場に舞い戻るのではない。けじめをつけ

るため、彼の翼がこの空に蘇る。

機体の風防が閉じようと動く。完全に閉まる前に私は大声で言った。

「いいか！ この手紙はお前が届けることに意味があるんだからな！

あの約束ぜつつつたいに聞かないからな!!」

ビシイ！ と渡された手紙を突き出しながら私は言った。

——絶対に帰ってこい。それ以外は絶対に認めないからな！——

私が言った言葉の本当の意味を理解したのかどうか分からない。彼はそれに敬礼し軽く笑って返した。

それが私、マルセイユが見た彼——『黄色の13』の最後の姿だった。

乗り込んだ飛行機の振動で目が覚めた。気流が不安定なのか機体がガタガタ揺れている。

(あの時を夢で見るなんて、な)

「マルセイユ大尉。あと30分ほどで501基地に到着します」

「分かった」

パイロットからの報告に返事をする。私はポケットから一枚の写真を取り出す。

「思っていたよりも早かったぞ」

ひとりマルセイユは呟いた。

夜

それはどの時代でも、戦う上で攻める側は絶好の時間であり、守る側は一層神経を尖らせる時間である。夜間の飛行が容易にできる。ジェット戦闘機は例えステルス能力がなくなるとも電撃戦に利用できる。これほど厄介なものはない。

そして、今スカイアイが交代で飛んでいた。基地からサーニャとエイラが飛んでくる。

「スカイアイさん。あとは私たちがやります。もう休んでください」

「こっからはうちらがやるゾ」

「すまない」

「謝る事なんてありません」

本当なら夜もやらなくてはいけないのだが、それだと自分の体もたない。夜は彼女たちに任せようと判断した。基地に戻ろうとする。と、ロンドンからこちらに飛んでくる何かをレーダーに捉える。

「サーニャ中尉。ロンドンの方角からこちらに来る反応を確認できるか？」

「こちらでも確認しました。おそらくミーナ隊長の報告通りならおそらくマルセイユさんかと」

パパラッチとロンドン市民……いや、おそらく情報はブリタニア国内全域に回っている可能性がある。外に出るのが危険な状態なのにどうしても行くと行ってきかない彼女にベルツから夜間にストライカーでそちらに向かわせる、と連絡があった。確かにそれなら大半の人物の目から逃れられる。何時に出るとい話は無かった。念には念を入れた結果からだろう。

「それでは迎えに行ってきます」

「分かった。それまではここで警戒しよう」

「じゃあ言ってくるナ」

マルセイユを迎えに行く二人を見送ったスカイアイは通信を開いた。周波数はISAFのもの。

「メビウス8。『黄色の14』がもうすぐ到着する。問題は無いと思う

が念には念をだ。メビウス1がいる病室に待機してくれ」

《了解》

「やして……」

彼女は我々の世界の関係者なのか違うのか。少なくともメビウス1に会いたいと言っている現時点では可能性は低い。しかし、完全に0ではない。まず何の目的で来たのかをハッキリする必要がある。

「もし関係者なら、どう対処すればいいのだ」

仮にエルジア側だったら一触即発だ。そしたら本当に……

スカイアイとメビウス8は隠し持つ小銃が使うことないことを祈った。

そのころリーネはあるものを洗っていた。それはメビウス1がいつも着ていたジャケット。あの戦闘で血まみれになったが本体は穴が開いただけだから洗って縫い合わせばまた使える。赤黒く固まった血を念入りに溶かし落したあと、穴の開いてある箇所を見る。

「あれ？」

その穴はちょうど胸ポケットの下を突き抜ける様になっている。その間に何か神のようなものが覗いてあった。なんだろうと思い、入ってあった中身を取り出す。血がまだべつとりと付着しているがなんなのか分かった

これは、写真だ

入っているのを知らないまま洗っていたから血は少しだけとれてる。けどすべて取れきれていない。擦ると血が取れて3枚の写真内容が分かった。

1枚目は何かの集合写真。全員男性だ

2枚目は前の写真にいた黒髪短髪の男性と車椅子に座る黒髪長髪の女性が写っている。

最後も同じ男性が写っていた。それは見たところその人の家族写

真だった。家族構成はお父さん、お母さん、その人と妹——？

「どうして——？」

「どうかしましたの？」

啞然としているとペリーヌさんがやってきた。リーネは何をしていたか説明する。

「その中にこれが入っていたのだけど、これおかしくありませんか？」
「どれどれ？」

ペリーヌは渡された2枚を見る。それを見ておかしな点にすぐに気が付いた。

「これ。メビウスさんが持っていたもので間違いありませんのよね？」

「はい」

「ならどうして彼女がいませんの？ これではこの男性の写真ではないですか」

そう。この写真にはどこにもメビウスさんがいないのだ。それなのになぜこれを大事に持っていたのか。最初は好きな人との写真と思っていたが、車椅子に座る女性は彼女と似ていない。どちらも美しいことには変わりないのだが。

「それと……これを見てください」

リーネは最後の一枚 その男性の家族写真 をペリーヌに渡す。それを見たペリーヌは目を見開いた。

「どうして……宮藤さんがいますの?!」

そこには私たちが良く知る宮藤芳佳が笑顔で写っていた。

メビウス1が眠る病室内でオメガ11——メビウス8はアレンジしたコーヒーを飲みながら隊長の顔を眺める。ちゃんと息をし

ているから生きてはいる。が、その無表情な顔だとまるで死人のようだ。

(大丈夫だ。これくらいのことですぐ死ぬやつじゃない)

そう思いながらコーヒーを飲むとする。そのコーヒーの水面にうつすらと自分の顔が映る。それに頬の傷跡を見て、昔を思い出した。

私は一匹狼の傭兵だった。ミッションで共にする同業者はいても関わらずやっていた。そして『ユージア大陸紛争』での活動を境にその実力を認められた私はFCU(中央ユージア連合)の正規軍に入れられた。一部隊の隊長となったが、うれしいとは思わなかった。何せ自分は傭兵の出だ。それにも関わらず部下たちは自分のことを親しんでいた。最初は慣れないなかだったが少しずつ、あまりにもとろかったが部隊の者達に気を許すような状態にまでなった。

そして、あの戦争が起き、私の部隊はストーンヘンジの砲撃で落とされた。地上支援のためにA-10で低空を飛んでいたおかげか全員が落ちることは無かった。しかし自分も含め隊の半数が落とされた。私は脱出できたが、できないで機体と共にしたやつが多かった。なんとか生き延びた部下を連れ味方のもとまで辿り着こうとした。あと少しで抜け出せることが出来る。と安心し後ろの部下を元気づけようと振り向いた。

「隊長危ない——！」

突き飛ばされる私。それに対して反対側に倒れる男。遅れて聞こえてくる銃声。咄嗟に小銃を抜き取り、30m先にいたエルジア兵を撃ち殺した。頬に熱を感じ触れると血が付いた。私に当たるはずの銃弾がかすめたのだった。部下を引きずり隠れる。私をかばった彼は頭を撃たれ即死だった。

「——馬鹿野郎が……」

傭兵だったころの私ならこんな気持ちは抱かなかつた。ただ一人死んだ。とだけ決めつけて忘れるだろう。しかし、この数年で彼らといるうちにあのころと変わったのだ。あのときと比べ強くなったのか弱くなったのか自分でも分からない。だが、あの気持ちは絶対に忘れない。

私は今日もしぶとく生き残り続ける。あいつらの最後を知っているのは私だけだ。あいつらの分まで私は飛び続ける。これからも、ずっと

「お前も同じだろ。メビウスー……？」

眠り続ける隊長にそう呟いた。

「ハンナ・ユステイナー・マルセイユだ。自己紹介は別にいいよな」

「ああそんなことしなくてもいいぞ。だが何しにお前がここに来たん
だ？」

「あ。私のことは気にしなくていいよ。聞くだけだから」

執務室。そこでマルセイユとバルクホルン、ハルトマン、ミーナがいる。ミーナはいつも通りだがバルクホルンはマルセイユと言わば犬猿の仲な関係だ。ハルトマンは出された紅茶と菓子を食べている。

「マルセイユさん。来て早々申し訳ないのですが、質問に答えてください。どうしてここにいらしたのですか？」

「この写真だよ」

マルセイユは一枚の写真を取り出す。そこには小さいがかつて飛んでいたF-4Eの姿が捉えてあった。

「6月くらいにブリタニアを出た輸送船の船員がとった写真さ。それ

を見つけたからここに来たのさ。それ、ジェット戦闘機だろ？」

なるほど。あのときの戦闘を写真でとったやつだったか。

「これに乗っている操縦者に会いたいんだけど」

「今メビウスさんは先の戦闘で重傷を負って眠っています。彼女の関係者を——」

「ちよつと待て。電話でも言つてたけど……メビウス”つて言ったか？」

「どうしたマルセイユ？ 顔色が悪そうだが」

メビウスという単語が出た途端どこか動揺した顔になる。マルセイユが口を開いた。

「もしかして、メビウス”——リボン付きの死神”？」

「な、なぜその名を？」

「リボン付きの死神”？ 何だその名は」

バルクホルンは何のことか分からないが、ミーナは表情が固まっている。2人の顔を見てマルセイユは確信した。

「よりにもよつてあいつの宿敵か……世界観的にビンゴだったけど大丈夫かな」

「あいつ？ あいつとは誰だ」

「黄色の13”」

「なに!? 貴様あのねう——」

黄色の13”について知っていると口ぶりにバルクホルンがマルセイユを問い詰めようとするが横にいるミーナが彼女の口をふさぐ。

「マルセイユさん。貴女から黄色の13”について聞きたいの。どんな人物でしたか？」

「どうだったか？ そうだなあ」

腕を組み、真剣に考えるマルセイユ。その間にミーナは小声で話す。

「（黄色の13”について何か分かるかもしれないわ）」

「（そうか。すまない）」

「（トウルーデ。メビウスがやられてから落ち着かないよね）」

「(こ、これはあいつのことを心配してだな……!)」

3人がそうこうしている間にマルセイユは言いだした。

「黄色の133は、隻眼のくせに腕が高く、一カ月で40機近くのネウロイを落として、私が模擬戦しろと言っても『必要ない』って軽くあしらわれて、仲間思いなやつで、私の約束を守らなかつたくせに頼みごとを私に押し付ける馬鹿野郎で——」

私が惚れた男だ

最後の言葉を言った後、ハルトマンが盛大に紅茶を嘔き出した。

第32話 「宮藤脱走」

星が降った夜を 覚えている

隕石を撃ち砕くために 各国共同で大きい大砲が作られ

あの夜 隕石破壊に使用され その様子がLive中継された

それを見ていた皆が思った これで助かると 誰もが思っていた

俺もその一人だった

爆音

乱れる映像 あまりの大音量にスピーカーがイカれた

撃ち漏らした隕石の一つが大砲の一つに直撃した

隕石が落ちたことで発生したシステムダウン

事前に予測していたため復旧は1分で済んだ

1分間 死が大陸に降り注いだ

翌日のニュース 隕石の墜落地点の詳細な情報がニュースで流れ
た

我が家のあった場所

なつかしい家族は もはや記憶の中にしかない

異世界に飛ばされた今もあの穴を

俺はけっして忘れない

あそこは家族が眠る 巨大な墓標

悪夢にうなされた宮藤は目を覚めました。外は朝を迎えようとして
いる。部屋にある蛇口から水を飲んだ。

「今の………夢？」

夢なら幾度となく見たことある。いつもの日常だったり、意味不明なものだったり様々だ。今の夢も意味不明なものに含まれるものだ。降り注ぐ星の雨。発射される大型ネウロイと同サイズの大砲。そして、巨大な大穴。しかし、何故か現実味を感じずにはいられなかった。「それとあのネウロイ……」

昨日メビウスさんに襲い掛かった2人目のネウロイ。私に対して攻撃したときの顔が、どうしても私を殺す気ではないように見えたのだ。

「危険なのは分かってる……でも」

ネウロイと分かり合えるかもしれない。争い事が嫌いな宮藤にとって、それはあまりにも愚かな考えだが、どうしても確かめずにはいられなかった。

執務室のソファーにマルセイユは1人考え込んでいた。夜に聞かされた私にそっくりのネウロイ。そして、そいつが履くストライカーが彼の機体と同じだったこと。

「なんだ。朝まで飲んでいたのか……お前が酒を飲まないなんて珍しいな」

部屋に入ってきたバルクホルンがマルセイユの飲んでいたグラスを手に取る。そこに入っていたウイスキーは水とお酒が分離していた。それはオンザロックで飲んでいたウイスキーを飲まずそのまま放置していたことを意味していた。

「なあ。バルクホルン。何故あいつは黄色の13お前たちを攻撃しなかったと思う?」

「なぜ? そんなのいつでもできるからだろう?」

「そこなんだよ」

マルセイユはバルクホルンへと振り向く。その顔は寝ていないの

に全く疲れていない。

「『黄色の13』を真似たただのネウロイなら躊躇なく攻撃してたはず。なのにメビウス1にだけ交戦し、戦闘に介入した宮藤芳佳には攻撃した……おかしいだろ？ 明らかに相手を選んでる節がある」
「ではなんだ。あれはメビウス1だけが目的だったと言うのか？」

「そうさ。宮藤芳佳に攻撃したのは決闘の邪魔をさせないための牽制と考えると納得できる」

しかしそれは予測だ。100%そうである確信はない。だから、どうしても確かめたかった。

「今日ネウロイの巣に近づいてみようと思う」

「な!? 危険すぎる! 一体何を根拠に言ってるんだ!」

マルセイユは水と分離したウイスキーを飲み干す。

「根拠なんてないけどさ。なんかあいつを似せてるんじゃないかって、あいつのような気がするんだ」

そうは言っても必ず会えるわけじゃないし、なにより普通のネウロイのお迎えを受けるだろう。どうしたものかな〜と思っっていると扉が開いた。

「大変です! 宮藤軍曹が脱走しました!」

ロンドンにいるベルツは自宅に帰らず部下から受け渡された資料を見ていた。7月に決定した501部隊の予算削減。確かにブリタニアの財政は火の車状態だがここ最近の空軍と海軍の金と資材の流れが怪しかった。私としては海軍の動きがとても怪しかった。陸軍だけでなく海軍にも顔が聞く私はそれなりに情報が回ってくる。しかし、海軍の資材の流れが異様に多くなっているのだ。なにか軍艦を

造っているのかと思ったがかなり周到に隠されているのか実態が掴めていない。それに対して空軍、とくにマロニー大将でお金の流れが頻繁に多く、何かあると思ひ部下に調査を言い渡したのだ。

海軍については何か扶桑陸軍の存在を確認しているがそれだけで情報は得られていない。一方でマロニー一派の動きは少しずつ掴めていた。それが手元にある絵。そこにはSF染みたロボットのようなものも飛んでいる姿が描かれている。写真では撮れないような今の時代に絵はときに重要な意味を持つ。どうやらジェット推進の機体であること、人が乗っていない無人機との情報だった。前者は分かるまでもないが、後者が信じられなかった。何せ今の時代完全な自立兵器など作れるはずがない。確かにこの世界には私がいた世界と違い魔法という概念が存在する。それを頭に入れても無理だということとは分かっていた。だとしたら、一体どんな技術を使っているのだろうか？

「いやな予感がするな……」

そう呟くとドアが叩かれた。中に入れさせる。

「監視の者から報告です。例の機体が501基地に向け飛び立ちました！」

「なに!? それは何時ごろだ」

「0800です」

現在0815 そろそろ基地に着いてもいいころだ。だが一体何の目的で? と考えていると別の者が入ってくる。

「失礼します。マロニー空軍大将と部下の者が501基地に向け出発したと報告入りました！」

「視察の間違いじゃないのかね?」

「通常装備と重武装の兵士、研究者らしき人たち合計200人越え中隊規模の人数です。おかしいです」

入ってきた情報を整理し考える。無人機を501に渡すとして研究者だけでなく兵隊まで送るか? まるで敵地にでもいくような感じだ。それに彼はウィッチ否定派だったはずだ。彼女たちと協力するなんてことはない。なら考えられるとすれば……基地の占拠?

まさか。とベルツは思う。毛嫌いするといっても自分の、空軍の基地だ。銃は必要になるかもしれないが重装備するまで警戒する必要性が考えられない。だとするなら何か別の目的がある。それに研究者もいるとあるが、もし無人機にさらなる改良を施すとするなら喉から手がほしいのは——彼の機体か。

「マロニー大将の動向を探れ。あと501基地を監視できる場所を速やかに確保しろ」

「了解しました」

「それと501に連絡をとってくれ。メアリーにも至急だ！」

「はっ！」

最悪を想定する必要がある。もし仮に彼のストライカーが破壊された場合どうやって対処しろと言うのだろうか。無人機に自信があるのだろうか、あんなもの私たちの世界では敵にもならない。ましてや戦闘機相手なら尚更だ。とにかく急いだほうがいい。すぐさま行動に移った。

宮藤芳佳軍曹の脱走——

その知らせを受けミーナはすぐに指示を出す。

「美緒とペリーヌ達は基地に残って！」

「……わかった！」

「さあ、出撃するわよ！」

「了解！」

ミーナは出撃するバルクホルン、エーリカ、マルセイユ、シャーリー、ルツキーニと共に、大空へと飛び立った。彼女たちが飛び立った後基地に連絡が入る。

「空軍大将殿がここに向かってる？」

「ああ。しかもかなりの人数だ。武装している兵士もいるらしい」

ベルツ大佐の連絡内容はこうだ。ひとまずメビウス1を基地から逃し、しばしの間海兵隊のところまで身を隠すということだった。もし捕まると機体が分解されかねない。そのとき襲撃を受けたら壊滅だ。「だがメビウス1と機体はどうする？ 自分の機体持っていくだけで手一杯だぞ」

「そこは俺たちが何とかする」

名乗りを上げたのはホーマーだった。

「さすがにあのデカブツは隠せないが、ストライカー程度なら十分隠せる。とっておきの隠し場所がある」

「賭けるしかない。よろしくお願いする」

「おう。任せろ！」

ホーマーが立ち去り再度話し合いが続く。

「機体はこれでいいとして、メビウス1はどうする？」

「……隠すのは無理だろう。それにおそらくメビウス1の顔は知られているはずだ。だが人が人だから強引にはできないはず」

そこもう祈るしかなかった。それにもう時間がない。

「すまない。メビウス1を頼む。行くぞメビウス8！」

「目が覚めたら伝えてくれ。必ず迎えに行くってよ！」

「分かった！ それまで奴らに指一本も触れさせないぞ」

「メビウスさんのことはお任せください！」

メビウス8とスカイアイは自分の機体を装着し、基地を飛び立った。

以前会った人型に出会い、導かれるようにネウロイの巣の中へと入った宮藤。その中心と思われる空間には私を導いたネウロイの他にもう一体いた。

「あの時の……！」

メビウスさんと交戦したあの人型ネウロイ。だが戦う気がないのかこちらを見つめるだけで何もしてこない。

そしてネウロイは宮藤にある映像を見せる。

青い海と白い雲に覆われた天体——地球。

続いて空を飛ぶネウロイと、それを迎撃する戦闘機。

シールドを張り、ネウロイに肉薄する一人のウィッチ——それは宮藤も知っている、坂本だった。

場面は変わり、地面に落ちたコアを囲む白い服を着た集団。

そしてどこかの工場らしき場所で、暗闇に光る人型の機械——

「ねえ、これはいったい何なの？ どうしてこの映像を私に見せるの？」

宮藤は隣にいる人型に話しかける。が、返事はない。人型は何かを察知したのかと思うと、姿を消した。

どうしても理由を聞きたいが本人がいないため聞けない。宮藤は近くにいたもう一人のネウロイにも聞きたいことがあるため問い詰めた。

「ねえ。どうしてメビウスさんを狙うの？ あなたはあの人の一体なんなの？」

問い詰める宮藤にネウロイはゆっくりと両手をかざし、先ほどのネウロイと同じように映像を見せる。

「なに………これ………あの、夢？」

見せられる映像

先ほどの地球とは大陸が違う、もう一つの地球。その一つの大陸が拡大される

夜空に降り注ぐ星の雨。吹き飛ぶどこかの都市。迎撃する巨大大砲

撃ち落とされる戦闘機。爆破される戦車

一瞬にして爆散する航空機群

どこかの小さな島の上空に所狭しと飛ぶ戦闘機たち

例の大砲上空で繰り広げられる音速を超える戦闘機同士の戦い
町の灯がともった夜

そして——真つ赤な夕日を背に二機の戦闘機が死闘を繰り広げている映像

一機は目の前のネウロイが履くストライカーと同型の戦闘機
相手をする機体は、私が良く知る機体とエンブレム——メビウス
さんだ。

「これは……どういふこと……？」

宮藤は、ネウロイから見せられた映像に困惑した。今の映像に出てきた戦闘。その全てにネウロイは出ていない。つまり、あれに乗っていたのは人間。そして、同じ人間同士の戦いなのだ。

「あなたは、あなたはメビウスさんの何なのですか？」

宮藤はネウロイに話しかける。が、何も答えない。すると突然ネウロイは宮藤を抱き動き出す。先ほどまでいた場所にビームが通り抜けた。

「ぎゃあああ………!!」

衝撃で宮藤は気を失った。

ミーナ達は突然現れた人型に驚きながらも、すぐに戦闘態勢を整え、散開する。しかし、人型はそれに反応せず、ただじつとブリタニア本土を見続ける。

「いったいなにが……」

ミーナが呟いた時だった。

突然現れた銀色の飛行体。それは猛スピードで人型に近づくと、機首についていた機関砲を撃った。

機関砲弾を回避した人型は、両手を變形させ、飛行体目掛けてビームを放つ。だが飛行体はそれを軽々躲すと、人型に變形する。

「なんだあれ!？」

驚く中、その機体は両手を胸の前で合わせると、ネウロイと同じ赤

いビームを放つ。人型はそれを避けるがビームはネウロイの巢を貫いた。

「何て威力だ！」

再度ビームを放とうとエネルギーを溜める機体。だが、突如その機体が爆風に巻き込まれた。ネウロイのミサイルが命中したのだ。両腕部分に損傷を受けた謎の飛行体は何処かへと去っていった。

「何だったんだあれ？」

「そんなこと考えている暇ないわよ」

茫然とそれが消えて行った方向を見続けるシャーリーにミーナが言う。彼女たちの前にはもう一体のネウロイ……マルセイユ似の人型ネウロイが気絶した宮藤を抱えていた。皆に緊張が走る。明らかに人質を取られている状態だ。だが、マルセイユだけは違った。

「私に任せてくれ」

「待って。マルセイユ大尉！」

ミーナが止めるのを無視し、マルセイユは自分と同じ姿の、黄色の13のストライカーを履く人型ネウロイに近づく。持っているMG34を背中に回し戦意がないことを見せる。ネウロイの目の前まで近づいた。ネウロイはゆっくりとマルセイユに宮藤を渡す。宮藤を渡したネウロイは立ち去ろうとし

「待て！ お前なのか黄色の13！」

マルセイユの呼びかけに立ち止まる。顔を向けない人型ネウロイとその背中を見つめるマルセイユ。彼女は振り向かせようと近づこうとし、頭を撫でられた。

驚くマルセイユ。しかし、恐怖は無かった。何故なら彼女の頭を撫でる人型ネウロイの顔がとても穏やかだったから。人型ネウロイが口を動かすが声はない。口の動きだけで分かった。

やくそくまもれなくてすまなかつた

「——やっぱりお前は」
マルセイユの言葉を待たず、人型ネウロイは巢へ戻って行った。

第33話 「ウォーロック」

基地に戻ると彼女たちは滑走路で盛大なお出迎えを受けていた。

「ご苦勞だった、ミーナ中佐」

「随分なお出迎えですね。基地を乗っ取るおつもりですか？」

「乗っ取るも何もここは我々ブリタニア空軍の基地だ」

マロニー大将を代弁するかのように副官の男が勝ち誇ったように言う。

「事例に基づく正式な対処だ。この基地は私の配下である特殊強襲部隊、通称ウォーロックが引き継ぐことになった」

マロニーが言い終わると同時にあの機体が下りてきた。

「これこそ我々が開発した魔女でなくともネウロイと戦える最強の兵器、ウォーロックだ！」

副官が彼女たちに熱く語る謎の機体 “ウォーロック”。

「最強の兵器？　ネウロイの攻撃にやられてたくせに」

マルセイユの食って掛かるような発言に怒りの表情をする副官。

そして、ウォーロックを見た宮藤は声を上げた。

「その後ろの機体知ってます！　ネウロイと一緒に実験室みたいな場所です」

「!!」

「なっ、何を根拠のないことを言ってるんだ君は！」

慌てる副官に対しマロニーは眉をピクリと動かすだけで表情は動じていない。マロニーは咳払いひとつすると彼女たちに言い渡す。

「これまでブリタニアを守ってきたことは感謝しよう。だが、このウォーロックがある限り、君たちは必要としない。本日をもって第501統合戦闘航空団は解散する」

「そんな……」

力なくつぶやく宮藤。その時、マロニーの後ろに来た兵士がマロニーと副官に報告した。

「報告します。例の魔女が目を覚ましました！」

「え」

「メビウスが目を覚ましたのか!？」

重体だったメビウスの意識が戻ったことに彼女たちは喜ぶが内心複雑だった。このあと彼女に迫られるのはおそらく技術協力に間違いない。続いてもう一人の兵士がやってくる。

「報告します。基地のどこを探しても例のストライカーユニットがありません！」

「なに？　ちゃんと探したのか!？」

報告を聞き眉間にしわを寄せる副官。やはり彼らの目的はメビウスさんのストライカーの奪取も含まれていたのか。いつもなら格納庫に置いてあるはず。無いと言うことはどこかに隠したのだろう。察したミーナは嘘を言った。

「彼女の機体ですか？　彼女が被弾したときにパージして海に落ちました。誘爆の危険がありましたので」

それを言った途端二人の顔が変わる。マロニーは残念そうに息をもらし、副官は苦虫を潰したような顔をする。だが、すぐさまその顔は晴れた。何故なら

「報告します。例の魔女が我々に協力すると申ししてきました」

「どういうことだメビウス!？」

ボタン！　とメビウス1が寝ている部屋の扉を開けたバルクホルンは大声で言った。

「うるさいぞ。もう少し静かにできないのか」

それに臆することなくメビウス1は出されてパンを頬張っている最中だった。そこにはメビウスのほかに坂本とペリーヌの他に武装した兵士もいる。

「どうもこうも、俺が選んだことだ」

「なに?？」

501メンバーの皆が入ってくる。

「聞けばそのウォーロックとやらは無人機だって？　ならそのほうがいいと思ったから賛同しただけだ」

「……………本気で言っているの？」

「ああ。本気だ」

食べ終わったメビウス1は立ち上がり服装を整える。

「もう一度言っておく。これは、俺のために選んだことだ。人が決めたことに口を出すな」

メビウスが言い終わるとバルクホルンがメビウスに殴り掛かった。殴られた勢いでしりもちをつく。

「……………満足か？」

「……………お前には失望したぞ。メビウス」

バルクホルンは下を向き呟く。メビウスは立ち上がり埃と払うとかつての仲間たちの間を分ける様に進む。その中に宮藤芳佳の姿を見つける。

「あ……………えっと、あの……………」

自分のせいで大怪我させてしまったから何を言ったらいいのか分からない宮藤。メビウスの右手が上がり叩かれると思った彼女は目をつぶる。しかし宮藤の予想とは違い。メビウスは宮藤の頭を撫でた。

「無事でよかった」

それだけ言うのと再び彼女は歩き出す。メビウスが振り返ることは無かった。

「俺のため……………か」

バスの中でハルトマンは呟く。ハルトマン、ミーナ、バルクホルン、マルセイユの4人はバスを使いロンドンへと向かっていた。

「まったくあんな奴らの言いなりになるなんて」

「まーまー仕方ないじゃん。メビウスが決めたことなんだからさ」
「それでもだ！」

「あーもう、うるさいなもう少しその脳筋な頭を柔らかくして考えた
らどうだ？ こっちは眠くて仕方ないんだ」

「誰が脳筋だ！ そもそも貴様が眠いのは寝なかつたせいだろう！」
「うるさいわよ。少しは静かにしなさい」

騒ぐ2人を叱るミーナ。一応まだばれていないが今のマルセイユ
は大きく服装を変えてポニーテールのサングラスをかけた変装中だ。
バスに乗る一般人の目は私たちを向いているが、もしマルセイユがば
れたら面倒なことになる。

「失礼。隣に座っていいかね？ お嬢さん」

「ええ。どうぞ」

「ありがとう」

乗ってきた初老の男性がミーナの隣に座り新聞を広げる。老人は
ミーナの顔を二度見て驚いた表情になる。

「驚いた。まさかあの501部隊の隊長さんではありませんか」

「ええ。そうです」

「あなた方にはいつも助けられています。知り合いのベルツさんもお
礼が言いたいと言っておりました。失礼ですが記念に握手をお願い
できますか？」

「はい。よろこんで」

ミーナと老人は握手を交わす。

「隣の2人はカールスラントのWエースさんですね？」

「そうだよーよろしくね、おじいちゃん」

「こらもつと礼儀正しくしないか。ゲルトルート・バルクホルンです」

「はっはっ。死ぬ前にお会いできるなんて儂は運がいいですなあ」

カールスラント組3人と老人の何気ない話は続く。しばらくして
後方から2人の男性が降りバスが出発する。

「――」。

「ん？ おじいちゃんなんか言った？」

「いえ。空耳ではありませんか？」

ハルトマンに笑って答える老人。

「3人とも。次のバス停で降りるわよ」

「え？」

「どうしてだミーナ。次のバス停なんて何も無いぞ？」

「少し用があつてね。重要なことなの」

「分かった。起きろ」

バルクホルンは隣に寝ている変装マルセイユを起こそうとする。

「ん〜？ あと10分……」

「起きろこの馬鹿！」

マルセイユを叩き起こしたバルクホルンは彼女を引きずるようにバスを降りる。老人はバスの中から降りた4人に手を振った。バスが走りだす。そのバスにはその老人のみ。

「頼みましたよ……ミーナ中佐」

老人の呟きはバスのエンジン音に消えていった。

「ねー。一体どこに行くの？」

バスを降り、途中でヒツチハイクして基地から10kmくらい離れた場所から海岸線沿いに歩く。ミーナは小さな紙切れを彼女たちに見せる。そこには

基地 北側10km 廃屋

とだけ書かれていた。

「なにこれ？」

「レオナード大佐からのメッセージよ。バスの老人から手渡されたの」

「あの老人がか!？」

「ええ。相当なプロね。私たちが監視してた人がバスから降りるとき小声で『ひよっこめ……』って毒舌してたわ」

驚きながらも4人は目的地の基地が見える廃墟に辿り着いた。

「ここがそうか」

バルクホルンは廃墟の扉を開ける。すると――

「はっ?――ぐわっ!?!」

中に入った瞬間組み伏せられるバルクホルン。一瞬のことで気づいたときにはやられていた。

「トウルデー!」

「おー。怪力のバルクホルンをいとも簡単に……」

「く……誰だ!?!」

「はあ、少しは警戒しなさい。もし私がマロニー一派の者だったらあなた達終わってたわよ」

バルクホルンを組み伏せていた女性は手を離す。金髪碧眼。長髪の典型的なブリタニア人の女性だった。風格から見てミーナ達より年上だと分かる。

「まあいいわ。ようこそ。父がお世話になったわ」

「父? 貴女は一体……」

「あら。何も聞かされてないの?」

目の前の女性はミーナたちに自己紹介した。

「はじめまして。私はメアリー・スウィントン。M I 5の職員よ。たまに大学の助教授をしているけど」

そのころ、一応パイロットスーツに着替えたメビウス1は滑走路よこに出してあるF―2AとF―4Eのところに向かう。とホーマーの怒鳴り声が聞こえてくる。

「この馬鹿野郎どもが! 死にてえのか!」

「どうした?」

聞くとマロニー傘下の研究者たちがまだ無事なF―2Aに手を出したのを止めたのだそう。それを見たホーマーは「勝手に起動する

と爆発するぞ！」と言い放ったそうだ（もしもの場合としてホームーと2人で打ち合せた）それを知った途端研究者たちは一目散に機体から逃げ出した。

「やっとなたか。さっさと起動させろ」

「勝手に動かそうとしてよく言う」

偉そうに言う副官を尻目にメビウスはF-2Aに乗り込もうとする。F-4Eを見ると機首部分。機銃が収納されている場所がこじ開けられていた。

「おい。あれどうしたんだ」

「破損したウオーロックの機銃と交換した。そんなことよりも貴様は我々の言う通りにすればいいのだ」

小銃片手に脅してくる副官の男に内心舌打ちする。コックピットに乗り込む。と、すぐ横の滑走路から修理されF-4Eの物だった機銃を取り付けたウオーロックが飛びたった。

「さあて。そろそろ行くかルツキーニ——ん？」

もう1つの滑走路からシルフィー ソードフィッシュに乗り込むシャーリーは基地から飛び立つウオーロックを見る。

「もう出撃か」

「あの音好きじゃないな。メビウスのは キュピイイイイン シュボッ！ シュウウウウウウウウウ!!! ってかっこいいのに」

「おいおい。今と未来の機体を比べちゃ勝てるわけないだろ」

「イ——だ！ やられちゃえばいいのに」

そう言いながらソードフィッシュは発進した。

空母赤城の甲板

先ほどまで自分がいた基地を宮藤は眺める。それを見かねたペリーヌは宮藤に言った。

「ちよつと。いつまでくよくよしているのですの？」

「あ。いえ、少し考え事をして。メビウスさんは誰も死ぬことがないからウォーロックに頼ったのかなって」

「どうしてそう思ったんだ宮藤？」

「……………夢を見たんです」

「夢？」

宮藤は2人に見た夢の内容を説明する。星が落ちてくる夜空。それを撃ち落とす大砲。そして——巨大なクレーター

「最初はいやな夢だと思ったんです。でも……………もう1人のネウロイが見せた映像が同じだったんです。その中でメビウスさんが乗るような戦闘機がたくさん飛んで……………互いに撃ち合っていました。ネウロイじゃないのに……………」

宮藤はそこで言葉を切る。

「あの人は人がたくさん死ぬ苦しみを知っている。だから、私たちがら離れたんじゃないかって」

再び基地を見る芳佳を見てペリーヌは溜め息を吐いた。

「はあ。宮藤さん。あなた勘違いしてますから言いますわ。メビウスさんは自分のためとおっしゃいましたが、本当は私たち……………いえ、宮藤さんのためを思って言ったのですよ」

「わたしのため……………？　なんで」

「あなたがメビウスさんの——」

ペリーヌが言う途中で基地を出撃した。ウォーロックのジェット音にかき消された。

廃屋の置かれた双眼鏡で基地を飛び立ったウォーロックを観察するミーナたち。

「さっそく出撃か」

「戦果がほしいのかな」

様子を見るハルトマンたちの後ろでミーナとメアリーは情報を交換していた。

「そのウォーロックだけとお父さんは「何故動くか分からない」って言ってたのよ。なにかそれらしい情報ないかしら?」

「ウォーロックが動く理由……」

ミーナは宮藤が言っていたことを思い出す。

「1つ。確証はありませんがネウロイの技術を使っている可能性がありますります」

「ネウロイ!? もしそれが本当ならなんて危なっかしいものを……でもその可能性が一番高いわね」

メアリーは部屋の隅に置いてあるものに手をかける。それはトン・ツード。

「何故これが?」

「急いでたからこれ以外なかったのよ。でも10キロ先にいる仲間確実に届くわ。そこから本部まで有線だからね」

一通りの話を終えると2人は3人のところに移る。

「どう? なにか変化はあったかしら」

「変化も何も」

「アツと間に4機の大型ネウロイがやられちゃった。ていうかどうしてあれビーム出せるんだろ?」

ハルトマンの疑問。なぜビーム兵器を扱えるのか。もしネウロイの技術を使っていると考えれば辻褄は合う。

「んん!? どうなってんだ!?!」

「どうしたマルセイユ」

双眼鏡をのぞくマルセイユが声を上げる。

「巢からうじやうじや湧いてる。サイズはバラバラだが、100機以上だ！」

「なんですって!?!」

「全てのネウロイを支配下に置きました」

「すごい……予想以上の成果だな……」

勝手に動き始めたコア・コントロールシステム。だがそれは正常に稼働しウォーロックの周辺を飛ぶネウロイを全て支配下に置いてしまった。凄まじい結果に驚きを隠せないマロニーと研究員たち。しかし、突然警報が鳴り響いた。

「どうした! 何が起きている!?!」

「それが、コア・コントロールシステムの稼働率が上昇し続けています!」

「馬鹿な! こんな数値がウォーロックだけで出せるはずが……まさかネウロイのコアと共振しているのか!?!」

研究員たちの悲鳴が飛び交う。有り得ない現象。だがそうとしか考えられない現象が起きていた。危険を察したマロニーはすぐさま指示を出した。

「ウォーロックを緊急停止させろ! これ以上は危険だ!」

「ダメです! こちらの命令を受け付けません!」

「なに!?!」

悲鳴のように叫ぶ兵士の報告に、マロニーは驚愕した。

魔眼を使い見ていた美緒は不思議に思った。

「どうした。まったく動かないぞ?」

ウォーロック。そしてその周りを囲むように飛ぶ大きささまざまなネウロイはどちらも攻撃せず、不気味な沈黙をとっている。そしてらどういうことだろうか。ウォーロックはネウロイたちに何もせず飛行形態になると巢の範囲内から出てしまった。囲むネウロイたちは何もしてこない。

「帰ってきますわ……」

赤城艦橋では先ほど艦上を通り過ぎたウォーロックを副艦長の樽宮敬喜が双眼鏡で見ていた。

「ネウロイと交戦していた機体がこちらに向かってきます」

「味方なのか……?」

見慣れない飛行機に艦長の杉田淳三郎は言う。再度ウォーロックを見る樽宮中佐。そのウォーロックがこの赤城に向け攻撃態勢の構えをとっていた。

「艦長! あ の 機 体 が こ ち ら に 砲 を 向 け て い ま す !」

「なに!? くっ、機関全速面舵いっぱい。総員衝撃に備えろ!」

赤城の左舷90度から来るウォーロックの攻撃の直撃を避けるよう指示を出す。村田艦長の素早い判断が功を奏した。

放たれる野太いビーム。それは回避行動した赤城の右舷50mを通り過ぎたが、そのビームは元501基地を直撃しなかったものの被害を与えた。

「きゃああああ! ウォーロックが私たちを!」

振動で倒れ、水柱の海水をあび動けない宮藤たち。3人の中ですぐに動けたのは坂本だった。

「行くぞお前たち! 出撃準備だ!」

「はっ、はい!」

「了解しました！」

赤城格納庫に置いてある自分たちのストライカーを履きに向かう。対空砲の砲撃が始まった。がウォーロックはシールドのようなものを張り全く聞いていない。急いで艦内に入ろうとしたとき艦が揺れ甲板を転がった。

「きゃああああ!!」

被弾したのだと悟った。

《艦首甲板被弾！ エレベータ大破！ 火災発生！》

《艦首右舷区画より浸水発生！ 隔壁閉めろ！》

空母赤城が艦首からゆっくりと沈む。まだそんなでもないがこれが大きくなったら艦尾のスクリューが海面から出てしまい航行不能。いい的になってしまふ。ウォーロックはその赤城にさらに攻撃しようとする。がそれを中断して赤城とは違う方角にビームを撃った。空中で爆ぜる1つの火球。その中から突如蒼い海鳥が姿を現し、ウォーロックと赤城の間を擦り抜ける。ウォーロックとは違う澄みきったエンジン音と出力が違うことを証明する大音量。F-2Aバイパーゼロ。誰が乗っているかなんて考えるまでもない。

「メビウスさん……!」

F-2Aはウォーロックとの交戦に突入した。

基地と赤城が燃えるのをミーナたちは双眼鏡を使わなくとも見えていた。

「ウォーロックが暴走している！ なんで？」

「分からない。一体何が……ん？ あれは!？」

「どうしたの？」

「基地からF-2 が出撃した！」

「なんですって?!」

「といことはあれにはメビウスさんが乗っている。だが今の彼女は危険な状態だ。もしものことがあったら……」

「それだけじゃなさそうよ。見なさいネウロイの巣を」

「え……!! なんだあれ!」

それを見たマルセイユは驚愕する。100機を超えるネウロイたちが真つ直ぐブリタニアへと向かっているのだ。その中の1割が赤城へと迫る。

「一体何が起こっているの?」

「それはわからないわ。とにかく、すぐに基地に行きましょう!」

「分かった!」

「メアリーさんは?」

「私はこのことを連絡しないといけないわ。近くの林に私の車を隠してある。それを使いなさい!」

「分かりました。ありがとうございます!」

急いで廃墟から出て行くミーナたち。その彼女たちを見送る時間も惜しい今メアリーはトン・ツーで手短かに連絡した。

『緊急事態発生。対象X暴走。ネウロイの大群襲来。レベルSと判断す。繰り返す。レベルSと判断す』

レベルとはブリタニアの組織間で取り決めた問題のレベルをランクづけるものだ。他に高い順からA B C D の4つのレベルが存在する。そしてSは最高レベル。国家存亡の危機。各組織は連携しこれを対処せよ、という意味だった。

「急げ！ 訓練でやっただろう！」

「そうは言っても……」

「さすがに階段はキツイ……」

赤城艦内の坂本たちは自分のストライカーを担いで階段を上がっていた。エレベーターを待っていたら時間がかかってしまうからだ。何とか甲板に辿り着く。

「くそー……ここまで傾斜していると発艦が……注水はまだなのか」

赤城の船体は片方に浸水が起きた場合、艦を水平に戻すための注水機能がついている。だがそれが間に合っていないのかまだ艦首が下がった状態だった。そのせいでスクリューの効率が悪くなっている。さらに振動で足元が不安定な今だと発艦が出来ない。

「坂本さん。あれを！」

宮藤が指差す方向。そこには大型3 中型5 小型10 のネウロイがこちらへと迫っていた。それに巣から次々とネウロイが出てくる。

「こんなときにも！」

メビウスはウオーロックの相手をしていてこちらまで手が出せない。苦虫を潰したような顔をする。だが、大型の1機が突然爆発した。

「え？」

大型だけじゃない。その周りにいる中型や小型も突如爆発する。なにが、と思っているとネウロイの間を縫うように1人の黒い影が見える。

「あれは……!!」

宮藤は息を呑む。当然だろう。その人は、あの時の人型ネウロイだった。

置いてあった格納庫の前に移動させる。そこは今巨大鉄柱に塞がれている。これなら多少無理してもいいかもしれない。

誰もいないことを確認してエンジン出力を上げる。

「メビウスー出撃するー！」

少し前に進んだところで強引にアフターバーナーを点火した。急に速度を上げるF-2A。その高温の排熱はF-2Aが滑走路から離れるまで通った場所が焼けただけ表面が剥がれ落ちる。それでも飛ぶことが出来た。黒煙を上げる赤城へと機首を向ける。その上空にはさらに攻撃を仕掛けようとするウォーロックが見える。

「こっちを向け。FOX3！」

F-2AからAAM-4(99式空対空誘導弾)が一発発射される。それを確認したのかウォーロックはこちらに振り向きレーザードミサイルを撃ち落とした。こちらに注意を引くようにウォーロックと赤城の間を通り抜ける。後ろを確認すると飛行形態に変形したウォーロックが追ってくるのが見えた。

「お前の相手はこっちだ！ っほっ」

ウォーロックの性能がどれほどの物か分からないがやってやる。

「メビウスー。エンゲージ^戦！」

ロンドンに2カ月ぶりに響き渡る空襲警報。次々と滑走路から飛び上がる戦闘機と魔女たち。

「司令部！ どちらの方角から来る!?!」

通信機に怒鳴りつける短髪茶髪の女性。彼女の名はドロレス・バーダー。またの名を『不屈のエース』『足無しバーダー』。ブリタニア空

軍タングミーア航空団司令であり、第11統合戦闘飛行隊「HMW (Her Majesty's Witch)」のリーダーでもある。愛機であり事故で両足のない彼女のためにアレンジされた。ウルトラマリンスピットファイアMkVストライカーを履きロンドン上空に躍り出ていた。そして、通信に見知らぬ声が聞こえてくる。

《首都ロンドンを基点に方位130 501部隊の基地がある方角から接近する機影多数。大型32機 中型51機 小型108機 侵攻中》

「あなた誰？ 一体どこから」

《君の頭上高度12000mからブリタニア全域を監視している》

まさかと思いい上を見る。目を凝らすと確かに人らしき影が見えた。それよりもだ。

「あなたは……」

《手短に言おう。私はISAF空軍第118戦術航空隊メビウス中隊担当管制官、スカイアイ。君たちはロンドンの防空部隊で間違いないね？ 早急に部隊を分けてほしい。方位180距離150kmに小型の大部隊が北西方向に向け進行している》

「南の150kmから北西方向にあるのは……ポーツマス軍港！」

ブリタニア軍の要所の一つであるポーツマス軍港にはブリタニア海軍の軍艦だけでなく先月到着した空母加賀を中心とした扶桑機動部隊が入港したばかりだ。ガリヤ上陸作戦に必要な戦力を失うわけにはいかない。しかし、私たちの本文はロンドン防衛だ。ここを離れるわけにはいかない。

「なら、南の敵は私に任せてくれないか？ 私に部隊を少し分けてくれ」

「ガランド中将。そうですね。お願いします。南の敵は小型中心ですから……」

バーダーは思考を巡らせどの部隊が適任か決める。

「第302戦闘機中隊、第303混成航空中隊。ガランド中将と共にポーツマス軍港防衛に向かってください」

《我々だけでいいのかね?》

「あなた方なら安心できます。バトル・オブ・ブリテン（1940年7月10日）で一番の戦果を挙げたあなた方なら」

《了解した。302、303。ポーツマス防衛に向かうぞ》

《了解隊長!》

ガランドと第302戦闘機中隊、303混成航空中隊は南の方角へと進路を取りポーツマスへと向かった。

《こちらスカイアイ。急ぎメビウス8の救援に入ってくれ。あいつでもあの数では無力だ》

今度は一体誰の事だろうと思うとこちらに向かってくるネウロイの一角が消滅した。それだけでは終わらない次々と消滅していくが消えるのは小型中型のみ。大型はその再生力で全く効いていない。

「分かったわ。ウィッチは大型中型の相手をして、小型は戦闘機部隊に専念。ロンドンを守りきるわよ!」

《了解しました!》

《いいかお前ら! ブリタニアを守るのは魔女だけじゃないってことをネウロイ共に思い知らせてやれ!》

《オオーツ!!》

ロンドンの防衛に携わる魔女・戦闘機部隊がネウロイ郡との戦闘に突入する。

ドーバー海峡 ロンドン ポーツマス軍港。

この三つの場所で同日に行われたこの戦闘は後に『第2次バトル・オブ・ブリテン』と命名され、今大戦の大空戦の一つとして軍事史に刻まれることとなる。

【ロンドン防衛戦】

「くそー。さすがにこの数では……」

メビウス8は右手に受け取った機銃を持ち、左手にはハルバードを持ち戦っていた。増層が取り付いた状態のF-22Aストライカーを履いているがこの敵相手ならそんなに悪くない。しかし、やはり多勢に無勢。小型ならともかく中型以上になると簡単には倒せない。大型に至っては全くと言っていいほどだ。こっちとしてはすぐにもメビウス1の救援に向かいたいのをここに無視するわけにはいかない。それにあいつのことだ。自分よりも市民の安全を優先させてくれと言うだろう。なら、私はその信頼に応えるまでだ。と思っているとレーダーに大部隊が映される。ロンドンの防空部隊がやっとなのだ。

「首都防衛なだけに結構な数だな」

その塊が二つに分かれる。1つは航空機サイズの一団。もう一つはさらに小さい反応。魔女と戦闘機に別れたか。

《あなたがメビウス8——ハンナ・ルーデルさん!? どうしてここに!》

「うん? あー、一応言っておくが私はルーデルって人じゃない。まったくの別人だ。ISAF空軍第118戦術航空隊メビウス中隊所属コールサイン“メビウス8”。オメガと呼んでくれ。あんたの名は?」

《ブリタニア空軍タングミーア航空団司令、第11統合戦闘飛行隊

「HMW」隊長ドロレス・バーダーです》

「じゃあバーダー隊長。私がネウロイたちを掻き回して混乱させる。あんたたちはその隙について各個撃破してくれ」

《やはりそれは噂に聞いたジェットストライカー》

「そんなところだ。後方は任せたぞ」

メビウス8はネウロイ郡のど真ん中へと突入する。

「さあ。一足早すぎの航空ショー始まりだ!」

機銃を背中に回し両手でハルバードを持つ。機体を加速させる。時速1000km。レシプロでは出せない高速でメビウス8はネウロ

イの大群の中を縦横無尽に駆け抜ける。小型を両断し、中型に致命傷に近い傷を負わせ、大型にはそれなりの損傷を与える。その繰り返し。一般的に自分が相手より100〜200km速いと相手が止まって見える。そして今のメビウス8にはネウロイ達の動きが完全に止まって見えた。もちろんネウロイの反撃はあるが、同士討ちを避けるためそんなに多くない。その間を抜けて攻撃を繰り返し返す。

メビウス8のおかげでネウロイたちの進撃は止まった。ネウロイは完全に高速で飛び回るメビウス8に気を取られている。この絶好のチャンスを逃す手はない。

「全員！ さっき言った通りに動いて！」

《了解！》

第11統合戦闘飛行隊のウィッチが攻撃を仕掛ける。それに気が付いた小型が前に出てくるが上空からの集中攻撃を受け蜂の巣にされる。

《お前らの相手はこつちだ。ちつこいの！》

ウルトラマリンスピットファイアMKV ロンドン防衛部隊は何も魔女だけではない。戦闘機部隊のパイロットはほとんどが男性だ。そして彼らにも意地がある。

急降下による一撃離脱攻撃でウィッチたちに迫りくる小型ネウロイを一掃する。

《バーダー大佐たちは行ってくれ。ここは我々が引き受ける！》

「ありがとう！ みんな。かかりなさい！ この空を守り抜くのよ！」

《ラジャー！》

《God save the Queen》

ロンドン南東50km上空にて ロンドン防衛部隊全戦力とネウロイの空中戦が始まった。

【ポーツマス軍港】

「すでに始まっていたか！」

ポーツマスまで30 km地点でランドはスコープを覗いてポーツマス軍港の空を見る。すでに30機程度が軍港内に侵入し戦闘が始まっていた。軍港内の艦船はほとんどが浮き放題状態である。今の時代の艦船は全速を出すまで半日かかってしまう。動けない軍艦などただの的だ。しかし、大部隊と聞いたにしては数が少ない。

《ポーツマス沖合20 km上空にてどこかの部隊が交戦に入っている。そちらから確認できるか?》

スカイアイからの報告を受けその方角に目を向ける。濃い緑色の戦闘機。

「あれは扶桑の戦闘機……ゼロ戦か」

零式艦上戦闘機。通称『零戦』扶桑が開発した現在の主力艦上戦闘機。レーザーを使うネウロイ相手に防御は不要と判断した開発者が、機体の骨組みからナットに至るまで神経を尖らせた軽量化。小型ネウロイに有効な20 m機銃を初めて搭載した艦上戦闘機。その攻撃力と軽量化による驚異的な機動性・格闘能力はトップクラスである。さらに増層無しで2000 kmも飛べる驚異的な航続能力を備えた機体だ。反面その軽量化により機体耐久力が脆弱。急降下である速度以上になると空中分解するほどだ。扱いやすい機体だが一つ間違えると危険な機体でもある。

飛んでいるのは零式艦上戦闘機五二型。宮藤や坂本が乗る二一型の改良版だ。

その機体が小型ネウロイおよそ200機近い大部隊を相手に半数の100機が必死の戦闘をしていた。その離れた場所に彼らの空母が待機している。

航空母艦“天城”“加賀”。赤城と共に扶桑海軍の第一航空戦隊を担う扶桑の主力機動部隊。その練度は世界一といっても過言では

ないほどの実力だ。その彼らが倍近くの敵を相手に何とか持ちこたえている。

「私は湾内の敵を片づける。君たちは扶桑部隊の援護に向かってくれ！」

《了解した》

ガランドは1人ポーツマス上空のネウロイ30機の相手をする。普通なら劣性であるが、彼女の前では有象無象に過ぎない。

「さて、かかってこい。雑魚共」

一方。ポーツマス軍港沖合では天城と加賀の航空戦隊がなんとか死守していた。しかし数の差で押されている。彼らが何故戦っているのか。ちようどこの時間に機動部隊の訓練を行うために軍港から出ていたのだ。訓練を始めようとしたとき敵襲の連絡が入り、全機迎撃に向かわせた。

『各隊 状況 ヲ 知ラセ』

各隊の分隊長のみに搭載されているモールスを使い、乱戦の中連絡を取り合う。戦闘の僅かな変化を見逃さないようにと加賀の飛行隊長の命令で付けている。本来なら他国の戦闘機の様に無線機を使つて口で連絡したいが、その分重量が上がり機動性に支障をきたしたしかない。軽いもので連絡が取れるものがモールスのみだった。

『サラニ 6機 落トサレタ』

『コレ以上 減ルノハ 危険 援軍ハ』

『森田飛行隊長 ハ 無事行ツタカ!』

『アノ人ナラ 心配ナイ』

いくら戦闘機でも倒せる小型でもこのままではこちらは全滅してしまう。そう思っていたとき。別の連絡が入った。

『北カラ 援軍』

その方角を見ると戦闘機とウィッチの混成部隊らしき編隊が近づ

いてくる。戦闘機もストライカーもブリタニア軍主力の1つハリケーン Mk II。

《全機。ロットを組んで各個撃破しろ》
《了解しました！》

戦闘機1機とウィッチ1人が二機編隊を組んで戦闘を開始する。戦闘機は主に攻撃中心、ペアのウィッチは戦闘機の死角から迫る敵を担当する。その姿は背中合わせに戦うようにも見える。

ブリタニア空軍ロンドン防衛部隊所属 第303混成航空中隊。

またの名を「OFT」（オストマルク航空中隊）。ブリタニアに逃げ延びたオストマルク人のパイロットとウィッチで構成された航空中隊。バトル・オブ・ブリテンで最も多くのネウロイを落とした飛行中隊だ。

その部隊で指揮を務めるのはヴィトルト・ウルバノヴィチ中尉。男性でありながらその実力は高くバトル・オブ・ブリテンで小型ネウロイを15機撃墜させたエースパイロットだ。

そしてその彼の背中を守るウィッチも同じエース。

シルヴィア・スカルスキ少尉

実を言うと撃墜数は隊長のヴィトルト・ウルバノヴィチよりも多い22機を出している。彼女は降りかかる火の粉を払うよう近づくとネウロイを撃墜する。

その彼らの横に一機の零戦が平行に並ぶ。空母天城の飛行隊長だ。無線がモールスなため通信はできない。よって敬礼で答えた。

援護 感謝する

それに対しヴィトルトとシルヴィアも敬礼で答える。ウィッチも加わった今ようやく戦力は互角になった。

《巻き返すぞ！》

『全機 粉骨砕身 ノ 心 デ カカレ！』
ポーツマス防空戦の反撃が始まった。

少し離れたワイト島。そこではワイト島分遣隊のウィッチも迎撃に出ていた。大陸から次々と飛んでくるネウロイを掃討していると超高速型のネウロイ一機が基地へと向かっていた。基地には魔法力を失いシールドを張れなくなったりネット・ビショップの姉、ウィルマ・ビショップがいる。迫りくるネウロイに彼女は自前の対物ライフルを出し狙撃を試みた。

「とっておきだよ」

ライフルに一発の銃弾を装填する。それは日々少なくなる魔法力を毎日少しずつ蓄えた銃弾だった。それを20発用意してある。

「北東の風……風速2メートル……敵の位置誤差修正……」

一度だけでいい。もう一度私に力を貸して——！

「行けえ！」

引き金を引き、銃弾が発射された。それを回避しようとネウロイは横に動く。

だが——

ウィルマの放った銃弾はその内臓する魔力量によつてか。翼が生え、まるで誘導弾のように動きネウロイへと吸い込まれていった。

「やった！」

その一部始終を見ていたフラン。しかし、貫かれたネウロイに変化が現れる。

「えっ！」

ネウロイの胴体にあるとがった部分がすべて切り離される。このネウロイの招待は超高速型の母艦だったのだ。離された数は4つ。そのすべてがウィルマへと襲い掛かる。

「ウィルマ！」

叫び声をあげる。ウィルマもここまでかと覚悟を決めた表情をする。

その接近するネウロイを横から銃撃する影。一瞬のうちに4機すべてを撃墜する。

「たった一回の攻撃で4機を!？」

「え？ 誰……戦闘機？」

フランとウイルマは同時に声を出す。援軍に来てくれたのはなんと戦闘機一機だけだった。国籍マークは扶桑。濃い緑色の胴体に両翼を黒に染めた機体。そしてネウロイを銜くわえた鴉のマーク。

その機体を見た角丸美佐は驚きの声を上げる。

「あの零戦は空母加賀の飛行隊長 森田昌一大尉の戦闘機だわ！」

「森田昌一……もしかして『扶桑海の家鴉』か？」

「誰ですか？」

「知らないのか。森田昌一 扶桑海事変のエースパイロットだ」

知らないアメリーに対してラウラが説明する。

森田昌一大尉

航空母艦「加賀」の飛行隊長を務める。1937年の扶桑海事変で初陣を飾る。撃墜数は11機。あまり知られていないのは扶桑海事変の決戦時台風の影響で出撃できなかつたからだ。決戦までの散発的な戦闘でスコアを稼いだ。後の映画『扶桑海の閃光』で出演を依頼されていたが彼は「あれは彼女たちの栄光です。僕はお門違いですよ」と断つたそう。

そのときから機体に描いていた鴉のマークからつけられたあだ名が『扶桑海の家鴉』。最初はただの鴉のマークだったが、ネウロイを食い殺すという意味を込めて今のマークになった。

その機体の増層が切り離され、飛んでいる彼女たちに向かって落ちる。その増層が割れた。その中から扶桑のウィッチが使う九九式二号二型改13mm機関銃が出てくる。角丸、アメリー、フランが一丁ずつ。ラウラが二丁受け取る。弾が無くなってきた今貴重な補給だった。

コックピットの風防を開けた森田大尉は扶桑の手信号で角丸に伝える。

『空母 防衛 戻る 御武運を』

「ここは任せてください。ありがとう……！」

森田大尉の零戦が離れていく。その姿を見届ける余裕はない。

「いいみんな。ここを守りきるわよ！」

《はい！》

《ああ》

《上等よ！》

《基地のほうに近づいたら任せて》

ワイト島の攻防戦はまだ終わっていない。それでも彼女たちは戦う。自分にできることをするために。

「やっと半分かつー！」

ハリケーンを駆け、さらに軍港上空にいたガランドも加わり何とか最初の約200から半分まで減らすことができた。しかし、こちらの消耗も激しい。我が部隊はウィッチもいるからそうでもないが扶桑の部隊はさらに減った。このままでは……

ふと見ると普通の零戦とは違うペイントをした機体が戦線に加わるのが見えた。最初の攻撃で2機撃墜する。

「いい腕だな」

その機体の後ろから追跡するネウロイがいる。結構近い。このままではやらせると判断した。ヴィトルトは援護に向かおうと機体を動かそうとする。が、その零戦の次の動きに驚いた。零戦は急上昇をする。後ろのネウロイは同じく上昇して追跡しようとするまえに、機体を翻した零戦に撃ち落とされた。

「左捻り込み！」

左捻り込み。

レシプロ機ができる空戦機動だ。ループの頂点直前で失速横滑りして斜め旋回に移行し旋回半径を大幅に縮める機動である。しかしそれを実戦で出来るものは少ない。間違えると失速して墜落してしまう危険がある。それができるといふことはさとうの実力の持ち主という事を示している。そして、その零戦に鴉のマークを確認して誰なのかすぐにわかった。

「全機良く聞け。『海鴉』が加わった。この戦いいけるぞ」

《『海鴉』って、もしかして『扶桑海海鴉』ですか!?!》

扶桑のエースパイロットが来た情報はすぐに全員に伝わる。これでやっと戦力が上回った。

「畳み掛けるぞー！」

《ラジャー！》

森田大尉が飛ぶすぐ横を一人のウィッチが飛んでいた。

「あれから随分と腕を上げましたね」

「いや、まだまだ未熟です」

森田とガランドは扶桑海事変のときに顔を合わせている。当時ガランドは観戦武官として扶桑を訪問していた。あの時森田大尉は才能はあったものの素人そのものだったからガランドには頭が上がない。

「まあいいや。さあ、行くか」

「ああ。これが終わったらゆっくり話すか」

ポーツマスの戦闘は終幕へと向かっていた。

【ドーバー海峡】

501基地

ミーナたちが基地に着いた頃にはすでに基地の制圧が済ませてあった。基地を掌握していたマロニー一派の者達は捕縛されている。それは管制室も同様だった。ミーナたちが入るとマロニーのほかには杖を片手に佇む見知った隻腕の男性、レオナード大佐だった。そして基地を取り戻したのは彼の部下である海兵隊の部隊だ。

「事実を捻じ曲げた官邸への報告書、偽情報のマスコミへのリーク、5

01に支給されるはずだった物資と予算の目的外使用……この計画にいろいろとやってみましたね。マロニー空軍大將」

「まさかあなたが来るとは思わなかったよ」

「きな臭かったのでね。調べさせてもらったよ。ただネウロイの技術を使っているのは予想外だった」

空軍大將と海兵隊大佐。階級の違いで本来このような会話はできない。だが、レオナード大佐は本来將軍になってもいい器だ。本人にその気はなくともそれだけの實力がある。

「ただ少し気になる点がある。何故今になって表に出たのだ？ この資料を見るにまだこれは完成形ではないはずだ」

「……確かに。本来は5機のウォーロックを用意してから表に出る予定だった。この計画は私が始めたことだったから万全を期す予定だった」

「なにか問題があったのか？」

そこまで考えていながら何故このような行動に移ったのか。

「簡単な話だ。この計画を中止にするためだ」

「なに……？」

意外な言葉を口にしたマロニーにレオナードやミーナたちは驚きを隠せない。自分が始めた計画を自分で中止するためにやったことだと？

「どういうことだ！ 中止にするなら貴様の命令1つで済む話だろう！？」

聞いていたバルクホルンが叫ぶ。

「それが出来ないからこうしたのだよ」

「何……？」

ミーナたちは呆け、気が付く。目の前にいるマロニーは、部隊の解散を宣言した時の彼と、雰囲気全然違うことに。

「当初はこのウォーロック計画を主眼に置いていた。だが半年前。あの施設廢墟が発見された。それは完全に破壊されていたが明らかに今の時代の物とは違うことがはつきりとわかるほど、ウォーロックが霞んで見えるほどに。それにウォーロックに使うはずだったコアを

使い詳しく調べようと考える者達が多数を占めたのだ」

「それを止めるために行動に移したと？」

「それもある。これは制御できるかどうかが問題だった。もしその施設にコアを使い暴走したら取り返しがつかなくなる。そう危惧した私はウォーロックが成功することを条件に彼らを抑えた」

マロニーは続ける。

「そして、ウォーロックが暴走した際、確実に落とすことが出来る要素が必要だった。ネウロイのコアを使用したビーム兵器を搭載した無人機だ。ウィッチが対抗できるかどうか分からない。そんなときロンドン空襲で飛んでいる彼女を見た」

「それが、メビウスさんだったわけですね」

ミーナの指摘にマロニーは静かに頷いた。

「部下たちはウォーロックの更なる改造に使うつもりだったらしいが、私は確実な抑止力として彼女が必要だったのだ」

淡々と語られるマロニーの考え。

「まさかコア・コントロールシステムが干渉されるのは想定外だった……そんな言い訳を言っても意味ないがね」

「覚悟の上だったわけですか」

「ああ。もとよりそのつもりだよ。レオナード大佐」

マロニーはゆっくりと椅子に座った。逃げも隠れもしないという意思表示に他ならなかった。

「マロニー空軍大将。あなたを拘束します」

マロニーは何も答えず、静かに頷いた。

「本部に連絡だ。研究所に軍隊を派遣させてくれ。研究に関するものを押収するのだ——」

「待てえ！ ふざけるな!!」

レオナードの声を遮るように大声で言い放つ男が海兵に拘束された状態で連れてこられる。あの副官の男だった。その顔は殴られたような痣が残っている。

「あれがなんだかアンタは分かっているのか。ウォーロックさえあればこの戦争のあとの世界の主導権を握れる！ 忌々しい魔女など必要

ない。ウォーロックこそがブリタニアの未来に必要な——」

「黙れえッ!!」

副官の言にレオナードが憤怒する。その場にいたものは皆面喰っていた。何故なら彼が怒る姿を見るのは初めてだったから。

「確かにウォーロックの技術は高い。味方に損害を与えず、敵を蹂躪する……戦争後の戦略兵器としてこれほど素晴らしいものはない」

「だったら——」

「だが、そこに人の意志はあるのか？」

ウォーロックが実用化された時代の戦争。それが実現された場合の戦争の姿で彼自身が一番危険視することを説明する。

「戦場の空気に接することなく、遠い後方から遠隔操作する無人兵器。それが戦場を折檻したとき、戦争はただのゲームと同じ感覚になる。そんなふざけたことがあつてたまるかッ！ 無人機が有望なのは理解している……：戦場は地獄だ。誰も彼も関係なしに死んでいく。襲い掛かる絶望。知っている人が死んでしまった悲しみ。そして、今度は自分が死ぬかもしれない恐怖。人間同士の戦争で人を殺してしまった罪悪感……あれを味わいたい奴などいない。だが、それを知っているからこそ平和とは何なのかを知ることが出来るのだ。それを破壊するあれを許すわけにはいかんッ！」

内に溜まったものを吐き捨てる様にレオナードは言った。その言葉を向けられていた副官は彼の気迫に完全に固まっている。ミーナはレオナードの右手が震えているのを見て理解した。彼は恐怖しているのだ。ネウロイの戦争が終わった後起こるであろう人間同士の戦争。それに投入されるウォーロック。戦場の地獄を体験しないせいで遊びと同じ感覚でやってしまう危機感。それが実現する世界の実態に。

「戦争を遊び感覚でやるなど狂気の沙汰だ……私はそれが一番恐ろしい」

最後は搾り取るように彼は言った。副官の男が連れて行かれる。マロニーが言う。

「君たちのストライカーは既に滑走路に出してある。私が言う資格は

ないが、言わせてくれ——ブリタニアを救ってくれ」

バルクホルンとエーリカ、マルセイユは滑走路に向けて走り始め、ミーナもそれに続こうとして——はたと立ち止まり、彼に向かって敬礼をすると、バルクホルン達の後を追った。管制室にはマロニーとレオナード、その部下たちだけが残る。

「1つ聞くが、先の言葉は体験したことかね？」

「さあ。夢か現実だったのか。私にはもうわかりません」

マロニーの質問にレオナードは寂しく返答した。

空母赤城。その上空では二つの戦闘が繰り広げられている。1つはメビウス1が乗るF-2Aとウォロツクの戦い。もう一つは赤城だけでなくブリタニアに向かおうとするネウロイを抑えているのがあの人型ネウロイだった。ジェットストライカーを駆け、右手に銃を持つ。GSh-30-1機関砲。スホーイ系列の戦闘機に搭載されている機銃だ。それを一発撃つ。ネウロイのコアの場所が分かるのか一機に対したった2発だけ撃つ。その威力は凄まじく、大型をいとも簡単に消滅させた。

「坂本少佐！ 艦尾に回ってくれ。そこにカタパルトがある！」

「了解した。ありがとう艦長！」

艦尾に移動するとその端っこにカタパルトが用意されていた。

「呉式2号5型と違うな。見たことない型だ」

「四式1号10型改です。リベリオンと同じ油圧式が本国で完成したのを渡されたんです」

そうか。と言いながら坂本はストライカーを履きカタパルトの上に立つ。ストライカーがカタパルトに接続される。

「発進！」

バシユツ！ と音を立てながら坂本美緒が飛び立つ。続いてペリーヌ、宮藤の順に射出される。

「いいか。まずは赤城の危険を無くするのが最優先だ。それが済次第私とペリーヌはブリタニア防衛。宮藤はメビウスのところに行け！」

「え！ 私がですか？ でも」

「この中で長く戦えるのは宮藤だけだ。あの戦闘にどう介入するかちゃんと見極めろ。いいな！」

「はい！」

「散開しろ」

「了解！」

一方マルセイユ似の人型ネウロイは第二次ブリタニア攻撃のネウロイ郡と戦っていた。主に大型を中心に右手の銃を撃ちこむ。1発目で装甲を剥がし、続く2発目でコアを撃ちぬく。それをひたすら、一度もミスなしでこなしていた。しかし、それも長くは続かない。最後の大型ネウロイを破壊したときちょうど弾切れになった。荷物はいらないとGSh-30-1機関砲を投げ捨てる。その無防備になったところをネウロイ達は襲い掛かる。が横から割り込むように誰かが入ってきた。

「黄色の13！ 助けに来たぞ」

やってきたのはマルセイユだった。ミーナたちも別の場所でネウロイと戦っている。マルセイユは持っている銃であつという間に5機撃墜する。

「アフリカに比べたらこれくらい——」

言いかけたとき人型ネウロイがマルセイユの後ろへとすぐさま移動した。どこから取り出したのか両手に真っ赤なサーベルを持ちマルセイユに襲い掛かろうとしていたネウロイを切り払った。

2人は背中を合わせる。すでに2人の周りを数十機のネウロイが取り囲んでいた。

「あ。そうだ。ちよつとこっち振り向いてくれないか？」

何だと思いい人型ネウロイはマルセイユのほうへと振り向く。頬を

叩かれた。

「!?」

「この馬鹿野郎。約束守らなかったうえに私に迷惑ばかりかけやがって。あく……すつきりした」

叩けたことに満足したのか笑顔になる。やられたほうは少し不満げな顔をしていた。

「このピンチを抜けるか。後ろは任せたぞ黄色の13」

同時に2人は動き出す。マルセイユは後ろから「お前もな」と聞こえたような気がした。

少し離れたところで宮藤、坂本、ペリーヌの3人を除く501の隊員たちがネウロイたちと戦っていた。

シャーリーとルツキーニが組んで2人の魔法を練り合わせ、高速弾丸としてネウロイの塊に突っ込み一掃する。バルクホルンとハルトマンは十字砲火で殲滅し、エイラの予知能力を使いリーネとサーニャが迎撃する。

コンビネーションをうまく使い食い止めているがやはり大元を倒さないといけない。

「やはりウォーロックを倒す以外に道はない。だけどあのスピードでは」

メビウスさんが乗るF-2Aとウォーロックの動きはもはやレシプロで着いていけるようなものではない。シャーリーのように音速に近いスピードを出せるなら行けるかもしれないが、そしたらあの時みたいにストライカーが空中分解する危険性がある。とロンドンにいるスカイアイさんから通信が入る。

《こちらスカイアイ。ロンドンとポーツマス軍港に攻め込んでいたネウロイがあらかた片付いた。現在残存の掃討を行っている。メビウス8をそちらに向かわせた》

「分かりました。聞こえるメビウスさん。今こちらにオメガさんが向かってるわ。それまで持ちこたえて」

《了解。もうミサイルがない。それまで——ブツ、ゲホツ、ゲホツゴホ。ガア!?》

「!? メビウスさん!」

突然咳き込むメビウス1。通信に口から何か液体が吐き出される音も聞こえてくる。間違いない、血だ。最悪の事態が起こってしまった。動きが鈍くなるF-2A。その一瞬を見逃さず、後ろから追ってくるウォーロックは新たに搭載されたM61機銃を連射し、エンジン部分と右翼に被弾した。被弾箇所から火の手が上がる。

「メビウスさん!!」

ウォーロックの攻撃は止まらない。撃ちながらどんどん近づく。

《人間なめんなああああ!!!》

通信から聞こえてくるメビウス[!]の雄叫びを全員が聞いていた。メビウス1はF-2Aのタイヤを下し空気抵抗を増大。強引にオーバースピートさせようとする。機体の少しずつ動かしウォーロックの進路上に移動させる。機体が接触する瞬間脱出した。

ウォーロックがF-2Aに衝突し爆発に巻き込まれる。

《メビウスさん!》

パラシュートで落下するメビウス1を宮藤は受け止める。そこに爆煙から出てきた機銃を損傷したウォーロックがレーザーの砲口を向けてきた。すぐにシールドを張る宮藤。だがウォーロックのすぐ目の前にもう一つの影が割り込んできた。宮藤が最初に会ったあの人型ネウロイドだ。ネウロイドとウォーロックは互いに攻撃せず、お互いのコアを出し相対している。一体何をしているのかと思っていると基地から通信が入った。

《ミーナ中佐! ウォーロックの稼働率が急激に上昇している!

そこにいるのは危険です退避してください!》

「!! 全員ウォーロックから急いで離れ——」

ミーナが命令を出すより速く。ウォーロックと人型ネウロイドは真っ白な光に包まれた。

「うわああー！」

「なんだ！何が起こっている!?!」

余りに眩し過ぎて、皆咄嗟に目を覆ったがメビウスだけが見えていた。一瞬だけ抱き合っているようにも見えた。

「……………」

光が収まった後、そこには誰一人の姿もなかった。すると、周りにいたネウロイが次々に自壊していき、周囲に白い破片が空中を舞う。まさかと思ひ彼女たちはガリアの方を見る。彼女達の視線の先には、ガリア上空を覆っていたはずの黒い雲が次第に引いていく光景があった。

「ガリアが……解放された……?」

自身の悲願が達成された光景を見てまるで夢でも見ているかのようになりペリーヌは言う。自分の頬を抓って夢ではないことを確認した。

「いよっしやー！勝ったー!」

「やった、やったぞー!」

思い思いに喜びを爆発させる隊員達。だが……

《いや……まだだ》

通信から聞こえてくるメビウスの声に皆が無事だったのかと驚きながら彼女がみる方向に顔を向ける。彼女たちより上空。彼女たちの同じようにじつとガリアを見つめる黒い影。もう一体の人型ネウロイ。

《聞こえるか……Yellow13》

かすれかすれの声に反応したのかメビウスに顔を向けるネウロイ。

《準備ができ次第……俺を空に上げる。ゴホゴホッ!》

咳き込み呼吸を整える。そして言った。

《決着をつけよう》

第35話 「決闘前」

1944年9月16日13:00

God save our gracious Queen,

(おお神よ我らが慈悲深き女王(国王)を守りたまへ)

Long live our noble Queen,

(我らが気高き女王(国王)よとこしへにあれ、)

God save the Queen:

(神よ女王(国王)を守りたまへ：)

Send her victorious,

(君に勝利を)

Happy and glorious,

(幸福を栄光をたまはせ)

Long to reign over us,

(御世の長からむことを：)

God save the Queen.

(神よ女王(国王)を守りたまへ)

—— 歌声。

町は守られた。

ヨーロッパ大陸の最後の砦になってから約3年。長くネウロイの恐怖に怯えていた市民たちが母国の国家を歌っている。空には昨日戦った戦闘機とウィッチが飛んでいる。ブリタニアだけではない。ガリアのネウロイの巢が消え去ったという情報は各戦線へと伝わり、ここほどではないがお祭り騒ぎである。この大戦に希望が見えてきたことに皆が喜びを分かち合っていた。

ただそんなうまい話ではない。ガリアにはまだ残存のネウロイが潜んでいる可能性があるため今後は上陸部隊を派遣して陸軍主体の作戦を展開する必要がある。

戦争が終わるのはまだまだ先。だがそれでもこの喜びに浸っていた。

「なんだこれはああああああっ!？」

外とは正反対にロンドンのある場所では大声が響き渡っていた。声の主はベルツ——レオナード・スウィントン大佐である。

「なんだってこんなふざけたものを建造したんだ海軍は!？」

「は。なんでもネウロイの攻撃を受けずに陸上に部隊・補給物資を送るためだと……」

「確かに有効だろうな。だがこんなもの設計図だけで無理だと分かるだろう!　かねがね思っていたが何故この国の軍人は可笑しな兵器を正式採用するのだ!？」　空軍のデファイアント、陸軍のジャンピングタンク、海軍のインコンペアブル!!!　また私の胃を痛くくすきか!?!　そもそも潜水艦の運用方法ではない!!!」

これまでブリタニア軍の珍兵器開発を止めてきたのは他にもないベルツだった。最初はデファイアント。気付いたときにはすでに100機近く生産され、ベルツ自身説得と他戦闘機の模擬戦を経て実用性が無いことを証明させ表舞台から退場させた。ジャンピングタンクは書類で正式採用したあとすぐにストップをかけて何とかなった。インコンペアブルにおいては把握するのが遅く、完成したときの能力を見た時紅茶をふいたらしい。今も昔も軍内で力が強いブリタニア海軍相手に説得するのは困難だった。だから「じゃあ実際に撃ってみろ」と言い、やってみたら反動で船が転覆した（もちろん無人の状態でやった）などなど……。兵器開発に失敗は付き物だと自覚しているが、ベルツにとつて頭が痛い記憶である。

付け加えるとこれは氷山の一角に過ぎないことをここに記しておく。そして新たなページが刻まれる

「それになんだこのパンジヤドラムと言う物は!？」

「ロケット推進式陸上爆雷だそうです。転がりながらネウロイに当てるとか」

「動く相手に無理だと何故気がつかん!？」

海軍の裏を探るために調査を命令した部下からの報告書を机に叩

きつげながらベルツは言う。海軍が建造していたもの。それは輸送型の大型潜水艦だった。扶桑陸軍の潜水艦『三式潜航輸送艇』を参考に建造した。簡単に言うならブリタニア版の三式潜航輸送艇らしい。だがその姿は親である三式潜航輸送艇とは似つかないものになってしまった。

原因は「補給物資だけじゃなく部隊も上陸できる強襲揚陸潜水艦ではどう？」と三式潜航輸送艇本来の目的であった能力を創ろうと考えたそう。結果出来上がったのは元の2倍近い大きさになった。

全長約110m。幅15m

最大積載量：歩兵二個小隊分+M4シャーマン中戦車2輜+α（パンジャドラム1個）相当

エンジン：ディーゼルと魔導エンジン搭載のハイブリット型

速力：通常時（ディーゼルのみ） 水上12ノット

水中8ノット

上陸時（ハイブリット） 水上最高20ノットまで増速

概要：船体の3分の1がエンジン。陸上上陸時にハイブリット式のエンジンを使用するが消耗激しく一度動かしたら壊れる。つまり使い捨て。

「ガリアが解放された今もう用済みだろう」

「そうですね。開発者は残念がってました」

「よし海軍工廠を強行視察するぞ。2隻目を造られていたらたまらん。というか造っていない」

「たら怒る」

ガリアが解放されたと言っても仕事が減るわけじゃない。今やるべきことをしながら

ベルツは他の重要なことを考える。

（ウォーロック研究所からコアの大元を押収、破壊したから問題ないが逃走中の奴らが

問題だな。マロニー大將に一番抵抗していた者たちだ。なにも起きなければいいのだが…）

ベルツは知らない。その大元のネウロイコアから小さいコアが切

り取られ持ちさらされたことに。

501基地

第501統合戦闘航空団「ストライクウィッチーズ」の達成目標であるガリア解放を成し遂げ、数日後に同隊は解散。彼女たちはそれぞれの場所へと離れることとなる。

彼女たちは知っている。まだ一つだけ終わっていないものがあることを。その鍵を握る人物はベッドの上で横になり、宮藤の治癒魔法を受けていた。

「……………」

ただ静かに、天井を眺めている。それはだんまりを決め込んでいるではなく、何から話せばいいのか分からないからだった。彼女の手元にはリーネが返してくれた三枚の写真。それを501の皆が見てこの場が騒然となったのはつい先ほどの事だ。その中に宮藤芳佳に似た女の子が映っていたことも。

「メビウスさん……もう隠しておくのは無理です。……話してもらえますか。貴方のことを」

「——ああ。そうだな。もう潮時か」

メビウス1はゆっくりと体を起こす。隣にいるスカイアイとメビウス8に視線を向ける。

2人とも無言で俺と目を交わす。どうやら、OKのようだ。

「写真に同じ男が写っているだろ」

「ああ」

「それが俺だ」

「は？」

「ISAF空軍第118戦術航空団メビウス中隊隊長メビウス1 ソラ・カザマ。男性、年は28……それが俺の正体だ」

メビウス1の言ったことに皆が驚く。男性？ 今日の前にいる彼女（メビウス1）が本当は男だったのかと。それを捕捉する様にミーナと美緒が言う。

「メビウスさんのいう事は本当よ。だからあなた達とお風呂を同じにしないようにしていたの」

「私たちも最初は信じられなかったが事実だ。現にメビウスたちはズボンの上に何かしらを穿いているだろ？ メビウスの世界で我々のズボンは下着だからだ」

下着と言う言葉が出た時皆の顔が少し赤くなった。いくら軍人とはいえ歳は二十歳も満たない少女だ。世界観が違うとはいえ、彼女たちのズボンが下着として見られている世界に迷い込んだらを想像しているのだろう。

「ということとは、スカイアイとオメガも男？」

「そうだ。私の本名はギルバート・ナガブチ。男性、32歳。メビウス中隊の担当管制官についている」

「エドガー・リーデル。男性、36。前の部隊『オメガ隊』隊長、今はメビウス中隊の8番機だ」

「……………なんで女の体になつてるの？」

「そんなの、こっちが聞きたい」

分からないとジェスチャーするスカイアイこと、ナガブチ。一応の理由を知っているメビウス1はあまりこの場を混乱させないため言わないことにした。

「俺とYellow13の関係を話すのに話さなくちゃいけないことがある。ユリシイズ。そして大陸戦争……………俺たちの世界の戦争のことを」

メビウス1はゆっくりと話し始めた。その内容は彼女たちにとってあまりにも強烈だった。

1999年7月3日に発生した小惑星1994XF04通称“ユリシイズ”の落下。大陸に降り注いだ隕石の破片で発生から2週間

で50万人が死亡したこと。

「そのときに、家族を失った」

驚く皆を余所に、メビウス1は、言葉を続ける。

その後の経済恐慌と発生した難民問題。その激化により軍事大国だったエルジアが中立国サンサルバシオンに侵攻。同国砂漠地帯に建造された隕石迎撃砲を対空砲として軍事利用する。それに反発したユージア大陸の国家群は同盟としてI S A Fを結成する。大陸戦争の幕開けである。

「開戦から劣性。その勢いを止めることが出来ないまま、ユージア大陸全域をエルジアに占領された。残されたのは俺の故郷であるノースポイントのみ。先だって戦線に加わった前メビウス隊が全滅し、まだ学生だった自分たちも加わった。撤退戦の支援でメビウス隊は俺と相棒だけになった」

メビウス1はもう一枚の写真。男たちの集合写真を見てしゃべる。「相棒と2人でなんとか勝利していたとき、奴が現れた。Yellow 13——エルジア空軍第156戦術戦闘航空団アキラ……黄色中隊。次々に落とされる味方機。機体を軽くしても性能差が大きく逃げられない。俺と相棒は命令を無視して交戦に入った。味方の撤退する時間を稼ぐために。だが結果は——」

あの時のことを、メビウス1は鮮明に脳裏に焼き付いている。戦いにすらならなかった。向こうは高性能機に対し、こっちは処分手前だった旧式。戦闘経験など比べるでもないベテラン揃い。無様に追いかけて回され、逃げるのに必死になり後部座席の相棒に耳を傾けず、四射撃に騙され被弾した。時間稼ぎは成功したが代償として、相棒が死んだ。

「あの時から複座に乗るのはやめた。もう俺のミスで誰かを死なせたくなかった」

ここで乗った癖に最悪だな俺は。とメビウス1は付け加えた。「落ち込んでいる暇なんてなかった。その後も俺は戦い続けた」

エルジア無敵艦隊“エイグル艦隊”の撃滅。偵察衛星打ち上げ支援のためコモナ諸島上空での大空戦。大陸上陸部隊を支援したバン

カーショット作戦。ストーンヘンジ再攻撃作戦、その後に行った黄色中隊と交戦し一機を落した事。中立国サンサルバシオンの解放。ウイスキー回廊の大戦車戦。そして、エルジア首都フアーバンテイ侵攻。

「その時には俺は敵から『リボン付きの死神』と呼ばれていた。上空にいるだけで味方の士気を上げ、敵を恐怖に震えあがらせる存在になっていた」

始まったフアーバンテイ侵攻。真っ赤な夕日を背に黄色の13と死闘を繰り広げた。

「戦場で俺の撃った機銃が奴の右エンジンに当たり出火した。それで終わりかと思ったがYellow13はその状態で戦闘を続行した。正面から撃ち合ってあいつを落した」

本当にギリギリの戦いだ。双方ミサイル尽きた最後のヘッドオンからの機銃攻撃。双方同時に撃ち合い、双方風防が弾け飛んだ。30mm弾が自分の真横を通り過ぎたことを今でも覚えている。

「あの時、Yellow13を殺したと思っていた。だが、そうじゃなかったようだ」

視線をマルセイユの方へと向ける。

「あいつが、黄色の13がトブルクに現れたのは1942年10月。被弾した戦闘機に遭遇したのが始まりだった」

マルセイユが自身を知る黄色の13について話しはじめる。極秘事項になっているが、マルセイユがストライカーの不具合で九死に一生を得た翌日に起こった。突然の警報とレーダーに映る影。索敵範囲の内側から現れたそれをネウロイと見て出撃し、その姿に驚いたこと。トブルクの町に墮ちるそれが機体を上昇させ海に突っ込み、彼奴が脱出したこと。その後の黄色の13と第31統合戦闘飛行隊「アフリカ」の関係をマルセイユは話してくれた。

「3カ月。負傷して隻眼のハンデを近寄せない。その間の彼奴のスコアは48。ネウロイに包囲されても生還する技量に教官としてやってもらおうと考えていた矢先に、トブルク南部500kmに新たなネウロイの巣——ストーンヘンジだって言ってた」

「何っ!？」

スカイアイたちの空気が変わる。マルセイユは一枚の写真を取りだす。そこに映っているのは、愛機の傍に立つ13の姿。

「なんでもか直った機体で出撃して………帰ってこなかった。分かったのは彼奴1人だけでネウロイの巢を破壊したってことだけ。それと渡さなくちゃいけないものがあるんだ」

マルセイユはポケットからあるものを取り出した。それは封筒。

『もし俺と同じ奴がいたら、渡してくれ』って言っていた。サンサルバシオンの酒場の少年にだって」

「13が……?」

メビウス1はマルセイユから手紙を受け取る。封筒にはサンサルバシオンのとある住所、酒場『スカイキッド』と書かれていた。エルジアの占領下だったところ何かあったのだろう。

「……分かった。必ず渡しに行く」

封筒をしまう。それを見計らってミーナが全員に言う。

「はい。これからメビウスさん……いえ、カザマさんと宮藤さんの大事なお話があるから皆さん部屋から出てください」

「我々も出よう」

「そうだな」

スカイアイたちも部屋を出て、残るのはメビウス1と宮藤の2人だけになる。最初に切り出したのは芳佳だった。

「あの、その写真に写っている私にそっくりな人は」

「ああ。俺の妹だ……ユリシーズで跡形もなく吹っ飛んだ。親父もお袋も」

メビウス1は目を閉じ、思い出すように呟く。

「最初にここに来て宮藤の顔を見たとき思った「やっど、皆のところに逝ける」って。迎えに来てくれたとあの時は本気で思った」

「あの、1つ聞いてもいいですか?」

「うん?」

「何故私のことを名前では呼ばないんですか?」

芳佳の問いにメビウス1は言おうか言わないか迷ったがいう事に

した。

「同じだったからだよ。ヨシカ・カザマ。それが妹の名だ。あいつとお前は違うんだって意識するためにずっと……………」

メビウス1は右手で目を隠す。涙目になっているのを見せたくなかった。

「あいつら(マロニー一派)の協力を拒んだらお前たちが人質にされると思った。だからあいつらに協力するフリをしたんだ。お前が死んだら俺は……………」

涙が頬を伝う。宮藤はそれをただ見つめることしかできなかった。

ミーナたちは格納庫にいた。メビウス1のF-22Aストライカーを出すためにだ。

「少し待っててください。偽装用のタイヤを剥がしますんで」

隠し場所を知っているホーマーに任せる。その間に皆がスカイアイとメビウス8にそれとなく大陸戦争のことを聞いてくる。

「エルジアもISAFもどちらも大義名分があった。だが正義でもなかった。双方深い傷痕が残った。俺の場合隊員が俺を庇って死んだ」「私はサンサルバシオン侵攻の折り、市街戦に巻き込まれ妻を失った」

さらに最悪なのはFCU軍の戦車の放った流れ弾が中つたのだから始末が悪い。侵攻で混乱していたとはいえあまりにも酷い結果だった。また、この戦車もこの戦闘で破壊され乗員死亡しているから憎もうにも憎めない。あれから2年経つが、娘の行方が分からない。休暇を取って探しているが見つからないのだ。

「見つかるといいですね」

「ああ……………そう言ってもらえると助かる」

「いいですか？ やりますよ」

準備ができたのかホーマーはレバーを下す。すると床が開き、下からF-22Aストライカーが出てきた。さながら空母のエレベーターの装置だ。

「なんでこんな装置があるんです？」

「あつたら便利と思ひ造りました」

「私の記憶にないのは？」

「報告しなかったからです」

「後悔は」

「ありません！」

「……はあ。もういいわ。もう考えるの疲れてきました」

眉間にしわを寄せてミーナは言う。まあ、隠し通すことが出来たから今は良しとしよう。

「それで。例のネウロイは？」

「カレー上空に留まったままです。状況に変化なし」

メビウス1を待っている。ここからは私たちが介入できるものではない。メビウス1であるソラ・カザマ少佐しかできないことだ。

(でも、あの体で……)

今の彼女の体は危険な状態だ。それを言っているのに出るの一点張り。分らないわけではない。だがどうしても止めたいと思うミーナだった。

「この調子なら、メビウス1が出るのは18時ごろだな」

「今の時期は陽が長いから戦闘に支障はないだろう。18時か……これも運命なのか」

スカイアイは空を見る。9月、そして18時。奇しくもメビウス1と黄色の13が闘った「フアーバンティ包囲戦」と同じ時間帯だった。

空が夕日で赤く染まる。その空をソラ・カザマ——メビウス1が飛んでいる。F-22Aストライカーをはき、右手には手持ち用のM61機関砲、腰に扶桑刀を帯刀している。

(あのときと同じ風景か)

フアーバンティ上空で真つ赤な夕日を背にYellow13と戦った。あのときと同じ舞台上で戦うことになるとは思わなかった。

「来たぞ。Yellow13」

カレー上空。そこに彼女は、否。黄色の13は佇んでいた。黄色中隊カラーのSu-37ストライカー。右手にはGSh-30-1機関砲。背中には聞いてた通り紅いサーベルを2つ背負っている。人が消えたかつての都市パ・ド・カレーに佇むその姿はさながら亡霊のようにも見えた。

「戦場じゃない空で、あんたと一緒に飛びたかった」

決して叶う事のない。けど一度願ってしまったこと。敵でないあんと飛べたらどんなにすばらしかったのか。今ではもう分からない。と、はるか後方。基地上空で待機している皆から通信が入った。

《こちらスカイアイだ。メビウス1。幸運を祈る》

《お前は1人じゃないぞ隊長》

《メビウスさん……御武運を》

《私と剣道でやりあったようにやれ！ メビウス1！》

《やられたら承知しないからな！》

《それ応援になってないよ……がんばってねメビウス》

《黄色の13 リボン付き 悔いのない戦いを。私はここで見守るからな》

《メビウスさん。どうか御無事で》

《まあ、頑張ってコイ》

《メビウス少佐。貴方の勝利を祈ります》

《メビウスさん。あの、その……頑張ってください！》

《どんなケガも治します。だから、帰ってきてください。必ず》

「……ああ、必ずな」

それだけ言って、メビウス1は気持ちを固める。

全力をもってYellow13の相手をする。

ISAF空軍第118戦術航空団メビウス中隊隊長メビウス1として

リボン付きの死神として

「メビウス1、エンゲージ^交！」

メビウス1と黄色の13は同時にバーナーを吹かし、すれ違う。

ユージア大陸の空でぶつかり合った2人は、異世界の空で再び激突する。

メビウス1 またの名を“リボン付きの死神”

黄色の13 またの名を“エルジアの大鷲”

宿命のライバルである2人の決闘が今、始まった。

第36話 『リボンと黄色』

前編 “2人の戦争”

交差した2人はそれぞれ相手の後ろに回り込もうと、複雑な螺旋を描く。黄色の13が機体の性能差を活かしメビウス1の後ろを取る。メビウス1は後ろにいる黄色の13を視野に入れながら反転させ射程に入らないよう動き回る。音速に近い速さで飛び、その衝撃波が地上の廃墟を揺らす。互いに後ろを取るまいと飛ぶが、ついに黄色の13がメビウス1の背後を取る。

(やはり旋回能力では勝てないか。だが——！)

Su-37からR-77中距離空対空ミサイルが3発発射される。主翼下に搭載されていたR-77は機体から離されると、白煙を盛大に吐きながらメビウス1へと迫る。欺瞞のチャフを撒き、急旋回する。だが欺瞞に強い作りになっているAMRAAM中距離空対空ミサイル同様このR-77も例外ではなく、1発だけ誤魔化され、残りの2発が向かってくる。それに対し、メビウス1は無意識に自身の能力を使用する。アフターバーナーをかけ、増速。さらに機体の性能を最大限に発揮し、急旋回を駆ける。

「ぐううううううう——！！」

超音速、急旋回、さらに機体を回転させ、全体を翻らせる。常人には耐えられないGを体に受けながら意識を手放すことなくメビウス1は動く。そうして、その横を2発のR-77が通りすぎる。

メビウス1の固有魔法『身体強化』で、ミサイルの機動以上の動きを可能にし、近接信管の範囲外に逃れたのだ。

躲した——！　だが、気を抜かない。底部ウエポンベイを開き、黄色の13にロックオンする。

「FOX3ッ!!」

お返しとばかりに3発のAMRAAM中距離空対空ミサイルを発射する。チャフは効かないと解っているためか。黄色の13は急降下し、追ってくるミサイルに機関砲を向け引き金を引く。そのすべてを撃ち落とした。上昇し、回避した黄色の13。と、開いている左手にサーベルを持ち、振り返りざまに横に一閃する。そこには同じよ

うに左手に扶桑刀を持ち黄色の13に振り下ろすメビウス1の姿。魔力を帯びた二つの刃がぶつかり合い、火花が散る。身を翻し、2人は同時に引き撃ち。必中の銃撃全弾を、機体をわずかに動かし、避ける。お互いダメージは0。

「さすがだYellow13!」

2人は再び後ろを取るために旋回を始めた。

メビウス1と黄色の13の刃が鏝迫り合いになった10秒遅れて、ぶつかり合った魔力の余波が一陣の風となり501の部隊の皆に襲い掛かる。

「ッ!!」

「なんて魔力ですの!?!」

あまりの強風にシールドを出す。100km離れた場所から見守っているのに、その戦闘の迫力に皆が驚かされる。約半年メビウスと共に暮らし、彼女の戦闘を垣間見てきた第501統合戦闘航空団の皆だが、あれは全力ではなかったのだ。今の姿が彼女の全力。メビウス1の本気。相対する人型ネウロイ——黄色の13も引けを取らない。

互いに後ろを取り取られ、迫るミサイルをチャフ、フレアで欺瞞し、弾丸の雨を掻い潜り、左手に持つ剣で斬りかかる。

スカイアイが表示する立体映像を見る。

「いいかお前たち。よく見ておけ。これが、ネウロイがいなかった世界の戦争だ」

美緒が皆に言う。以前ミーナと話した、ネウロイがいない人間同士の戦争。その光景を皆に記憶させるようにする。もしかしたら、あそこで戦っているのが、私たちだったかもしれないということ。

メビウス1の後ろを黄色の13が取ろうとする前に、メビウス1は急降下を始める。スピードを落とすことなく、どんどん高度を下げる。その後ろから黄色の13が距離を詰める。

「何をしているこのままだと地面に激突するぞー！」

メビウス1の意図が分からないバルクホルンが叫ぶ。このまま急降下を続ければ、引き起こしが間に合わず 地面に激突する羽目になる。そのとき、あと少しで地面とキスする手前でようやく水平飛行に戻す。高度は30フィート(約9m)。黄色の13も水平機動になる。さすがにあんな超低空を飛ぶのは危険だと思ったのだろう。だが、メビウス1の後ろは格好の的だ。

Su-37の主翼端に取り付けられているR-73短距離空対空ミサイルが発射される。赤外線誘導のそれは、しっかりとF-22Aの排熱を捉え加速する。メビウス1は回避も何もせず、飛び続ける。その先にはパ・ド・カレーの廃墟のなかで一回り大きい建造物がある。そこに迷わず突入する。

「危ない!!」

皆が叫ぶ。が不思議なことが起きる。そのまま建造物に突入したメビウス1が何もなかったかのように映し出される映像に健在だったのだ。

「まったく無茶なことを」

メビウス8が呟く。そうしていると通り過ぎた建造物が崩壊した。そこにミサイルがぶつかり爆散する。

「メビウスは一体何をしたの?」

「ああ。すでに穴があつた空間に、音速で通り抜けたのさ。その衝撃で建物は崩壊。その残骸でミサイルを全て回避したんだ」

以前戦闘機で気球にカスルことなく避け切った実力は知っていたが、なんて無茶をするのだ、と絶句する。下手をすれば自分自身が危険になるのに。今度はメビウス1が追いかける方に移り、黄色の13は急降下をし、海面すれすれに飛行した。通った後を水柱が立ち上がる。M61の照準に黄色の13を捕えようとする と 僅かに射線から逸れる様に飛行する黄色の13。無駄弾を使わせ、機銃弾を無くすこ

とが目的だとすぐに分かった。既に双方ミサイルを使い果たし、あるのは機関砲とその剣のみ。決定打を与えるにはもう少し近づかないといけない。メビウス1は増速しようとしたとき、この行為こそ罠だと気が付いたとき既に黄色の13は行動を始めていた。

目の前に立ち上る巨大な水柱。以前のパ・ド・カレー戦に置いてメビウス1が使ったアフターバーナーを使用した回避方法。それと同じ方法で黄色の13は仕掛けてきたのだ。水柱の回避は不可能と判断したメビウス1はアフターバーナーを点火増速、上昇をかけ水を被りながら突破する。海水を被ったことで視界が悪くなる。さらに水を浴びたことでF-22のステルス効果が半減。向こうのレーダーにも映るだろう。水を被ることによる失速墜落だけでなく、ステルス能力の低下も含んでいたとは、やはり彼は侮れない相手だ。今の自分は隙だらけだ。この状態で狙うなら——ッ！

《そこ——ッ!!》

まだ目が使えない状態で、メビウス1はパイロットの勘を頼りに上半身を捻り、右手のM61機関砲の残弾全てを後方に向けばら撒く。彼の勘は当たっていた。無防備な背中から狙っていた黄色の13のGSh-30-1機関砲の弾倉に弾丸が命中爆発する。黄色の13は咄嗟に手離し距離を取ること事なきを得る。これで互いのミサイル、銃弾は底を尽きた。

大きく旋回し、リボン付きと黄色の13は向かい合う。

互いの距離が50mをきつたところで機関砲を放り投げ、メビウス1は扶桑刀を。黄色の13は二本の朱いサーベルを手取る。そして、2つの刃がぶつかった。

剣戟の音だけが響き渡る。黄色の13が繰り出す嵐のような二刀サーベルの猛攻を、メビウス1は冷静に見切り、避け、受け流し、一撃を加えるも、同様に当たらない。一撃の1つ1つ全てが必殺。双方攻撃をさらに強くするために自身の得物に魔力を付加させる。先ほどとは比べものにならないほどの魔力のぶつかり合い。その影響が

爆炎を上げ沈没して逝く大艦隊

《警告！ストーンヘンジからの砲撃だ》

破壊されていく空の下、狭い谷を飛び回る戦闘機

『FOX 2、FOX 2！』

空を覆い尽くすほどの戦闘機同士による大空戦

『リボンのエンブレムだ』

僚機に一撃を加えたあそのときのリボンのエンブレムの戦闘機

《こちらクラウンビーチ、B部隊指揮官のベルツ中尉だ！》

曇天の中進んでゆく上陸部隊

《犬死にするな。生き残ってこそ英雄だ》

爆音のなか巨大な対空砲を攻撃する戦闘機

『当たれえええ!!』

唯一動きの鈍い一機への機銃掃射

『こちら黄13、黄4の脱出を見た者はいるか』

爆散する黄色で『4』とペイントされた僚機

『今日と言う最高の勝利に乾杯だ!』

酒瓶片手に盛大に酒をメビウス1に浴びせるほどのお祭り騒ぎな
ISAFの仲間

『不調機で上がった者に文句は言えん —— どんな場合でも』

目の前の少年に撃墜した彼女のことを語る黄色の13

映し出される映像。聞こえてくる音声。

これが何なのかすぐに分かった。これは、2人から見たあの戦争の
記憶だ。

『僕らの町を出て行け 侵略者!』

あの少年が拳銃を黄色の13に向ける。その光景を見ていた宮藤
たちに衝撃が走る。黄色の13に一番懐いていたあの少年が、こんな
にも歪んだ顔ができるのかと。その手は震えていた。怖いのも、恐
ろしいのでもない。ただ、本当はこんなことしたくないと思う表れで
あった。

『そんなに、俺たちが憎いか』

黄色の13は何をするでもなく。じつと少年を見つめる。そのあ
と黄色の13は彼らを逃した。それから彼の態度は変わらない。

そして、ある日の夜。ついに連合軍の奪還作戦が始まった。黄色中
隊も全機迎撃に出る。機体の準備を進めていると、あの少年が来てい

ることに気が付く。まるでこれが最後になるかもしれないと察していたかのように。しばし顔を向けた後準備を再開し、離陸体勢に入る。黄色の13は振り返ることはなく、夜の空へと昇って行った。

そして――

『残ったのは俺だけか……………』

真っ赤な夕日に染まる大空の下、旋回を続ける二機の戦闘機。後ろを取られないように、こちらの後ろを取ろうと同じように旋回を続ける一機の戦闘機を見る。F-22Aラプター。乗っているのはリボン付きの死神。ここまで黄色中隊得意の包囲殲滅戦法で仕掛けるもリボン付きはその全てを抜け出し、一機。また一機と着実に墜としていった。結果。残ったのは自分ただ一人。

『だが――！』

自分は敗けるつもりはない。例え祖国が敗れたとしても、目の前の、自身がライバルと認めた敵に負けるつもりなど毛頭なかった。黄色の4の敵討ちではない。ただ純粹に己が望んだ、己の全てを注ぎ込んで闘う最高の決闘。そして、それを見込んだ最大の相手。

リボン付きの死神。

飛ぶだけで味方の士気を上げ、敵の戦意を喪失させるISAFのエースパイロット。彼が初めからエースではなかったことは黄色の13が誰よりも知っていた。開戦時からエースパイロットと皆から湛えられた自分とは違う。最初に接触した石油コンビナートのとき、リボン付きの動きはルーキーのそれだった。しかし、コモナ諸島の空戦でその片鱗が見られ始め、ストーンヘンジの攻撃を掻い潜り、黄色の4を撃墜し、ついにはこの俺と戦えるまでの力をつけた。皮肉にも、戦争が彼をここまで強くした。最初からエースだった男と、もがきながらエースになった男。これが黄色の13とメビウス1の違い。

追ってくるリボン付きに黄色の13は十八番であるコブラを使う。慌てて減速するもF-22Aは黄色の13が操るSu-37をオーバーシュートしてしまう。機体を水平に戻した黄色の13はミサイ

ルのボタンに手を駆ける。が、リボン付きはアフターバーナーを点火し急上昇を始めた。すぐさま後ろを追った。両機上昇を続ける。太陽は西に沈みかけ目くらましに使用することはできない。絶好のチャンスだった。残りのR-73、R-77ミサイル全てを使い決着をつける。ラプターをロックオンした。

『終わりだ！ リボン付き!!』

ミサイルの発射ボタンを押そうとしたとき

『まだだッ!!』

リボン付きの死神、メビウス1が驚きの動きを見せた。

『何?!』

黄色の13は目を見張る。リボン付きは推力偏向ノズルを使い、非情に粗いクルビットを実行した。強引すぎるそれに機体は失速、こちらへと墜ちてきた。このままでは機体同士、墜ちてくるF-22Aの真ん中にコックピットからぶつかってしまう。ミサイルで破壊しても飛び散った破片が襲い掛かる。

すばやく判断した黄色の13はミサイル発射を断念。回避行動に全力を注ぐ。エルロン、ラダー、推力偏向ノズル。Su-37の全てを活かし、F-22Aの機体をギリギリで躲した。クルビットとバレルロールを組み合わせたような変態機動で躲したSu-37はちょうど背面の状態だった。黄色の13は失速し墜ちていったリボン付きの機体を確認するため下を見下ろす。

『……ッ!』

黄色の13は我が目を疑った。F-22Aラプターは、メビウス1は、リボン付きは、墜ちながら機体を制御しM61機銃の銃身をこちらに向けていた。目標から離れながらの攻撃。それでは攻撃の威力が落ちてしまう。その状態にも関わらず実行するその執念に驚きを隠せない。そして、その銃口の先は偶然にも正確にコックピットを狙っていた。

『ガンアタック、当たれ!!』

メビウス1は引き金を引く。二〇ミリ機関砲が唸り声を上げる。対して黄色の13は直撃を避けようと機体を動かす。が――

『ぐ——ッ!』

銃弾の一つが風防のガラスに当たった。幸い銃弾は体に当たらなかつた。

だが、黄色の13の視界。左側に大きく亀裂が入る。風防のガラス片がヘルメットを貫通し刺さった証拠だつた。その後、殴られたような衝撃が黄色の13を襲う。左エンジンが被弾したのだ。霞んでいく意識の中手を伸ばし左エンジンの燃料供給を停止させる。左エンジンを緊急停止させたことで空中爆発の危機は去つた。だが、この状態で戦闘は不可能。愛機は飛ぶだけの棺桶になつてしまつた。配電盤もイカレてた。あの時の一発が機内OSにダメージを与えたのだらう。機体水平維持システムも機能していない。緩やかに下降して逝く機体。意識が無くなる直前、黄色の13はフツと笑つた。隊長として失格だが、戦闘機パイロットの自分に悔いはない。最高の闘いだつた。

雲の中に入る。そこで黄色の13の意識は途絶えた。

機体を水平に戻す。大きく呼吸をする彼はレーダーをじつと見つめていた。映し出された一つの反応が消える。最強の相手。黄色の13がこの空に散つたのを現していた。あの黄色の13に勝つた。その事実にもビウス1は舞い上がることも勝利の雄叫びをあげることも無かつた。残つたのは、彼自身も理解できない空しさだけ。通信越しから味方の勝利の歓喜が流れてくる。メビウス1は通信を切り空を眺めた。何故勝利を喜ぶことができないのか? それは純粹にこちら側に大義名分が無いこと知っていたからだ。かくいうエルジアも大義名分も無かつた。双方、どちらも悪かつた。I S A F側が難民問題をエルジアに押し付けなければエルジアは戦争に踏み切ることは無かつたかもしれない。エルジア側がストーンヘンジを兵器利用しなければここまでの戦争にはならなかつたかもしれない。数多くの可能性。もしか頭をよぎる。ただ、一番最大のもものは、ユリ

シーズが堕ちてこなかったら。こんなことは無かったかもしれない。敵同士としてこの空を飛ぶことは無かったかもしれない。決して実現しないI Fを考えてしまう。ここでようやく理解した。未練が残っていたのだ、自分には。それは軍人らしからぬ感情。だがどうしても捨てきれない想い。自分でもどうしたらいいか分からない。が、声にせずにはいられなかった。

「敵同士じゃない空で、共に飛んでみたかった。Yellow 13」

この日。彼らの戦争は終結した。

目が覚めるとそこは見知らぬ天井だった。あのととき、確かに自分は燃え盛る機体と運命を共にしたはずだったのに。顔を動かし周りを見る。個室のどこかの病室。入ってきた看護婦に「ここは地獄か？」と聞く。返ってきたのは「地獄に一番近いこの世」という言葉。その言葉で二つを理解した。

1つは自分が生きていること。

2つはまだ飛ぶことが出来るかもしれないこと。

二つ目の事実に彼——黄色の13は、わずかに口元を緩ませた。

彼の物語にピリオドが打たれた。だがそれで終わりではない。

ここからは、翼をもがれた大鷲の物語である。

次回第37話『リボンと黄色』

後編『決着』

第37話 「リボンと黄色 後編 13」

目が覚める。見知らぬ天井と窓から見える空を眺めていた。

どうして生きているのか分からなかった。確かに自分は、機体と運命を共にしたはず。あの戦闘の感触が手にまだ残っていることからそれほど時間は経過していない。自分はISAFの捕虜になったと考えるのが妥当か。運が良いのか悪いのか。自分は死に底なってしまうた。だとしてもあと数日の命だろう。別に死ぬのは怖くない。自分はもう死んでいるのだ。

左目は包帯を巻かれていた。もう使い物にならないだろう。もし運よく生き延びても空を飛ぶことさえ敵わない。良くて空軍学校の教師になれるかもしれないが、敗戦国になったエルジアの軍の育成をISAFがすぐに認めるわけがない。どうしようかと悩んでも相談できる仲間はいない。

手元にあつたハンカチはもう無い。

あの戦闘で失くしてしまったのだろう。それを残念に思いながら、あの感触を噛みしめていた。

数日後、信じがたいことにこの世界は自分がいたところとは全く違う世界に飛ばされたことを把握した。もといたところの50年前の物。レシプロ機。自分が知らない大陸、国家。そして、魔法という概念。ウィッチと呼ばれる女性軍人——いや、正確に言うなら彼女たちはまだ女の子だろう。あんな、年端もいかない子まで戦場に出さないといけないのは気が引ける。

数日ぶりに対面する自分の愛機だったもの。数日前、トブルクの港に不時着した大型の飛行機。着水と同時に脱出したあと自分は救助された。海から引き上げられ、機体の原型は保たれているものの海水を被ったせいか錆が目立つ。エンジンは破損し、中の精密機械も海水

でやられて復旧不可能。愛機は二度と飛ぶことが出来ない鉄の塊と化していた。だからだろうか。長年の相棒に触れる。

——ありがとう

大陸戦争。2年間に及ぶ、黄色中隊の栄光と衰退を共に見て、共に戦った自身の機体に最大の敬意を贈った。

左目に眼帯をした彼はリハビリを終え、目の前の機体にいた。メツサーシャルフBf 109F カールスラントの主力戦闘機である。彼が動けるようになって最初に思ったことは『また空を飛べるかもしれない』これ1つのみだった。もとい世界で無理でも、この世界なら可能かもしれない。実際1940年代のユーリア大陸、ISAF本部が置かれることになるノースポイントに隻眼のエースパイロットが実際にいたのだ。実例があるなら自分にできないことはないはず、戦闘機に乗ることを思いながら今日まで過ごしてきた。片目の自分の申し出を了承してくれるとは内心想っていないなかった(裏では残骸となったSu-37の調査が遅々として進まないこと。それに乗っていた黄色の13の実力を把握するためが挙げられる。その他諸々の理由も存在)やはりレシプロだけあってすべてがアナログ。安全装置などないから急旋回時のGで気を失ったら墜落する。高Gに慣れているとはいえ今の自分はこの時代のパイロットスーツ。慢心してはいけない。

『あなたがあの機体のパイロット?』

同行することになったのは加東圭子という名の女性。ウィッチの装備であるストライカーと呼ばれる足に穿く戦闘機のようなものを装着している。戦闘に出る為ではないため腰の拳銃のみ。手にはカメラを持っている。

離陸し、最初はただ真っ直ぐ飛ぶ。片目で視界がどうなるか実際に飛んでみないと分からない。やはりと言うべきか立体感がつかめない。しばし目を慣れさせた後、大きく旋回を始める。機体の性能チェック。すぐにコツを掴んだ。それに何より空を飛べることがうれしく感じる。戦闘機乗りの性だからか。その間にも圭子はパシャパシャと写真を撮っている。

現在滑走路の南10km上空を飛んでいる。広大な砂漠が広がる大地の空から下を眺めると南の方角、さらに10km先地上付近に何が光った。隣にいる圭子に確認するとそれが敵、つまりネウロイだとの返事が返ってきた。その後の行動は早かった。戦闘機に乗っていた頃の勘とでもいうのか。敵機を見つけたらすぐに動く。増層を切り捨て、速度を上げる。置いていった圭子の声も無視。敵は飛行機というよりも筒状で頭にプロペラを付けた奇妙な形をしていた。砂漠の砂丘擦れ擦れを飛んでいる。あれでは今の時代のレーダーに映らない。相手は10機。少数での奇襲を考えていたのだろうか見なければこちらの物。太陽を背に急降下急接近する。自分だけで撃滅するのは不可能。ならば、相手の進撃を止めることが重要と判断する。編隊を組む先頭の敵に狙いを定めた。7・92mm MG 17 機関銃が火を噴く。瞬く間に先頭の二機を仕留める。逆に奇襲された小型ネウロイたちの編隊が乱れた。皆ばらけてそれぞれ黄色の13に襲い掛かる。だが、統率のとれていない包囲攻撃など彼にとって怖くない。統率のとれた包囲攻撃は彼の部隊の得意戦術なのだから。一機、また二機と確実に仕留めていく。五機目を追っているとネウロイが二機後ろから追ってきた。目の前の奴は囷だった。少しは考えて行動する敵なのだと認識する。目の前の囷ネウロイが左旋回すると同時に後方二機のネウロイは黄色の13に攻撃を仕掛けた。彼は右に旋回し回避……ではなかった。右旋回と見せかけ、機体を背面させながらのバレルロール。バレルロールを終えた彼の前には先ほどまで追っていたあの囷ネウロイが存在しそれを撃ち落とす。

それを見ていた圭子はその光景をこう口にする。

『あの時の彼はすべてのネウロイの動きを把握しているように見えたわ。まるでもう1人のマルセイユの闘いを見ているみたい』

その後、スクランブル出撃したマルセイユ達が参戦したことによりここでの戦闘はすぐに終わった。

その後、いろいろあった

あの戦闘を見て模擬戦をしたいと迫るマルセイユを適当に誤魔化したり

俺のBf109Fを黄色中隊カラーにペイントしているライーサを見つけたり

いろいろなところで圭子に盗撮されたり

酔いつぶれたマルセイユのとなりでマティルダと会話したり

どういうわけか、稲垣真美の空戦の指導をしたり……などなど

たった二カ月という短い間にいろいろなことを見てきた。そして

『……………くそっ』

意識が朦朧とするなか、自分は甦った愛機Su-37のコックピットに座っている。

ネウロイとして突如出現、猛威を振るう、ストーンヘンジ。破壊作戦に出た自分に立ちはだかった5機のSu-37型ネウロイ。最後の一機。完全に動きを読まれていたが、砲台の形振り構わない攻撃に撃ち落とされる。それでも攻撃はしっかりと狙っていた。キャノピーのガラスの破片が両足に突き刺さっている。それは肉を貫通し

操縦席にまで達していた。座席は血で濡れ、出血で意識が薄れるも激痛で目を覚ます。響き渡る警告音は燃料漏れ。誘爆はしなかったものの、数発受けていた。急速に燃料が減っていく。基地まで辿り着けない。脱出してもこの傷だ。助かる見込みは——ない。

ストーンヘンジ型ネウロイの砲台はその半数がまだ健在。時間が経てば復活する。だが、コアは見つけた。本来は通信ジャミング機器が設置されていた施設中心部分。そこに爛々と赤く輝くネウロイのコア。

『はー……………』

これが、この世界に来てしまった理由なのか？ 答えは分からない。ただ、もしかた飛べるならまた奴と戦いと思った。それは無理な話になったが、お前はここで消えてもらう。この世界から永遠に。

『最後まで付き合ってもらうぞ、相棒』

もの言わぬ兵器である機体は、操縦者の意志通りに動くことでその忠誠を示す。残り少なくなつた燃料を惜しむことせず、黄色の13はアフターバーナーを使った。高度を下げながら、減速せず、真っ直ぐコアに迫る。その真意を見抜いたのか対空砲火がより一層濃くなる。垂直尾翼の一つが吹き飛ぶ。速度が機体性能限界のマツハ2を超える。

『貴様の役目は終わった。消えてもらうぞ。俺と一緒に！』

熾烈な対空砲火の弾幕を掻い潜り、ついにSu-37の先端が接触した。死ぬ瞬間、その光景がスローモーションのように感じると良く聞かぬが、まさにそれが当てはまった。先端から潰されながらゆっくりと迫りくる。

『あとは、マルセイユ。お前たち次第だ——頼んだぞ』

眩き、刹那、モニターが真っ黒に染まる。鉄の磨り潰され爆発の音も途中で途切れた。

それを皆はじっと見ていた。メビウス1と黄色の13を通して見

た大陸戦争。この世界に来てからの黄色の13の記憶。それを見ていたマルセイユは体を震わせていた。

そして、二人の闘いも終わりへと向かう。

もう何度目か分からなくなるほど剣を混じりあった。どちらの刀身も刃こぼれが目立つ。致命傷は無いものの双方切り傷が多数ある。

《———ツ!!!》

黄色の13から先に仕掛けてくる。右手のサーベルが振り下ろされるタイミングに合わせて扶桑刀を斬り上げた。

バギツ!

扶桑刀を受けた部分からサーベルが折れた。刃こぼれした場所を的確に狙った結果だった。これで残りは左手のサーベルのみ。ここで、メビウス1は黄色の13が右足を上げていることに気が付く。

(まさかっ!?)

咄嗟に身を引いたメビウス1。その瞬間、ボツ!! という破裂音と共に右足の蹴りが繰り出された。偏向ノズルとアフターバーナーにより生まれる即死クラスの蹴り。それをギリギリのところまで躲すも遅れた扶桑刀が餌食となり刀身が半分に折れてしまった。だが、これだけで終わらない。その回転の勢いを殺さないまま、黄色の13は残った左手のサーベルで斬りかかった。

完全に反応が遅れた。後ろに下がり避けるのはもう間に合わない。折れた刀で受けてもあの勢いだ。刀ごと切り裂かれるだろう。だが

(俺は、まだ死ねない!!!)

元の世界にいる中隊の仲間たちのためにも

後ろで戦いを見守るあいつらのためにも

そして何より、あんたのためにも———!!

次の瞬間。メビウス1は黄色の13のサーベルを舐める様に躲し

た。方法は先ほど黄色の13がやったのと原理は同じ、偏向ノズル。左のストライカーは上を、右のストライカーは下を向け、さながらファイギアスケートの回転技のように黄色の13の懐に入り込んだ。残っているのは折れた扶桑刀。十分だ。まさかの動きに黄色の13も目を見開いている。

「13ッ!!!」

メビウス1は折れた扶桑刀を突きだす。それは吸い込まれるように胸のコアを貫通した。

時が止まったかのように、静寂が訪れる。メビウス1の最後の一撃によりコアを貫通した。折れた刀身の切先が背中から生えている。ぐったりと、メビウス1に支えられるように倒れ込む。

「俺の勝ちだ。Yellow13」

「——アア、俺ノ敗ケダ。リボン付き」

ネウロイが……いや、黄色の13がしゃべった。

「ワガママニ付き合ッタコト、感謝スル。ヤット、皆ノ……トコロニ

——」

限界がやってきた。コアが破壊されたことにより体の崩壊が始まる。ストライカーも同様だ。1つ違いがあるのは、通常と違い、まるで砂金のように輝き、細かく、空に消えて逝った。

『黄色の13』の肉体は大空に消え 地上に戻ることはない。彼を知る者の記憶の中で存在し続ける。歴史に残ることは無い。だが、それでも一部の人だけが語り継ぐ、一人のエースとして存在し続ける。

「Yellow 13……安らかに」

こうして、異世界の空で、二人のエースの闘いは幕を閉じた。

第38話「王の目覚め」

1944年9月17日

ブリテン島の北200kmに位置する全長3kmほどの無人島。そこにはレオナード部隊の検閲から逃げ延びた科学者たちがいた。そう。こここそがマロニー大將が言っていた謎の廃施設が見つかった場所。科学者たちはそれを調べるためにネウロイのある能力を利用してしようと考えた。それは再生能力。ネウロイの再生能力を利用して施設を復活、調査する手筈だったが、コアコントロールシステムの暴走で不可能となった。

「これからどうする?」

「どうするって……なあ」

捕まりたくない思いと科学者としての意地のせいか大元のコアを斬り取りここまで持ってきてしまった。どうしようと悩む科学者たち。

異変は、ゆっくりと浸食していた。

ガリア解放によりネウロイの恐怖が無くなった日からロンドンには昼夜関係なくずっとお祭り騒ぎだ。その中のお店。そこでブリタニア料理を堪能していたメビウス1達御一行(メビウス8、スカイアイ他数名は別行動)

一応この場を借りて言わせてもらおう。明確な理由は筆者も知らないが、不味いと名高いブリタニア料理。食べてもいないのに不味いと決めつけるのは彼の国に大変失礼です。筆者は食べたことないため説得力はありませんが美味しい料理はあります。

『……………雑でした』

と言いつ放った腹ペコ王の言葉は有名ですが、時代背景を良く考えてください。あの時代、調味料は良くて塩のみだったと思います。しかも戦時中で味付けも何も無かったかもしれない。さらに付け加えると、王の言葉は大半が“太陽の騎士”に原因があります。

以上述べたようにブリタニア料理にも美味しいものはあります。現に、皆さんおいしく頂いたようです。

で す が

どれだけ美味しくても絶対に食べられないものは存在します。それは見た目と香り。過去に合ったのは、まだスカイアイたちがここに来る前のある日。料理当番だったエイラはあるものを取り出した。

シユールストレミング

スオムスが誇る伝統の缶詰食品。それを開けた30分後、基地関係者の半数が倒れる事態となった。異変(異臭)を察知したサーニャ(ガスマスク装備)によって対処されたのは記憶に新しい。そして、ある特定の国に対して、絶大に効果を出す料理がブリタニアにある。そして、つい先ほど灰になったものが。

(燃えたよ。燃え尽きた……………真っ白にな)

「メビウスどうしたんだ!? メビウス。メビウスーーーーー!!!」

GAME OVER

「いやいや勝手に死なせんな筆者」（メタい）

誰か（？）にツツコミを入れるシャーリー。

「肝油すら耐えたメビウスが一撃だど!? そんなに凄かったのかこれは」

ブリタニア料理の代表の1つ。それは、ノースポイント、扶桑、そして我らが日本の民に死が確定した拷問級の食べ物。

ウナギのゼリー寄せ

またの名をウナギゼリー

……………うん。もう何言っているかわかんねーと思うけど、何この異世界料理？ て思うのは分かるよ？ でも残念。実在してるんだぜ、これ。見た目と調理方法は各自で調べてくれ。責任は各自で。因みに味は塩味らしい。調味料は入れてないため、良い意味で素材本

来の味が出されている……らしい。

「あれ？ 芳佳ちゃん？」

食してから笑顔を崩していない芳佳。というか。まったく動いていない。ペリーヌが芳佳の眼前で手を振る。

「え……笑顔で気絶してますわ」

「芳佳ちゃん……ん!？」

尊い2人の命が「だから殺すなっつーの！」

軍所有の大演習場。そこではある物を装備した海兵隊隊員が横一列に並んでいる。その端っこにはワイト島分遣隊のフランシー・ジェラードの姿が。

「放てー！」

合図とともに一斉に引き金が引かれる。ポウツ！ と音と共に大量の水が放水された。ものすごい勢いで水が放たれたにも関わらず微動だにしていない。さすが海兵隊。これしきの事でビクともしない。

「うひゃー……」

「あ。フラン飛ばされた」

「これで何回目でしょうか」

「さあ？」

「自分が作った手前、どうしても使いこなしたいのじゃないかしら」

以前海水浴に行った際フランが作った高圧放水銃。あの時は足場

が砂だったこと、フラン自身が軽すぎたせいで勢いに負けて自身が飛ばされる事態となった。夢を諦めかけたが、海兵隊にCCCを教えていた、あのエースウィッチに瓜二つの誰かさんが『ちやんと構えてればできる』

と言いながら実証した。しかも能力なしで。コツだけ言うと

『コーヒーの香りがする』

と言いながらどこかに飛んで行ってしまった。

で、この高圧放水銃。ガツチリと極められた体つきである海兵隊員たちはそうでもないが、華奢な体である彼女には厳しい話だ。年頃の子に体重増やせなんて無理な話。それでも挑戦している。

「まだまだーーーーー！」

「うひゃーーーーー……………」

なんともほのぼの(?)として雰囲気に含まれていた。

一方その頃。ポーツマス軍港に停泊中の扶桑海軍航空母艦 “加賀” 飛行甲板

前回の約束通り。ガランドと森田以下加賀航空隊の皆はコーヒーブレイクを楽しんでいた。嗜好品の一つであるコーヒーは煙草に引けを取らないほどの人気だ。そんな中、途中参戦してきた有名ウィッチ似のウィッチが来たこと、持参してきたコーヒー豆カオスでより混沌カオスになっ

航空兵A 「うわ……………」

航空兵B 「苦っ！」

部下の1人が誤って書類の山に触れ、それがドミノ倒しのようにつほど巻き込んで崩れた。床に散らばった書類を拾っていくなか、その中に写真が挟んであった。スカイアイは何気なしにそれを拾いあげ、言葉を失った。

「何故……こんなものがここに……ある!？」

「どうした?」

「これを見せてくれ」

拾った写真を見せる。それを見てベルツも絶句した。そこに映っている物を一度も忘れはしない。風化で色痩せ、表面が崩れ落ちているがそれは正しく、エルジア軍のマークだった。

嫌な予感がする。

そう感じた2人は同じことを思った。

「諸君。エルジアという言葉が記載された書類を至急探してくれ!」

床にバラけた書類を重点的に調べる。この不安がただの夢だったと思えることを願って。

その希望は、無残にも砕かれることとなる。

第501統合戦闘航空団『ストライクウィッチーズ』

この部隊に最後の夜が訪れた。ガリア解放の目的を達成した彼女たちは明日をもって解散となる。最後の晚餐だけに皆が皆料理に手を振るう。その間、メビウス1は1人飛べなく形だけ留めるF-4

の主翼に寝転がっていた。あれからもう少しで半年となる。俺たちをこの世界に送り込んだあの女神は準備ができ次第元の世界に返すと言った。なんでも今世界と世界の狭間で時空乱流というものが発生してため安定するまで待たないといけないとか。

「ここにいたんですか」

「探しました」

芳佳とリーネが来ていた。どうやら晚餐の準備が整ったらしい。

「メビウスさん。その、1つ聞いていいですか」

「なんだ」

「メビウスさんの写真に写っていた車椅子の女性。メビウスさんの恋人かですか」

「——ああそうだ……いや、そうだった」

包み隠さずメビウス1は言う。その言葉に宮藤は違和感を覚える。

「もしかして、その人は……」

「いや、死んでないよ。ちゃんと生きてる」

「そうだった……何かあったのですか？」

怪訝な顔を浮かべるリーネに、メビウス1は話を続けた。

「彼女の弟が俺の親友でな。後部座席を任せていたんだが……俺のミスで被弾して、死んじまったよ。あの日から今まで顔も合わせない」

あれ以来複座戦闘機乗ることをやめた。もうあんな気持ちを味わうのは御免だったから。

「今でも面会の話が来ているが……適当な理由付けて断ってる」

「どうしてですか？ その人が会いたがっているのに」

「——どの面さげて、会えばいいんだ？」

自嘲的な笑顔を浮かべているが、その表情には明らかに、底知れぬ悲しみが宿っている。そんな彼女に2人はどんな言葉をかければいいのか分からなかった。

その時だった。眠りに着こうとしていた基地に警報が響き渡る。

「なに？ なんなの!？」

「ガイアのネウロイの巢は消滅したのに？」

「おい管制室この警報は何だ！」

《わ、分かりません情報が混乱してて……とにかく空を見てください！》

空？ と聞いて三人は急いで格納庫を出る。空を見上げて言葉を失った。

雲一つない夜空を覆い尽くすほどの流れ星。その一つが、綺麗な白い光から凶暴な赤い火の玉となってヨーロッパ大陸に落下した。直後、夜空を照らさんばかりの閃光が見える。隕石が落ちた瞬間だった。

「出撃するぞ二人とも」

「はい！」

3人は駆け出し、自身のストライカーが置いてある格納庫に向かう。

災厄の流れ星

御稜威の王が蘇る

慈悲深き王は、地上に住まうもの分け隔てなく安息を与える

“救い”が始まる

絶望という名の“救済”が

第39話「Shattered Skies」

「誰か手を貸してくれ！ その下に人が！」

「お母さん！ いやああああ」

「水だ！ 生存者だ！ 水をもつてきてくれ！」

町に——いや、ヨーロッパ大陸の全土に響き渡る絶望の声。あの夜が一夜明けたロンドンの街並みを上空から見下ろす。

「ロンドンが……」

変わり果てたロンドンを見る。その被害は3年前のバトル・オブ・ブリテンのロンドン空襲を遥かに超えていた。

「こんな……こんなことが……」

「——くそっ！」

上空哨戒に飛んでいる皆が口を噛みしめた。

場所は変わり、ある建物内で作戦会議が行われている。ここはバッキンガム宮殿。ブリタニア王室が所有する宮殿の一つだ。そこではモニターに映された例の資料の説明をメビウス1、8、スカイアイが行っていた。

「——以上が、要塞施設『メガリス』の全貌になります」

(こんなものを、エルジアは造っていたのか……!!)

静かに説明を聞いていたベルツは怒りを露わに持っていた万年筆が折れた。当然と言えば当然だろう。すべての始まりとなったあの災厄をあるうことか戦争に、兵器に利用しようと考えたのだから。

「それで、この悪魔の兵器をどうやって破壊するの？」

傍らで聞いていたミーナが質問する。

「それについては我々がとった作戦をまず説明させてもらう」

チヨークを手に黒板に描かれたメガリス全体図に矢印を描きながらあの日の作戦を思い出す。

①・特殊部隊がメガリス内部に侵入しサブコントロール室がある13階を制圧する。

②・サブコントロール室の扉は電子ロックで閉ざされているため、ダクト内部にある3つのジェネレーターを破壊し解除。

③・サブコントロール室を制圧し、施設中央の大型弾道ミサイルへの道を開放。戦闘機が突入、攻撃し、脱出する。

「ちよつと待て！ 戦闘機で要塞内部に突入したのか!？」

「そうだ。あの時は時間が無かった。それに、彼女が突入した本人だ」
メビウス1に視線が集まる。半地下になったミサイルサイロの正面通路から飛び込んで目標ミサイルを破壊、さらに直上の発射口から脱出を果たすという荒技をやったのけた。あの時を思い返してもあの作戦は自殺行為に等しかった。しかし、これにはしっかりとした理由がある。破壊目標のミサイルがISAF本部が置かれているノースポイント首都を含めたユーリア大陸の主要都市に定められている可能性があったのだ。発射される前に破壊する。それを可能にできたのが新生メビウス中隊のおかげだった。当時、要塞正面から見て左側をメビウス1、右側がメビウス8、中央地下のジェネレーターをメビウス2が破壊し、最後の大型ミサイルに隊長であるメビウス1がもう一度突入した。

スカイアイの説明を簡単に表すところこんなものだ。一通り説明を終えたあと「だが」と付け加える。

「今回のメガリスはあの時と状況が違うかもしれない」

「というと?」

「俺たちがあれを叩いたときまだメガリスは未完成だった。だが、資料にあったネウロイ化による復元の可能性。それにあの時よりも隕石の量が多かった。おそらく、このメガリスネウロイは完全体に近いかもしれない。壊しても治る。対空兵器。護衛の敵も多いはずだ。だから、今回重要になるのがコアの完全破壊だ」

これらを踏まえたくうえで作戦を説明する。

①・艦隊を要塞の南100 kmに囷として集結させる。

②・ウィッチのみで構成された部隊が要塞に奇襲をかけ、敵残存航空勢力を引き寄せ殲滅する。

③・その隙を狙い、地上特殊部隊がメガリスに侵入。サブコントロール室がある13階をおさえる。その場所にネウロイのコアが置いてある可能性が高い。そこが要塞の中核だ。

④・ウィッチがダクトに侵入し3つのジェネレーターを同時に破壊。再生を防ぐため攻撃を続ける。

⑤・扉が開いたら中に潜入。爆薬を設置し、コアを破壊。速やかに脱出する。

「ふざけるな！ 艦隊を囷に使うと言うのか！」

「艦砲射撃の一斉掃射で叩けばいいだろう！」

作戦内容に不満の声を上げるブリタニア海軍の将校たち。彼らの言い分も分かる。だが

「これが、現状で一番最良の作戦であります！」

ベルツの大声にその場にいる全員が押し黙った。

「彼女たちの情報が正しければ、メガリスの隕石落下有効射程距離は最長3000 km。それに比べ戦艦の射程距離は？ 精々50 km。そこまで近づく前に艦隊が全滅するのは目に見えている！ メガリスは無数の対空兵器を備える要塞。シールドを持たない通常戦力では太刀打ちできない。唯一対抗できるのはシールドを展開できるウィッチのみだ。この作戦に次はない。時間が経てばたつほど不利になるのは我々の方だ！」

こうしている間にまたあの雨が降り注ぐかもしれない。メガリスの射程距離はヨーロッパ全土を捉えているのだ。早急に破壊しなければブリタニアだけでなくヨーロッパ大陸各所で行われている作戦全て断念、大陸を放棄せざる負えない最悪の事態になりかねない。

「———どうやら、結論は1つしかないようだ」

一部始終を見ていたある男性の声に皆が背筋を伸ばした。この男性こそブリタニア王室現ブリタニア国王である。

「ブリタニア国王ジョージ6世の名において命ずる。速やかにこの悪夢を終わらせよ」

『はっ！』

「以上が今回の作戦です。艦隊が囷となっている間、私たちはネウロイの拠点を攻撃、潜入部隊の掩護になります」

501部隊とワイト島分遣隊のウィッチが集まり作戦の詳しい内容が言い渡される。

「それで、どういう役回りにすればいいんだ？」

「要塞には無数の対空火器が置いてあるだろう。だから、最初は501と分遣隊の全員で対空火器の排除。対地攻撃に慣れているマルセイユとガランドは潜入部隊の援護を中心に臨機応変に戦ってくれ。その後、潜入部隊の準備が整い次第今から言うグループがダクト内に突入。ジェネレーターを破壊してもらおう」

ダクトA：アメリー・プランシヤール、フランシー・ジェラード、ラウラ・トート

ダクトB：ゲルトルート・バルクホルン、エーリカ・ハルトマン、

ハンナ・ユステイナー・マルセイユ

ダクトC：宮藤芳佳、リネット・ビショップ、ペリーヌ・クロステルマン

「何故この人選なんですか？」

「1人をターゲット破壊担当にし、その前と後ろに護衛としてつかせてもらう。もう一つ理由を加えると、この3人の組み合わせが一番と考えたからだ」

ジェネレーター破壊のために3人はどうしても重要だ。その上でこの組み合わせとした。互いに連携を取りやすいと考えた結果だった。

「おい。それならマルセイユじゃなくミーナのほうが良いのではないか?」

「ミーナ中佐には現地指揮をお願いしてある。潜入部隊との連絡も兼ねているから無理だ」

「それにだ。お前たちなら大丈夫だ。犬猿の仲らしいが、逆を言えば『喧嘩するほど仲がいい』んだろ?」

「誰がこいつとなんか!」

珍しく口が合う二人を見てハルトマンはお腹を抱えて笑う。

「敵の航空戦力はどうするの?」

「それには、メビウス隊の2人がやる。いいな?」

「ああ」「任せておけ」

「メガリスネウロイ破壊後、全員の帰還を持って作戦を終了する。いか、必ず帰還せよ。それ以外は、許可しない——以上だ」

「私たち2人は除外か」。まあ当然だよな」

「……そうだな」

皆が作戦の準備に取り掛かる中、2人のウィッチが話していた。坂本美緒とウイルマ・ビショップ。共にウィッチとしての峠を越え、シールドを張れなくなった二人は今回の作戦から外された。坂本は認めたくなかったが、彼らの言うメガリスは対空火器の城。音速を超える戦闘機やミサイルを撃ち落とす精度をもつ兵器が配備されている以上シールドを出せなくなった2人は彼女たちの戦線に加わることはできない。

「で、これからどうする?」

「愚問だな。そういうお前はどんなんだ?」

「そんなの決まってるでしょ」

坂本は愛用の扶桑刀、ウィルマはボーイズMk1対装甲ライフルを手にする。

作戦に加わることはできない。だが、このまま何もしないのは性に合わない。自分にできることをする。なら、私たちができることはただ一つ。

「皆の帰る家（空母）を守ること」

「それが我々の使命だな」

やれることをやろう。それこそが私たちの理念なのだから。

ロンドンから現状集められる各国の艦隊が集い始めている。ポーツマス軍港に移動している。その道中、昨夜の爪痕も見えた。

「ひどい……」

「ネウロイも恐ろしいですがこのようなものを人が作ったとは思えませんわ」

「これほどの戦略兵器だが、メガリスは決定的な欠陥を抱えている」「え?」

「広範囲に隕石を落せるが正確に狙えないんだ。だからターゲットを含める周辺をまとめて消滅させる。それが本来の運用だったらしい。だが、目標が遠ければ遠いほどその制度は下がる。よって、要塞には隕石落下のミサイルの他に弾道ミサイルが存在する。」

「だんどうみさいる?」

弾道ミサイルという言葉を知らない彼女たちはどんなものか分からないだろう。

「弾道ミサイルってのは、簡単に言えば超長距離の大型ミサイルだ。射程は長いもので地球の裏まで届く」

「そ、そんなものまであるんですか……!?!」

「こいつもあると思う。だが、今回は発射される前にコアを破壊して一緒に瓦礫に埋める作戦だ。如何に俺たちと潜入部隊が迅速に動けるかが勝敗の決め手だ」

説明している間メビウス1はあることを思っていた。あの時と同じ状況であるこの国は空を怖がる人たちに溢れているのではないかと。

(女神さま聞こえているか?)

(何でしょうか)

(一つ。頼みがある)

(頼み?)

(それは――)

夜を迎えたポーツマス港を扶桑、ブリタニア、ガリアからなる大艦隊が抜錨した。(ガリア軍は解放戦線において陸軍はヒスパニア、海軍はブリタニアを拠点にしていた)

扶桑艦隊

戦艦：長門 陸奥

空母：天城 加賀 (赤城は前回の戦闘による損傷により不参加)

重巡：高雄型4隻 利根型2隻

軽巡洋艦10隻 駆逐艦20隻

ブリタニア艦隊

戦艦：N3型戦艦4隻 (セント・アンドリュース、セント・デーヴィッド、セント・ジョージ、セント・パトリック)

空母：イラストリアス級3隻 (イラストリアス、フォーミダブル、

ヴィクトリアス)

他巡洋艦駆逐艦合わせ30隻

ガリア艦隊

戦艦：リシユリユー級戦艦（リシユリユー、ジャン・ボール）

空母：ベアルン

他巡洋艦駆逐艦合わせ20隻

約100隻からなる大艦隊が北海を通るルートを征く。それに比べ少数の艦隊がポーツマスから西へ行くルートを選択する。その艦隊がメガリス攻略隊のウィッチが乗っている部隊。ブリタニア海軍の軍艦から選ばれた艦船が進んでいく。インプラカブル級航空母艦一番艦インプラカブル。今年の4月に就役した新しい軍艦だ。それを守るように両脇にキング・ジョージ5世級戦艦2隻（キング・ジョージ5世、プリンス・オブ・ウェールズ）がつき、他巡洋艦10隻が単縦陣で航行している。

インプラカブルにはウルトラマリン シーフアイヤ 60機が搭載されている。そのパイロットたち全員この艦隊を直掩にあたる。そして、今作戦が彼らの初となる任務だ。寝ている者やまだ起きて煙草をふかしている連中もいるが、その表情は険しい。皆怖いんだ。それを紛らわそうとする。

「おりゃー！ ドロー2！」

「私もドロー2」

「ん（ドロー4）……黄色」

「あらラッキー。私もドロー2」

「いやあああああ」

ワイト島分遣隊の面々は街で見つけた。UNOと呼ばれる見慣れないカードゲームをしていた。因みに声の順番はフラン、メアリー、フラン、角丸である。

「3人とも突入する際の役割は決めた？」

「前をフラン。後ろにメアリー。私が真ん中」

「メアリーが後ろに固定。ストライカーからシールド張れるからね。攻撃力の高い銃使っているラウラを中央にして前を私が守る。これ

かな」

「これが私たち、ワイト島分遣隊の最後の闘いになると思うわ。必ず成功させましょう」

角丸の言葉に皆が頷いた。

「お。面白そうなのやってるね私も混ぜて」

「ウィルマさん。妹さんと話は済んだんですか？」

「まーね。同じこと言うけど、帰る家私がつっちり守るから、あなた達もしっかりやりなさい」

「はい！」

空母甲板上。雲一つない星空をエイラとサーニヤは眺めていた。昨日と同じ空とは思えないほど美しい。

「いよいよダナ」

「そうね……」

「お前たちそこにいると風邪ひくぞ」

見かねたスカイアイが2人に毛布を渡す。航行しているため船外はずつと風が吹いている。

「スカイアイ……いえ、ナガブチさんは怖くないんですか？」

「怖いさ。あの日も隕石が降る中の作戦だった。成功するまで生きた心地がしなかったし二度とやるか！ と思ったほどだ。だが、あれは私たちの世界の負の遺産だ。完全に破壊するのが我々ISAFの役目だと思っている。あの苦しみを再現されるのは見過ごせないんだ。私もメビウス1もメビウス8もな」

「……………あんたもいろいろあったんだナ」

「……………ああ。いろいろあり過ぎた」

その一言に多くの出来事が詰まっているとエイラもサーニヤも感

じ取った。

スカイアイ。本名ギルバート・ナガブチ。彼もメビウスたちと同じく深い傷痕を抱えていた。ユリシーズの際両親を亡くし、大陸戦争開戦時に起こったサンサルバシオン市内の戦車戦で妻子が巻き込まれ妻が亡くなった。しかも味方の攻撃だったことが後に分かったためぶつけ様のない怒りと悲しみに襲われた。あの混乱から娘（当時11歳）の行方が分からない。もし生きていたら彼女たちと同じくらいの歳になっているだろう。

似たような境遇であるサーニヤを見て娘の面影を重ねた彼女はサーニヤの頭を優しく撫でた。

「ナガブチさん？」

「いろいろ終わったあとはぐれた両親に合えたら、存分に甘えてもらえ。それくらい許してもらえさ」

「——はい」

「な、なら私もぐぐぐぐ挨拶いってもいいいいかな!？」

「ぶっ。はははははははっ!」

「な、何笑ってんだよー!」

結婚前に彼女の両親にご挨拶に行く彼氏か何かかお前はと思った。

そして、作戦開始予定時刻9月19日05:00の一時間前04:00

慌ただしくなった艦内。攻略部隊であるウィツチたちは準備を進めていた。ポーツマス港を出港し、ブリテン島とアイルランド島間の海峡を通過し北上。現在艦隊はオークニー諸島ウエストレー島南側に停泊している。メガリスがある島から100kmほど離れ島影で艦隊は見えていないはず。ここから出撃する予定だ。

「芳佳。大丈夫か？」

「え？ 私は大丈夫ですよ。大丈夫です」

と言っているが、ほんの少し。本当に少しだけ手が震えていた。や

はり怖いのだ。迷惑をかけないようにしているが、本能が恐怖を感じ取っているのかもしれない。

「宮藤芳佳。ちよつと後ろを向け」

「え？ あ、はい」

宮藤が後ろを向いた後ウィツチの状態になったメビウス1。そして、自身の髪に結ばれているリボン。メビウス1——リボン付きの死神の異名が形となったであろう青いリボンを解いた。それを鉢巻みたいに結んだ。

「いたたた！ 強すぎです」

「ああすまん」

もう一度結び直した。鏡を見た宮藤はメビウス1に振り向く。

「これは」

「お守りみたいなもんだ……少しは気が引き締まったか？」

「はい」

「よし。じゃあ格納庫に行くぞ。もうみんな集まっているだろうからな」

格納庫には全員が集まっていた。と、入ると同時に館内放送が鳴る。

《〈全員。そのまま聞いてほしい。先行しているレオナード大佐から伝えたいことがあるようだ。それでは、どうぞ〉》

《〈おはよう諸君。君たちに伝えたいことがある〉》

潜入部隊の指揮官であるレオナード大佐（ベルツ）から一体何があるのかと皆が怪訝な表情になる。

《〈1時間後、我々は海軍史上最大の作戦に参加する。》

我々の大陸に混沌をもたらした敵を打ち倒す作戦となる。

我々は国も、人種も異なるが、我々は共に闘い、共に傷つき、そして死んでいった。

信じるものの為に、自由の為に戦ってきた。

今日この日、我々は1つの目的のため結集する。

我らの美しき大陸を開放し、人々に、友人に、そして家族に自由を取り戻すために。

我々の勝利はヨーロッパ大陸解放と新たなる繁栄の時代を告げる先駆けとなるだろう」

ベルツの演説に皆が聞き入る中メビウスとスカイアイは目を合わせた。この演説は自分たちのメガリス攻略作戦の前に上官から言われて内容とそっくりだったのだ。驚きメビウス8を見ると隠れて親指を立てて見せた。

(お前の仕業かよ。まあ、悪くない)

《勝利は我々のものである!》

ベルツの演説を聞き兵士たちの士気は最高潮を迎えた。皆が演説を復唱する。

《取り戻そう、人々に平和を》

『取り戻そう、人々に平和を!』

《勝ち取ろう、我々の自由と未来を》

『勝ち取ろう、我々の自由と未来を!』

《『世界は全ての人のものである!』》

《さあ、私たちの碎けた空《ソラノカケラ》を取り戻そう!》

第40話「MEGALITH」

1944年9月19日5:30

陽はまだ出ていないものの明るい空の下。彼女たちは海面スレスレを飛行していた。

《レーダーに感。 四艦隊に向けメガリスから小型の大部隊の反応を確認。 数……300以上》

「ここまで作戦通りですね。でも作戦が長引いてしまうと……」

「小型だけなら戦闘機だけでも何とかなるだろう。こちらも300機だからな」

《……いや、どうやらそう簡単にはいかないようだ。敵機の機種が判明した》

スカイアイは敵機の形状を伝えた。

《零式艦上戦闘機、九九式艦上爆撃機、九七式艦上攻撃機、ワイルドキャット、ヘルキャット、ドントレス急降下爆撃機、デヴァステイター雷撃機！》

「なに!？」

報告を聞きまっさきに驚いたのはメビウス1だった。何故敵が今の時代に合わせた兵器になっているのか分からないが今そんなことはどうでもいい。

「おい。扶桑に九七艦攻という飛行機は、魚雷は存在するか？」

「九七艦攻は存在するが……魚雷とはなんだ？」

返ってきた言葉に歯ぎしりする。考えてみれば簡単なことだった。この世界の兵器が彼らの世界1940年代の物と酷似しているのは前々から分かっていた。だが、全てが100%合致しているわけではない。この世界と自分たちの世界で唯一違うのはネウロイの存在だ。だから、基本兵器もそれに対応したものが主流になっている。魚雷の危険性など知らないのだ。

「スカイアイ。艦隊に雷撃機を優先的に落とすよう伝えてくれ」

《もう伝えた。あとは祈るだけだ》

「ああ」

今は彼らを信じるしかない。
「みんな急ぐぞ！」

《三国連合艦隊》

スカイアイからの通信を受けた連合艦隊は護衛の戦闘機を上空から襲ってくる爆撃機の排除、低空から迫りくる雷撃機を艦隊が受け持つという形で迎撃態勢を取っていた。既に上空で会敵した戦闘機部隊が交戦に入っている。戦力は拮抗しているがそれでも擦り抜けてこちらにやってくる敵がいる。これほどの大部隊を全て戦闘機部隊だけで防ぎきるのとは不可能である。艦隊に近づく九九艦爆とドーントレスに似たネウロイ郡に扶桑艦隊の戦艦長門、陸奥。重巡洋艦高雄、愛宕、鳥海、麻耶、利根、筑摩の主砲が向けられる。
「まさかこれを使う時が来るとはな」

戦艦長門、射撃指揮所にいる砲雷長は言う。今主砲に搭載されている砲弾は扶桑海事変での艦対空戦闘の経験をもとに開発され、しかしネウロイの大型化により使われることはないだろうと言われていた物が詰められている。それが今使われようとしている。

「三式焼霰弾、発射用意！」

《甲板員は直ちに爆風退避！ 繰り返す。甲板員は直ちに爆風退避！》

「距離2万！ 仰角30°！」

「照準良し！ 主砲発射準備良し！」

「目標前方ネウロイ郡 撃ち方始め！」

扶桑艦艇から爆音とともに主砲が火を噴いた。放たれた砲弾の一つ。戦艦長門から発射された砲弾がネウロイの目の前で炸裂した。瞬間、炎に包まれ穴だらけになり墜ちていく。搭載されていた砲弾は

“三式焼霰弾” 扶桑海事後後に考案され開発された艦船用の榴散弾である。時限信管で爆発すると無数の散弾と可燃性ゴム弾がばら撒かれる。小型ネウロイに対して大きな戦果を挙げれるが一つだけ欠点がある。それは信管の調整が難しい点だ。高速で飛んでくる敵に対して爆発時間を調整するのは非常に困難なのだ。現にその他の軍艦から発射された三式弾は、目標を通り過ぎたり、手前で爆発して散弾の威力が弱くなってしまったり、うまくいけば一網打尽にできるが3分の1しか仕留められなかった。

「扶桑海を乗り越えた俺たちがやるんだ。いいな！」

「右30度、口角40度 敵5接近！」

「機銃高角砲撃ち方始め！ ネウロイを近づかせるな！」

全艦艇からまるでハリネズミのように弾が発射される。扶桑軍人は二度目の、ガリア・ブリタニア軍人は初めての艦対空戦闘が始まる。

連合艦隊が作戦通り取り巻き達を引き付けたおかげで彼女たちは本来の高度で飛んでいる。だが、要塞をがら空きにしてはいない。レーダーがこちらに高速で接近する影を50機捉えた。その中9機が他の追隨を許さない速さで迫ってくる。

「ここは俺たちに任せて先に行ってくれ」

「すぐに追う」

《分かったわ。ここはメビウスさんたちに任せて行くわよ》

《了解！》

メビウス1とメビウス8を除いた皆が超低空へと避難する。高度8000mに移動した2人はそれぞれの武装を構えた。見えてくる先頭の9機。それを見てやっぱりかと2人は思う。

「9機と聞いてもしやと思ったが……………」

「ああ。本当に亡霊になっちゃったか」

二人の目の前にいるのはSu—37。メガリス破壊作戦時に相対した相手。そして、死んだ数が一致する。

「片づける。メビウス1、エンゲージ」

「メビウス8、エンゲージ」

「……………！ 見えた！」

海面スレスレを飛んでいる彼女たちの先頭にいるガランドが能力の魔眼でついにメガリスの全貌を見つけた。次第に見えてくるそれを見て、皆が言葉を失う。

「何ですのこの大きさは……」

「島全部が要塞になってるの力!？」

それはまるで十字架のようで、巨大な要塞が鎮座していた。これがメガリス。かつての災厄、今だユージア大陸の人々の心の奥底に潜む恐怖を利用しようとした悪魔の兵器。要塞が彼女たちを近づけまいとすべての銃口が向けられ発射された。散開して回避する。

「全員散開して敵を私たちに引き付けるのよ！」

『了解！』

各所に散った彼女たちは要塞の防御火器を1つ、また1つと潰していく。想定していた破壊した対空火器が再生しないことを確認したが、確実に減っているのにその弾幕の量が減らない。

「ちよつとー！ なんで弾幕薄まらないの？」

「おい。あれを見ろ！」

バルクホルンが今破壊した対空機銃を指差す。なんとそれが地下に下がるとまるで何ともなかったかのように新品同前の機銃が出てきた。

「なんだよあれ!？」

「おそらくストックが用意されているんだ。これではジリ貧だぞ」

《話は聞かせてもらった。全員上空に退避してくれ》

「分かったわ。全員急いで上昇して!」

スカイアイの指示に従い彼女たちは高度を上げる。

《メビウス8、やれ!》

《アフターバーナー点火!》

低空から侵入したメビウス8による超音速飛行により発生した衝撃波が大地を揺さぶる。その衝撃が対空機銃を襲う。銃身が僅かに、歪み弾が詰まり暴発するものが多数見受けられた。

「エドガーさん。カザマさんは?」

《隊長に任せた。あいつなら問題ない! それよりも突入隊は!?

もう頃合いじゃないのか!?!》

「突入部隊。準備が整いました!」

《了解した。諸君作戦開始だ!》

《第一、第二、第三エンジン稼働。魔導エンジン稼働。全システム異常なし。総員衝撃に備えろ!》

通信越しに向こうの声が聞こえてくる。数秒後、島の沖合500m付近から海中よりその姿を現した。

それはブリタニア海軍が扶桑陸軍の協力の下造ってしまった珍兵器。ブリタニア版三式潜航輸送艇。メガリス内部に侵入するためにどうしても部隊を投入しないとイケない。だが、この時代の方法は航空機からの落下傘降下か上陸用舟艇による強行上陸の二つのみ。

航空機では近づく前に撃ち落とされるし、上陸用舟艇の鈍間なスピードでは容易に撃沈される。そこで白羽の矢がたったのがこれだった。潜水艦の隠密性とそこそこの兵員を目的地まで運搬できる上陸用舟艇としての能力。珍兵器に違いがないが今回の作戦に最適な能力だったのだ。運用するに至り、急遽船名がつけられた。

『Ark』

名前は旧約聖書に出てくる巨大船『ノアの方舟』から拝借した。墮落した人類を抹殺するために神々が起こした大洪水を乗り越えた船

『ノアの方舟』。この神話では神に選ばれたノアの家族だけが生き延びたとされる。そして、神話の世界から遠く離れた今、設計者たちは願いを込めてこの軍艦に名前をつけた。

『アーク』^{方舟}

それは気の狂った神によって起こされた災厄を乗り越える希望の船という意味を込めて。

海上に出たアークはそのまま最高速度で島の海岸に乗り上げた。そして、艦首が開くと同時に海兵隊1個小隊と5人の陸上ストライカーを履いた海兵隊所属の陸上装甲歩兵が現れる。老兵の身でありながらベルツが指揮を執る突入部隊と出口を確保するウィッチ部隊だ。

「あそこを狙え！ あれが入口だ！」

「ラジャー！ 徹甲弾装填、撃て！」

陸戦ウィッチ5人の斉射により入口が破壊され、そこからメガリス内部に続く通路が見える。

「突入隊は私に続け！ ここは任せたぞ！」

「大佐も御気を付けて！ いい皆！ 絶対に死守するのよ！」

突入部隊がメガリス内部に侵入したことで作戦の第一段階が完了した。あとは彼らが目標のサブコントロール室がある13階まで到着してくれるのを待つのみ。

「突入部隊が潜入に成功したか……………」

レオナード率いる海兵隊が作戦を開始したとの連絡を受け取った坂本とウィルマは静かに彼女たちが今戦っている方角を見つめる。今の私たちが出来ることは彼女たちの帰るこの空母を守り作戦の成功を祈るだけだ。だが、そんなことなど気にしないでとも言えばかりに警報が鳴り響いた。

《レーダーに感！ 東より接近する小型ネウロイの反応あり。数50!》

「くそ。艦隊の迎撃に出ていた敵が私たちに気付いたのか!？」

「私も出る！ 直掩隊もすぐに発艦準備しろ！」

想定していたとはいえ厳しい戦いになる。坂本は急いで自分のストライカーを装着する。

「先行して敵を叩く！ 発艦する！」

空母インプラカブルから発艦した美緒は東に進路をとり敵部隊と会敵する。

「ワイルドキャットか！」

敵の先頭はリベリアンの艦上戦闘機 F4Fワイルドキャットに酷似したネウロイ。それをすれ違いざまに斬りつける。が

(!? 堅い！)

切れ込みを入れたものの完全に斬れなかった。予想以上に堅い構造になっている。

(急いでくれ。みんな——！)

その海にはごみが散乱していた。形状の様々なゴミが散在し、そのほとんどが挟まれ、穴だらけで、火が付き黒い煙を上げている。その真ん中でポツンと水面に立っているように見える女性が1人。誰かは言うまでもない。

「——こちらメビウス1。敵航空戦力の完全破壊が完了した。これ

より彼女たちの支援に向かう」

メビウス8と共同で20機。残りの30機のジェット型ネウロイをたった一人で殲滅したのだ。使い切ったM61機関銃を海に投げ捨て背負っていた13mm機関銃に持ちかえようとした際に咳き込んだ。口を抑えた掌には血が

(まだだ。もう少しだけ耐えてくれ……)

改めて13mm機関銃を持ち直したメビウス1はメガリスへと飛んだ。

最終話「Blue Skies」

《こちらレオナード。目的の13階サブコントロール室前に辿り着いたが……》

「どうかしましたか？」

《敵が出てこない。静かすぎる。まるで——》

バババババババババババツ!!!

《大佐！ B扉からクモ型ネウロイが！》

《C扉にも！》

《ええい、やはり罠だったか！ 応戦しろ。なんとしても死守するんだ！ 聞いての通りだ。急いでジェネレータを破壊してくれ！》
「了解しました！」

攻略艦隊は敵ネウロイの猛攻にさらされていた。

「右120。よりデヴァアステイター接近数3！」

インプラカブル右舷側のQF 連装2ポンド砲とエリコンFF

20 mm 機関砲が接近させまいと弾幕を集中させる。1機を撃墜させるも残り2機が魚雷を投下した。

「面舵——！ 急げ！」

スカイアイからの報告で魚雷を恐ろしさを聞かされた艦隊はその回避に必死になっていた。魚雷の恐ろしさは当たり所が悪いと大型艦でも立った一発で致命傷になることだ。船体に穴をあけられるとどうなるかなど誰にでも分かる。魚雷の対処は投下する前に撃ち落とすしかない。そして、投下されたら逃げるしかない。

「!! 雷跡1被弾コース！」

「どいてー！」

本来なら投下された魚雷の対処は逃げるしかない。だが、今この空母にはそれに対応できる女性が一人いる。対装甲ライフルを構えたビショップは被弾コースの雷跡手前に照準を合わせ引き金を引く。手前150mに水柱が立った。

「迎撃成功です艦長！」

「ああ。だが問題は九七艦攻だ……酸素魚雷……あれに戦艦二隻が被弾している」

魚雷になれない彼らがさらに頭を悩ませているのが九七艦攻型ネウロイから投下される魚雷だった。

『九四式酸素魚雷3型』

重量：850 kg

全長：550 cm

弾体直径：45 cm

射程：45 ktで3000 m

弾頭重量：250 kg

1940年代にノースポイントが開発した航空魚雷のひとつ。実はこの魚雷、酸素魚雷の技術を注ぎ込んでいるのだ。酸素魚雷の特徴は雷跡が見えないことだ。通常の魚雷は燃料消費により排気ガスが発生し、その気泡で魚雷の位置が分かる。だが、酸素魚雷の燃料は酸素で排気ガスは二酸化炭素になる。二酸化炭素は海水に溶けるため雷跡は消滅するのだ。魚雷に慣れていない彼らにとって目に見えないそれは脅威だ。現に戦艦キング・ジョージ五世は左舷に2発、プリンス・オブ・ウェールズは右舷に1発酸素魚雷が命中している。敵は明らかに戦艦と空母の大型艦にのみをターゲットに絞り込み攻撃している。上空からの急降下爆撃機は坂本美緒が、魚雷の処理はウィルマ・ビショップがやってくれている。酸素魚雷の処理は雷跡が見えないうえ海面が反射して見つけにくい。そのため回避するしかなかった。

「敵い！ 直上！ 急降下ー！」

そのとき、上空より坂本と艦載機の防衛網を突破してくるドーンとレスと九九艦爆計4機が逆落としを仕掛けてきた。艦長は身を乗り

出し確認すると即座に指示を出す。

「取り舵！ 急速転舵！」

突入角度からどう回避したらいいか瞬時に割り出す。爆弾は投下されるも自分たち右舷100mに落下する。だが、監視員から悲鳴にも似た報告が伝えられた。

「か、艦長！」

「どうした!？」

「左90°より九七艦攻、デヴァステイター型ネウロイ接近！ 魚雷

投下！ 数……111！」

「何!？」

艦長はまさかと考える。あの急降下はどこか攻撃が甘かった。もしあれがこのための誘導だったのだとしたら……。確認できる雷跡は5。残り6は酸素魚雷だ。どこにいる？ いやそれよりもこのコースはどちらに舵をきっても間に合わない！

そのとき、魚雷と空母インプラカブルの間に戦艦一隻が入り込んだ。ブリタニア海軍キング・ジョージ5世級戦艦1番艦「キング・ジョージ5世」

「一体どういうつもりだ！ これ以上キングが被弾したら……！」

「まさか危険を顧みず我々の盾に!？」

空母を狙った魚雷は壁となった戦艦目がけ命中した。6つの水柱が立つ。計8本の魚雷を左舷に被雷したキング・ジョージ5世は速力低下。傾斜甚大になり総員退艦命令が出された。

「艦長。キングが……！」

「救助は駆逐艦に任せろ。彼らのためにも我々がやられるわけにはいかない！」

「突入部隊が目的地に辿り着きました！ これよりジェネレーター破壊に移行してください！」

レオナードからの連絡を受け取ったミーナは彼女たちに次の作戦に移行することを伝えた。正面向かって右・ダクトAをアメリカ、フラン、ラウラが。左・ダクトBをバルクホルン、ハルトマン、マルセイユ。横・ダクトCに芳佳、リーネ、ペリーヌのメンバーが突入した。

【ダクトA】

フラン、ラウラ、アメリカの順で3人はダクト内部に突入した。戦闘機一機がギリギリで通れるダクトも人サイズ、ストライカーを履いても精々2 m前後であるため余裕に入ることが出来た。だが、慣れない閉塞感か、入口から目標までそんなに離れていないのに上空から飛んだ時よりも長く長く感じられた。

「最大速度で突っ切るぞ」

「OK。私の後ろから着いてきなさい。アメリカー！ 後ろ任せたわよー！」

「はいー！」

もしものために護衛を2人付けた編制だったが、突入時すでに敵航空戦力を壊滅させたおかげで追手はなかった。これなら大丈夫かもしれないとアメリカーは思う。だが、決して簡単ではないと通信が聞こえてくる。

《K扉にも敵だ。入れるな！》

《アルトマン、手榴弾を使い！》

《火炎放射器だ?! 伏せろ！》

《撃て撃て！ 階段のところだ！》

通信越しにメガリス内部の戦闘が音声のみで聞こえてくる。自分たちの成功を待とうと必死に戦っている。急がなければ彼らは全滅してしまう。

「もうちよい……見えた！」

通路を上って行った先、目立つように赤く光るものが見える。あれ

がジエネレーターだ。

「ラウラさん！」

「ああ。目標破壊する！」

ジエネレーターのそばに対空し、アメリーとフランに守られるなかラウラは銃を構え引き金を引いた。

【ダクトB】

《ダクトAのジエネレーター破壊開始！ のこり2つ！》

ダクトAに突入した部隊がジエネレーターに取り付いたと通信に流れてくる。

「スピード出すぞ着いてこいよお前ら！」

「貴様に言われなくとも」

「そのつもりだよ」

先頭からマルセイユ、バルクホルン、ハルトマンの3人が進む。

《こちらタンゴ2、通路6に増援をお願いします！》

《だめだ手が回せない！ 持ち堪えるんだ！》

《あきらめるな！上の連中がなんとかしてくれる！》

《後退！後退！》

《そいつは死んでいる、置いていけ！》

より激しさを増した戦闘音が聞こえてくる。分かり切っていたことだが既に戦死者も出ている。彼らの死を無駄にはしない。

「あれだ！」

「トウルーデー！」

「ああ！」

バルクホルンの両手に持つ機関銃が火を噴いた。

【ダクトC】

《ダクトBのジエネレーター破壊開始！ 残りは宮藤さんたちだけ

よ!」

《《背後をつかれました!完全に袋のねずみです!》》

《《こちらチャーリー、限界です!後退します!》》

《《まだだ、あきらめるな!》》

聞こえてくる通信を聞きながら宮藤たちはダクトCを飛ぶ。こんな狭いところをメビウスさんたちは戦闘機で通り抜けたのかと思うと背筋がぞつとする。メビウスさんの強さは天性のものだと思っていた。だが、実際は違う。戦争を経験し、多くの戦場を渡り歩いた経験から積み重なった実力なのだ。

「あれですわ!」

「芳佳ちゃん」

「うん!」

3人のなかで一番の火力をもつ13mm機関銃を持っている宮藤がジェネレーターに向け銃弾を発射する。だが傷一つつかない。

「堅すぎる!」

その間にも突入隊の被害は増していく。

《《チャーリー、応答しろ!どうした?!》》

《《くそ、このままじゃ全滅だ!》》

《《ジェネレーター破壊はまだか?!》》

私がお手こずっているせいで人が死んでいく。このままでは埒が明かないと判断し3人全員でやることにした。

「リーネちゃん、ペリーヌさん!お願い!」

「うん!」

「ええ!」

三人同時に銃弾が発射される。赤く光るジェネレーターにひびが入った。

バツン という音と共に停電が起こった。そして非常用の電源に切り替わったのが最低限のランプだけが薄暗く光る。

《ミーナです。聞こえますか?! ジェネレーター全ての破壊を開始しました。そちらの様子は?!》

連絡を受け取りレオナードは後ろに振り返った。そこには固く締められていたはずの扉が開放されていた。

「いいぞ、扉が開いた! 突入! 突入!」

「他の奴等は退路を死守だ! 帰り道を守れ!」

十名も満たない隊員がサブコントロール室に入る。それと同時に足の動きが止まる。見た光景に言葉を失った。サブコントロール室の床にはこの研究者たちだった死体が転がっていた。

「ネウロイがやったのでしょうか……」

「……………そうだろうな」

部下の質問にそう答えたベルツ——レオナードだが彼は真実を見極めていた。

(コアの暴走で閉じ込められて、発狂して互いに殺し合ったか)

あまりにも凄惨な光景に憶測とはいえ部下に恐怖を与えるようなことなど言えないためネウロイの仕業だということにした。そんな血の海の中心には5cmにも満たない小さな赤い結晶が置いてある。ネウロイのコアだ。

「コア周辺に爆弾をセットしろ。ありったけだ、ケチるな!」

「おい。手榴弾も括り付けるぞ!」

コアの周りに爆薬が設置される。1つはタイマーを5分に設定した時限爆弾だ。準備を進めている間、部下があるものを見つけた。

「…………… 大佐。これは一体」

「どうした?——これは!?!」

それは1つのモニター。映し出されている画面を見てベルツは驚愕した。

《緊急事態だ！ ミサイルの発射シークエンスが作動している！

》

「なんですって!? 残り何分ですか!」

《もう1分をきっている! あと40秒だ! こちらも急ぐ! 予定変更だ予備の導火線を出せ!》

想定外の事態だ。弾道ミサイルの発射が始まっていた。基地破壊も当然だが、ミサイルの破壊も成功させないと意味がない。

《コア爆破の準備が完了した。急いで脱出する!》

「了解しました。全機上空に上がってください。これよりミサイル撃墜のミツシヨンに入ります!」

『了解!』

ジェネレーター破壊に参加していた9人も上がっていく。弾道ミサイルを内蔵している場所は特定しているため発射直前に開いたところを攻撃すればいい。しかし、そうさせまいと最強の対空火器フアランスが今までよりも比べものにならないほどの弾幕を張る。

「くそっ……ここまで来て……!」

「対空火器は任せろ!」

声と共に一陣の風が機銃郡を抜ける様に飛んでいく。通り過ぎた後フアランスは弾倉が爆発したり、砲身が斬れ使い物にならなくなっていた。メビウス1だ。素早い立ち回りですべての対空火器を翻弄している。フアランスは超高速で飛来するミサイルを撃ち落とすために作られている。だが、今のメビウス1を捉えきれない。追い切れず懐に入れられ、破壊されていく。同様にメビウス8もハルバードを振り回して一帯のフアランスを一掃する。その光景の中宮藤は見えた。メビウス1の口から血が滲んでいるのを。

「メビウスさん血が」

「俺のことは後回しにしろ！ 来るぞ!!」

メビウスーが言うと同時に、弾道ミサイルの発射口が開いた。発射したミサイルをバルクホルンが能力の怪力でへし折り。サーニャがフリーガーハマーで撃ち落とす。各々がミサイルを撃ち落としている中たつた一つだけ、大型ミサイルだけが残されていた。入口は開いているが、そこには対空機銃搭載の四足型ネウロイが防御を固めている。

「俺が行く」

「ダメです！ 死ぬ気ですか!?!」

「大型ミサイルは強力な妨害電波を搭載している。発射されたら作動して攻撃できなくなる。その前に内部に突入しなくちゃいけないだ！ 時間が無い!」

「でも入口があればじゃあ「私に任せてください!」え?」

返事をしたのは角丸美佐。彼女は弾倉から銃弾を取り出すとそれを拳で殴りつけた。能力の金剛力を付加させた銃弾は、艦砲の破壊力にまで上がる。戦艦の主砲斉射に似た大爆発は入り口前の敵を一掃した。角丸は右手を抑える。

「行って!」

「ああ、でも出口は……」

「俺に任せろ隊長！ 大穴開けてやる!」

「……………ミサイルは?」

「ない!」

「あーもー、知らねえからな！ って、芳佳！ なに抱きついてんだ離せ!」

いつの間にか背中から宮藤はメビウスーに抱き着いていた。ストライカーは穿いていない。

「行くなら私も行きます」

「はあ!? だめだ離せ!」

「いやです!! カザマさんこそ無理すぎです。治癒魔法かけます。言っただじやないですか。どんな傷も治して見せるって」

「……………勝手にしろ。但し、振り落とされんなよ!」

閉扉が爆散。出口ができた。

(やりやがったあの野郎……)

イジエクトしてストライカーをぶつけたんだ。あまりの所業に見ていた彼女たちが驚いているのだろう。だが、おかげで脱出口は確保した。

「出るぞー！」

「はいー！」

崩れ落ちるミサイルの弾頭はまだ起爆していない。その前に自分たちは上の脱出口向けまたアフターバーナーを点火した。

サブコントロール室。誰もいなくなったその場所で火のついた導火線が火薬に引火した。爆弾に引火したそれは小さなコアを破壊するには十分すぎた。コアを失ったことによりメガリスの崩壊が始まった。運命の巡りあわせかこの世界で再誕した王は再び目覚めることない長い眠りにつく。大型ミサイルを収容していた場所からも炎があがる。そして、中央、一際大きな火柱が立ち上る。その中から青い光が飛び出してきた。

「目標破壊しました！ 作戦成功です！」

「いたぞ、レーダーにメビウス1を確認した！」

《《こちらレオナード、飛びこんだウィッチは無事か？》》

「彼女は無事だ。今ここから視認している」

メガリスから脱出した後下を見下ろした。メガリスが音を立てて崩れ落ちていく。

「いやったー！」

「よかった……」

「芳佳ちゃん！」

「うん！ やったよリーネちゃん！」

表情は様々だが皆作戦の成功に喜んでいた。これでブリタニアに平和が戻ると。あの悪魔の兵器を破壊することができたのだと。

ふと横を見るとスカイアイとメビウス8がいた。メビウス8はストライカーを履いておらずスカイアイに肩車してもらっている状態

である。スカイアイ若干キレかかっているのが伺えた。

ふと、体に違和感を感じた。自分の体を見て合点がいった。

「リーネ。宮藤をお願いします」

「え？ どうしてですか」

「——どうやらここまでのようだ」

皆がメビウス1を見た。彼女の体が白く光り透けているのだ。起こっているのは彼女だけではなかった。

「おお!? 俺もだ」

「どうやら元の世界に戻るらしいな。なんて間の悪い」

スカイアイのいう通りだ。作戦成功の喜びを分かちあう時間もないなんて。

《向こうに帰るのか?》

隊員収容に待機していた潜水艦に向かうボートの上からレオナード……ベルツが話しかけてきた。

「ああ。そうらしい」

《そうか……いや、そうであるべきだな。あるべき世界に戻るんだ。こちらのことは心配しないで行くがいい。そのかわりと言っては何だが——向こうをよろしく頼む》

「ええ、貴方こそ」

メビウス1たちはもうこの世界に干渉できない。彼は前の世界に戻るなど許されない。もとは同じ仲間なのにどうしようもなく隔たれた大きな溝がある彼らは仲間を信じ託すことにする。どちらも世界観が違う自分が生きる世界の平和を祈って。

《総員。敬礼》

レオナードの言葉に海兵隊が、ウィッチたちも同じく彼らに敬礼した。メビウス1たちも同じく敬礼で返す。

光が彼らを包んでいく。

「どんなときでも仲間を大切にしろよ。それが大きな力になる」

メビウス8が仲間の大切さを

「どれほど苦難に合っても諦めないことだ。私たちと同じように」
スカイアイが諦めない強さを

そして――

「生きろよ。世界は絶望するほどに、残酷だ。だがその分、幸福とか、希望とか、世界にたくさん溢れている」

最後に生きることの喜びを伝えた。501の皆を見渡して笑顔で言う。

「まあ、なんて言うのかな。君たちとの日々も悪くなかった。………楽しかったよ。ありがとう」

そうして、彼らを包んでいた白い光は刹那閃光するとリインという鈴の音を奏でて弾け消える。光の残滓は白い羽根となって舞い落ちる。

「ごちらこそ、ありがとう。貴方がたには本当に助かりました。どうか、お元気で」

「メビウスさん………さようなら」

かくして、彼女たちとユージアの英雄たちの物語はここで終わりを迎える。

彼女たちの頭上、

平和を取り戻した空が彼らを祝福する様に青く青く広がっていた。

エピローグ

エピローグ

1944年10月

あの作戦から1カ月たった。傷痕は深いものの復興が進んでいる。そして、ヨーロッパ大陸への上陸作戦も始まった。ガリア方面のネウロイの巣が消えたといってと今すぐ安全な土地になったわけではない。ガリアの難民たちが祖国の地に戻るにはもう少し時間がかかる。現在ガリア・カールスラント二国で上陸作戦が準備されている。ブリタニアもそれに参加したいのは山々だが、あの災害の被害が大きくまですは自国内の復興を先にする方針らしい。災害派遣という任務で今でもレオナード准将の部隊はブリタニア国内を忙しなく働いている。

ポーツマス軍港には扶桑に戻る遣欧艦隊が出港を迎えていた。

「もうお別れね」

「ああ。長い間世話になった」

「いえ。それはこちらも同じよ美緒。あまり無理しちゃだめよ」

「少佐！ 扶桑でもお元気でいてください」

「ペリーヌもガリア上陸作戦に参加した後故郷の復興に行くのだろう

？ 応援しているぞ」

「はい！」

「芳佳ちゃん。いろいろ終わったら扶桑に遊びに行くね」

「うん。まってからね！」

坂本と宮藤は艦隊と共に扶桑に帰る。またいつ会えるか分からない。最後の話をしていた。

「バルクホルンさんたちはこのあとどうするんですか？」

「私とハルトマン、ミーナはペリーヌと同じ作戦に同行するさ。そのあとは祖国カールスラント奪還戦だ」

「でもその前に妹に会いに行くんだよね」

「く、何故お前に言われると恥ずかしく感じるんだ……」

ミーナ、バクルホルン、ハルトマン、ペリーヌはガリア上陸作戦に参加後ペリーヌは故郷の復興、ミーナたちはカールスラント奪還戦線

に移る。

「私等はアフリカに行こうかな。他にやることないし」

「シャーリーが行くなら私も行く！」

シャーリーとルツキーニはアフリカへ

「私は両親を探しに行こうと思う」

「うちとサーニヤはスオムスにイクゾ」

エイラとサーニヤはこのあとストライカーにのってスオムスへ

「私は復興を手伝ったらペリーヌさんのお手伝いに行くの。芳佳ちゃんは？」

「帰ったら医学の勉強するんだ」

「頑張つてね」

「うん！」

リーネはブリタニア復興の後ペリーヌの手伝いに

芳佳は帰国後もっと医学の勉強をすると誓う。

「そういえばこれ、返しそびれちゃったな」

宮藤の髪にはあの青いリボンが結ばれている。今は大切な人の、思い出の一部として大切に使っている。

「そろそろ時間ね。私たちも行くわ」

「ああ。そういえばミーナはこのあとコンサートだったな。ラジオで聞けるか？」

「ええ。絶対に聞いてほしいわ。伝えたいことがあるの」

「それじゃあ。またどこかで会いましょう」

「元気にしててね！芳佳ちゃん！」

「少佐ー！ またいつかお会いしましょう！」

「宮藤風邪ひくなよ！」

「バイバイ！」

「じゃあなー！」

「バイバイ！芳佳ー！」

「さようなら。宮藤さん」

「またなー！」

「みんなー！ 元気でねー！」

皆の声に宮藤も精一杯の返事を返す。坂本も手を振って応える。修理を終えた赤城がポーツマス軍港を出港した。

数十分後、ラジオから音声が届いてくる。ミーナ中佐の声だ。

《その前に、皆さんに伝えておきたいことがあります。これはある人が残した言葉です。》

ペラペラと紙を開く音が聞こえると話を始めた

《あの星の降る夜からどれくらいたっただろう。皆元気にしているだろうか？

もうこの世界にいない私たちは知る術がない。もう君たちの顔を見ることは叶わない

この先もつと苦しいときもあるだろう。つらい時もあるだろう

そんなとき、ふと空を見上げてほしい

空は君たちの心と同じように曇っているかもしれない

だけど、その雲の向こうには

決して変わることのない青い青い青空が広がっている

世界が違くともこの青空は変わらない

だから、今日も私は空を飛ぶ

遠い空から君たちを見守ろう

この広い青空には希望がある

青空はたくさんの希望をくれるのだから——》

もう分かる人には分かっただろう。このメッセージの贈り主が誰なのか。

《そんな貴方たちにこの歌を贈ります——『Blue Ski
es』》

音楽が流れる。それはピアノとドラムのみというシンプルな音楽
だった。しかし、どこか、心を引き付けられる何かが感じられた。そ
して、ふと空を見上げる。

歌っているミーナも

それを聞いているバルクホルンやハルトマンも

書類作業に没頭していたレオナードも

スオムスへ飛んでいるエイラとサーニヤも

船に乗り込むシャーリーとルツキーニも

ビショップ邸にいるリーネもペリーヌも空を見上げる

そして

空母赤城甲板にいる美緒と芳佳も空を見上げる。

輝く青空の下、数羽の海鳥たちが彼女たちを見送るように羽ばたい
ていた。

20XX年9月19日 ユージア大陸 サンサルバシオン

町の通りの一角に店を構える酒場『スカイキッド』のテーブルに1
人の男性が座っていた。彼は今、手紙を書いている。その横には色あ
せた古い手紙と写真。

心地よく鼻をくすぐった ジェット燃料の 燃える匂いもかすれ
果てた

『黄色中隊』の野戦滑走路も 今では ただの自動車道にすぎない
あの戦争が終わってから数年経ったある日 彼から手紙が届いた
手紙には私と妻へ宛てた言葉と 私たちと彼が映った写真が入っ
ていた

届けたのは若い I A S F 空軍の青年と 綺麗な車椅子の女性だっ
たと聞いている

私は今 手紙を書いています

あのむなしかった戦争の最後に あなたのような好敵手と巡り会
えたのは――

彼には 望外の喜びだったに違いない

そんな彼だから 手紙を託したのかもしれない

せめてそう信じたいものだ

それを確かめる相手は 彼を墜としたあなたしか残らない

だから こうして あなたへの手紙を――

F i n

あとがき

燃えたよ。燃え尽きた

真つ白にな

いきなりふざけたこと抜かしてすみません。ですが割と本心でもあります。

どうも皆さん。エスコン大好き他のも大好きSkyfishであります。初めての投稿になりましたこの二次小説を完走できたのは他でもない読者様皆様の応援があったからこそです。本当にありがとうございます。

この小説を書いてきた上でエスコンバットキャラたちを私がどう見て設定を考えていたのかを語ろうかと思えます。ストパンキアラは公式が詳しいため割愛します。

メビウス1

エスコン主人公のなかでも最強の称号を得ているISAFのエース。『リボン付きの死神』この小説での彼の設定は判明している情報を元に考えた(私の)メビウス1になります。ゲームをプレイしただけでなくネット内の情報、ほかの二次小説での設定も参考にさせていただきました。あくまで私の考えたメビウス1になるため、楽しんでいただけたならうれしいです。

最初ピクシブで投稿したとき、メビウス1の使い魔はいませんでした。後に乗り多くのご意見(完走)がもらえるハーメルンに投稿しようと思ったとき「やはりストパン世界だから使い魔は必須」と考え直しハヤブサに決定しました。

実を言いますと使い魔の件で少し後悔があります。ゲームのムー

ビーに海鳥（カモメ？）が登場しますよね。あれを使い魔にしたほうが皆さんの受けが良かったのでは？と今でも思っています。

投稿始めのころは主人公のTS化とエスコン信仰者から見たら批判以外の何物でもない設定だったためビクビクしてました。しかし、思ったほどなかったのが良かったです。でもメビウス1女口調に対するコメントが多かった。さすがに女性化しといて口調が変わっていないのはどうかと思った次第です。メビウス8とスカイアイの登場で治りましたが。

固有魔法『身体強化』にした理由は「メビウス1の超絶機動に耐えられる強靱な体」を再現したいと思ったからです。作中というか自分でも能力フル発動中どこまで耐えられるか決めていませんが個人的には20Gまで耐えられると思っっています。やりすぎだろと思う一方でメビウス1だからと納得してしまう。なんじゃこりゃ

黄色の13

敵側、ヒト型ネウロイとして登場させました。歴代敵エースの中でも絶大な人気をもつ彼をネウロイとして登場させるのは当初から決まっっていました。そして、書く上で一番難しかったのが彼になります。彼の魅力を損なわないで描くのがとても難しかったです。

彼の元ネタはマルセイユと同じ人なのでマルセイユに似せた姿にしました。

彼とマルセイユたちが出会うのはマルセイユが機体不良による墜落事件で九死に一生をえてから数日後とされています（墜ちたという共通点から）

最初撃墜された影響で片足あるいは片腕を無くそうかと考えていました（そのほうが印象ありますから）でもそれで戦闘機乗れんのか疑問に思いハーメルンの活動報告欄で情報募集し、結果無理となったためボツ。じゃあ隻眼にしようと考えました。もっさんや坂井さんの例もあるし大丈夫だろうと。

そして、彼が宮藤にミサイルを発射した件ですが、あれは戦闘のじやまをするなどという意味を込めた牽制であります。魔法やシール

ドの概念を知っていたのでミサイル1発程度じゃ倒せないことも分かってます。別に彼は宮藤を落とすつもりは無かったのですが、一部読者に誤解釈させてしまい申し訳ありません。

そして、死者は去るのみ。メビウス1と再び闘い敗れます。共闘コメントも多くありましたが、当初の予定通りにしました。

自分はエスコンXが初めて04は3番目になりますが、黄色の13は最高の敵エースです。

スカイアイ

誕生日プレゼントちようだいの人スカイアイ。しっかり者なイメージが私にはあります。

ストライカーのイメージはピクシブユーザーの汚狐さんの空自の早期警戒機擬人化イラストに近いです。

正直言いますとあまり出番が無かったかもしれませんが。キャラ多すぎて疲れていたと言いますか……それに最終話9月19日と誕生日なのにシリアス状態すぎてすっかり忘れてました(ヤベェ！)

それに彼は現在進行形で新作で活躍中なのでこれからも知名度は右肩上がりですね

メビウス8

彼の本職は！

音速で敵地に赴き！

単独で降下し！

目標を攻略して！

颯爽と味方陣地まで走って脱出する！

ISAF空軍最強の陸戦パイロット！

その名もオメガ11！

うん。ふざけすぎた。でもこれで紹介が十分と思う。不思議。

ある意味読者様の反応（感想コメント）が一番高い人でした。愛されている証拠ですね！TS化する際に最初ニパに似せようかと考えていました。しかし、彼女は不運で墜ちているのに対し、彼は戦場で撃墜されています（故意ではない……たぶん）のでボツ。敵地に墜ちても何度も何度も生還して再び空に飛ぶかのリアルチートルーデル閣下に似たものを感じたので、ハンナ・ルーデルに似ている姿にしました。

そして、皆さまの期待を裏切らないwww。彼はこうでなくちゃ！

ベルツ中尉

この作品では輪廻転生を経て登場させました。50歳を超えていますが全盛期には劣るものの現場で部隊の指揮が出来るほどの体力は健在。メガリス戦での功績を称え、昇進し准将になり部下に部隊を任せサポート側に着きました。老兵は死なずただ去るのみ。

そして、前世の記憶があるのが災いしブリタニア珍兵器郡の犠牲者になります。まだまだ彼の闘いは終わらない。胃薬あげなきや（使命感）

作中に出せなかつた補完

原作で人型ネウロイの行動を見るに囚われた仲間を助けたかつたのではないかと思えます。でもそこにイレギュラー足る存在メビウス1がいたため困難になります。そこで死ぬ間際で出来るならもう一度奴と戦いたいと願った黄色の13に目をつけ彼を人型ネウロイとして生み出しました。現にネウロイでありながらそれなりに自由に使っています（そのつもりで書いたけど分かりにくかつたですねすみません）

原作ではウォーロックが周辺ネウロイを掌握破壊したあと暴走します。ですが、掌握したまま暴走したらどうなるだろうと思いつき今回のような形にさせていただきました。いや、あの時は張り切り過ぎましたww

まあ、あの回だけとはいえ少しだけでもエースパイロット&エースウィッチを出せたことに満足です。

ストップパンにわかかなだけに現時点でどの国の誰がウィッチとして描かれているか完全に把握してません。間違つてなきやいいですけど……

メガリス戦はエスコン04のいいところこれでもかと言うくらい入れちゃいました。メガリスも最初は予定なく黄色の13との決闘で物語終了のつもりでしたが、04のクロスしてるんだったらこいつも出しちゃおう（というかあの神演説を再現したい！）と思いつたしだいでもあります

そしてエピソード。

最終ミッション終了後のムービーとスタッフロールをイメージしながら書きました。ゲームをクリアしたはずなのに、戦争を終わらせたはずなのにどこか悲しく切ないあの感じを再現したいと思っていました。心に來るものを感じてもらえたらと思います。

作中苦労したこと

やはり一番苦労したのは戦闘シーンです。戦闘機動なんて知らなかったので専門のサイト開いて調べてました。バルクホルン&エイラとの模擬戦のときは一文一文サイトを交互に見ながら自分なりの戦闘をイメージして書いていました。専門知識豊富な読者に指摘されないよう書いていましたね。そして戦闘空域。毎回グーグルアースで調べて基地があると思われる場所を中心に大体の方位と距離を調べるのもありました。距離からこの速度で何秒かかるのかと計算機を出したこともありました。

そして、二つの作品の持ち味を殺さず活かすことは大変でした。
さて、長々と書いてしまいましたがあとがきこれで終わりです。
ご愛読誠にありがとうございます。

また

余力がありましたららの話ですが

次回作も考えています

題名は

A C E C O M B A T S W 2
| T h e J o u r n e y H o m e |

ありがとうございました。